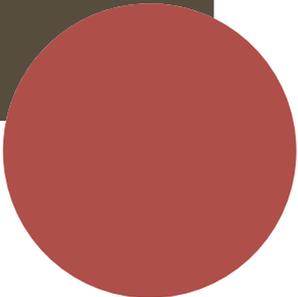


Curricula Vitae



日本ロシア文学会
75周年記念
インタビュー集



2025 ЯАР

Curricula Vitae

日本ロシア文学会75周年記念インタビュー集

ЯАР 2025

はじめに

日本ロシア文学会は、1950（昭和25）年に活動を開始し、本2025（令和7）年で75周年を迎えました。本書には、昭和の時代から現代まで、それぞれのご専門の立場から私たちの学会活動を支え、リードしてくださった様々な世代の先輩会員に、より若い世代がうかがったインタビューが収録されています。

本学会の20世紀末までの歴史的な歩み、およびその背景にあった大学等の研究・教育施設の歴史については、学会50周年記念事業として編纂された『日本人とロシア語』にロシア語教育を中心に詳述されていますが、本書はそのような歴史の中で活動されてきた12名の方々の個人史から成っています。

とは言え、本書には、20世紀半ばから今日までの日本を含む世界の歴史——敗戦前後の日本の光景、朝鮮戦争、国際的な冷戦と国内の左右陣営の緊張、ハンガリー動乱、スターリン批判とその後の〈雪どけ〉、60年安保、プラハの春、全共闘運動、ペレストロイカとソ連の崩壊とその後の混乱、グローバリゼーションとナショナリズムや宗教の復権等々——も随所に姿を現しています。

これらの顕著なできごとを別としても、日本の経済はこのあいだ、戦後の混乱からの復興、高度経済成長、バブル、そして長期低落傾向を経てきましたし、世界のメディア環境も文学を初めとする活字文化から、視聴覚性が優越するインターネット主導の文化へと大きく変容してきました。

こうした時代状況の変動は、当然ながら学問環境にも反映し、研究者と研究対象地域との関係（たとえば現地研究、共同研究、資料収集、国際学術交流等のあり方）をも複雑で多様なものにしてきました。様々な世代の先輩諸氏がそれぞれの状況にどう対処され、自分の方法を築き上げてこられたかという面からも、本書の証言はじつにたくさんの学ぶべき事柄を含んでいます。それらは、日本や世界の変化と切り結びながら、思考と学問の自立を追求してきた方々が、それぞれに描いてこられた軌跡です。

思考や学問の自由と自立は、とりわけそれらが現代に至るまで相対的に強く脅かされてきた分野や地域を対象とする研究者の目標であるでしょう。ですが、学問を時代状況からけっして完全には遮断できない現実も、とくに 2022 年 2 月以降の私たちが直面していることです。

当学会 75 周年を記念する本書は、過去の顕彰のためだけに編まれたものではありません。ロシアやその隣接地域と関連分野を対象とする人文学は今も、本書で先達が語ってくださっている地平の延長線上にあります。

2025 年 9 月

日本ロシア文学会会長 中村唯史

Curricula Vitae 日本ロシア文学会 75 周年記念インタビュー集

【目次】

はじめに	3
本書について	7
佐藤純一	13
岡本崇男	29
中澤英彦	57
栗原成郎	71
伊東一郎	95
桑野隆	133
安岡治子	161
川崎浹	187
渡辺雅司	205
リュドミラ・エルマコーワ	241
生田美智子	261
宇多文雄	289
編集後記	303

本書について

本書は、日本ロシア文学会 75 周年を記念したインタビュー集です。

タイトルにある «Curricula Vitae» とは、もとは「履歴書」を意味するラテン語で、その複数形です。日本ロシア文学会とその会員たちが築いてきた研究・教育の流れについて、あらためて会員はもちろん、多くの方々と共有すべく、会員および元会員の中から 12 名の先生方にインタビューを行いました。

2000 年の学会 50 周年の際には『日本人とロシア語』が刊行されました。日本におけるロシア語やロシア文学、ロシア文化とその隣接領域・関連分野の研究と教育の歴史について、主要な教育機関や分野を中心にまとめられています。450 頁を超える大部な書籍は、読み物としてだけでなく総合的な便覧、研究書のたまたずまいがあり、その価値は現在でも色あせていません。

2025 年／75 周年を迎えるにあたり、2023 年末ごろから執行部をはじめ会員のかたがたから「やはり記念事業の企画を…」という声が上がってきました。記念のイベント、あるいは『日本人とロシア語』の続編(?) など、いろいろな意見がありましたが、現在も『日本人とロシア語』のデータは有効であるし(刊行後のデータについてはさらなる蓄積を待ち、取りまとめはもう少し後の世代に任せることにして)、よりソフトな「語り伝え」の要素を強めた冊子の刊行を記念事業の企画の基本方針とすることにしました。

2024 年 4 月より本書刊行に向けて「日本ロシア文学会 75 周年記念事業ワーキンググループ(以下「WG」)」の発足準備が進められ、WG のメンバーへの就任について、所属支部や研究分野、世代、ジェンダーバランスなども考慮して打診を始め、オンラインで一度予備的な集まりを持ったのち、同年 7 月理事会で WG の承認・発足となりました。

メンバーは

坂庭淳史(座長)、秋山真一、扇千恵、大平陽一、小椋彩、神岡理恵子、畔柳千明、中村唯史、松枝佳奈、望月哲男の 10 名です。

インタビュー対象の先生方については、WG で研究領域、所属機関、地域、世代、ジェンダーバランスなどを考慮して決定し、2024 年夏より順次インタビューを開始しました。なお、インタビューに際しては、上記のメンバー以外に、逐次、以下の関連分野の学会員／非会員の方々にご協力いただきました。ご協力に感謝いたします。

阿出川修嘉、須佐多恵、田中大、野町素己、八木君人／安達祐子、長谷川麻子、藤原克美（以上、敬称略）

インタビュー内容について、メンバー間で共有していたのは、先達の「記憶」をつなぐ／「研究の流れ」を知ることでした。インタビュアーは「学会の歴史」や「各箇所での学びの歴史、各テーマの研究における人のつながり」、「ソ連・東欧という時代を含む、ロシアおよび隣接する地域についての研究や暮らし」などを意識しつつお話をうかがっています。WG 座長としてこの文章を記している私も、大学に入学したのが 1991 年 4 月で、この年の終わりにソ連が崩壊し、初めての訪露は 1993 年で、その名残はあったとはいえソ連時代の生活の空気に触れていません。研究のレベルに関して言えばなおさらのことで、今回は極めて貴重な経験となりました。各インタビューの方向性はある程度統一されてはいるものの、基本的にインタビュー対象の先生方には思う存分に語っていただきました（残念ながら、紙幅の都合上、インタビューを丸ごと掲載できなかったことです。話が盛り上がってしまって、長時間にわたったインタビューも少なくありません）。

インタビュー対象の先生方のご快諾と全面的なご協力、WG メンバーのオンラインでの合議と献身的な作業のすえ、今回の刊行となりました。日本国内のみならず国外の研究者、あるいは文化・芸術を担ってきた人々のつながり、さらに前の世代との接続、学び舎の雰囲気…… 興味深く読んでいただけたと思いますし、ひょっとすると新たな研究の萌芽が見つかるかもしれません。

こうした「知と体験の世代を超えた共有」が今後も続いていくことを祈念いたします。

2025 年 9 月

日本ロシア文学会副会長

同 75 周年記念事業 WG 座長 坂庭淳史

凡例

1) 本書の構成は、日本ロシア文学会 75 周年記念事業ワーキンググループ（以下「WG」）において立案されました。

2) インタビュー対象の方のプロフィールは、各記事の冒頭に記されています。

①生年 ②出身大学／大学院 ③主な元勤務先 ④専門研究分野 ⑤主な業績（最大4点まで）

なお、②について出身大学と大学院が同じ場合には大学院で統一しています。インタビューを受けた先生が希望されない項目については掲載していません。

3) インタビューの行われた時期や状況、インタビュアーや立ち会われた方を含めた参加者については、各記事の冒頭で簡単に紹介されています。各記事の文責者は文末にカッコつきで表記しました。

4) 各記事に登場する個人名や事項・概念などについては、人物の生没年や難しいお名前の読み方などを含め、できるだけ注記や補足を付していますが、網羅性よりも文脈上の必要性や理解しやすさを優先しており、必ずしも統一原則に沿ったものではありません。記事内の情報についてはWGで可能な限り確認作業を行いました。チェックは必ずしも厳密ではありません。学術的データとして活用される場合には、必ずご自身でもご確認ください。また、人名や地名の表記については、特に統一していません。

Curricula Vitae

クリクラ・ウイタエ

日本ロシア文学会 75 周年記念インタビュー集

佐藤純一（さとう じゅんいち）

① 1931 年 ②東京外国語大学、東京大学
大学院 ③東京外国語大学、東京大学、創価
大学 ④ロシア言語学、スラヴ言語学 ⑤
『NHK ロシア語入門』（日本放送出版協会、
1969）、『ロシア語コーヒーブレイク』（日本
放送出版協会、1980）、『基本ロシア語文法』
（昇龍堂出版、1985）、『ロシア語史入門』（大
学書林、2012）



2024年8月6日（火）、佐藤純一先生のご自宅（東京都世田谷区）にてインタビュー実施。インタビュアーは大平陽一、野町素己、小椋彩。猛暑のなか大勢で押しかけたにもかかわらず温かくお迎えいただいた。

「実用語学」から「言語学」へ

小椋 まずは佐藤先生とロシア、ロシア語学、スラヴ語学の関わりからお伺いしたいと思います。先生はどのようなきっかけでスラヴ語学を研究されようと思われたのでしょうか。

佐藤 旧制中学二年の時に戦争が終わり、新制高校の時に共産主義に興味を持って学生運動をやっていたりしたものですから、その興味もあって、それで大学は東京外国語大学のロシア語に進んだわけです。それが一つ。もう一つは、ロシアと言えば隣の国ですから、ちゃんと勉強したいと思い、それで外語大のロシア語に入ったんです。ところが、外語大は新制になるまでは専門学校ですよ。東京

外事専門学校といまして、研究するというよりは、実用的にロシア語を使う人間を育てるといふ、そういうところでした。まあ、それでも新制大学になりまして、その、新制の二年目に、ロシア語科に入りましてね。そこで四年間勉強しました。ただ、いらしたのは概して実用ロシア語の先生でした。八杉〔貞利〕先生（1876-1966）はとっくに定年でやめておられまして、直接習うこともできませんでしたね。

大平 そうなんですか。ちょっと話の腰を折るようで申し訳ないんですけど、我々の間では八杉貞利について伝説があって。東京帝国大学文科大学言語学を卒業して、ペテルブルク大学でボードアン・ド・クルトネ（Baudouin de Courtenay, Jan, 1854-1929）に学んで、日本に帰ってきたけれども外語大に着任した時に言語学を封印したというか、言語学を教えることを断念したというか、教えないようにしたという伝説が上から伝わって来たんですが。

佐藤 それは外語大という学校の性質に関係があったのかもしれないですね。東京外事専門学校、その前は旧制東京外国語学校といいましたが、実的なことをやるところで。学問、つまりスラヴ語研究、ロシア語研究とかを教える先生がいなかったんですよ。

小椋 そうしますと、先生は大学でロシア語を勉強されて、さらにスラヴ言語学を勉強したいと思われて大学院に進まれたということですよ。

佐藤 実はね、ロシア語の先生の中で学問的なことを教える方はあまりおられなかったのですが、お一人だけ、和久利誓一先生（1912-2001）、八杉さんの弟子なんですけれども、かなり学問的なことを色々授業でやられた記憶があります。他の方は授業では実的なことばかりですね。ただまあ、幸いと申しますか、ロシア語ではないけれど、言語学の担当で、徳永康元先生（1912-2003）という、ハンガリー語の専門家がいらっちゃって、同級生で親しくしていた千野栄一君（1932-2002）、千野君は旧制高校から新制大学の我々の同じ学年に移ってきた人なんですが、彼は徳永先生と同じ都立高校、旧府立高等学校の後輩ということで、外語大に入学後、すぐに徳永先生とお近づきになったのです。千野君に徳永先生のお宅へ連れて行かれて紹介してもらい、私も2年生の頃からしょっちゅうお宅へ通うようになりました。徳永先生は、言語学といいますが、言語という

ものに深い教養をお持ちですね。まったく徳永先生のおかげで言語学をやるようになったと思っています。

野町 例えば学生の時に、どういう言語学の本、あるいはロシア語研究の本を読んで、大学院で研究を続けたいと思ったんですか。何かそういうのはありますか。

佐藤 そうですね。それは、徳永先生のところ毎週千野君と二人でお邪魔をして、色々話を伺ったりして。徳永先生が、ロシア語じゃなくてスラヴ語として、スラヴ語の一つとしてロシア語をやるという、そういう方向性を教えてくださいました。徳永先生はちょうど第二次世界大戦が始まる頃までずっとハンガリーに留学していらして、戦争が始まったのでそれで帰ってこられた。そして外語大の先生になられたのです。そういうご体験もあって、日本人がロシア語をやる意味を、単なる実用じゃなくて、色々なスラヴ語をやる手がかりとみなすという方向で、ずっと指導してくださって。ロシア語をやって、スラヴ語に拡大して、それから他のヨーロッパの言語に広げていくというような、そういう勉強の仕方を教えてくださいました。それがとても勉強になりました。本当に徳永先生のおかげだということに思っております、なんとか勉強できたのは。それで、大学院は東大の言語学科に行きました。そこで、大家の高津春繁先生（1908-1973）に直接教えて頂くようになりました。

野町 高津先生のところ勉強されたのは、やはり歴史言語学にご関心があったということですか。ロシア語の歴史も含めて。

佐藤 ええ、比較言語学ですね。いろんな他のスラヴ語をずっと。私は、ロシア語の他には南スラヴをやりました。ブルガリア語は地道にやりました。いい先生に恵まれるというのは本当に大事なことです。

大平 徳永先生の『ブダペストの古本屋』、『ブダペスト回想』、『ブダペスト日記』といったエッセイ集は古本屋などで入手できて、今でも読めます。徳永先生のご本、大変面白いですよ。

佐藤 そうですね。

大平 第二次世界大戦が勃発したために留学先のハンガリーからお帰りになるのですが、その直前にベーラ・バルトク（Bartók, Béla, 1881-1945）の最後のコン

サートを聴いたというエピソードや、バルトークの息子で、渡米後にレコーディング技師として父の作品のレコードを制作することになる、ペーテル・バルトークとハイキングに行ったというエピソードなど、とても興味深い内容です。

佐藤 戦争が始まったので、シベリアの方をずっと通って日本に帰ってこられたのですよ。私共が行くと、その話をずっと非常に詳しくしてくださる。いろいろな国を通った、この国はどうかのこうのってね。私と千野君にとってはとても刺激になりました。

大平 徳永先生はロシア語もお出来になったんですか。

佐藤 もちろん、読むことはできたと思うんですけどね。専門はハンガリー語です。ただ言語学としてスラヴ語の意味を教えてくださいだったので、それは大いに役に立ったと思っています。徳永先生の場合は言語学が先あって、スラヴ語の中におけるロシア語の位置とか世界の言語におけるスラヴ語の位置とか、そういうことを色々、毎週お邪魔した時に教えてください。非常にありがたかったと思っています。

スラヴ・ブルガリア・バルカン

小椋 先生が大学院にいらっしゃるときは、海外留学が難しい感じでしたか。

佐藤 日本は、敗戦後は経済的に非常に悪かったですからね。自分がお金を持ってないと。奨学金も中々もらうこともできませんしね。一般的に言えば非常に難しい状態でした。

小椋 海外に行かれるようになったのは、いつ頃ですか。

佐藤 モスクワへは 1960 年代に、ブルガリアは 70 年代後半頃からかな。夏季セミナーで滞在したりしました。ブルガリアはソフィア大学にね。

野町 先生はあらかじめ、ブルガリアで具体的に指導を受けたい先生とかはいましたか。

佐藤 その先生のところへ行きたいと思って行ったような方はいなかったんですけどね。確か、ソフィア大学から奨学金が出ててね。それで、大使館経由でアプライしたら、丁度受けられましたね。

小椋 最初に行かれた時のブルガリアの印象はいかがでしたか。

佐藤 ロシアに比べるとやっぱり小さな国だと思ってね。それでお互い同士が非常に親切なんです。それで、ロシア語をやるという人は日本でもたくさんいたんですけど、ブルガリア語はあんまりいなかったものですから、のめり込みましたね。

野町 先生の時代もスラヴ語研究では仕事を見つけるのがなかなか難しかったのではないかと想像しますが、先生のご両親は、先生がスラヴ語学を専攻されたことや、将来の仕事に関して心配されませんでしたか。

佐藤 父親は国立博物館で、刀剣が専門なんですけど¹、最後には学芸部刀剣室長になりました。あんまり私のことは心配していなかったようです。好きなことをやらせてくれました。修士論文を東大に出して、就職してからモスクワに行ったわけですね。

小椋 修論を書かれてから、割とすぐに就職されましたよね。

佐藤 そうですね。最初は外語大の留学生別科の専任講師になり、留学生に三年くらい日本語を教えていました。その後、駒場の講師になりました。

野町 佐藤先生がブルガリアに留学されたときは、例えばリュボミール・アンドレイチン（Андрейчин, Любомир, 1910-1975）²とか、キリル・ミルチェフ（Мирчев, Кирил, 1902-1975）³とか、そういう先生の講義には出たりされましたか。

佐藤 もう退職されていたと思いますね。まあ、サマースクールやそのほかで、いろいろな先生に会いましたがね。

野町 その時お会いになった先生とは、留学後も交流はありましたか。

佐藤 ええ、ずっとありましたよ。

小椋 この前野町さんが、佐藤先生へのご連絡で書いていた、ペーチャ・アセノヴァ（Асенова, Петя）⁴先生でしたっけ。

野町 そうですね。アセノヴァ先生。佐藤先生が東大に招聘されたこの方は、ず

¹ 日本刀研究の権威として著名な佐藤貫一（1907-1978）。

² 現代ブルガリア語記述文法及び文章語史の専門家。

³ ブルガリア語史の専門家。

⁴ バルカン言語学の専門家。1990年代に佐藤先生が東大・駒場に招聘した。



1960年代、東大の留学生たちと

いぶん後になってからのお知り合いってことでしょうかね。

佐藤 だと思いますけどね。どういうふうになったか、ちょっとここに書いて頂いていただけね。[事前に送ったファックスを見ながら]⁵

野町 この人はウラジーミル・ゲオルギエフ（Георгиев, Владимир, 1908–1986）⁶ という先生の教え子だったみたいですね。

佐藤 ゲオルギエフね。有名なスラヴ語学者ですよ。

東大での思い出

野町 では東大の話に戻るんですけども、言語学科で服部四郎（1908–1995）先

⁵ 佐藤先生は1970年代初頭からバルカン諸言語研究に集中的に取り組みられ、「バルカン諸言語におけるスラブ的および非スラブ的要素の総合的研究」（1974–1975）、「バルカン地域における言語接触の研究」（1976）、「バルカン諸言語における言語圏現象の総合的研究」（1980–1982）、「マケドニア語と隣接諸言語の比較対照研究」（1983–1984）、「ユーゴスラヴィア各民族語における標準語の成立と民族問題の研究」（1985–1986）など、科研費による共同研究を推進していた。

⁶ 印欧語比較文法の専門家。通時的なブルガリア語学、スラヴ語学にも従事。

生とはどのようなお付き合いがありましたか。

佐藤 まあ、大言語学者ですからね。服部さんは、やっぱりロシア語もよくできてましてね。非常に、面倒見てくださったような気がします。ただ、大先生ですから、授業以外にあまりお話しするチャンスはなかったですね。

野町 では、東京言語研究所での、外国人を招聘した講義などには、先生も出席されましたか。ロマン・ヤコブソン（Якобсон, Роман, 1896–1982）が来たりとか、エドワード・スタンキエーヴィチ（Stankiewicz, Edward, 1920–2013）⁷が来たりとか、1960年代、70年代だと思うんですけど。東京言語研究所って、服部先生が運営していた、言語学を普及する目的の学校がありましたよね、新宿ですかね。

佐藤 ああ、そうですね。

野町 それでヤコブソンが1968年に。先生はそれに参加されましたか。

佐藤 講義はあまり記憶にないな。木村 [彰一] 先生（1915–1986）がヤコブソンとハーヴァード大学で知り合っていて、ヤコブソンの来日時に会いに行かれるというので、私も同席させていただきましたけどね。

野町 木村先生と、先生が知り合われたのは東大の大学院なんですか。

佐藤 そうです。木村先生はそれまで北大にいらしたんですよね。で、私が東大の修士に入った時に、木村先生がちょうど北大から東大の方に移ってこられてね。それで、木村先生がいなかったら今の私はいないぐらいお世話になりました。学問的にも非常にね、ありがたいと思っています。ほとんど毎週お会いしてはいろいろ教えて頂きました。木村先生も私も、お酒が好きなもんですから、渋谷あたりでしょっちゅう飲んでたんです。

小椋 それは千野先生と佐藤先生と。

佐藤 千野君。そう、いつもその3人で。

野町 千野先生も佐藤先生と一緒に東大に進まれたと思いますが、当時の学生はスラヴ語学をどのように見ていましたか。佐藤先生は「東京スラヴ研究会」の立ち上げメンバーのおひとりだったように思います。

⁷ 米国のスラヴ語学者。ヤコブソンの教え子。音韻論研究で著名。

佐藤 いやね、残念ながら、スラヴのものに関心を持つ人はあんまり、若い中でいなかったんですね。千野君が西スラヴをやって、栗原〔成郎〕さんも南スラヴをやって、だんだんスラヴィストが増えてはきたんですけど、結局、あんまりたくさん専門家は出てこなかったですね。

国際スラヴィスト会議と日本のスラヴィストについて

野町 先生は国際スラヴィスト会議の日本の代表をずっとお務めになって、今でも外国に行くと、「佐藤先生はお元気ですか」と必ず聞かれます。国際スラヴィスト会議に、日本代表団が参加していく経緯について教えて頂けるでしょうか。

佐藤 それがね、どうも色々資料を探してみたんだけど、どこでどうやって接触してね、付き合うようになったか全然ちょっと今、記憶にないんです。まあ、スラヴィスト委員会っていうのは毎年夏ですかね、集まりがあったのは⁸。

野町 日本がオブザーバーで参加したのが1978年のザグレブ・リュブリャナ大会で、その次に1983年にキエフで行われて、そこで公式に日本が参加した。佐藤先生もご出席されたのでしょうか。

大平 1978年のザグレブ・リュブリャナ大会には、恐らく千野先生がいらしたと思うんですよ。というのは、千野先生ご自身からソ連で開催されるのは、次は分かっていたんだけど、モスクワでなくてキエフだっていったら拍手が起こった。モスクワは飽き飽き、キエフでよかったというようなことを、そういう話をされたのを覚えてるんです。だからオブザーバー参加したっていうのは、その中に千野先生がいらしたのは、多分間違いないと思うんですけど。佐藤先生がいらしたかどうかは聞いた覚えがありません。

佐藤 千野君はそのころチェコに長くいましたんでね、いろんなチャンスがあっ

⁸ 国際スラヴィスト会議は、1929年から始まるスラヴ学（もともとは言語学、文学、フォークロア、歴史学）の国際的な研究集会。戦争などでの例外を除いて、これまで5年に一度スラヴ系の国で開催されてきた。会議は加盟国の代表者がなる国際スラヴィスト委員会により運営され、各国代表団の責任者は毎年大会間に会合を行っている。日本代表団の加盟は木村彰一のイニシアティブによるもので、佐藤先生はそれを引き継ぎ、2003年の第13回リュブリャナ大会まで日本代表を務められた。

たと思います。私はもう、滅多に、夏休みぐらいしか、海外に行けなかったもの
ですから。

大平 1983年の、日本が正式に参加するようになったキエフ大会の、日本のコ
ントリビューションズ（報告集）は木村彰一先生の名前で出てるんですけど、そ
れは佐藤先生がやってたんだと思います。僕は佐藤先生のご指示で、報告集を巢
鴨の郵便局から外国に送った記憶があります。それで、佐藤先生はその時、メレ
チイ・スモトリツキーの文法用語について論文を書いておられたんですよ。そこ
までは覚えてるんですけど、ただ、誰が会議にいらしたのか、多分千野先生とか
栗原先生とか、そのあたりなんでしょうが。

佐藤 キエフにはたしかに行きましたね。

大平 多分、佐藤先生が科研費か何かを獲得して、その報告書という形でコント
リビューションズが印刷されたという記憶があります。

佐藤 木村先生と一緒にいった覚えはありますよ。

大平 その次の1988年のソフィア大会の報告集は、佐藤先生のお名前にもう
なってますね。ただ、あんまりあちこちの図書館に所蔵されてないんで、あれだ
けたくさん、自分の眼で山のようにあるのを見た報告集が、地方の大学には所蔵
されてないのは、ずっと地方にいる者としては困ったものだと思っています。

野町 まあ日本の代表団ということだったんですけど、日本にはある意味、いろ
んなグループのスラヴ語研究者というか、あるいはグループとか、もしかしたら
個人かもしれませんが。例えば、東京は東大の木村彰一先生を中心とした、佐
藤先生や栗原先生が関わっておられるグループがあって、関西には京大の山口巖
先生（1934-2020）⁹とそのグループがあり、私にはまあ、古代ロシア語研究や一
般言語学の立場からのスラヴ語研究があったという漠然としたイメージがあった
んですけども。どういう関係だったんですか、先生方の間というのは。京都の先
生方とか。

佐藤 まあ、同じスラヴィストだっていう意識は互いに持ってたと思いますけど
ね。

⁹ ロシア語学者、言語学者。京都大学名誉教授。

野町 一緒に科研費で何かやろうとか、そういうことは、当時はなかった感じですか。

佐藤 中々なかったですね。そういうチャンスはね、そういう申し出はなかったですね。山口さんがじゃんじゃん一人でやってるという感じで。

野町 古代ロシア研究会がありますね。

佐藤 ええ、研究会ですね。

大平 私は、30 歳ぐらいのときに天理大学に赴任して、で関西に行って驚いたのは、極端に言うと、スラヴ諸語まで視野に入れていたのは山口先生お一人だけっていう。

佐藤 ああ、そうですね。

大平 だから語学の先生といっても、他のスラヴ語にロシア語以外にどんな言語があるかとか、そんなことを知らないような、そういう先生方しかないようなところで山口先生がポツンといて、その周辺に古代ロシア研究会の人が集まってるという感じがありました。

佐藤 木村先生が古代教会スラヴ語の授業をあちこちでやってらっしゃって、それはよかったですけどね、我々は。

大平 だから、古代教会スラヴ語の授業を木村先生に受けられるとまだいいんですよ。僕は外語ですから、外語の英米学科出身の先生からロシア語史や古代ロシア語の講読を習うということになって、面白くないので身につけませんでした。

野町 木村彰一先生は、『イーゴリ軍記』なんかを 1950 年代にヤコブソンのところで習って、帰国後はそれをもとに授業をしたり、翻訳とかをしてらっしゃったみたいなんですけど、佐藤先生も『イーゴリ軍記』講読の授業は当時ありましたか。

佐藤 ありました、木村先生のゼミで『イーゴリ軍記』を読みました。

野町 授業はどういう感じなんですか。テキストが配られて、この文法形式は何だって特定して分析していく、そういうようなタイプの授業なんですか。

佐藤 そうですね、木村先生は『イーゴリ軍記』の翻訳を、あとで『イーゴリ遠征物語』として岩波から出してますよね。だから、意味はわかるわけですけどね。言語学的な説明っていうのは、実際の授業であまりなさらなかった気がしま

すけど。

大平 実は私も『イーゴリ軍記』の講読の授業を受けたことがあります。早稲田の大学院の授業で、私は外語の院生だったのに、潜りで聴講に行きました。

小椋 他にどんな方がいらっしゃったんですか。

大平 もう亡くなったけれど、山本〔富啓〕さん（1955-1998）という、フラブルの「文字について」という文献について修士論文を書いた人なんかがありました。その頃はもう木村先生は北大スラブ研究センターの『スラヴ研究』に翻訳と注釈を出された後で、私達はそれをカンニングできたので、まあ何とかついていけたのですけど。でも、細かかったですよ。一つ一つの語形がどうか、そういう話で、「ああ文献学ってのは、こういうふうなやり方でやるんだな」と思いました。桑野隆先生によると、ポーランド語の授業もそんな感じだったと。

[この後しばらくアルバムを拝見しながらお話を伺う。]

佐藤 これ、木村先生ね。千野君。3人で温泉に行ったんですけどね。

野町 勉強会とかですか。どこかに行ってテキスト読んだり。佐藤先生は、東大言語学科の風間〔喜代三〕先生と一緒に何か、メイエ（Meillet, Antoine, 1866-1936）¹⁰の本を使って読書会されてたって昔仰っていた気がしますね。

佐藤 風間さんとはよく一緒に飲みましたね。読書会なんかでもお付き合いがありました。

ロシア語教育、教科書執筆、蔵書

大平 こういうことは学会ではあんまり評価されないような気がするんですけど、先生の作られた教科書、先生のお作りになったロシア語の教科書が、我々の間では名著だと言われておまして。『NHK ロシア語入門』はとても良い、と京都大学の服部文昭さんなんかはいうんですけど、劣等生だった私は、白水社から出しておられる『ロシア語初級クラス』の方が好みます。それは私が天理に赴任

¹⁰ 仏人、印欧比較文法の専門家。『共通スラヴ語』の著者。



千野栄一先生、木村彰一先生、佐藤純一先生



おそらくは八杉貞利先生の米寿のお祝いの会にて。佐藤先生は最後列左から6人目

したときに使っていたんですけど、あの教科書は結構画期的ではないかという気がするんです。それまでは、文法項目がごちゃごちゃと入ってる。いろんなことを御存知なんですけど、体系づけられていないような印象の教科書が多かった

のですが、佐藤先生が作ると、ロシア語の体系っていうのがわかるような気がしまして。とても整理されている、必要な文法項目が選ばれている、全部落とし込んでないっていうのをすごく感じました。やっぱりそういうことを意図して作られましたか。あの頃は、実は今でも、使いにくい教科書っていうのは、次々作られていて、それはやっぱり盛り込みすぎている気がするんですが。

佐藤 どうでしょうかね。これが『NHK 新ロシア語入門』の最新版ですけどね。

大平 ハードカバーになった。

野町 私は先生がお書きになったロシア語史の本を、授業で使わせていただきます。大学書林から出た、分厚い本ですね。

大平 『ロシア語史入門』ですね。

野町 先生はロシアには留学はされてないわけですよね。

佐藤 長期はしてませんね。夏休みの講習会とか、そういうのは何回か参加しますけど。

大平 先生はNHKのロシア語講座をやっておられましたよね。割と早い時期の、テレビとかラジオの。

佐藤 私はテレビではやっていなくて、ラジオのロシア語講座をやっていました。

大平 どんな感じでしたか、最初の頃は。僕なんかテレビでちょっと見た頃なんかは、モスクワから派遣されてきたアナウンサーがいたんですけども、やはりラジオでもそういう、モスクワから派遣されてきたような、ある意味プロフェッショナルなアナウンサーのような人が。

佐藤 そうですね、かなり発音が良かったです。

大平 服部文昭さんが、すごい発音が良いというか、細かい違いまで分かるような人がいたって仰ってたんですけどね。僕は聞いてなかったんで、そこまでは分からないんですが。

野町 栗原先生に伺ったんですけども、栗原先生もよくご存知なかったんですが、木村彰一先生の蔵書とか、資料とかです、文通とか、ああいうものはどうなったかっていうのは先生ご存知ですか。どこか大学が引き取ったとか、そういう感じではないんですかね。

佐藤 うん、それほどたくさんはなかったです。娘さんが3人いてね、確かその一番上の娘さんのお婿さんだったと思うけど、その方がずっと世話をしてくれて。古本屋にね、色々処置してくれたように思いますけれども。

大平 確かに木村先生の蔵書の話っていうのは聞かないですね。徳永先生の蔵書の話は、千葉大学の図書館にまとめて入ったんで、シンポジウムを開いて、その文書が読めたりしますけど¹¹。ああいうふうにしてくれると助かるんだけどな。千野先生もあんまりよくわからないし。博友社の『ロシア語辞典』は先生が中心におつくりになられたんですか。

佐藤 そうですね、何人かですが。

小椋 学生が最初に使う辞書ですよ。私も使いました。

大平 先週桑野先生にインタビューしたんですけど、桑野先生が大学院を出て就職するまでの間に、ここの仕事が支えになったって。で、佐藤先生と森安〔達也〕先生（1941-1994）と、いつも一緒に仕事してて、とても勉強になったと話をしてられました。これはなかなか良いと思うんですけどね。発音記号もついてるし。でも、文学やってる人はあまり認めてくれなかったりする。

小椋 いやいや。でも先生は、駒場の時はお忙しかったでしょうね。ラジオとかこういうことをされて、その他に、駒場の授業がたくさんあったりして、やっぱりお忙しかったですか、印象としては。

佐藤 ええ。外語大でも教えてましたしね。忙しかったですよ、本当にね。

野町 佐藤先生はロシア文学にはご関心はあんまりなかったのですか。

佐藤 そうですね、私自身は関心があっても、他に専門家がたくさんいましたからね。ただロシア語学の方はね、あんまり、信頼できるところまでやってる人が少なかったんですけど。まあ文学はうんといましたからね。

大平 でも、先生がゴーリキーの『どん底』の翻訳をしておられるの、知っています。

佐藤 ゴーリキー？ 忘れちゃったな。

小椋 ゴーリキーか。どうしてそういう新しいのを先生が訳されたんでしょう

¹¹ ユーラシア（徳永）文庫のこと。

ね。

大平 白い本だったな。昔あった世界文学全集で。まちがいないと思う。¹²

[このあと写真撮影。お茶とお菓子をいただき、しばらく歓談ののち、お暇する。]

(文責：小椋彩)

¹² 講談社の『1974年版 世界文学全集 82』にゲーリキーの「イタリア物語」と「どん底」を翻訳しておられる。

岡本崇男（おかもと たかお）

① 1954 年 ② 神戸市外国語大学 ③ 神戸市外国語大学 ④ スラヴ語発達史、中世東スラヴ語文献の言語 ⑤ 共著に「ノヴゴロド第一年代記（シノド本）語彙集」『古代ロシア研究』23号（2014年）や「シモン・ブドニ『教理問答』（1562年）テキストおよび解説」『神戸市外国語大学外国学研究』56、71（2003年、2008年）、翻訳にアレクサンドル・イサチェンコ「ロシア標準文章語成立にまつわる神話と事実」『古代ロシア研究』23号（2014年）などがある。



2024年8月26日、120 WORKPLACE KOBE（神戸市中央区磯上通4丁目 三宮スカイビル）の小会議室にて

インタビュアー：大平陽一、田中大

古代ロシア研究会がハイブリッド形式で研究会を行う時に使っているというコワーキングスペースを、岡本先生に予約していただいた。インタビューは、午後3時より途中で休憩をはさんで約3時間行われた。

大学でロシア語を専攻した理由

大平 まず、大学進学にあたってロシア語を専攻した理由をお聞かせください。

岡本 中学生の頃、英語の成績が良かったので、高校に入ったらもっと他の外国

語に手を出そうと高校入学前から学習計画を立てていました。具体的に言うと、まず英語の次に人気があったドイツ語、次にフランス語を勉強することにしていたのです。そして高校一年でNHK ラジオ・ドイツ語講座の基礎編を聞きながら三修社の月刊雑誌『基礎ドイツ語』を購読し、二年からはラジオ・フランス語講座の基礎編とドイツ語講座の中級編を聞きました。この時点で、どこかの大学の文学部か外国語大学に入ってドイツ語を専攻できればいいなと思っていました。ただし、ドイツ語とフランス語の学習に相当な時間を割いていたせいで、英語を含めた正規の学習科目の成績が低下の一途を辿り、特に物理、化学、数学は限りなく欠点に近い評価しかもらえなくなっていました。

高校三年生になると否が応でも大学受験を意識するものなのでしょうが、実はわたしは高校入試の成功体験の記憶があったのでまだ楽観的で、二学期から、夏休み明けから勉強すればどうにかなるのではないかとのおんびり構えていて、三年生になってからはフランス語の中級講座とロシア語の基礎講座を聞き始めました。ドイツ語、フランス語の後にロシア語を選んだ理由はあまり明確ではありません。世界史で習う「三国干渉」の当事国の公用語であることが、少しは意識の中にあっただのかもしれませんが。おそらくそれより大きい理由としては、ある英語の先生が授業中に「ロシア語はとても綺麗な響きの言語ですよ」とおっしゃったことが影響したようです。その先生は英語の発音がとても見事なのですが、英語覇権主義者ではありませんでした。広島大学文学部言語学科を出られた方で、どうやらご自身もドイツ語、フランス語、ロシア語などにも手を出されたようで、日本語を含めたさまざまな言語を平等に見る態度をお持ちでした。だから、響きの綺麗なロシア語を勉強してみようかなという気になったのだと思います。ただ、ロシア語の学習はドイツ語やフランス語ほど順調には進みませんでした。文字と語尾変化はそれほど苦にならなかったのですが、語順が自由なようでそれなりの決まりがありそうなのだが、その原理がわからない。ちなみにその時のNHK ラジオ講座の講師は佐藤純一先生でした。よくできたテキストではあったのですが、語順の説明などは、逆に初学者には必要のない説明だったので省かれていたのかもしれませんが。そのため少し勉強の進捗がもたつき気味になりました。それから非人称述語（特に動詞）を使った表現がやたらに多い。ヨーロッパ

の言語に対して自分が抱いていたイメージがロシア語に触れることで大幅な修正を迫られることになり、戸惑いが学習意欲の低下につながり、時々ラジオ講座を聞くのをサボるようになりました。そうこうしているうちに三年の一学期が終わりに近づき、大学受験を意識して高校の授業科目の勉強をしないと、どの国公立大学にも入れないという現実を突きつけられて、英語以外の外国語の学習は放棄しました（私立大学は授業料が高いので選択肢に入っていません。それに比べて当時の国公立大学の授業料はあつてないようなものでした）。

高校の授業科目をまともに勉強していなかったことが祟り、それなりの点数を取れる科目は英語、世界史B、現代国語のみで、その上経済的な理由で私学は無理ということだったので、自ずと進学先は絞られてしまいます。受験科目に理科と古文がなく、数学の問題が嘘のように簡単な大学は、神戸外大以外に選択肢がありませんでした。当時、国公立大学は一期と二期の2度受験チャンスがあったので、一期は広島大学の独文、二期は神戸外大のロシア学科に出願しました。ロシア学科を選んだのは、ラジオ講座での挫折を帳消しにしようと思ったのと、受験の前年に日中国交回復があり中国学科の競争倍率が高くなると予想したからです。当時は冷戦時代だったため、ロシア語なら入りやすいのではないかと思ったためです。しかし実際のロシア学科の倍率は名目13倍、といっても二期目で欠席者が多いため実際はその半分くらいでしたが、それでも高い倍率ではありました。ちなみに、英語とスペイン語は最初から眼中にありませんでした。結局、広島大学の方は生物と数学でほとんど点が取れなかったので落ちるべくして落ちましたが、幸いなことに神戸外大が拾ってくれました。

大平 当時の神戸外大のロシア語学習環境がどのようなものであったのか、お聞かせください。

岡本 当時のロシア学科には教育プログラムのようなものがなく、各教員が悪く言えば勝手に授業の方針を決めていたようです。もちろん一年生には初級文法と会話の初歩を教えるということについては現在と基本的に変わらないのですが、わたしの大学生生活初日に受けた露作文の授業には驚かされました。先生はいきなり日本語の問題文（五つぐらい）を読み上げて、それらをノートに書き取るようにわたしたち学生に指示します。ほぼ全員が書き取った頃合いを見計らって、先

生は教室の一番前に座っていた学生に向かって、「そこの学生さん。最初の問題文をロシア語に訳して板書してください」とおっしゃるのです。その瞬間、学生は全員あっけにとられました。ちょっとだけロシア語を齧ったことのある学生は、わたしも含めて少数派に属していて、ほとんどの同級生は文字さえ知りません。わたしもロシア語はほとんど忘れていました。当てられた学生はおそらくアルファベットも全く知らないという状態でしたが、それで和文露訳をしるというのは無理な話なのに、先生は学生たちが戸惑っているのを見て不思議そうな顔をされるのです。やがて、先生に当てられた学生が自分たちは入学したばかりでアルファベットもまだ習っていないと恐る恐る言うと、先生は「あっ。そうでございますか。それなら今日はわたしがやりましょう。来週からは皆さんがやってください」と淡々とおっしゃって、解答を板書されました。もちろん、ほとんどわかりませんでした。板書はもちろん筆記体で。後で、上級生やOBにこの話をしたら、笑いながら「まだやっているのか」と。毎年同じことが繰り返されていることがわかりました。

大平 聞きにくいことですが、それは専任の先生ですか。

岡本 専任の先生です。わたしが受験したときの試験官でもありました。作文の問題文も何年間も基本的に同じだったようです。ですが、その先生の名誉のためにも言っておきますが、その先生の授業は決して悪くありませんでした。一年、二年とその先生に作文を教わったおかげでそれなりにロシア語の文章を作れるようになりました。実はその先生はハルビン学院の出身者で、奥さんはロシア人であり、実践的なロシア語がかなりできる方でした。ちなみに、この先生はオーカニエで発音されるので、最初は「この先生はロシア語が下手なのではないか」と思っていたのですが、そうではありませんでした。ちなみに、奥さんはアーカニエで発音されていました。

最初の年はそのような感じでしたが、学年が上がると講読が増えていきました。神戸外大のロシア語の授業構成の一つの特徴は講読の比重が大きいことかもしれません。わたしが教員になった頃からこの講読重視のカリキュラムは学生から非難され続けていますが、現在でも三、四年生の専攻ロシア語の授業の半分は講読のはずです。

わたしが学生だった頃は二年生くらいから講読が始まっており、プーシキン、トルストイ、レーンモントフといった文学作品、それからソビエトの新聞雑誌の論説などを読みました。先生によってはソビエト共産党の党大会のテーゼを教材にする方もいらして、これを嫌う学生は結構いました。しかしこれは典型的な論文のスタイルであるため、論文特有の構文に慣れることができました。大体内容は抽象的で、語彙も抽象的なものだらけ。それに加えて、ありがたいことに、クリシェ、決まり文句の集まりです。それほどページ数は多くありませんでしたが、一年かけて読んだと思います。前期が終わった頃にロシア語学関係の論文を読んでみたら、ある程度読めるようになっていました。論文の文体にすでに慣れつつあったのだと思います。これが文学作品の場合だと、最後の頁まで辞書なしでは読めませんが、このような論文の場合だと、最初は少し大変でしたが、徐々に慣れてくると辞書をそれほど使わなくても読めるようになりました。ですから、論文を読むことは今でも授業の中に取り入れていいのではないかと思います。

大平 一昔前の神戸外大の学生さんのイメージだと、講読が多いことが不満というのは分かるのですが、最近はロシア文学会にも神戸外大の院生が増えてきています。学生の質が変わってきていて、そういうものを面白がる学生もそれなりにいるのではないかと思います。

岡本 大平先生がおっしゃるような学生たちは、教室では少し変わり者です。彼らはかなりよく読んでいます。三年生くらいから徹底的に読んでいました。授業以外にも研究会をしたり、あるいは翻訳のある種のクラブ活動を楽しんでやったりしています。

大平 いまも過半数は口頭コミュニケーション志向ということですね。

岡本 そうですね。ただ口頭コミュニケーションができるかということ、そうでもありません。つまり話のネタがなければ口頭コミュニケーションはできないし、それなりの文体の練習というのも必要なのですよね。それは何で培うかということ、書き言葉、いわゆる литературный язык というもので、大学で教えているのは литературный язык ですから、書き言葉としてだけでなく口頭で用いても恥ずかしくないものです。これをきっちりやるには、辞書を引きながらでもテキスト

を丁寧に読んでいくのがいいのではないかとわたし個人としては思います。二年生の頃、ひとりだけものすごく会話ができる同級生がいて、「金魚のフンのようにいつもロシア人の先生に付き纏っているからできるんだ」と皆は言っていました。実はそれだけではなくて、その同級生の持っていた辞書はぼろぼろになっていました。後で本人に聞くと、使い方が荒かったからだと言うのですが、それだけではなかったのです。基本的な単語はほとんどわかっていました。後々その人は大学院に入ったのですが、やはりきっちりと論文も読んでいました。喋るのも読むのもできていました。それも *литературный язык* に習熟したことに支えられていたのだと思います。

スラヴ語研究を始めたきっかけ

大平 次に、ロシア語からさらに、スラヴ語研究を始めたきっかけについてお聞かせいただきたく思います。実は先日、佐藤純一先生にインタビューをしたのですが、当時の東京外大にはある意味学問的な先生がいらっしゃらず、スラヴ語のひとつとしてロシア語を学ぶ意義を理解できたのは、一般教養の先生であった言語学者の徳永康元先生のおかげであったことを繰り返し強調しておられました。東京外大にせよ神戸外大にせよ、わたし自身、岡本先生より少しだけ年齢としては下ですが、昔の外国語学科のカリキュラムには、スラヴ諸語についての授業はほとんどなかったように記憶しています。どうして岡本先生のようなスラヴィストが出現したのかということについてお聞かせください。

岡本 神戸外大ロシア学科の最初の二年間は、昔やったフランス語やドイツ語をちょこちょこ勉強していましたが、ロシア語以外のスラヴ語に全く興味が湧きませんでした。ごっちゃになるのではないかとという心配があって手を出しませんでした。一年生の間とにかくロシア語に集中しようと心に決めて、それを実践し、それなりの結果が得られましたが、一般教養の授業をほとんど履修していなかったで、最初の年度末に取得した単位数が卒業必要単位の6分の1以下という悲惨な結果に終わり、四年で卒業できないのではという不安に襲われたものです。しかし、二年目からはできるだけたくさんの授業を履修することに方針を転換して、どうにか四年で卒業できました（当時はCAP制が導入されていなかった

たので、体力があれば一年間で70単位近く取得できたのです。

ロシア語の文法は好きでした。一年の専攻ロシア語の授業6コマのうち文法が二つあり、その授業がとても面白かったことが、その後のわたしの人生を決めたような気がします。文法の授業を担当された松川秀郎先生（1919-2011）は「文法は理屈で覚えるものであって、暗記で身につけるものではない」ということを力説され、独自の図式を使って文法を説明されていました。

大学の二年生になって専門科目と呼ばれる講義科目を履修できるようになったので、このカテゴリに入っている言語学、音声学（特にこの二つは大学入学前から取ろうと思っていました）、それから古典語（ラテン語）の三つの授業の勉強には相対的に多めの時間を費やしました。その分、ロシア語の勉強は疎かになりました。

三年生に上がると「ラテン語を勉強したのであれば、スラヴの古典語も勉強してみないか」と、当時着任したばかりの井上幸和先生から古教会スラヴ語の勉強会に誘っていただきました。井上先生はわたしより六つくらい上の、まだお若い先生でしたが、京都大学大学院の言語学専攻の前期を終えられて助手として赴任されました。この勉強会には井上先生とわたし以外に先ほど紹介した松川先生と松川先生に師事されていた大学院生の村上光昭さん（現在、神戸外大名誉教授）が参加していました。古教会スラヴ語の学習経験があるのは井上先生だけで、松川先生、村上さん、そしてわたしは全くの素人です。勉強会は金曜日の午後に井上先生の研究室で行われました。教材は August Leskien, *Handbuch der altpulgarischen Sprache* の撰文集で、文法分析をしながら古教会スラヴ語のテキストを訳読していきます。訳読は最年少のわたしの仕事でした。今のわたしがあるのはこれのおかげだという気がします。文法の講習なしに、初回から訳読をすることになったので、前日の木曜日は最初のうちほとんど徹夜をせざるを得ませんでした。金曜日の午前中は専攻ロシア語の授業が2コマあって、こちらの準備も疎かにしづらかったので、専攻の予習をすこしやって、それから古教会スラヴ語をじっくり勉強する、という生活が一年間続きました。同じスラヴ語だとはいいながら、ロシア語と古教会スラヴ語は、似ているところはあるとはいってもかなり違ってきます。一から文法を学びながら、文を訳していくのは楽ではありま

せん。初回の予習は福音書 5 節分で力尽きました。冒頭部分は今でも暗記しています。参考書は先ほど申し上げた August Leskien の *Handbuch...* と André Vaillant, *Manuel du vieux slave* で、これは井上先生から借りました。それから当時出たばかりだった *Хабургаев Г.А., Старославянский язык* を使いました。高校生のときに独習したドイツ語とフランス語の知識が偶然ここで役に立ちました。メインの参考書としては Leskien と Vaillant を使い、これらに書いていないことをたまたま *Хабургаев* が書いているので、この三つがあればそこそこの知識が得られました。また、二年生の時に言語学、音声学、ラテン語の授業を履修していたおかげで、どうにか挫折せずに勉強を続けることができました。

この研究会は四年生の前期まで続きました。井上先生が後期からモスクワ大学に研修のため出張されたので、そこで終了となりました。

古教会スラヴ語に熱をあげているうちに、古いロシア語、いわゆる「古代ロシア語」にも興味が湧いてきました。もっとも、当時は古教会スラヴ語と現代ロシア語を結ぶ線上に古代ロシア語が位置付けられると勝手に思い込んでいました。しかし、そんな単純なものではないのです。今から考えると恥ずかしい限りです。古代ロシア語と古教会スラヴ語の文法的な違いなど全くわからないままに、卒業論文では古代ロシア語の無接続詞複雑文をテーマにしました。つまり二つの並立する単文に主従の関係を生み出す従属接続詞以外の言語手段を見つけて分類しただけの短い論文です。特定のテキストを対象にせずに、ソ連の文献から例文を取ってきたので、キエフ・ルーシ時代、モスクワ・ルーシ時代の書き言葉だけでなく、アフナーシエフが採取した民話からの例なども混じった酷いものになってしまいました。

実はわたし自身は単語の形態とかアクセントに興味がありました。ところが、先ほど紹介した、わたしのゼミの先生で卒論指導もしていただいた松川先生は歴史が大嫌い、古い言語をやるものではないという信念のようなものをお持ちでした。でも不思議なことに山口巖先生（1934-2020）とは仲が良かった。だからお二人の間にはいると、どちらの先生の顔を見たらいいのかわからなくなってしまっ、とても居心地が悪かったです。松川先生は統語法をやっておられたので、少し歩み寄るようなふりをして、古代ロシア語の統語法を研究していたわけ

ですが、結果は惨憺たるものでした。

大平 松川先生、井上先生に声を掛けられて勉強会があったというような話は、実は前にインタビューした桑野先生の場合は、当時東京外大の非常勤講師だった千野栄一先生のお宅に伺って、ひと夏毎日のように読書会をやったとか、あるいはその千野先生と佐藤純一先生は、古教会スラヴ語に興味があったけれども東京外大では教えてもらえないので、ネイティブのミチューリン先生のお宅に伺って、当時出たセリシチェフ (*Селищев А. М., Старославянский язык*) を読んだというようなことをおっしゃっていたのですが、そのような雰囲気、もしかしたら古代ロシア研究会にも繋がっていったのかもしれませんが、昔はそのようなことが多かったのでしょうか。

岡本 当時日本の大学で古いところを教えているところはなかったのではないのでしょうか。実はモスクワ大学の文献学部では、古教会スラヴ語は必須科目なんですよね。だから、モスクワ大学出身のロシア人の先生は、みんなやっています。

大平 何年か前にスラヴ・ユーラシア研究センターの野町素己先生とお話した時に、野町先生は文献学専攻の方ではありませんが「古教会スラヴ語をやるのはスラヴィストとして当然のことだ、だから日本ではそうではないということに海外から来る研究者はみんな驚いている」というようなことはおっしゃっていました。

大学院時代の研究と山口巖先生との出会い

大平 話を先生ご自身のことに戻しますが、岡本先生は、どこの大学院に進学されたのですか。

岡本 大学院も神戸外大です。松川先生に勧められて京大を受けてみたのですが、一次試験で落とされました。英語ができてなかったのかなと思います。わたしを厄介払いしたいと思っていたであろう松川先生の機嫌がそのときは非常に悪かったですね。神戸外大の大学院の方は受かっていたので、仕方なく神戸外大の大学院で勉強することになりました。困ったのは、松川先生が古いことばが嫌いだったことでした。松川先生は音声と古語がお嫌いでした。音声学と音韻論の区別がつかない。それなのに現代語専攻で、しかも現代語はよくできて、説明力

がある人でした。誓約させられたわけではありませんが、大学院では現代ロシア語の統語論をやるということになってしまいました。しかし、それでいろいろ議論したことが役に立ったと思います。修士論文は「ロシア語における主語 [Подлежащее в русском языке]」というもので、これも非常にひどいもので、中身は思い出したくありません。

大平 岡本先生は山口巖先生の指導をずっと受けておられたのだと思っていたのですが、そうではなかったのですね。

岡本 山口先生は教養部の先生で、院生を持っていませんでした。よく「院生のおもりをしている」「僕は弟子を取らない、みんなライバルだ」ということは仰っていましたが。

大平 山口先生とのつながりはどのように生まれたのですか。

岡本 山口先生は神戸外大大学院の非常勤として出講されていました。実は山口先生と神戸外大のつながりは非常に古くて、山口先生は博士課程後期から神戸外大で授業されていました。当時神戸外大のボスだった久保二郎先生が、山口先生の学会の報告で、具体的なことは忘れてしまいましたが、報告の何かに「しびれた」ということで、声をかけたのだそうです。久保先生が辞められたあとは松川先生の研究室に入りびたりでした。久保先生や松川先生との関係はずっと続いていて、結局松川先生が神戸外大をお辞めになったときに、「もう義理は果たした」とおっしゃって山口先生は神戸外大の非常勤をお辞めになっています。わたしが院生の頃、他の授業はわりとのんびりしていたのですが、山口先生の授業は厳しかったです。「数学ができる先生だ」ということでロシア学科では有名でした。最初の年は *Гладкий А. В., Мельчук И. А., Элементы математической лингвистики* という数理言語学の入門書をやりました。二年目が *Десницкая А. В., Вопросы изучения родства индоевропейских языков* で、印欧語比較文法をやりました。実はどちらも山口先生の得意分野でした。特に一年目の数理言語学は往生しました。これは当番制で、当時は幸い院生がたくさんいたので一人の分担は割と少なかったのですが、切りのいいところまでということだったので、切りのいいところとなると 5 頁から 10 頁ほどと、けっこうありました。それを、「いちいち訳してはいけない、要約しなさい、必ずハンドアウトを作りなさい」というこ

とで、これまた当番の日の前日は徹夜でした。これでハンドアウトを作る練習をしたという気がします。そのため、その後学会の報告などでハンドアウトを作るなど、それほど苦労しませんでした。論文を読みながら、まず、ある程度まとまりのある範囲を頭のなかで要約していました。実際には、テキストの余白に小さく要約を書いていました。そのようにして、どうにか二年間、山口先生にお世話になりました。当時、山口先生は結構怒りました。「わからないのに質問もせず、分かった顔をするな」と一度怒られたことがあります。あまりそのような怒られたことがなかったので、これは非常に新鮮でした。やはりそうになると、ある程度懐くんですね。

院生の頃から、山口先生に「古代ロシア研究会に来ないか」と言われていましたが、古語嫌いの松川先生の顔がちらちらと思い浮かびました。その頃、すでに古代ロシア研究会に入っていた井上先生に聞いてみたところ、好きなようにすればと言われましたが決心がつかず、神戸外大の大学院は修士課程だけなので、博士後期をどこかに進学するという手もありましたが、ちょうど松川先生がロシア語の非常勤講師の口を回してくれたので、自分で勉強しながらどうにかつないでいこうと思いました。自分で比較言語学とかスラヴ語学の勉強をぼちぼちとやることにしました。ちょうどそのころロマン・ヤコブソンの著作集 *Selected Writings* が刊行中で、幸い神戸外大の図書館にも所蔵されていました。音韻論や形態論に関する論文を選んでコピーをして、ノートに訳していました。そのような生活を一年くらい続けました。今その訳を読み直すとあまりのひどさに驚いてしまいます。分からずに訳していることがすぐに分かります。ただ、「ちょっと気になるものがあつたら訳すと良い」と山口先生が、わたしが院生の頃に仰っていたので、それを実行したわけです。結果的にそれは正しかったと思います。

結局古代ロシア研究会に参加するようになったのは、松川先生が神戸外大を退職されて京都産大に移られたところで、1982年か、83年だったと思います。

古代ロシア研究会設立の経緯

大平 岡本先生ご自身の話から離れてしまうかもしれませんが、古代ロシア研究会について、岡本先生が入会される以前のことも含めてお話させていただきたいと思

います。わたしは東京外国語大学出身ということもあって、今も関西人になり切れていないところがあって、どっちつかずの者としてロシア文学会を見ています。そんなわたしの目からすると、関東の研究者もそうですが、関西のロシア文学会の会員でさえも、日本のスラヴ語研究にとって古代ロシア研究会の持つ重要性を理解していないような気がします。それもあってこのインタビューを企画した次第です。そこでこの機会に、その主要なメンバーである岡本先生に、古代ロシア研究会全般についてお話しさせていただきたく思います。まず、この古代ロシア研究会はいつ、誰によって設立されたのか、お話しください。

岡本 創立当時のことはもちろんわたしの体験ではありませんので、山口先生か河合忠信先生（1924-2013）にうかがった話や研究会誌の記録をもとにお話しすることになります。研究会誌『古代ロシア研究』創刊号の序文には、日本古代ロシア研究会が1961年に設立されたとあります。具体的な日付はわかりません。創刊号が発行されたのが1962年3月1日で、そこには『原初年代記』（いわゆる『過ぎ去りし年月の物語』）の冒頭部からの、ある程度まとまった分量の記事の訳註が掲載されているので、かなり頻繁に輪読会が開かれていたようです。創刊号の「あとがき」には「月に一度か二度日曜日に大阪外大の研究室を借りて、その機会に（＝輪読に）当てて来た」と書かれています。今よりも頻繁に集まっていたのだらうと思います。

設立時のメンバーは菱山忍（1921-1981）、河合忠信、國本哲男（1925-1996）、植野修司（1926-2008）、山口巖の五先生です。これらのうち山口先生を除いた四先生は1920年代生まれで比較的年齢が近く、大阪外語（大阪外国語学校、大阪外事専門学校）でロシア語を学ばれています。そして、戦後、菱山先生と植野先生は京都大学文学部に入学されて言語学を専攻し、河合先生も文学部の専科に入ってやはり言語学を専攻されています。國本先生も京都大学に入学されたのですが、専攻は経済学でした。これについては、当時ソ連のことを学ぶには経済学が一番よかったということなのではないかと思いますが、よくわかりません。そして、先の四先生とはやや歳が離れた山口先生（1934-2020）だけは学部から京都大学で学ばれ、やはり言語学を専攻されています。つまり、設立時のメンバーには大阪外語でロシア語を学んだ、あるいは京都大学で言語学を学んだという共

通点があります。古くからの顔なじみだったのでしょう。

大平 山口先生以外の四先生については、今の若い会員は知らないのではないかと思いますので、簡単にご紹介いただけますか。

岡本 菱山先生は、スラヴ語の比較・歴史研究をされています。「ロシア語史概説」というのを『古代ロシア研究』に3回にわたって書かれています。これは、後に菱山先生が亡くなったときに、山口先生が、これは本邦最初の本格的な研究であると書かれています。おそらくこの時期には、他にこのような研究がなかったのではないかと思います。

河合先生は、天理大学、それから近畿大学の教員をされています。お若い頃は天理図書館の司書として14年間くらい在籍しておられ、教員になられてからも司書の仕事は続けておられました。いわば図書館のプロでした。『古代ロシア研究』では年代記テキストの書誌的研究を發表されています。天理図書館の館報に『ビブリア』というのがありますが、実はそこによくお名前が出ていました。貴重本の解題を得意とされていました。松平定信の蔵書が天理図書館にあります、そのロシア語類の翻訳と解題もされていますし（河合忠信・左近毅「楽亭（松平定信）文庫旧蔵『魯西亜断本』——解題と翻刻」、『ビブリア』105）、これ以外にもたくさんあります。直接河合先生からうかがった話だと、60年代に二代真柱中山正善から、当時のお金で200万円だったかを渡されて、好きな本を買って集めてくるようにとロンドンに派遣されたこともあったそうです。

大平 次に國本先生についてですが、國本先生にはプーシキンとか歴史というイメージがありますが、経済を学ばれていたのですね。

岡本 國本先生の『ロシア国家の起源』が1976年の出版で、ロシア史に関する研究のある程度集大成になっているのではないかと思います。わたしはこの本しか知りませんでした。他にも書かれておられますが、実はプーシキンの研究をけっこうされています。個人的にプーシキンが大好きだったようです。

植野先生についてはよく知りません。というのは、菱山先生と植野先生とは一回しか顔を合わせたことがなくて、お話ししたことはありません。植野先生が書かれたものを読んでいると、ゴリゴリの言語屋ということではなく、どちらかという中世ルーシの文献を文学テキストとして扱われていて、レトリックとか、

言語表現を扱っておられた感じです。ですから、『古代ロシア研究』に出ている論文は、論文といってもなんとなくエッセイ風といった感じでした。

大平 そうした先生方が古代ロシア研究会を設立なさったわけですが、その研究会設立の動機はどのようなものだったのでしょうか？

岡本 設立の動機については『古代ロシア研究』創刊号の「あとがき」に「いかにほか古代ロシア語に通じたものたちが集まって、共通の文献を読み、それぞれの分野での専門を生かして古代ロシアの文化の研究に役立てようとする意見が、誰とはなしに起こってきた〈…〉お互いに、そうして勉強し合うことによって、また専門の分野での仕事にも貢献することがあるようにも思われると話したものである」と書かれています。

会誌の創刊号の序文には、第二次世界大戦後の日本でロシア研究者の数が急速に増えて、多方面にわたる成果が上げられつつあるが、それは当時のソビエト連邦の諸問題か 19 世紀ロシア文学の領域に限られていて、ロシア史、特に古い時代の歴史への関心が薄いことが指摘されています。この序文は菱山、河合、植野、山口の四先生の共通の恩師である泉井久之助先生（1905-1983）によるものですが、おそらく当時のロシア研究の実情が反映されていると思われます。

研究会が発足した当時は、ある種のソ連ブームだったわけですね。わたしはその頃小学生でしたが、ソ連の科学技術やベーリング海峡のダム計画のような自然改良計画などが知られていました。ちょうど日本のほとんどの国立大学や大手の私立大学では、第二外国語にロシア語講座が開設されていて、ロシア語の先生がその当時は多かったですね。ソ連というと科学、社会主義経済、戦前から知られていた文学と芸術といったあたりが、日本人にとってのロシアだったのでしょうか、結局ロシアの文学や芸術というと 19-20 世紀、つまり近代なので、それ以前の文献、ましてやキエフ・ルーシ時代の年代記を原文で読もうという人は、ロシア語やロシア文学の専門家の中にもほとんどいなかったのではないかと思います。研究会設立当時というのは、最年長の菱山先生で 40 歳、河合、國本、植野の三先生は 30 代半ば、最年少の山口先生はまだ 27 歳でした。おそらく、自分の学問上の確実な足場を築くために模索されていた時代ではないかという気がします。当時はまだ古代ロシア語の辞書や古教会スラヴ語の辞書がなく、中世ロシ

アの年代記を読むというのはかなり無謀な企てだったはずなのですが、その分若手研究者たちの野心をくすぐったのではないかと、わたしは勝手に想像しています。

泉井久之助教授の影響について

大平 古代ロシア研究会のメンバーである木下晴世さんが、よく泉井久之助先生の話を読まされていますが、わたしにとって泉井久之助は歴史上の人物という感じですね。最近、エスキモー語研究の世界的権威である宮岡先生のご著書を読んでいて、そこに泉井先生の名前が出てきて、京大言語学科における泉井先生の影響力を再認識したのですが、その創刊号の序文を泉井先生に依頼しているというところを見ると、やはり影響が大きかったと考えてよろしいのでしょうか。

岡本 國本先生を除いた四先生は、泉井先生の直接の教え子です。ですから『古代ロシア研究』の第6号、これは泉井先生の還暦祝いということになっていて、表裏の表紙が真っ赤なんです。ひとつの趣向ですね。やんちゃなことをするなあと思ったのですが、これは恩師である泉井先生への敬意の現われでもあり、親しみの現われでもあるという気がします。『ロシア原初年代記』の注釈には、単語の語義とか語源、異本間の語形の比較に関するものが割と多いのですが、これは訳者の多くが言語研究者なので、どうしても年代記に書かれている内容だけではなくて、言語そのものに関心が向けられたからだと思います。泉井先生の代表的な訳注書は、岩波文庫のタキトゥスの『ゲルマーニア』ですが、この訳書の注釈には語源や語形成を通じてテキストを理解していく態度が窺えます。初期の『古代ロシア研究』の注釈の書き方も泉井先生のこうした姿勢に影響されたところがあります。

大平 年代記だけでも、言語研究にも直結しているというスタンスというのは、古代ロシア研究会のひとつの特徴なのかと思いますが、泉井先生からの影響があるのだろうと、お話をうかがっていて思いました。

初期の古代ロシア研究会における資料の入手について

大平 古代ロシア研究会の活動の大前提として、資料の入手ということがあると

思います。研究会が発足した 1961 年に原初年代記のテキストを入手することは、容易ではなかっただろうと推察されるのですが、どのようにして初期のメンバーが辞書を含めた関連資料を入手していったのか、ご存じの範囲で教えてください。

岡本 これは『古代ロシア研究』創刊号の「あとがき」に書かれていて、天理図書館所蔵の『ロシア年代記全集』1846 年版を使ったということです。「貴重な本を利用させていただいたことに対し、深く感謝いたします」という謝辞があります。河合先生が当時天理図書館の司書だったので、テキストを提供されたということなのですが、どういう形で提供してもらったのかはよくわかりません。原本を持ち出せたのか、それともコピーをしたのか、あるいは他の手段に拠ったのか。この時代にはコピー機はまだ普及していないはずなんですよ。もしかしたら数少ない資料を車座になって読んだのでしょうか。

辞書については、スレズネフスキーの 3 巻本 (*Срезневский И. И., Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам*)、6 巻になって復刻されたこともあります。これが最初はなかったようですね。最初は岩波の露和辞典と、ダーリの辞書を使っていたようです。ただ、『古代ロシア研究』が創刊されるまでの間に、國本先生が当時勤務されていた大阪外大がスレズネフスキーの辞書を購入したため、研究会の開催場所がその頃から大阪外大になったようです。それまでは植野先生のご自宅で行っていたそうです。1963 年の会誌の第 3 号の「あとがき」によると、ロシア年代記全集がモスクワから再版されたく、会員全員がこの原初年代記が入っている第 1 巻を入手したと書かれています。また、第 1 巻から第 27 巻まで、会員が手分けしてそろえたということです。割と早いうちに資料をそろえることができたようです。

古代ロシア研究会の第二世代について

大平 創設期以降、特に佐藤昭裕先生や岡本先生の「第二世代」の方のお話をお伺いしたいと思います。これは田中さんの推測でもありますが、それまでの時期、『古代ロシア研究』第 10 号前後を境に世代交代があったのではないかということですが、その結果として何か違いはできたのでしょうか。

岡本 『原初年代記』の訳注最終回が掲載されたのが第11号、1977年でしたが、その「あとがき」に、植野先生が研究会を去られたということが書かれています。その前後、4年前の1973年の第10号の『原初年代記』の訳注の著者に、菱山先生の名前がありません。ということは、1970年代の前半に、2人の創設メンバーが研究会を離れられたということになります。実は第11号から会誌の欧文名称が *Studia philologica vetera Russica* から *Studia philologica palaeorussica* に変わっています。そして発行責任者の名前が書かれるようになりました。山口巖会長の名前が書かれています。この号が出された1977年から、訳読の対象が『ノヴゴロド第一年代記（古輯）』に変わります。

わたしが入会したのが第14号と第15号の間、ちょうど1980年から1983年の間なので、新しい体制になってからすでに3、4年経っていたのですが、雰囲気としては山口先生と名古屋大学の中條直樹先生が研究会を取り仕切っていて、國本先生と河合先生がときどき意見を述べられていました。訳語の決定については、國本先生が「そういうことにしておきましょう」とおっしゃれば一応解決ということになっていました。國本先生が一番の重鎮だったということですね。

1986年の後半から1987年の前半にかけて、『ノヴゴロド第一年代記』の訳読を中断して『原初年代記』の訳文の見直しをした時期があります。そのときにわかったのが、年代記の訳文の文体が新体制になってから微妙に変化しているということでした。これは、第11号までの会誌に掲載されている『原初年代記』の訳文と、1987年に出版された『ロシア原初年代記』の訳文を読み比べてもすぐには気づかないかもしれませんが。訳文を見直しているときに誰もが気になったのは接続語の「しかして」で、これがやたら出てくるんです。それで皆で「しかして撲滅運動」というのをやまして、全体として平易な日本語で訳して漢語を多用しないという方針を立てて、実はこの方針は現在でも守られています。

会誌には訳読に参加した会員の名前が書かれているのですが、それを眺めると、第9号の出た1968年あたりから会員の出入りが頻繁になっています。特に大学院生や若手の教員の出入りが多くなっています。これらの若手研究者の所属は京都大学、大阪外国語大学以外に、京都産業大学、名古屋大学、天理大学、香川大学、立命館大学、神戸市外国語大学などです。

古代ロシア研究の出版物と会員の業績

大平 会誌『古代ロシア研究』を除くと、研究会の出版物と言えるのは名古屋大学出版会から出ている『ロシア原初年代記』ですね。会誌は、現在まで何号出ているのか、そのあたりを教えてください。

岡本 『ロシア原初年代記』は日本出版翻訳文化賞を受賞しているのですが、古代ロシア研究会の会誌は今のところ 25 号まで出ています。実にゆっくりとしたペースで出されています。特に最近はそうなのですが、なかなか訳読が進まないというのがあります。

大平 そうは言っても 50 年以上続いているのはすごいことだと思いますし、『ロシア原初年代記』が日本出版翻訳文化賞を受賞したということは、それが画期的な仕事であったということで、当然のことだと思います。山口先生や有力なメンバーである先生方のお仕事の影響もあるのかもしれませんが、古代ロシア研究会は他の研究会に比べてとてもアカデミックな感じがしますが、研究会メンバーの皆さんの業績について、軽く論評していただけますか。

岡本 いくつかの傾向があります。一つが内的類型論で、特に山口先生の研究生活の後期はこれに完全にはまり込んでおられたと思います。内的類型論関連では、石田修一先生がおられます。この分野の著作は石田先生の方が多いかと思います。山田勇先生も類型論をやっておられました。また、すでに退会された神山孝夫先生は印欧語の比較文法や印欧祖語の母音体系について博士論文を書かれています。やはり内的類型論の影響を受けているようです。それから、割とオーソドックスなロシア語史については、佐藤昭裕先生が年代記のテキスト研究をされています。

大平 部外者からするとロシア語史の方が王道という感じがするので、山口先生のように類型論に走ったというか、はまり込んでいったプロセスというのはいささか不思議な気がして、この分野での代表作である『類型学序説』（1995 年）が出版された時は驚きました。あと石田先生のことを忘れていましたが、石田先生も古代ロシア研究会のメンバーですね。石田先生もむしろ類型論の方に仕事の重きを置いているのでしょうか。

岡本 お若い頃はロシア語史ですね。たとえばヴィノクルの翻訳、それから歴



『ロシア原初年代記』（名古屋大学出版会、1987年）のカバー

史統語論をやられていました。歴史統語論をやる人は少ないので、貴重だったのではないのでしょうか。

田中 山口先生のお仕事の中で、ロシア・スラヴ関係のお仕事についてもう少し伺いたいと思います。山口先生のロシア・スラヴ学の代表的なものにはどのようなものがあるとお考えでしょうか。

岡本 先生が書かれた論文の多くは古代ロシア語、古教会スラヴ語及び現代ロシア語の形態論と統語論に関するものです。特に、動詞の法・アスペクト・時制・相に強い関心をお持ちでした。それから、先生の研究業績の中で大きな価値をもつものとして『ロシア中世文法史』（1991年）に触れておく必要があると思います。ロシア語やスラヴ語に関して、音声や形態の歴史的变化を記述したり、特定の時代の文献の言語を分析したりする参考書や研究書は少なくないのですが、文法記述の歴史に焦点を当てた本はあまりお目にかかれません。先生の本は中世から近代に至るスラヴ語およびロシア語の文法書の内容が要領よくまとめられている良書だと思います。

大平 山口先生の晩年のお仕事は、わたしの中で今ひとつ古代ロシア研究会と結

びつかないのですが、中でも『パロールの復権——ロシア・フォルマリズムからブラーグ言語美学へ』（1999年）は、わたしのようにプラハ構造主義美学に関心のある者にとっては、他に類例を見ない大きな業績だと思いますが、これは先生の言語学の業績からはやや孤立しているかのような印象を受けます。それらの山口先生のお仕事と比べて、今の古代ロシア研究会のイメージを決定づけているのは、佐藤昭裕先生のお仕事のように思われます。

岡本 わたしたちが年代記を訳したときにも、佐藤先生の影響は結構ありました。訳読のスタイルというところがかなり影響を受けていると思います。とくに注の付け方のあたりにかなり影響を受けています。また、年代記テキストには大きく分けて「事実叙述のタイプ」と「コメントタイプ」の2種類があり、それぞれのタイプと語順や指示代名詞の用法との間に相関関係があるという佐藤先生の学説は説得力があるもので、わたしたちは古代ロシア研究会で年代記を訳読するにあたっていつも念頭に置いています。

古代ロシア研究会の学風

大平 古代ロシア研究会に「学風」と呼べるようなものがあるとすれば、どのようなものがあるとお考えですか。

岡本 「学風」らしきものがあるのかどうかはよくわかりません。ただ、年代記テキストの翻訳に向き合う態度は共有されているような気がします。それは訳文を何度も練り直すということです。つまり、即断しないのです。テキストの翻訳は当番制で、メンバーのひとりが数ヶ月から数年にわたって訳文を作って月例会で配布し、他のメンバーが訳文に対する意見を述べたり、辞書による語義の確認や、参考文献にあたって記述内容の事実確認などを行ったりして訳文の精度を上げます。場合によってはしばらく経ってから議論を蒸し返したりします。それのおかげでなかなか翻訳が進みませんが、出来上がった訳文を見ると、それほど悪くないものに仕上がっているのではないかと思います。

大平 どこかの出版社が出してくれないでしょうかね。

田中 余談ですが、『ノヴゴロド第一年代記』の翻訳も、出版社が出すというのにこちらが逃げ回ったという経緯があったと聞いています。先ほども『ロシア原

初年代記』の時のことをうかがいましたが、訳文全体の見直しや文体の統一、注の再検討には大変な労力が必要ですから、あの大変さをもう一度、と考えると、メンバーの腰が引けるのは仕方がなかったのでしょうか。『原初年代記』のときは、山口先生の「これで行くんだ」というリーダーシップがあったからなんとかなったのでしょうかね。

大平 あまり強烈なリーダーシップがあると、よそから近づきにくいということもありますね。まあ、サークルとしても良し悪しがあるのでしょうかね。

田中 今くらいの方が、強烈なリーダーシップが発揮されているというわけでもなく、ちょうどいいのではないかと思います。

大平 そうしたやり方は、文献学の本来の在り方なのでしょうが、昨今の業績主義とは相容れないのではないかと思います。そうした「学風」があるとすれば、ある種の古き良き「学風」のようなものだと思いますが、そうした「学風」に、関東のロシア語・スラヴ語研究者たちとの間で違いがあるとお考えでしょうか。

岡本 あるような気がします。関東の皆さんは関西の人たちに比べて計画性があるように思えます。つまり、何らかの目標を設定して、そこに到達することに若い頃から慣れているようです。わたしたちから見ると関東の研究者の方が勤勉ですね。おそらく、ご自分たちが学ばれた大学の環境がこうした働き者を形成したのかもしれませんが。関東の研究者たちの論文・著作・翻訳などの数が関西の研究者たちよりも多いのは、知的能力や地理的な条件に恵まれているだけでなく、決まった期日までに仕事をやり遂げることを当たり前だと考えているからでしょう。文献学的な研究でも、年代記の翻訳でも、ある程度計画を立ててやる方がいらっやって、それはわたしたちとは全然違います。

岡本先生ご自身のスラヴ語研究について

大平 関東と関西の研究者たちの間で論文・著作・翻訳の数に違いがあるというお話でしたが、岡本先生は切れ目なく論文を書いておられるではないですか。ほかにも、支部の学会などで発表者がいないときなどに、岡本先生が重鎮でいらっやるのに自ら名乗り出て下さったことが何度かありました。それも切れ目なく研究を続けておられるからこそであり、わたしは先生をリスペクトしてきたので

すが、そうしたお仕事の中で、メインのお仕事である古代ロシア語研究以外に、ウクライナ語、ベラルーシ語に対する視点も大きな位置を占めているように思われます。ウクライナ語、ベラルーシ語に目を向けられるようになったきっかけや、そこで学ばれたことは今の先生の経験の中でどのような位置づけにあるのかということをお話いただければ幸いです。

岡本 ウクライナとベラルーシの言語事情は無視できないと考えるようになったできごとがありました。1986年の秋に、大学から研修のためにモスクワ大学に派遣されました。そのとき指導教官として、ボリス・ウスペンスキー先生を紹介されたのがきっかけになりました。実はその前年、神戸外大の助手だった頃ですが、非常勤で大阪外大の小野堅先生が大学院の授業をされていて、そこでアレクサンドル・ラジーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』を読んでおられました。そこでわたしは先生に、もぐりで出させてくださいと言いました。そのときの院生が林田理恵さんだったのですが、1対1でやるのは少ししんどいということで、わたしも参加することになりました。そこでわたしは初めて18世紀のロシア語に触れました。とてもおもしろく、現代ロシア語では忘れられた二重対格や絶対与格構文、明らかに文体的な手法としての教会スラヴ語が結構使われていました。実はラジーシチェフはロモノーソフの信奉者です。彼の「三文体」説をラジーシチェフは実践していたわけですから。そしてわたしはまたも単純に、古代ロシア語と現代ロシア語の中継点というのは、18世紀の言語なのだと思いに思ひ込みました。それでモスクワ大学に行って、当時の学科長のゴルシュコーヴァ先生に、18世紀のロシア語を研究したいと言ったら、電話をかけてくれて、ウスペンスキーさんがOKを出してくれました。

実際にウスペンスキー先生に会って、わたしの思ひ込みを告げたところ、先生は即座に「ラジーシチェフの言語はちょっと変わっている。18世紀の典型はニコライ・カラムジンだ」と言われました。そして、これを読んでおくようにと言われたのが、スマローコフとトレヂャコフスキーの論争についての論文と、ボリス・ウスペンスキー先生の著作で『キエフ・ルーシの言語状況とロシア文章語史にとってのその意味』という、1983年に出たばかりのものでした。ここでいうのは恥ずかしいのですが、わたしはモスクワに8か月くらいいたのですが、ウス

ペンスキー先生に会ったのは数回で、ほとんどともに勉強はしませんでした。日本に帰って来てからこの本を読むとおもしろくて、かなり影響を受けました。

その本には東スラヴ語史についてのいくつかの面白い考え方が盛り込まれており、その一つが、「русский」という形容詞の意味内容が、北東ルーシと南西ルーシで違っているというものです。キエフ・ルーシが崩壊した後、東スラヴ世界は、いわゆる後にモスクワを中心とした北東ルーシと、リトアニア領に組み込まれた南西ルーシ、現在のベラルーシとウクライナとに分断されます。北東ルーシでは「русский」と言うと、実は教会スラヴ語のことを意味します。一方、南西ルーシでは世俗的な書き言葉を意味していました。これを人によってはポーランド語のことだと言う人もいますが、ポーランド語をキリル文字で書いたようなものです。ところがこの世俗的な書き言葉は、現在のベラルーシやウクライナの標準文章語には継承されていません。どうやらこの地域がロシア帝国に再併合されたときに消滅したようです。しかし、教会スラヴ語ではない世俗的な書き言葉を作るという精神が、南西ルーシから北東ルーシに取り入れられ、17世紀の混沌とした時代を経て18世紀に近代ロシア語の成立を見たというのが、ウスペンスキーの描くロシア語発達の道筋です。実はこの考えは、亡命ロシア人学者のアレクサンドル・イサチェンコのロシア語史観を土台にしており、そこから強い影響を受けています。イサチェンコとウスペンスキーは盟友でした。その分ウスペンスキーに対するソ連での反応はやや冷やかでした。というのは、イサチェンコがソ連の学会に対して終生批判的だったからで、今のロシアでもそうですが、そのような人に対してはソ連では無視されるか、酷評されるかのどちらかです。『ウィキペディア』に「イサチェンコの著作は禁書であった」とあるのは言い過ぎですが、そのくらい嫌われていたのでしょうかね。ウスペンスキーのロシア語発達史への見解に対して批判的な研究者は、ロシア国外にもたくさんいます。しかし、南西ルーシの言語状況がロシア語発達史に大きな意義を持っているというのは、否定のしようがないことだと思います。特に、規範書である文法書や辞書が16世紀末から17世紀にかけて南西ルーシで出版され、それらが北東ルーシに輸入されたのも事実です。そこでわたしは、この時代の東スラヴの世俗語（プロスタ・モヴァ проста мова）を勉強することにしました。神戸外大の先輩で、当時

神戸大学に勤務されていた村井隆之先生がタラス・シェフチェンコの韻文作品を翻訳されていたのですが、その村井先生と一緒にウクライナ語を勉強しないかと声をかけられました。実はそれまで村井先生は、シェフチェンコをロシア語訳から日本語に訳されていました。でももっと本格的に研究するには、ウクライナ語で読まないといけないということで、二人で半年くらいかけて、ウクライナ語の入門書を一通り勉強しました。

そのあと、シェフチェンコの『コブザール』に収められた作品を少しずつ訳していきました。その途中で、神戸外大のロシア学科で、現代東スラヴ語の対照文法をまとめるという話が、研究プロジェクトとして持ち上がり、大学に申請したところ、採用されました。わたしはロシア語とウクライナ語の対照文法を担当しました。これがわたしのウクライナ語との付き合いのいきさつです。ちなみにわたしは現代ベラルーシ語をまともに勉強していません。今でもほとんどわかりません。短い論文なら辞書を引きながら理解できるという程度です。近世南西ルーシの文章語に触れたことで、ロシア語・ウクライナ語・ベラルーシ語を東スラヴ語として平等に扱う眼が養われたような気がします。「русский」という形容詞の意味内容が地域や時代によって違うということが意識できるようになったのは、わたしにとっては大きな一歩だったと思います。実は今のロシアの人たちは、「русский」というと、ルーシの時代の東スラヴ語、いわゆる「древнерусский」の「русский」と、現代のロシア語の「русский」は同じだと思っているようですね。今のロシアとウクライナの問題の原因の一つにロシア人のこうした勘違いがあるのではないかと、という気がしています。

大平 今ウクライナやベラルーシに関して、社会言語学的な研究が学会でも目立つように思いますが、より古いところから研究をしてこられた岡本先生は、そうした若手の仕事をどのように評価されますか。

岡本 多いのは、ロシア語とウクライナ語の中間的な言語とか、ベラルーシ語とウクライナ語の中間的な言語とかが、社会言語学的に見ると面白いところがあるということなんです。その大本にある「русский」という概念が地域によって違う、という理解がないと、間違ったというか、浅い研究になってしまうのではないかと思います。

古代ロシア研究会のメンバー構成について

大平 古代ロシア研究会の話に戻りますが、古代ロシア研究会のメンバーは、ほとんどが関西を中心にした言語研究者で、教授法関係以外の言語研究者なら一度は古代ロシア研究会を通っているのではないかと思います。そういうメンバー構成には何か理由はあるのでしょうか。

岡本 先ほども言ったように古代ロシア研究会で若手の研究者が増えだすのは大体 1968 年あたりからで、それは学園紛争の関係があると思います。68 年くらいだとまだ安田講堂事件の前の年ですから、あちこちの大学がロックアウトされていてまともな授業ができなかったのです。人は勉強しろと言われるとさぼりたくなるものですが、勉強できないとなると、不安になって勉強しようと思うんですね。ちょうど 68 年から 70 年代半ばまでに入会した人というのは、ほとんどが京大の言語学専攻の院生なんですね。山口先生が声を掛けられたのか、あるいはすでに参加していた院生が別の院生を誘ったのかわかりませんが、そのような場を求めていたのだらうという気がします。

ちょうど 70 年代半ばには、大阪外大の法橋和彦先生（1932–2024）を中心にしたロシア・ソヴェート研究会の『むうぎ』が始まっていたので、関西には 70 年代半ばには語学系と文学系の研究会があったということになります。

大平 ふと気になって、東京の木二会はいつ設立されたのだらうと思って調べてみたところ、創刊号には 1988 年とありました。わたしがこちらに来てからのことだったので、関西の二つのサークルはずいぶん早くからできていたのだなと感じました。

そのように研究会が半世紀以上続いてきたというのには、その間入れ替わりがあったり、研究者が育ってきたりしたということが大きい役割を果たしているのだとおもいますが、古代ロシア研究会で鍛えられる側と、鍛える側の立場の両方を経験してこられた岡本先生は、古代ロシア研究会での研究者の育成や鍛え方をどのようにお考えですか。

岡本 これは結構難しいですね。おそらくわたしが若い時にいらした先生たちは、鍛えてやろうとは思っていなかったと思います。今のわたしたちも若い人を鍛えてやろうとは思っていません。ただ、継続することが重要で、特に古代ロシ

ア研究会は、年代記テキストを読むという目的がはっきりしているので、続けやすいということがあると思います。現代語の研究会だと、テーマがネタ切れしてしまって困ることがありますが、逆に古代ロシア研究会はネタ切れの心配がありません。だから集まりやすく、集まるとお互いにいろいろ雑談や世間話をするので、興味を持つ、勉強に対する興味を維持できるということがあります。当然それぞれのやり方がある程度は盗みますね。盗もうと思わなくても、真似をしてしまう。それがいいことであることも悪いことであることもあります。結果的にそれが育成になっているのではないかと思います。

大平 やはり佐藤先生とか岡本先生の方が山口先生に比べて近づきやすいというか、劣等生であるにもかかわらずわたしは山口先生に、最後の方には良くしていただいたので恩義は感じてはいますが、初めの頃は怖いという印象があって、そういう意味では端から見ると恵まれた環境でうらやましいと思います。

コンピュータを利用した研究について

大平 最後の質問です。話はだいぶ変わりますが、メンバーの浦井康男先生のコンコーダンスの研究はこの種の研究の先駆けをなしたものですし、中條直樹先生にもロシア年代記のコンコーダンスの作成プロジェクトがあるというふうに、コンピュータを活用した研究というのがいち早く古代ロシア研究会にも芽生えていたというのが不思議な気持ちになります。そのあたりの事情とか、そうした先駆的ともいえるような研究のことについてお話しただけですか。

岡本 コンピュータに興味を持つ会員が多いのはやはり山口先生の影響が大きいと思います。山口先生は元々京大の工学部に入学されていますが、専門課程にあがるときに考えて「工学は原理を追究しない、だからわたしは原理を追究する言語学にした」とおっしゃっていました。原理を研究する学問である言語学を専攻することに決められたものの、やはり数理言語学を授業のテーマのひとつにされていたことからわかるように、わたしとはちがって数学アレルギーはなかったのでしょうか。学生には、集合論や整数論は入門書でいいからちゃんと読んでね、とおっしゃっていました。

会誌にも、年代記の暦の計算に関するものを書いておられました。あれ自体が

正しいかどうかということはちょっとわかりませんが、ただその中で算出用のアルゴリズムとC言語のプログラムを披露されています。プログラム言語の文法には例外がないんですね。ちょっとでも間違うとそのプログラムが動かなかつたり、あるいは暴走したりするわけですが、文法を守っている限り非常に素直に動いてくれるという「かわいい」ところがあります。だからコンピュータというのは、高価ではありますが楽しいおもちゃでもあるわけで、山口先生だけでなく、他の人たちも、多分おもちゃいじりが好きだったんでしょうね。

実際コンコーダンスの作成については浦井先生と中條先生がかなり業績を残されていて、実際にこれは一時期、90年代に流行りました。どちらの先生も、クイック (KWIC) 形式のコンコーダンスを作成されています。浦井先生はラジーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』やカラムジンの『ロシア人旅行者の手紙』、プーシキンの『大尉の娘』のコンコーダンスを作成されていて、北大に移られてからは安藤厚先生や望月哲男先生とドストエフスキーの『罪と罰』のコンコーダンス作成メンバーにも加わっていました。浦井さんは、これで18世紀から19世紀の言語の変化はわかるんだと言っていました。実際にわたしもそれをつかって気が付いた面白いことがあります。例えばロシア語の「сердце」と「разум」がラジーシチェフによく出てきます。前者が「情動」、後者が「理性」を意味していますが、19世紀になるとどちらもあまり使われなくなります。ドストエフスキーはこの情動を表わす「сердце」をあまり使いません。そのかわり「душа」が多い。客観的な事実としてそうなんですよね。何か意味があるのかもしれませんが。ただし、コンコーダンスの使い方が難しいのは、わかった事実をどう説明するかということです。それができるようになるためには、コンコーダンスの対象になった作品以外の作品を相当数読み込む必要があるような気がします。

中條先生のコンコーダンスはかなりの数作られていて、一部CD化されています。ただ残念なことに、年代記テキストの電子データが残っていません。中條先生に確認したら、もうないということでした。実際このプロジェクトが始まったのは30年ぐらい前で、その頃と比べるとコンピュータの処理速度が格段に上がっているんで、コンコーダンスを作るための元データを高速で処理

することが今は可能になっています。もちろんそのデータを使って何をするのかということが一番大事なのですが、これから先のことを考えると、加工されていない生のデータがあったらよかったのにと、その重要性が痛感されました。

大平 われわれが当たり前のように PC を使うようになる前のことだったので、はた目には驚きでした。浦井先生から、プリンタとコンピュータがコトコトと一晩中動いているという話を伺ったことをよく覚えているのですが、今は本当にいろいろなものが処理できるのでしょうか。

田中 岡本先生ご自身の PC 利用についておっしゃられていませんけれども、『ノヴゴロド第一年代記』のインデックスなどは、まさにその流れにあったのですか。

岡本 それはコンコーダンスができる前のことなので、わたしの生データは提供しています。『ノヴゴロド第一年代記』の語彙集は C 言語で作りました。今ならそんなことをする必要はなくて、簡単なスクリプト言語を使ってあっという間にでき上がるはずです。

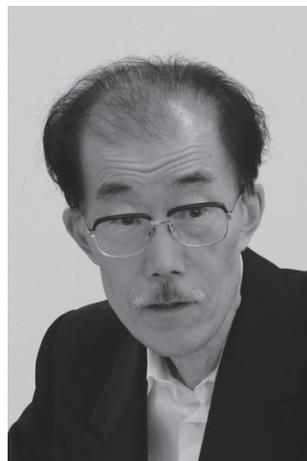
田中 佐藤先生も、ハードディスクが 1 メガバイトあたり 1 万円するような高価だった時期にハードディスクを使ってポーランド語辞書を作ろうとされたりしています。これもかなり早い時期のことですね。古代ロシア研究会では山口先生の暦、その次に佐藤先生のと、そういう流れがやはりありました。山口先生も京大を退職される前後ぐらいに、組版ソフトの LaTeX にはまりました。最初の頃は MS-DOS で動いていたので、コンパイルに一晩かかり、しかも翌朝に確認したらエラーで止まっていた、ということもよくあったそうです。それが、MS-DOS から WINDOWS に OS が変わっていく頃には、コンピュータの処理速度がどんどん上がっていきました。コンピュータ処理ということに古代ロシア研究会のメンバーは比較的早い時期から意識的だったのですね。他の言語などで、コンピュータ処理の結果が出ていても、応用できない形でしか残っていないということはありますが、古代ロシア研究会の方ではそれなりにあとからでも応用できるようなものが残っているのではないのでしょうか。

大平、田中 本日は、どうもありがとうございました。

(文責：大平陽一、田中大)

中澤英彦（なかざわ ひでひこ）

① ②東京外国語大学大学院 ③東京外国語大学 ④スラヴ語学 ⑤『はじめてのロシア語』（講談社、1991）、『ニューエクスプレス ウクライナ語』（白水社、2019）、『プログレッシブロシア語辞典』（小学館、2015）、『森の詩』（ドニエプル出版、2021）。



2024年8月6日、東京都世田谷区、京王線千歳烏山駅近くの喫茶店「珈琲館」にて。炎天下、サングラス姿で登場された。

インタビュアー：秋山真一、阿出川修嘉

ロシア語を学ぶきっかけ

秋山 本日は喫茶店までご足労をおかけしてしまい、申し訳ありません。私と阿出川修嘉先生で日本ロシア文学会75周年に向けたインタビューをさせていただくことになりました。

中澤 2人ともお久しぶりですね。よろしくお願ひします。

秋山 まずは先生のロシア語を学ぶきっかけについて教えてください。

中澤 あまり人に話したことはなかったですけど、ロシアで一時期ロシア語の通訳をしていた伯父の影響が大きかった。有人宇宙飛行（1961年4月）後の、世界的なロシア・ソ連ブームといった時代背景と、家庭環境的にロシア語をするのは運命だった。あとはスヴェン・ヘディン（Hedin, Sven Anders, 1865–1962）って人の著作で、シルクロードと歴史が大好きになった。シルクロードを学ぶには

まずロシア語だ、って思ったんです。

秋山 大学入学前の、中学・高校時代とかはどんな生徒だったんですか？

中澤 ひたすらロシア・ソ連、社会主義にあこがれた素朴な生徒でした。それで中学・高校の優れた先生方のお陰で英語が得意だったけれど、大学で英語を専攻する気はまったくなく、とにかくロシア、ロシア語が学びたかった。大学に入学して原卓也先生（1930-2004）に出会い、失礼ながら、最初はものすごい腹黒い先生かと思った。何しろこちらにとってロシア・ソ連は理想だったわけです。ところが「あそこはなー」と信じられないことをおっしゃる。とんでもないこと言う先生だと。もちろん、面と向かっては言いませんよ。ところが生まれて初めてロシアへ行き、到着後ものの5分で原先生が正しいと分かった。社会主義に対するあこがれが当時は社会全体にあったけれど、現実のソ連を知ると頭の中だけの社会主義じゃだめだと痛感した。それと中学のとき、社会主義教育を受けていた。革命はファッションではない、理想はすぐには実現しない。地に足がついていなければ革命は成功しないと徹底的に教えられていたのです。社会主義幻想が崩壊した今でもその先生を尊敬しています。理想に燃え、真摯で行動力がある。生徒全員をぐいぐい引っ張っていくタイプ。

秋山 その通われてた中学校は（埼玉県の）北本のほうでしたっけ？

中澤 群馬県。

秋山 群馬のどのあたり？

中澤 前橋市。県庁所在地にあると言ったって県庁から直線距離で4キロ。さぞかし都会だと思っでしょ。でも江戸時代そのままの田舎で、当時は速達配達圏外で狸しか住んでないって言われた（一同、大笑い）。

ソ連へのあこがれ

中澤 ソ連にはとにかくものすごく憧れてて、中学では国際放送でモスクワ放送を聴いた。他にほぼ情報がないところに入って来るからしっかり心に沁みついてるんですよ。自分がひょっとしてロシア人かと思ったくらい、キリール文字を独学したりして。

秋山 モスクワ放送ってあれですよ、AM ラジオの周波数を NHK に合わせて、

ちょっとずらすと聞くことができるやつですよ。

中澤 そう。それでその中学のときの思い出話になるけれど、シナリオを自分で書き革命劇を演じたり、ロシア文学を読んだり、ロシアの歌を歌ったりした。特に気に入った歌をロシア語で歌いたくて、上智大学ロシア語学科に手紙を書いたのです。ぜひロシア語に訳して下さいって。ほどなく飯塚書店の世界の民謡集が送られてきた。もちろん、大喜びだったのですが、馬鹿ですよ。歌はカチューシャ、ロシアの歌だった。それに礼状書くのをすっかり忘れていた。ロシア語教員になって、上智大で学会があったときかな、先生方に「どなたが送ってくださったんでしょうか」って訊いてみた。でもどなたも私が贈ったとおっしゃらないんですよ。だから結局お礼言わないで過ぎてしまった。とにかくロシアが理想の国で、こんないい国が隣にあるんだ。日本も学び模範にしなければって。

東京外語大の学生・院生時代

秋山 東京外語大に入られて当時習った先生ってどなたですか？ 先ほどの原卓也先生以外だと？

中澤 入ったときはもっぱら石山正三先生（1914–1973）、当時大学はロックアウトで学生は大学に入れてもらえず、石山先生のご自宅で教えて戴いた。奥様もロシア語が出来る方でカチューシャなどを丁寧に教えて戴いた。常勤教官は、和久利誓一先生（1912–2001）、東郷正延先生（1908–2002）、原卓也先生、磯谷孝先生。非常勤で印象深い方は橋本みさごっていう火の球みたいな先生。この方には、二年生の時習った。どの先生もロシア語に命を捧げているような方でした。当時の先生はご専門分野の権威でまさに神様のような方ばかりでした。授業でもバカ話は一切なし（笑）。本当ですよ。東郷先生は私が入って三年のときにご定年でした。和久利先生も大学院のときご定年。

秋山 外語大の第一印象はどうでしたか？

中澤 ロシア語科の授業はさることながら……私は東京外語入ったとたんに失望した。外国語大学と名乗っている以上キャンパスに入ったら専攻語と英語以外は禁止なんじゃないかと思っていた。でもそれを実行していたのは一部の中国語の学生くらいだった。大学自体は、ちっちゃくて融通のきいたいい大学でしたけれ

ど。ある時、スロベニア語の手紙の翻訳を頼まれた。私は、スロベニア語なんて一切勉強はしていなかった。古教会スラブ語と古東スラヴ語は習っていた。それで図書館に辞書を貸してくれて言ったら辞書は全て禁帯出。ところが事情を話したら「分かった、使ってくれ」って。お役所的ではなく融通がきいたんです。授業は面白くて色々出ていた。私は、卒業必須単位を取れば卒業できると思っていたので、受けた授業数は卒業単位の三倍以上。修得単位が二倍以上。だから忙しい忙しい。三年になったときに卒業必須単位を取り終わって、これで卒業できると喜んだら、「四年間在籍するのが前提です」って。それ最初から分かってたらあんなに取らないで済んだのに……。

秋山 学園紛争は西ヶ原でも結構活発だったんですか？

中澤 外語は、死者こそ出ていないんですけど、その一步手前までいった。あるとき図書館へ行こうとしたら廊下が血の海だった。授業を受けるのも危険覚悟。授業阻止に学生が乗り込んでくるのです、ゲバ棒って分かります？ ゲバ棒を持ち、ヘルメット被って。昔のハイジャック犯よろしく。ただ幸いなことに阻止に来る人の9割以上が外語の学生だった。他大学の学生だと平気で殺人もおこなったらしい。あの頃は金田一春彦先生（1913-2004）の授業が人気抜群で、いつも聴講学生が廊下にはみ出していたほど。その先生も紛争で残念ながら外語を離れられた。私はどうも興味が拡散するタイプ。つまりなんにでも手を出す。マルクス経済学から伊東光晴先生（経済学者・京都大学名誉教授）のケインズ経済学まで覗いていた。

秋山 先生は1973年に学部を卒業されてそのあと大学院の修士に進まれたんですよね。どんなタイミングでロシア文学会に入られたんですか。修士の段階で入られてるんですか？

中澤 えーと、まず最初に当時の修士のレベルと学会のレベルの話をして。当時の学会を運営なさっていた先生方と修士レベルの格差は絶対的、絶望的に大きい。怖くて近づけない。例をあげましょう。秋山君は、内村剛介 [内藤操] 先生（1920-2009）に教わりましたか？

秋山 はい、一応。定年前最後の年に僕が上智に入学してるんですけど、授業は実はほとんど受けてません。

中澤 私も教わってないですが、外語大に非常勤でいらしてた。先生は餓死寸前状態の捕虜収容所から解放されるや、買い求めたのがパンではなくセルゲイ・エセーニン詩集、それほどエセーニンを愛し、詩集の翻訳もなさっている。その訳たるや凡人には及びもつかないほどのもの。ロシア語、ロシアに対する洞察力が桁違いなのですね。その先生がある学会のあとお仲間の方と話していた、「僕は論文はまず引用文献から読む、引用文献を全部知ってたらもうその論文は読まない」と。近寄りがたい印象でした（でも先生には私は尊敬も感謝もしています）。

秋山 はい、そのような逸話は聞いたことがあります。

中澤 ずっと後のことですが、私がラジオ講座の応用編でロシア語史の専門家の書籍を取り上げ、なまいきな解説をしたら、なんと内村剛介先生から手紙を戴いた。これは、足腰立たないほど批判されると思ったら絶賛して下さった。なにしろ私ごときものとは比較にならないほど、ものすごい力の持ち主なのです。他の一見やさしそうな先生方もみんなそうなんです。休み時間にコーヒーを飲みながらの雑談のレベルが院生とはけた違い。これは木二会 [もくじかい：ロシア語学の研究会で、毎月第二木曜日に開催していたことに由来する] に関係しますけれど、気軽な雑談ですら手が届かない。

秋山 内村先生は最初の体験授業だけ聞いたんですけど、родителиには複数形しかないんだってことずっと仰ってたんですけど、でもあの国は離婚率が高くて単数形で使う確率のほうが高いのに родителиには複数形しかないんだってことなどを滔々と仰るんですけど、栃木弁が分からなさすぎて、родителиが複数形というところまでは分かったけれど、あととはちょっとと言う感じで（笑）。

中澤 それで分かった。実は今ある方から質問をうけているんです。内村先生の本読んだらどうも栃木弁で訳してある。それには、何か深い意味が込められているのですかって。そうだったんですね。とにかくあの当時のロシア語の先生方ってみな権威が



あった。考えてみれば言語って語学と文学が別々に存在しているわけではないので、本来そうあるべきだと思うんですけど、当時の先生方は語学をなさって、文学もなさっている。ほとんどの先生がそうですよ。それから今は時代が違いうし、上智大の事情は知りませんが、学生と戯れたりする雰囲気は、まったくなかった。先生から研究室に話しにいらっしやいなんて言われたことあるかな……。



横山オリガ先生の特別講演会にて

木二会について

秋山 中澤先生は木二会の初期メンバーでいらっしやいますけど、先生はロシア文学会よりも木二会に先に入会されているんですか？

中澤 学会で発表するには学会入会が義務、それで入ったのです。最初の発表って今も覚えています、東工大が会場で、とにかく緊張緊張の連続、口の中はカラカラ、発表終了後「さて逃げよう」としたら司会の佐藤純一先生から、「君、そんなすぐ帰っちゃだめだ」って言われた（一同、大笑い）。

それほど学会の権威は高かった。別の学会のときに金田一真澄さんが発表し、私が質問した。終了後、帰るときにたまたま金田一さんと出会い、喫茶店で話そうとなった。山崎紀美子さんも加わって三人で話した。若手は一人蛸壺状態で研究しているが自分がやることがとんちんかんかも知れないし、すでに過去に

解明されてることを知らずにあがいているかもしれない、だからみんなで定期的に勉強会をやらないか。これが木二会の始まり。最初は私なんかを会を開いているなんていうと各方面から怪しい秘密結社にとられるかもしれない。幸い、飯田規和先生（1928-2004）が「僕の研究室でやりなよ」ってことで、最初は飯田先生の部屋で開いていたんですよ。飯田先生は文学ご専門で、文学作品をほとんどご存知の方。だからちょっと議論になるとそれはこの動詞にはこういう意味があるんだってすぐ指摘してくれる。こうして研究上のことをざっくばらんに話す場、木二会ができた。ただし、木二会という名前がついたのはずっとあとです。

秋山 最初は名前もなく勉強会やろうってそれだけ？

中澤 会場がないときはどこの公園だったかな。あの大阪大学の教授の神山孝夫君なんかと話したときは早稲田の近くのどこかの公園だった。その後徐々に若手が集まって来て、大体第二木曜日にしているから、「もくにかい」か「もくじかい」って議論になって。知ってます？

阿出川 なんか読み方が割れてましたよね。柳町裕子先生とかは「もくにかい」と。

秋山 そうなんですね。

中澤 「もくに」だと黙認されてるみたいで、誰が言い出したのか、金田一さんかな、「もくじ」にしようとなった。あの頃、私はある意味木二会は理想だと思った。というのは役割を押し付けたり、「次はお前発表しろ」ということはなかった。最初のうちはむしろ発表したいことばかりいっぱいたまっていた。金田一さんという方は研究能力が卓越しているだけでなく事務能力抜群な方で、この次の発表者は誰とかというのは全部金田一さん。それから懇親会の会計なども全部してくれた。

秋山 いつ頃から会場が外語大に落ち着いたのですか？

中澤 飯田先生がご退官後に私の研究室ですることになった。木二会は何の垣根もなしに本心から喋れ、発表者に対する批判なども一切なかった。話がとぶようですが、今では考えられないけれど当時はインターネットが一切使えなかったのですよ。インターネットが使える時代と使えない時代は研究上、質的・量的にまったく別世界。昔は、先生の権威が唯一絶対。例えば、動詞のアスペクトを勉

強したくとも、先行文献が一切わからない。それは、全部先生の頭の中。仮にわかってもその文献がどこにあるか分からない。ところが今は、パソコンの前に座って 10 分もあれば必要な情報が自分のものになる……。当時木二会では情報交換もできたのです。これも本当に有難かった。当時もしあの会がなかったら若手は相当苦しんだに違いない。しかも学会の論集というのは先ほど言ったように、若手には手が届かない。これが研究論集『ロシア語研究』をスタートさせた動機。

秋山 『ロシア語研究』というタイトルはどうやって決まったんですか？

中澤 なんと一番中心的な『ロシア語研究』という名の先行論集がない事を金田一さんが発見。おそらく金田一さんがいなかったら木二会は早々に潰れてたと思います。あの方は研究者・学者の血筋。私が言うと下世話に聞こえるようなことも品よく聞こえる。研究活動のノウハウも熟知しているんですよ。ある原稿に私が「なんとかについて (1)」ってやったら、「(1)」って書いてそのまま終わることが多いからと注意されました。それから論文のテーマも短くしないと駄目とか。業績一覧を出そうとするとこーんな長くなっちゃうから、と。そういう、なんていうか研究者としての行儀作法が、無意識のうちに身につけているんですよ。研究上、論理構築や研究上の「ツボ」も随分教えて貰えました。その後、お二人がご存じのとおり大学院生も参加するようになった。

秋山 最初のころ、芳之内雄二先生も論文を書いてらっしゃいましたよね。

中澤 そうそう、昔は服部文昭さん、芳之内君。最初の頃はそうですね。神山君も一回だけだったか、二回だったか。

秋山 最初の方の巻だと金田一先生の論文の書き方とか、記憶にあります。あの、『ロシア語研究』が創刊された頃の原稿の印刷とかも金田一先生が集められてたんですか？

中澤 はい。原稿を金田一さんに提出すると金田一さんがちゃんとまとめられて、一人で。

秋山 打ち直してくださるんですか？

中澤 いや、打ちなおしはなかったかな。一応こちらからデータを提出するとそれをきちんと編集して、出版社もどこか自分で見つけて来てくれた。

ロシア語と PC 環境について

秋山 当初の『ロシア語研究』は、ロシア語部分をテクノメイト [KOA Techno Mate 2 : 1990 年代前半まで存在していたワープロソフト] とかで打っていた時代ですか？

中澤 よく知っていますねそんな古いソフト。

秋山 僕、卒業論文をテクノメイトで打ちました。

中澤 そんなテクノメイトを後々まで使われたんですか。もっばら私なんかテクノメイトでした。

秋山 半角でロシア語が打てる貴重なソフトでしたよね。あれに、だから、フロッピーディスクはまだ小さい 3.5 インチじゃなくて大きい 5.25 インチとかのフロッピーディスクで、テクノメイトで打ってって感じでした。『ロシア語研究』も、最初の方、テクノメイトっぽさがあるかな。なんか全角のロシア語もときどき入ってるんですよね。だから一太郎みたいなやつ使ってたのかなと思うときもあるし。

阿出川 ワープロ専用機があって、僕、卒論それでした。

秋山 ロシア語は全角で。

阿出川 なんか読みを入力して変換できるようにして。

中澤 阿出川君もテクノメイトなんて分かるの？

阿出川 テクノメイト、僕は分かりませんが、そのあとのワープロ専用機が出たときにちょうど、家にそれがあって、そのあとくらいにウィンドウズ使うように。

中澤 テクノメイトが出たとき、天国だと思いましたよ。

秋山 いや、だからテクノメイトで完結してたときにはとてもいいんですけど、僕の場合は卒業して社会人になっちゃったじゃないですか。それでもう一回外語大に、あの、卒業論文を提出しようと思ったとき、もうテクノメイトはないわけですよ。既に Word の時代になっていて、Word で古いテクノメイトのファイルを読み込むとロシア語の文字が全部違うものに置き換わっていて、日本語の部分はそのまま抜き出して、ロシア語の部分だけ全部打ち直して外語大を受験するときに提出した覚えがあります。

中澤 大変だったでしょう。

秋山 しょせん卒論ですから、あのくらいだったから打ち直せた。

中澤 あのくらいどころか秋山君の卒論の厚さにびっくりしましたよ。

秋山 技術も、あの頃、親切じゃない変わり方、進化の仕方をしましたよね（笑）。

中澤 技術に堪能な方はそう思うけれどこちらはどちらも難しいし（笑）。

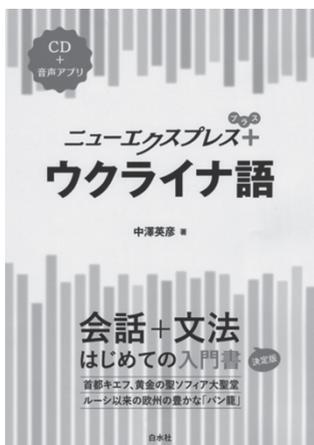
阿出川 原稿寄せ集めてひとまとめにしてみたいなことは僕らも。先生のところ行って原稿でできましたって。ページ番号一所懸命貼ったり。

秋山 Русский язык : Энциклопедияの翻訳をしたのも、たしかページの半分に収まるような設定で原稿出してくださいという指定で。本当にそのサイズの原稿を金田一先生と半分に切ってページに貼り付けていました。『ロシア語研究』13号とか14号ですら、あれをやってましたね。

中澤先生とウクライナ語

秋山 あとウクライナ語の話もぜひ伺いたいんですけど、先生がウクライナ語の研究を始めるとか、ウクライナに興味を持たれたきっかけは？

中澤 興味を持ったのは、かなり早い。大学の二年か三年です。友人がタラス・シェウチェンコ（Шевченко, Тарас Григорович）の訳詩集を持ってて、開いたまどこかへ行ったんです。何気なく読み衝撃をうけました。世界にはこのような人もいるのか、世の不条理に苦しむ人の魂の叫び、奥深い苦悩が言葉でこれほどまで表現できるのかって。それで、そもそも専攻語のロシア語辞典を買うのも古本だったのに、そのときどこからそんなお金工面したのかと今思うと不思議なのだけれど、ウクライナ語ロシア語辞典を新品で買った。いつか勉強しよう。といっても始めたのは相当後ですが、ロシア語をある程度までしたらウクライナ語を



絶対学ぼうと心に決めました。

秋山 それから研究を始められたのは？

中澤 いつから研究かって難しいですけど。

秋山 たとえばウクライナ語に関する論文とか。

中澤 それだと 1991 年 12 月のソ連邦崩壊時の少し前です。まさに崩壊の時、私はキーウにいた。ウクライナ語の教科書、文献収集のためです。当時手元には教科書が数冊、辞典も一冊しかない、これでは研究にはなりません。ただ出張して行ったのはよいけれど、キーウの本屋さんにはどこにも語学書、文法書がない。なぜないのだと質問したら、ウクライナ人が皆慌ててウクライナ語の勉強始めたんで、と。

一同 大笑い。

中澤 しょうがないので、これだって文献だと、残っていた詩集を買って帰って来た。その後、必要な文献は北大のスラ研に行ってコピーを取った。ウクライナ人でアメリカに帰化したシェヴェリョフ (Шевельов, Юрий Володимирович: 1908–2002) っていう人が自分の蔵書が散逸するのを危惧して全部北大に譲ってくれた。スラ研には何度も通ってコピーをしています。ウクライナ語、ウクライナ関係の書籍がほとんどなく困っていた私にはスラ研はまさに宝の山でした。その後知ったことですが、私より前にウクライナ語を学んだ方は神戸外語の小松勝助 [こまつしょうすけ] 氏 (1916–2000)。北大の福岡星児氏 (1926–2003)。それと中井和夫さん。中井さんはおそらくハーバード大でウクライナ語を身につけた。それに東外大の先輩の藤井悦子氏。あとは世に知られず「ひそかに」学んだ人は、広い世間ですからおそらくいたと思われます。ですがウクライナ語研究の状況は、解体新書の時代とあまり変わらない。私が発表したのはいま思えば馬鹿らしく感じますが、規範としてのウクライナ語のアルファベットの字母について。当時、諸文献の記載ではアルファベットの順番は違うし字母も異なる。『(ゲー) って文字、あれも入ってなかった。

秋山 入ってない？

中澤 ソビエト時代の末期は。だからどれが規範として字母なんだって。従来のアルファベットを色々調べて「えいっ」と、予測し教科書など書いたら現在、現

地ではそのとおりになった。こういう現地の事情と私の置かれた状況から、本格的な研究は今からになります。繰り返しになりますが、文献なし。辞典は権威のあるはずの辞典の間でも食い違いがある状況。英仏独語などは異なりまだ規範が確立していないのです。だから秋山君に言ったと思うんですが、数詞 2, 3, 4 と結びつく名詞の形は複数形なのか単数属格なのか。こんな基本的事項もまだ決着がついていない。あれはウクライナ語にはまだ電子コーパスがないから統計学的には断定できないものの、私のみるところ単数属格です。現地のヴィホヴァーネツィ (Вихованець, Іван Романович : 1935–2021) という研究者もその説です。それに年賀状で書いたと思いますが、ことによると大変なことを見つけたかもしれない。それは他の分野の人からみたら当然かもしれない。私は言語以外の専門家と話していて、得心がいったのです。ただそれをどう理論づけするかで今悩んでる。結論は、簡単すぎるから今は言わないですが本当びっくりしますよ。慶応の英語の先生なんか「なんでかなー」なんて言って。私もこういう方向の先行研究があるかなとちょっと調べたけれど、ない。だから本格的な研究はこれから。ロシア語の本格的な研究もこれからと思っています。

後輩 (と自分) へのメッセージ

秋山 来年がロシア文学会の 75 周年なんですけど、後輩に向けてメッセージをいただけますか？

中澤 後輩って言うか、私は自分に向けて言います。語学でいうところではないパラダイム、要するに固定的な思考法を打破しようと。それから向こうの研究書・論文の翻訳で研究なりという時代は、もう終わりだろうと。21 世紀の今、コーパス言語学を利用しない限り、言語現実に迫ることができないんじゃないかと。今までの研究手法だけでは決定的に不足。だから私は秋山君くらいにパソコンの技術が上がりますようにといつも祈っているのですよ (一同、大笑い)。

それと、外語で科研費もらって作った「ロシアにおける制限された自然会話」コーパス、大量にあるでしょ。あれで論文が束のように書ける。たまに九州の人から使わせてくれて問い合わせが来るのに、作成した我々は一本も論文書いてない。あれで数値的な研究をやれば存分に研究ができる。ロシアのナショナル



2016年10月木二会の中澤先生講演会

コーパスに比べても外語のコーパスは決して引けを取らない。ナショナルコーパスとは異なり、外語の会話のコーパスは、会話の出だしから最後までぜんぶ録音してある。しかもそれが文字化されている。調べてみると、世界的権威に基づく通説って意外と現実を正確に分析していないこともまれではない。外語大のコーパスを自在に利用すれば、話し言葉におけるロシア語の研究が加速し、さらに最新の信頼における文法書ができると思う。いつまでも1960-70年代の知識に安住してはいけないと自分を戒めています。

秋山 最近やっぱり英語の辞書ですね、かなりコーパスでの用例が多い少ない順に見直しが進んでるんですね。コーパスを基にした文法記述とかも研究レベルではなくて高校生向けの英語の参考書にすらかなりコーパスでどのくらい使われるか意識した、多分、投野由紀夫先生〔東京外国語大学大学院教授で英語コーパス言語学の第一人者〕あたりが情報を整理してると思うんですけど、かなり辞書・文法書のあり方変わってきてるんで。だからコーパスをベースに文法書作り直したら、ロシア語教育もかなりラジカルに変わるでしょう。

中澤 この時代にコーパス使わないで偶然入手したサンプルを分析して統計だって言われたって信用できないですよ。我々はやはり人間だから自分の仮説に合うデータを無意識に選んでしまう。論文執筆中にこのデータさえなければキレイな

結論が導ける、一瞬隠そうかって誘惑にかられますよね。でも、それでは客観的な進歩がない。ロシア語でもウクライナ語でも、コーパスのデータが活用できれば現時点で最も信頼性の高い結論にたどり着けるでしょう。さきほどのウクライナ語の 2, 3, 4 と結びつく名詞の格の問題もコーパスさえあれば断定的に述べられるはずです。今後、言語を研究する人には電子コーパスをぜひ使えと言いたいですね。

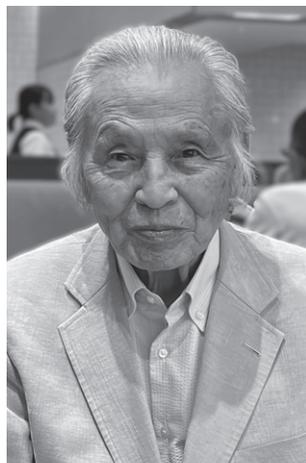
(文責：秋山真一)

栗原成郎（くりはら しげお）

① 1934 年 ② 東京教育大学大学院 ③ 東京大学、北海道大学、創価大学 ④ スラヴ文学 ⑤ 『スラヴ吸血鬼伝説考』（河出書房新社、1980）、『スラヴのことわざ』（ナウカ、1989）、『ロシア民俗夜話』（丸善ライブラリー、1996）、『ロシア異界幻想』（岩波新書、2002）

2024年7月25日、栗原成郎先生のご自宅（東京都八王子市）にてインタビュー実施。

インタビュアー 野町素己、小椋彩



ロシア語との出会い

小椋 このたびはロシア文学会 75 周年記念インタビューをお受けくださり、ありがとうございます。早速ですが、先生の学生時代のことからお話しいただけるでしょうか。

栗原 東京教育大学には、留学時代も含めて 10 年間いたんですよ。そのときお世話になった先生が、熊沢龍（東京教育大学教授。日本語研究や国語教育で著名な言語学者、1901–1974）と矢崎源九郎（東京教育大学助教授。言語学者、北欧文学者、1921–1967）。一講座に定員が 5 人で、学生が少ないのがいいと思って行ったんだけど、専任教官は最初はこの 2 人しかいなかった。

矢崎先生はゲルマン語学の先生で、僕は北欧に憧れていたので、初めはゲルマン語をやろうと思ったけれど、同じ世代でゲルマン語をやるのが何人かいたので

やめたんです。だけど、矢崎先生からヨーロッパ言語学の基礎みたいなのを習った。それで僕がスラヴ語をやりたいっていうのをちょっと言ったら、誉めてくれて。

それから関根正雄先生（東京教育大学教授。学士院会員。聖書学者。神学博士、文学博士、1912-2000）。この人の影響を物凄く受けたけれど、専門がギリシャ語とヘブライ語と旧約聖書の研究で、この先生からギリシャ語を習って、ヘブライ語もちょっとかじった。あと旧約聖書学の講義が面白くて聴いた。今でもこの先生の本を読むんだよね。

あとは河野六郎先生（東京教育大学教授。言語学者。中国語・朝鮮語の専門家、1912-1998）。中国語音韻論の専門家で、この人は本当の言語学者。矢崎先生と関根先生と河野先生は、どなたもすごい語学力で、これはとても追いつけないと思って。

徳永康元先生（1912-2003）という東京外国語大学の先生が、東京教育大学でウラル語特論という講義をしていて、シベリアのウラル系の民族の話とか、ものすごく面白かった。博学な先生でね。後に東京電機大学の教授になった倉又浩一君と一緒に、ヘルマン・パウル（Paul, Hermann, 1846-1921）の『言語史原理』っていう言語学史の本の講読に毎週先生のご自宅に通って、この先生からはずいぶん影響を受けた。この先生は民族学もやってらしたんで、いろんな人が来ていて、山口昌男さん（文化人類学者、1931-2013）なんかもいましたよ。それで、徳永先生に東欧文学、とくにユーゴスラヴィアの話を話したら本を貸してくれて。ユーゴスラヴィア文学をやるなら、セルビアではイヴォ・アンドリッチ（Andrić, Ivo, 1892-1975）、クロアチアではミロ斯拉ヴ・クルレジャ（Krileža, Miroslav, 1893-1981）っていうのがトップにいるから読みなさいって、ロシア語訳を貸して下さって。その他いろんな本を貸してくれた。そこからずいぶん影響を受けて、東欧文学の方に方向が固まっちゃった。

野町 先生は卒業論文はどんなことを書かれたのですか。指導の先生は。

栗原 最初に習ったのは、さっき言った熊沢先生っていう、文の理論をやっていた先生。元々は国文の先生だけど、高等師範学校の教授の頃に、2年間、ドイツに言語学の研究のために行って、ドイツの言語学の影響を受けた。

ヨン・リース (Ries, John) って人がいるんですよ。Was ist ein Satz? 文とは何か、Was ist Syntax? シンタクスとは何か、という本を書いていて、それについて、熊沢先生が僕に話してくれた。その本を翻訳したらしいんだけど、戦争で原稿も印刷所も焼けちゃって、何も残ってない。言語学科を作った功績がある、この先生が文の理論をやっていた。僕はそれをロシア語でやったらどうかなって思った。

その当時、ちょうどナウカにかなり本が入ってきた。でも、一番読みたかった、ヴィノグラードフ (Виноградов, Виктор Владимирович, 1894(1895)–1969) の「Русский язык」って本がなかなか手に入らなかった。早稲田に一冊あったけど、誰だかがずっと持っていて、図書館に戻らないとか。それで、ヴィノグラードフの書いた論文とかシャーフマトフ (Шахматов, Алексей Александрович, 1864–1920) とか、そういうものを一応読んで、「シンタクスの基本問題 ロシア語の例に基づいて」という論文を書いた。だから、ロシア語をテーマにした卒業論文。

大学院に行ったら、河野先生が、木村彰一先生 (1915–1986) を非常勤講師として授業にわざわざ呼んでくれた。大学院の学生の言語学の定員は一人だったんですよね。英文学専攻の中で一人だけ。それでその一人のために木村先生を呼んでくださって、2年間、最初から古代教会スラヴ語、それから『イーゴリ軍記』を、私の他に、一橋の大学院生だった中村喜和さんと二人で習った。

大学院の英文科でしょ。英語はあんまり好きじゃない。英語の先生があんまり好きじゃない。なんか深みがないと思って。その中でも、石橋幸太郎 (1898–1979) って先生が一番面白いって思ったかな。その頃、東京教育大に太田朗 (1917–2015) とか、安井稔 (1921–2016) とか、若い優秀な言語学者がいた。でも、助教授は大学院の授業を持ってないんですよ。それで、ドイツ語・ドイツ文学の講義をかなり聞いて、それと言語学、あとは非常勤で来ていた木村先生の授業で単位を取った。

修士論文は、「ルースカヤ・プラウダの言語」で、今になったら全然意味がない研究で。やっと少しずつ、ナウカの本が出はじめたんで、使えるだけの本を使って書いた。勿論、木村先生と河野先生と矢崎先生ぐらいしか審査出来ない。で、博士課程に入って。僕は英語専攻じゃなかったから、試験は一番下でした。だけどロシアをやってるっていうんで、大目に見られたんじゃないかな。博士課

程まで進んだけど、結局中退。だから、全部半端な学位しか持ってない。

ロシア語そのものは、外語大の和久利誓一先生（1912-2001）が、言語学の講義としてスラヴ語特講って講義を出していたんだけど、これは一般教養のロシア語も兼ねていたんですよ。初めは 70 人ぐらい履修していたけれど、1 学期で大体文法が終わって、2 学期になったら講読になって、最後に僕だけ残った。週 1 回、2 コマ続けて 2 時間か 4 時間くらい、一対一で習った。

和久利先生は、1 週間に 2 コマじゃとても足りないから、どこかで勉強しろとおっしゃる。それで大学の 2 年生頃から、ニコライ堂のニコライ学院に、学部時代の 3 年間通いました。その時に習ったのが神父さんなんだよね。ニコライ神学校の校長の鈴木与志郎先生。あとは、永井博先生とか。ポドスターヴィナ（Подставина, Галина (Гали) Григорьевна, 1902-1969）というロシア人の先生もいた。昭和 32 年に上智大学にロシア語学科が出来たとき、ニコライ堂で習っていたこのポドスターヴィナさん、彼女は亡命、白系ロシア人ですけれど、「今度、私は上智大学に行くから、栗原さん、来なさい」って言われて。結局 [僕は] 行かなかったんだけどね。

その前にも、早稲田外語っていう 1 年間だけ存在した学校にも行きました。今の早稲田の文学部の近くに「早稲田奉仕園」というキリスト教関係の事務所があって、その近くに学校ができて、ロシア語、中国語、英語、ドイツ語、フランス語を教えていた。行ってみたら、先生が 2 人。1 人が松尾隆先生（1907-1956）で、この人のペンネームは木寺黎二だっていって、『ドストエフスキー覚書』（三笠書房、昭和 11 年）っていう本を書いていた。この本を読んだことがあってね。この先生に最初手ほどきを受けた。教科書が、八杉貞利先生の『初等ロシア語文法』っていう本だったかな。松尾先生は元々早稲田の英文科出身の人で、早稲田が露文科を復興したときに、大学の教授の資格のある人があんまりいないんで、露文科の先生になったんですよ。だけど、露文科そのものではあんまり教えていなかった。この先生がまた、ものすごい博学なんですよ。2 クラスあった初級は、初めはそれぞれ 4、5 人いたかな。でも、一学期終わったところで誰も来なくなって、2 クラスを一つにして。初級文法から習いました。

先生が、君は何をやるんだっていうから、言語学でスラヴ語でもやろうかと思

うって言ったら、それは面白い、ただ金かかるぜってね。それで、いきなり、メイエ (Meillet, Antoine, 1866–1936) の *Le slave commun* (『共通スラヴ語』) の話をしてくれて。この先生はロシア語専門じゃないから脱線ばかりするんだけど、それがまた面白くてね。例えば、音韻交替なんかがあるでしょ。それを説明するのに、ヘーゲル哲学を出してくる。眉唾だと思ったけれど、ある程度は理屈があうんですよ。とにかくその先生に何か一冊読めと言われて。薦められたボヤヌス (Boyanus, Simon Charles, 1871–1952) の “Spoken Russian” を読みました。これは会話中心の入門書、名著なんですよ。それから、八杉先生、除村吉太郎先生 (1897–1975) なんかが編集した、橘書店から出ている、確か六巻本の『最新ロシア語講座』。当時も古本しかなかったけれど、それをじっくり読めば、早稲田の露文科出たぐらいの実力をつくっていうんですよ。一応、それを古本屋で手に入れて読んだ。

早稲田外語では、黒田辰男先生 (1902–1992) にも習った。この先生は、除村先生の書いた和文露訳から露文和訳へ、いや『露文解釈から和文露訳へ』。名著なんですよ。この露文テキストに基づいて教えてくれた。だけど、1年でこの学校はなくなっちゃった。だから、僕はその程度のロシア語しかできない。それがロシア語の語学歴。

ロシアへの憧れ

そもそも、なんでロシア語をやる気になったかっていうと、高校生の頃に小樽に住んでいたんですよ。僕の親父が船会社、日本郵船にいたんです。それでしょっちゅう転勤になるわけ。親父は元々、東京高等商船を出て、プロの船乗りをやっていた。ところが、戦争中は船がないから陸上勤務になって、神戸に移った。僕が生まれたのは東京の目黒区。それで、目黒の小学校に1年まで行って、2年生のときに神戸に行ったのだけれど、神戸で空襲に遭って。それで一時期、岡山の方に学童集団疎開していたんですけど、親が呼びに来て、今度は埼玉県春日部市の郊外の村にあった親父の実家に移って、そこで田舎の中学校を出た。高校1年になるとき、小樽に引っ越した。

小樽や小樽港は、その頃栄えていたんですよ。日本郵船とか、川崎商船、汽船

とか、商船系の会社の支店があって、親父がそこの勤務になった。小樽には3年住んで、小樽潮陵高校に通った。そのときに、日本にロシア映画が来たんです。『シベリヤ物語』¹っていうね。その頃は日本にカラー映画がなかったんで、その天然色映画っていうのを見て感激した。何故感激したかっていうと、そこの民衆が、バイカル湖のほとりで合唱するんです。それを見て、シベリアに憧れたのかもしれない。それで小樽の海を見て、向こうが沿海州、その先、煙波はるかに西はシベリア、そこへ行けるんじゃないかと。そのとき初めて、ロシア的なものに憧れた。

高校生のときは学校の勉強は嫌いで、ちょっとドストエフスキーを読んでいた。たまたま古本屋で、中山省三郎（1904-1947）の『露西亜文学手帖』（生活社、昭和18年）って本を見つけて、暗記するほど読んだ。今でも覚えてるんですよ。例えば、「プーシキンが死んだとき、ドストエフスキーはまだ少年であった」という文章で始まる。それで、ロシア文学っていうのはすごいなと思って、それがちょっとロシアに憧れたきっかけかな。



『若きチャーホフ』『露西亜文学手帖』（ともに中山省三郎著）と

¹ 『シベリヤ物語』は『石の花』（1946）に続いて公開されたソ連のカラー映画。

アメリカ留学時代

そのうち親父が、初めはアメリカの船に乗せられていたのが、戦後、日本人で初めて、ヨーロッパ航路の船長になった。それで、クロアチアのアドリア海沿岸のスプリットって街に行った。その話を聞いたときに、クロアチアに行きたくなった。親父に色々言ったけど、親父は文学青年じゃないからね。クロアチアの文化については話してくれなかった。

[大学院生の時] ユーゴスラヴィアに行きたかったけれど、その頃、徳永彰作²さんっていう、確か第1回留学生がいて、その人が卒業するまで5年間はほかの留学生を取らないっていうんですよ。だからユーゴスラヴィアは行かれなくなって。ロシアに留学できた人は、例えば、米川哲夫さんは米川正夫の息子だからそのツテがあった。あとは、社会党とか共産党とかの関係の人が行ったり。ロシアに行かれないとなると、ユーゴスラヴィアかブルガリアか、チェコです。チェコは千野栄一さんが留学生試験に受かって、彼が行った後、5年間は留学生を取らないって聞いたけれど、どうもそうじゃなかったみたいね。ユーゴスラヴィアも結局その後、田中一生さん（ユーゴスラヴィア研究、翻訳家、1935-2007）が行ったし。

木村先生が以前アメリカのハーヴァード大学で勉強していた [1953年7月-54年8月] から、相談したんです。どこで勉強したらいいですか。そうしたら、ハーヴァードか、カリフォルニアのバークレーしかないって。でも、正規の留学っていうのか、フルブライトとかは、ロシア語とか言語学専攻の学生は取らなかったんですよ。その後、取ったみたいだけれど。ただ、たまたま僕はキリスト教徒だったので、アメリカのルーテル教会が日本にもあって、そこの留学生試験を受けた。神学校の米人の先生が試験して。そこでスラヴ語をやりたいって言ったら変な顔されたけど、いいっていうんですよ。だから、渡りに船と。

バークレーのほうが暮らしやすいし、フランシス・ホイットフィールド (Whitfield, Francis James, 1916-1996) っていう人がいるから、この人に付きなさいって言われて、行くことにした。1962年のこと。夏はボストンで英語の勉強

² 札幌大学教授。著書に『モザイク国家ユーゴスラヴィアの悲劇』など。

をして、秋学期からバークレーの大学院の1年に入った。その前、1957年にスプートニクが上がっていて、1961年にはガガーリンが有人飛行した。要するに、宇宙開発戦争でアメリカはソ連に負けたんですよ。それで、ケネディが、アメリカで高校からロシア語をやれって命令出したそうです。1963年にケネディは暗殺されたけれど。大学にもスラヴ学科が出来はじめて、例えばウイスコンシン大学のスラヴ学科は、僕が行ってからできた。

カリフォルニアにはいろんな先生がいたけれど、ホイットフィールド先生が実際に教えたのは、専門の古代教会スラヴ語。Old Church Slavic Reader っていう、自分の手書きの本があって、これがものすごく面白い。この先生は、[デンマークの言語学者の] イェルムスレウ (Hjelmslev, Louis, 1899-1965) の、グロセマティックスっていう、日本で原理学とかいうんだけど、それをデンマーク語から翻訳して、Prolegomena to a Theory of Language っていう本を出して、だから言語学者なんだよね。元々は、ハーヴァード大学で英文学をやっていた。それに、自身が詩人で、詩人として何か賞をもらったぐらいだね。ハーヴァード大学にスラヴ学科が出来た時に、そこでホイットフィールド先生はスラヴ語スラヴ文学で PhD を取ったと。

この人はカリフォルニア大学ではいろんなこと教えていたけれど、古代教会スラヴ語の、この手書きのリーダーを、僕が行った1962年に初めて作った。まず文法の理論がある。これはイェルムスレウに依ったかどうかわからないけれど、いろんなものを言語学的に分析して、例えば現在分詞なんていうのはどうなるか、理論形っていうのを、ideal notation として立てて、それが actualization 実際にどういうふうに変現されるかって、1頁ぐらいにまとめた文法表でわかるようになっていて。それですぐリーダーに入って。この先生に1学期習って、それから1年おいてまた同じ授業を聴いた。ところが3学期が終わったときに、ホイットフィールド先生はデンマークに行っちゃった。木村先生もその頃 [1961-1962] ポーランドにいらして、日本に習う先生がいないからってアメリカに留学したんだけどね。正直言って、私はアメリカがあまり好きじゃないんですよ。大学もそんなに憧れるほどではない。ホイットフィールド先生は素晴らしい先生だと思うけどね。

その他に、オレーグ・マースレニコフ (Maslennikov, Oleg, 1907-1972) という先生にロシア語を習いました。この人はハルビン生まれで、アメリカに渡って、ロサンゼルスの高校からカリフォルニア大学に進んでスラヴ語をやって、チェコのカレル大学に留学して、アメリカに戻って、バークレーでバールィ論で博士号をとった。

あとは、有名なカーリンスキー (Karlinsky, Simon, 1924-2009) ね。ツヴェターエワ研究で博士になった人。当時はまだ Acting assistant professor という身分だった。この先生には影響受けただけね。何を習ったかという、ロシア語作文。非常におしゃれで皮肉屋で、それでまた語学がすごく出来る。英語もドイツ語もフランス語も。通訳で食べてた時代もあるらしくてね。

スラヴ語比較文法を教えてくれたポーランド人の女性の先生もいた。名前を忘れた。ドイツ語の『スラヴ語言語学』っていう教科書で比較文法を教えてくれる³。面白かったですね。この先生だけ講義の仕方がヨーロッパ風で、アメリカ的じゃないんで面白い。ポーランドで学位取ったんじゃないかな。

セルビア語とクロアチア語は、習ったのはカーメンシチクっていうスロベニア人なんですよ。その人が、トマス・マグナー (Magner, Thomas Freeman, 1918-2004) の Serbo-Croatian っていう、その頃はバンドで綴じたノートみたいなテキスト、今は一冊の本になってますが、それで教えてくれた。この先生の他に、亡命セルビア人女性に作文なんか添削されたから、どこかに記録があると思うんだけどね。カーメンシチクは何故覚えてるかって言ったら、初めて会った時に、立派な体格で六十位に見えたから、この人がプロフェッサーかと思って聞いたら、「私はまだ学生です」って。ユーゴスラヴィアから亡命して、元は空港のディレクターをやってたんだって。チトーの親友だったって言うんですよ。それで、イタリア語を勉強するためにカリフォルニア大学の修士課程でまだ勉強していて、勉強しながら教えてくれた。だけど、この先生も、ものすごく面白かった。スラヴ人っていうのはやっぱり良いなと思った。その人が、「私はエカフスキ (エ方言)」だっていうの。セルビア語系の方が良いっていったね、覚えやす

³ Herbert Bräuer 著 Slavische Sprachwissenschaft I (1961) のこと。

いから。セルビア語で、クロアチア語じゃない方で覚えろってね⁴。その先生のことは後で人から聞いたら、アメリカのサンフランシスコの短大の先生になったって。

英語を通して習ったけど、結局ちゃんと覚えられなかったね。滞在は1年8ヶ月だったかな、丸2年いなかった。アメリカでPhD取るまでに4、5年かかるな、そこまで我慢するより、日本に帰ってまた学生に戻った方がいいなと思って、1964年の春学期の途中で思い切って帰ってきちゃった。

教員の道へ

アメリカから帰ってきてから、3月になって、駒場のロシア語の先生になれって言われて呼び出されて。まだ学生だったけれど、学生は教えちゃいけないだって。だから大学に退学届を出して、それで非常勤講師になった。なぜ拾われたかはわからないけれど、これはガガーリン効果なんですよ。日本でも、宇宙開発戦争、宇宙物理学なんかにはやっぱりロシア語が必要だって。駒場でもロシア語の授業を一般外国語学にする運動があったみたいね。それで玉木英彦先生って物理学の先生が、かなり熱心にロシア語の教員を取って言ったらしい。木村先生がポーランドから帰ってこられて、1963年かなあ。木村先生は東大の文学部言語学の助教授だったけど、駒場にロシア語の教室を作った。本郷の文学部から駒場に移って。

それで人を集めたのね。最初、北垣信行先生（1918–1981）と米川哲夫先生（1925–2020）、それから佐藤純一先生と池田健太郎さん（1929–1979）って。池田さんは、本名は池田豊っていうんだよね。駒場に行ったら池田豊っていう人がいた。そんな人は知らん、ひょっとして池田健太郎じゃないかって聞いたら、そう、俺が健太郎だって。

今もあるのか知らないけれど、一研っていう⁵、カビ臭い、一高の元の寮のと

⁴ セルビア・クロアチア語は2つの標準形を有している。一つはエ方言、もう一つはイエ方言で、前者はセルビア的、後者はクロアチア的として知られる。

⁵ 文系の教官研究室の建物。現在はその跡地に駒場図書館がある。

ころにロシア語の教室たてて。そこに先生が5人、そこで初めて非常勤で、僕と中村喜和さんが雇われた。僕は全然予想してなかったことです。僕は駒場に来て、2年間、見習いみたいな、野球で言えば二軍の球拾いからやった。使い物になるかどうか、先生方が見ていたんじゃないかな。中村喜和さんが1年先に専任になって。それから僕が、昭和41年かな、初めて専任講師になってね。その頃は文部教官っていう任官ですよ。辞令が来て、それで駒場に入れてもらってね。駒場でもそういう先生方に囲まれていたから勉強になった。東京教育大でもロシア語の専任を取るようになったときに、教育大に戻って言われたけど、駒場で専任講師になったばかりで、すぐに出て行くわけにいかないでしょ。それがロシア語教師のスタート。

その頃 [1967, 8年頃]、ロシアに行くには、ロシア語資格向上考査っていうのがあって、10か月かな、専任講師みたいな職位の人が向こうの大学に行けた。それでロシアに行こうと思ったけれど、僕は授業を持ってる。東大の教養学部でロシア科が出来て [1966年]、木村先生が移られて、菊池昌典さん (1930-1997) が来て、灰谷慶三さん (1936-2006) が、そこの最初の助手になった。それで、助手なら授業がないからいいだろうって、灰谷さんが行った。それで初めてロシア行くチャンスはなくなった。

東大文学部時代

その間に (大学) 紛争が起こったけど、せっかく駒場にいるのだからしっかり勉強しようと思った。僕は駒場が好きなんですよ、いろんな先生がいてね。多種多彩で、必ずしも専門にこだわらない。こんなにいい大学ないと思って。なにを勉強しても、文句を言われぬ。それで、そこでコツコツ勉強しようと思ったんだけど、ろくすっぽ勉強しないうちに、今度は、1972年だったと思うな、文学部の露文科が出来たの。その後、川端香男里さん (1933-2021) が北大から東大に戻って [1969年]、駒場にいたんだけど、駒場からそっちに移ることになって。木村先生は、結局文学部で1年教えただけで定年になっちゃった。そのときの最初の弟子が長谷見一雄君と淵上克司君 (1948-1988)、それから学部にいたのが望月哲男君かな。

それで僕も文学部に移れてることになって。これもちょっと困ったんですけどね。本郷に行ったら、全然違うんですよ、駒場と雰囲気かね。なんていうか、錚々たる学者がいてね、インド哲学とか国文とか、英独仏で。一方の露文なんて、できたてのほやほやで、助教授二人で苦労したんだけど、川端さんが一生懸命やってくれた。

ちょうど大学院大学にする時代だった。東大も最初は、修士に3人、博士に2人の定員だった。そのうちにオープンにして。オープンにするように、かなり僕は働いた。反対もあったけどね。その頃は、修士まで入ったけど、博士には入らない人も何人かいた。そのうちに、外語大とか、上智とかから来たりして。金田一真澄さんは早稲田の露文科で修士号まで取ったでしょ。だけどロシア語学に興味があったのは早稲田では藤沼貴さんお一人だったので、藤沼さんが金田一さんに、東大で博士号を取れと言ったらしいです。金田一君が博士の第1号。その後、三谷恵子さん（1957-2022）とか、福田千津子さんとか何人か出て。だけど、博士号出すのに、こっちには博士号がない。だから自分の研究をやらなきゃって、はじめはロシア語文法をやった。シンタクスとか時制論とかに興味があった。フォークロアやったりね。

1992年に北大に移ったのね。北大にロシア語文化論っていう講座ができて。その頃ソ連が解体したでしょ。エリツインの時、ロシアが弱腰で、北方領土は二島は返るっていう読みがあったって言うんですよね。噂では、それで文部省が、北海道とか日本海側でロシア語教育を盛んにする、って言ってね。北大は長い間、露文の第二講座を要求していたけど出来なかった。同じ時にロシア語学と中国語学枠で申請したら、中国語学は通ったけど、結局人が付かなかった。それで結局、ロシア語学で一講座ついたんですよ。はじめはロシア語学って講座名にしたのを、ロシア語文化論に変えろって言われて。

講座を要求する時に、誰を呼ぶか、文部省に一応言うらしいね。で、僕が候補だって話があったから、二つ返事で引き受けた。東大も後継者が育ったから、僕はいない方がいいと思ってね。結局、北大では小講座は潰せてことになって、大学院講座にするために大講座にして。露文科はなくなっちゃったね。

東大文学部の場合も、2講座ができたけど、講座が曖昧になっちゃってね。

せっかく露文科を作ったのに惜しいことしたね。それでも、のちにスラヴ語スラヴ文学科に発展してよかった。文学部には昔は、類卒っていうのがあったでしょ。ふつうは英文、独文、仏文とか分かれるのに、どの学科にも属さない学生がいるんですよ。どこかにくつつのが嫌な、自由な学生さんだよ。卒業論文は試験だけで論文は書かない、いや書いても書かなくてもいいのかな。それで、「露文卒」じゃなくて、「第3類卒業」って、それを類卒っていうんですよ。それでその時、「西洋近代語近代文学」っていう、名前だけある講座があった。駒場に比較文学っていうのが先にあったけれど、文学部の方にはそういう講座がないんで、それを作ろうとしたらしい。スペイン語とかハンガリー語とか、何でもいいからやる、そういう講座。大学院は露文に来たけど、学部は類卒という人もいた。それを、沼野〔充義〕さんが力入れて、後で講座にしたんですよ。現代文芸論って。

「西洋近代語近代文学」って、名前としてだけの講座はあるけど人員がつかない。でも事務も授業もやらなきゃならない。英独仏の先生方は、「西洋近代語近代文学」の授業は担当したがる。川端さんと僕がやるしかない。川端さんは何でもできる人だから、それを喜んでやっていた。僕も授業をやれっていうことで、ロシア語が出来る人はあんまりいないから、何をしていたかな。カール・フォスラー（Vossler, Karl, 1872-1949）の *Geist und Kultur in der Sprache* をテキストにして、言語美学的なことを教えたのかな。そういう点では、東大のために尽くしたと思うよ。

その中で、ハンガリー語をやりたいっていう人がいた。そこから、徳永〔康元〕先生のところ、関西外国語大学で博士号を取った人もいますよ、類卒で。そういう、どこにも属さない人がいたな。元英文で、〔英文学者の〕中野好夫さんの血筋の人もいたな。英文科を敬遠して西洋近代語近代文学に来たけど、教室がないから、露文の教室にいたんだ。その頃は諫早〔勇一〕君が助手でよく学生の面倒をみてた。野球させたりしてたけど。

中には、もう何もやりたくない、ロシア語が出来ないけれど単位くれっていう人もいた。それで、翻訳でいいからって勉強させて。で、単位取って卒業して、NHK か何かに就職して、かなり有名になった人もいる。後から聞いたら、栗原

のおかげで卒業出来たとかね。

今は今で、いい時代になったんじゃないですか。

ポーランドへ

1975 年の秋だと思ったけど、学振の留学生試験に受かってロシアに行くことになった。長期留学で 10 ヶ月。モスクワ大学に行くつもりだった。その頃はハブルガーエフ（Хабургаев, Георгий Александрович, 1931-1991）って人が教会スラヴ語の本を書いてたんで、その人に付こうと。そしたら、返事がまったく来ないんですよ。そのうちに日本は新学期になっちゃった。行くか行かないか分からないのにこっちは授業しないわけにいかないから、4 月から授業も始めた。

その頃、吉上昭三先生（1928-1996）が仕掛け人になって、東大とワルシャワ大学の学术交流が始まって、直野敦さんがワルシャワへ行くはずだった。ところが、直野さんが都合悪くなった、誰も行かないから、お前が行って吉上さんに言われて。学振で行くはずのロシアの方は、結局、なかなか返事が来なくてね。東大の事務には、ちゃんとした招聘状がないといけないって言われて。そうしたら、テレックスで、栗原を 4 ヶ月招聘する、その期間中に、1 回だけレニングラードの往復を許すって、それしか書いてない。それじゃあ許可が通らない。そのうちに 1 年経っちゃって。ワルシャワ大学へは、森安達也君（1941-1994）が前に 2 年行ってたんだけど、僕はもちろん 2 年は行かれない。ワルシャワ大学 [の日本学科] では日本語を教えないといけないけれど、ポーランドに丸一年はいられる。それで、僕は 76 年から 77 年までいた。

ワルシャワでは、正規にスラヴ語を研究した訳じゃない。日本語の先生をしながらの滞在だからね。その前に、ロムアルド・フシチャ（Huszcza, Romuald）⁶ が日本に留学していたでしょ。彼にポーランド語をちょっと習って、その程度で行った。最初、入学式で学長の演説聞いたら一言もわからない。どうしようかと思って、そのときバルトニツカ先生（Bartnicka, Barbara, 1927-2011）っていう、外国人にポーランド語を教えるのが上手い言語学者がいっちゃってね。この先

⁶ 言語学者。ワルシャワ大学・ヤゲウォ大学教授。

生にちょっと習って。バルトニツカ先生のことは後で東大が1年間呼んだんですよ。本郷と駒場で、ポーランド語で講義してくれた。だからポーランド語はその先生の影響を受けている。

セルビアへ

文部省在外研究員というものがあったんですよ。これは駒場では順番が絶対回ってこない。行きたがる人がたくさんいるから。それが、駒場から本郷に移ってから、すぐ受かっちゃった。ただ短期の、4ヶ月留学で、それで初めてセルビアに行ったのが1985年。このときに、セルビア人学者の影響をずいぶん受けた。

国際スラヴ学研究所に関わってる先生がベオグラード大学の哲学部に何人かいらして、ミロシェヴィッチ=ジョルジェヴィッチ (Milošević Đorđević, Nada, 1934-2021) という女性の先生と、スロボダン・マルコヴィッチ (Marković, Slobodan, 1928-2015) という、この二人に最初会ったんだ。

ジョルジェヴィッチ先生のセルビア叙事詩の研究書を、この人に会う前から持っていて、論文を書く時に使っていた。この先生にまず何をやりたいかって訊かれたときに、ヴーク・カラジッチ (Karadžić, Vuk, 1787-1864) って答えた。これは本当だったんだけどね。そうしたら、2年後の1987年の国際学会でヴーク・カラジッチの生誕200年祭があるから、そこに来て発表しないかって。それには勉強しなきゃならないっていうんで、僕のために車を出してくれて。ヴーク・カラジッチの生誕の地の、西セルビアのトゥルシッチに行こうって言うんですよ。生誕の地に行って帰ってきたら、その次はセルビアだけじゃなくて、ウィーン大学とかワルシャワ大学を周ることになって。だから、セルビアには1ヶ月か、もうちょっとぐらいしかいなかったかな。

セルビアで一番世話になったのが、イエレナ・シャウリッチ (Šaulić, Jelena, 1931-?) っ



イエレナ・シャウリッチ先生

ていう先生。ベオグラード大学のすぐそばの、ドシテイ・オブラドヴィッチ (Obradović, Dositej, 1739–1811) とヴーク・カラジッチに関する国立博物館 [Mezej Vuka i Dositeja] の館長さんだったんだよね。この先生は、本当に親身になってくれた。何を読めばいいとか、こんな厚い、自分でお書きになった本をくれたりとか。そこの研究所の『コフチェジッチ』とかいう紀要、創刊号はないんだけど、2巻からくれた。それは多分僕しか持ってない。この先生には本当に世話になってね。

シャウリッチ先生のお父さんは、ノビツァ・シャウリッチ (Šaulić, Novica, 1888–1959) って、日本いえば柳田國男みたいな人。法律家で、弁護士で、フォークロアの、いやむこうはあんまりフォークロアっていわない、ナロードナ・クニジェヴノスト [Narodna književnost, 民衆文学] の研究をしていた。古いセルビア民話集とかそういうものは、ほとんどみんなこの人が書いている。その娘さん。ものすごい教養があった。お父さんがツルナゴラ [モンテネグロ] の出身で、いろんなツテがあるわけ。それでカラジッチの子孫も紹介してくれた。

カラジッチの生まれ故郷、ドゥルミトルの山の上に行く途中に、ペトニツァっていう村があるんですよ。それがカラジッチの先祖の村。説明によると、遠くからだとか村があるようには見えない。森で囲まれているから。だけど、森の奥に村があって、その村がペトニツァ村で、住民の苗字は全部カラジッチ。彼の先祖の家がまだ残ってて。いろんなヒントをもらったね。例えば、チーズを晩御飯だっていってご馳走になり、チーズしか出ないんだけど、チーズの作り方なんか教えてくれたよ。6月の末の聖ペテロの日に、レンゲの花を摘んできて、それがチーズの上に置いてある。何でかっていったら、聖ペテロの日にレンゲをとってチーズの上に飾ると、よく固まるんだって。そういう、古い迷信みたいなものがある。面白いなって思ってた。それで、そういう民衆文学にますます憧れて。

山崎洋さん⁷が仕掛け人だったと思うけれど、86年に、セルビア作家協会の奨学金を取ってくれて、夏の間だけ招待すると言ってくれた。ホテル代と滞在費が

⁷ 翻訳家。ユーゴスラヴィア研究者。

付くから、旅費だけ自分で持って。それで、夏休みをまるまる利用して、二度目のセルビアに行ったの。作家協会の会長がブラトヴィッチ（Bulatović, Miodrag, 1930-1991）、そのころはまだ若手の作家で、日本でも『ろばに乗った英雄』とか、『赤い雄鶏は空に飛ぶ』とか、『冷血の地』っていうのが、英語やドイツ語から訳されてた。日本でも重訳からでも知られた人。この人がどういうわけか気に入ってくれて、かなり自由に勉強させてくれた。それで、その2年目に行ったときには、おもにアンドリッチの資料集めた。だけど、ヴァーク・カラジッチも少し勉強して、学会でちっちゃな話をして。その後、本格的にカラジッチをやれば良かったんだけど、カラジッチの数十巻の全集が揃わない。今でも端本でしかない。その後、ユーゴ戦争が起こって行けなくなっちゃった。

87年にも行って、四度目、89年に行ったときにも、作家協会の世話になった。アレクサンドル・ペトロフさん（Петров, Александр Николаевич, 1938-2021）って、詩人で文学者。ロシアの貴族の出で、セルビアに亡命した人の子。そのペトロフさんが会長で、奥さんのクリンカ先生も学者。この夫婦にはあまりにも世話になったんで、望月哲男さんに頼んで北大に1年来てもらったな。

そのうちに、作家のブラトヴィッチが日本に来たんですよ。新宿を案内してくれと、僕のところに連絡があつてね。それで、田中一生君、セルビアの専門家の彼と歌舞伎町を案内した。この人が、『グーロ・グーロ』って本を書いたから翻訳しろって。なんかへんな厚い本なんですよね。本はくれなかったけどね。

そのうちに、ユーゴスラヴィアが戦争になったし、ブラトヴィッチさんも亡くなった。戦争の後、ジョルジェヴィッチ先生もマルコヴィッチ先生もシャウリッチ先生も亡くなられた。

言語学をめぐる

野町 先生が言語学を東京教育大学で専攻されてた時代というのは、まさに生成文法が出始めたところで、日本でも、[英語学者の]長谷川欣佑先生（1936-2023）とか、生成文法でどんどん新しいことをやっていく人が現れたり、あとは例えば、服部四郎先生（1908-1995）が東京言語研究所を作っているんな外国人を呼んできたり、そういう一般言語学の発展が出てきた、国際的になってきた時

だと思いますが、先生はそういうとき、自分をどういうふうと考えてらっしゃいましたか。そういう人たちと一緒に言語学をやるということは考えたりされましたか。

栗原 生成文法も、最初チョムスキーの本が出た時、論文に使えるかと思って見たんだけど、なんかロシア語には使えないような気がして。気がしたんだけど、まだ学生だったから。それでアメリカに行ったら、アメリカでもその頃、まだ構造言語学の時代ですかね。言語学の講義も聞いた。ブルームフィールドの *Language* って本をテキストにして、つままない授業をしてたけどね。だからチョムスキーは、若い先生がその本を読んだのは知ってるけれど、向こうで勉強はしてない。ただその後、もう生成文法ががーっと伸びちゃって。

そして僕より少し若いんだけど、矢崎先生の甥の長谷川欣佑さん、この人は全く生成文法ね。それで結局、生成文法は自然科学に近くなっちゃって、言語学の名著なんかいないなんて言うんですよ。サピアとかブルームフィールドなんか古い、ってね。例えば 1978 年頃に流行った問題は次の年にはすたれるとか、年ごとに研究テーマが違ってたね。だから長谷川さんなんか、もう研究雑誌しか読まないとか言って。それでちょっと、ロシア語ではうまくいかないんじゃないかなと思った。試みた人もいるみたいだけど。スラヴ語で成功した人はいるんですかね。

野町 1960 年代に、ミルカ・イヴィチ (Ivić, Milka, 1923–2011) とかパヴレ・イヴィチ (Ivić, Pavle, 1923–1999) が日本に来て、そのミルカ・イヴィチは生成文法の枠組みをスラヴ語にどうやって当てはめるかってのを授業したようです。で、その時アメリカではディーン・ワース (Worth, Dean, 1927–2016) という UCLA の人が、生成文法の枠組みをスラヴ語に当てはめ始めた。それが 63 年とか、そんな感じだと思うんですけど。そういう時代だったんですね。

先生は、服部四郎先生たちのグループとは、何か交流がありましたか。

栗原 ほとんどない。言語学研究所で講演会はずいぶんやりましたね。川本茂雄さん (1913–1983) とか。[ロマン・] ヤコブソンも来ましたよ。僕も聞きました。生成文法じゃなかったけどね。それから服部先生も、初め意味はやってなかったけど、言語の意味論の方に切り替えて。国広哲弥さん (1929–2022) なん

か呼んで、言語の意味論やって。意味論はちょっと、生成文法ってわけにはいかないで、認知言語学へと進んだのですかね。生成文法の人とは全く交流はないですね。長谷川さんとよく話したぐらいで。

野町 例えばプラハ言語学派とか、どういうふうに当時、あるいは今でもお考えですか。プラハの言語サークルを、千野先生がいろいろ紹介されたりしたと思うんですけども、栗原先生もそういう理論なんかにご関心はありましたか。

栗原 いや、理論はどうか。ただトルベツコイには興味があって、あの人は古代教会スラヴ語もやっているし、ちょっとウラル語みたいなものかじったし。それから、音韻論もやったから。結局、彼の書いたもので一番面白いのはロシア語史とかね、言語と文化だったかな [«Общеславянский элемент в русской культуре»]。ロシアでは発禁だったのが、ソ連崩壊してから出た本がありますよね。確かに千野さんの時代があったね、ブームがね。僕も初めは文法理論に興味があったんだけど、なくなっちゃった、セルビアに行って民衆文芸へ興味が傾いたもんでね。

野町 でも、先生もその後、少しキャリアを重ねられてから、動詞アスペクトの問題だったりに戻られたのですね。

栗原 金田一さんが勉強してた頃か、チェコからも文法書が出たし、80年文法とか、色々な文法書の比較なんかしたりして。ロシア語の動詞に興味があったんで、しばらく動詞論をやった。いまでも興味がありますよ。でももう年をとっちゃったんでね。若い、力のある先生に習うことが出来なかった、オールドファッションなんでね。

野町 先生が留学中に授業を聞かれたり、あるいはその方を知る方に会ったりする中で、この研究者に会ってみたいだとか、直接会いに行った人だとか、すごく印象深かった人だとかがいますか。

栗原 ホイットフィールド先生は、カリフォルニア以外では知られてなかったのかな。この先生は次の学期に、リトアニア語を教えるって言うんで楽しみにしてたんだけど、デンマークに行っちゃった。それで、イェルムスレウを読んでみたけれど、僕はちょっと理解出来なかった。だから外国では、現役の人で、特に習いたい先生ってのはいなかった。アメリカがあまり好きじゃないっていうものあ

るけれど。

グレープ・ストゥルーベ (Струве, Глеб Петрович, 1898–1985) っていう、ロシア文学ではかなり有名なロシア人がいますね。ロシア文学にも興味があったから、あるとき会いに行ったら、けんもほろろに、「マイ・オフィス・アワー・イズ・オーバー」とか言われてね。カーリンスキーさんにはロシア語作文しか習わなかったけれど、僕が行った後に偉くなって。どの先生に付きたいっていうのは、特になかったかな。

ただ、ホイットフィールドさんとは最後まで文通していた。僕が東大の助教授になった時は、ものすごく喜んでくれた。ホイットフィールドさんは、あのコシチューシコのパウンダーションの二冊本の、ポーランド語・英語、英語・ポーランド語辞典の編集をやった [The Kościuszko Foundation Dictionary]。この先生の後にはどんな言語学者がいたのか知らないですね。この後、大学にノーマン・マックリーン (Maclean, Norman, 1902–1990) とか色々な有名な文学者もきたね。

日本の研究者と

栗原 日本のロシア文学会の最初の頃、僕は駆け出しで、誰も栗原なんて知らない。要するに木村先生、北垣先生が拾ってくれたんで。ロシア文学会が『ロシア語ロシア文学研究』とかいう雑誌を出した第一号に、*dativus ethicus* っていう与格のことを書いた⁸。そしたら、木村先生たちが喜んで。やっとお前も面目を施してくれたって。そこからデビューした。だけどその後は、あんまり語学論文は書いてない。あとは東京教育大学関係の雑誌とかね。それから2号で潰れた、東京スラヴ学研究会の『スラヴ学論集』とか。そのころは動詞、再帰動詞なんかに興味があって。

野町 ええ、先生が発表されてましたね。

栗原 再帰動詞だと与格にかかってくるからね。だけど格論みたいになってくると、ヤコブソンみたいなのはまた難しくてね。あんまり頭良くないから理論的な

⁸ 栗原成郎「ロシア語における *dativus ethicus* とその周辺」『ロシア語ロシア文学研究』1号、1969、71-82頁。

ものはだめなんだ。だから生成文法が向かない。非常に抒情的だね。

野町 まさにフィロロジストという感じがします。

栗原 だから、ドイツ文学でも星野慎一先生（1909-1998）、リルケとかゲオルゲの研究なんかしてた人ね、研究までいかないけど、授業を受けて一緒に話したりしてて。

野町 当時のスラヴ語研究の世界っていうのは、どういう感じですか。木村先生の学派はあると思うので、関西には関西の派がありましたよね。

栗原 京大の言語学講座の初代教授が新村出先生（1876-1967）、二代目が泉井久之助先生（1905-1983）。僕はこの先生の書いたものが好きで、よく読んだんだけどね。『言語の構造』（1939）、『言語構造論』（1947）なんてのはものすごく面白いと思った。いろんな言語をやっていて、マライ・ポリネシア系の比較言語学なんかを、こんな厚い本書いて。たった一人でやっています。

[ここで] 言語学の弟子になったのは、山口巖さん、僕と同年なんだよね。よくできる男で、古代ロシア研究のグループやって。で、植野修司さん（1926-2008）って人がいて。この人は大阪外語から京都大学に来た人なのかな。山口巖グループって、あったんですよ。山口巖さんは、すごい仕事した人ですよ。やっぱり理論があってね。京都の学問ってのは、やっぱりこう、構えるんだね。僕の論文は、いきなり本題に入ってるから駄目なんだって。まず言語とは、とか、何とかとは、から始まる。定義から定義に進んでいく。大袈裟にかぶるんだね。まあそれは一つの形式で。

京都の学問ってのはすごいですよね。言語もそうだし、中国文学なんかもすごいでしょ。吉川幸次郎（1904-1980）なんてのは、東大と全然違う。泉井さんのところからスラヴ語をやる人が[出たのが]、山口さんと、それから、助手からスラヴ学科を作った、僕も仲良くて、ポーランドに留学した、佐藤昭裕さん。

僕の北大の最後の年に、昭裕さんが集中講義に呼んでくれて、京大でセルビア語を教えた。そこでは、スラヴ学も芽生えつつあったね。京都はある意味ではロシア語の伝統があるんですよね。ニコライ神学校の教授だった小西増太郎（1862-1940）って人が始めて、それからロシア文学をやる人が出てきたんだけど、講座なんか出来なかったからね。それで、山口さん、彼の独断場ですね。山

口さんを非常勤で呼んで、東大で集中講義してもらった。金田一君とか三谷さんとか、僕もその授業出ただけどね。とにかく、山口さんは理論家。最初に理論がはっきりしてて、ちょっと学問の性格が違った。

野町 木村先生が栗原先生のことを良いなと思ったのは、ロシア語研究の論文から、という感じですか。

栗原 それもあるし、人の話では、東大の比較文化の雑誌に書けて言われて書いたら、木村さんが激賞したって千野さんが言ってた。それかもしれない。僕みたいなこんな、体系を成してない人間を拾ってくれた。本当にそう。東京教育大の方では、生え抜き。筑波にもこれからロシア語 [の学科] が出来るから、って言われていたけど、結局、学園紛争で反対が出て潰れちゃった。だから筑波にいたら、どうなっていたか分からない。

木村先生はおおらかな人でね。決して怖くないしね。お父さんは木村謹治 (1889-1948) って東大の独文の教授で、木村先生の文学部での評価もすごく高かった。木村さんが良いつて言えば、他の先生も反対出来ない。僕は東大に行った時、まず駒場で教えたけど、本郷に行ったら、いじめられたかもしれない。でもいじめは無かった。とにかくその時は、他の先生はみんなやっぱり偉いんだよね。

僕は本郷の生野幸吉先生 (1924-1991) っていうドイツ文学の人が昔から好きで、彼の書いた小説とか詩とか全部読んでたんですよ。その頃は、まだ学生紛争をやっている。文学部だけ最後までやってた。それで、教授会開けなくて、逃げ回って教授会やったんです。そういうことやって、いつもは付き合えない先生にも付き合ってもらってね。で、生野先生、この人は本当に詩人で、言葉と格闘した人。詩集もあるけど、小説は二作、『徒刑地』と、『私たち神のまま子は』。なんの意味だか分からない難解な小説なんだけど、日本語がすごい。この人は日本語と格闘した、と思ってね。それで僕は、『ロシア異界幻想』って本の、序文と最後のところを、この人の詩のイメージの中で書いた。だから、専門も違うし、弟子でもなんでもないけれど、ある種、私淑したっていうかね。向こうも好意的に受け止めてくれた。

ある時、この先生に、ロシア語に「グロ」ってロシア語があるかって言われた

から、近い言葉はあるけれど「グロ」はないと答えた。だけど、墓場のことを、「グロ」っていわないかと。先生は、「墓場」に潜ったとか何とかいう詩を書いていて、「墓場」に「グロ」って振り仮名を付けようとしたらしい。だから僕が、гробとか、грозとか挙げて、「洞窟」の意味になるとか言ったら、そうかねえとか渋ってね。最後に、何か思い切って、洞窟で「グロト」とルビを振るようにしました、とか言って。その詩集をくれた。ところが文学部では、生野先生が詩人だってことは皆知ってるけれど、永遠の文学青年のイメージが強くて。カチカチの論文书く人じゃないと思われていた。若い頃は Rilke の研究をした。文学部である折に生野先生のドイツ詩の講義を聴いた。そのとき、Rilke はちょっとわざとらしい所がある。パウル・ツェランの方が良い、と言われた。そして最後に『闇の子午線 パウル・ツェラン』（岩波書店、1990）を書いて、僕にもくださった。

野町 これは個人的な興味でお伺いしたいんですけど、木村彰一先生の蔵書、アーカイブはどこにあるんですかね。

栗原 一度、北大で先生の蔵書を買おうとしたの。でも、大体が北大にある本だったって。百科事典とか、語学書とかに日ソ〔ロシア語書籍専門店〕が値段を付けて、望月哲男さんが見に行ったとか言ってたな。原暉之さんがその頃のスラ研のセンター長かな。それで、買わなかったんだけど、ヤコブソンからもらった『イーゴリ軍記』のなんか特殊な本、ボロボロの本なんだけどね、誰も手に取って見たことない。あれ欲しいなとか、中村喜和さんなんか言ってね。木村蔵書がどうなったのかわかんない。もったいないね。

僕も木村先生の家には何度も行ったけれど、応接間に本がやたらに積んであって。だけど教養人だから、ふっと見たらサマセット・モームとか、探偵小説とか、アガサ・クリステイー、英語の。英語の勉強にはいいよとか言って。木村先生自身は、「僕は蔵書家じゃない。蔵書家は千野さんだ」って。本を買う人と読む人って区別しててね。僕も、本は若い頃は財布をはたいて買ったけれど、どっかにいっちゃうのが嫌だから、言語学書は言語学関係の人に預けて、あとは創価大に置いてきたり。何度も引っ越ししたから、読める本だけ、と思ったのが残ってる。いずれにしても、大きな辞書類とかはある。文学関係の全集なんかは置いて

てきちゃった。あとは、覚えてない本があるかな。木村先生は、自分は蔵書家じゃないって仰ったけれど、教養のにじみ出た本がある。木村先生は言語学者だけれど、やはり文学青年だね、文学書が多かったんですよ。



[まだまだお話を伺いたかったが、4時間以上にわたってお話いただいたため、ここでいったんお開き。場所を八王子駅前のホテルのレストランに移して、食事を一緒にしながら歓談し、その後、お暇した。]

(文責：小椋彩)

伊東一郎 (いとう いちろう)

① 1949年 ②早稲田大学大学院 ③国立民族学博物館、早稲田大学 ④ロシア文学、ロシア音楽文化史、スラヴ比較民族学 ⑤著書に『マーシャは川を渡れない——文化の中のロシア民謡』（東洋書店、2001）、『ガリツィアの森——ロシア・東欧比較文化論集』（水声社、2019）、訳書にミハイル・バフチン『小説の言葉』（新時代社、1979）、『ラフマーニノフ歌曲歌詞対訳全集』（恵雅堂出版、2017）。



2024年7月29日、伊東先生のご自宅（埼玉県吉川市）にて

インタビュアー：坂庭淳史、神岡理恵子

猛暑のなか、伊東先生が坂庭、神岡をご自宅マンション近くのバス停まで迎えに来てくれた。最上階ははるかかなたに東京スカイツリーが見えており、窓から涼しく優しい風が通っていた。

ロシア、ロシア文化への関心：父の影響、高校まで

伊東 よろしくお願ひします。

坂庭 とっかかりとしては、伊東先生がロシア、ロシア文化・文学にご関心を持たれた経緯からうかがおうと思うのですが、いかがでしょうか？

伊東 「ロシア語について言えばやはり父〔伊東直（いとうなおし）氏〕の影響

が大きいと思いますね。父は戦前にハルビン（ハルピン）学院でロシア語をやりました。それは外務省の語学留学生試験に合格して、戦前の 1941 年のことです。最初はハンガリー語をやりたかったらしいんですが、最終的な語学の選択肢にはロシア語とスペイン語が残ったらしい。結局ロシアの音楽と文学に惹かれてロシア語を選択したようです。父がスペイン語を選んでいたら私の人生も変わっていたかもしれません。

その時の先生が染谷茂先生（1913–2002）で、1 年下に内村剛介〔内藤操〕さん（1920–2009）がいたんですね。染谷先生は外語出身だったが、外語には残れず木村彰一先生（1915–1986）が外語の先生になった。それで染谷先生はハルピン学院の先生になるんですけど、その結果染谷先生と内村さんは私の父の帰国後抑留されることになっちゃったんです。ハルピンは大きな文化都市で、バレエ・オペラ劇場もあった。父はそこに通って、レールモントフ原作ルビンシテイン作曲のオペラ『デーモン』とか珍しい演目も見ています。

ハルピンでも結構ロシア語の本は手に入って持っていたらしいんだけども。1944 年に帰国して 1 年後の 1945 年に東京大空襲があって、ロシア語の蔵書は灰燼に帰したようです。

それで私は 1949 年の 2 月に札幌生まれの母の実家で生まれました。父は宇都宮で生まれていますが、もとは鹿児島島の薩摩藩の家だったそうです。母は津田塾大学で英語、英文学をやっていましたが、戦前の札幌には結構コサックもいたという話をしてましたね。コサックにはコサックであることを示す「コサックだこ」っていうのが足にできるんだというんですよ。しょっちゅう鐘（あぶみ）を押さえるために。

坂庭 ということは、たこのできる場所は足の内側？

伊東 内側だったそうです。それから小学校のクラスにやっぱりロシア人の子供が何人かいていつの間にかいなくなってるということがあったようですね。

坂庭 すみません、そのコサックの記憶のようなものは伊東先生ご自身にも何かありますか？ 触れあった記憶などは？

伊東 それはないです。コサックの件は母が子供の頃の話ですね。父はハルピン郊外のコサック村に行ったことがある、と言ってましたが。

コサックは革命後にサハリンなどから流れてきたってことですよ。だから大相撲の横綱大鵬幸喜（1940–2013）もお父さんはずっとロシア人だと言われていたけれど、本当はチェルニーヒウ近くの村出身のウクライナ人ですよ、流れてきて、それで南樺太で日本人と結婚して大鵬が生まれたって話ですけど。

坂庭 プロ野球で活躍したヴィクトル・スタルヒン [ペルミ出身]（1916–1957）もそうですね。

伊東 スタルヒンもそうですね。それで終戦になって、日ソ間にはしばらく国交がなく、国交回復したのが1956年ですね。それで父は外務省に勤めていたけれどもその年まではモスクワに大使館がなくソ連に行くことができなくて、1952年から1954年にオランダのハーグに私と父母が滞在していました。私が2つぐらいの時でした。住んでいた家の家主のおじいさんが、フルソフという名のロシア人だった（笑）。それで私は2つぐらいだから、だからそのおじいさんとはオランダ語で喋ってたみたいですけど、全然、全く覚えてません。

「一郎（いちろう）」っていう私の名前はロシア人には発音しにくいみたいで、そのおじいさんは（私のことを）「Исидор（イシドール）」って呼んでました。ロシア語のアクセントはイシドールなんですけど、日本語に合わせてイシドールと呼んでいた。

ハーグにはオリエンタル・ブックショップという本屋があって、ソ連の本をそこで買えたらいいんです。だから、ハルピンで買ったものは空襲でほとんど燃えちゃったらしいんだけど、父がハーグで買ったロシア語図書は少し残ってて、1940年代に出たプーシキン全集とか、プローク作品全集とかがあったんで、私が受け継ぎました。戦前に父がロシア語を学ぶことを選択したおかげで、私もロシア語に馴染んだというところがあります。

ハルピン学院の1年下だった内村剛介は父のことをもちろんよく覚えていたので、上智にも父は非常勤で行ってました。シベリア経済が専門だったんでそういうことを教えてたようです。

それで、ハーグ時代にはオランダにも有名な亡命ロシア人合唱団のドン・コサック合唱団が来演してて、父はそれを聞きに行ったりLPを購入したりしておりました。家でもそのレコードが鳴ってたはずですよ。ちなみにハーグはワシー

リー・トレヂアコフスキー（1703-1768）がペテルブルグからパリに行く途中に滞在していた町ですよ。今でもちゃんとロシア正教会がありますが、18世紀から大使館付きの教会としてあったようで、1819年に「赤いサラファン」の作曲者アレクサンドル・ワルラーモフ（1801-1848）もこの教会の聖歌隊の指揮者になっています。

それで、私は帰国してから1955年に港区の麻布小学校に入学するんですけども、1955年から父はアフガニスタンの日本大使館に勤務になっちゃった。結構大変だったみたいで。宿舎の床をサソリが這ってたとか言っていましたね（笑）。バーミヤンの磨崖仏などにも車で行ってました。父がカブール勤務の小学校の間、私は生まれた札幌で過ごしました。

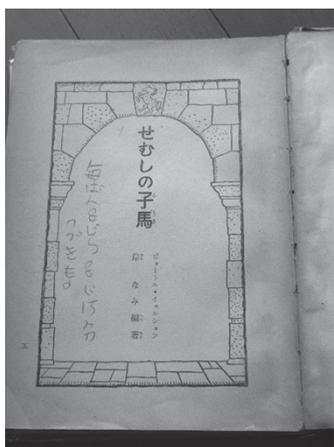
ですからロシア語はやっぱり歌が最初に自分の耳に入ってたようです。最初に読んだロシア関係の本っていうのはおそらくピョートル・エルショフ（1815-1869）の『せむしの子馬』だった。これはなぜか小学生の頃読んだ本を捨てずに持っているんですけど、これです [実物を見せる]。岸なみ [土子登代子]（児童文学作家・翻訳家、1912-2015）編著ってあって岸さんの創作も結構入っているけれど、なかなかいい文章なんでよく読んでました。記者の岸さんはロシアが専

門だったわけではないようですが。「せむし」という表現がまずいっていうんで、結局『せむしの子馬』の翻訳は差別語追放の時に一緒に消えちゃったんですね。

坂庭 今はだから『イワンの子馬』ですよ。ね。

神岡 うちに古い絵本全集版『せむしのこうま』があります。

伊東 それで、なんで父がアフガニスタンに行ったかっていうと、ソ連とアフガニスタンは国境を接してますよね。だからソ連の隣の国ではあったわけだ。それでロシア語をやった連中は国交回復するまでソ連に行けなかつ



小学校の頃、読んでいた本

たので、他のところに行かされて、父はアフガニスタンがソ連の隣だということもあってアフガニスタン勤務になった。その頃のアフガニスタンには親ソヴィエト政権が成立していたらしくて、そういう事情もあったみたいですね。だから父はその国境伝いにソ連のSPレコードなんかも購入してた節があるんですけども、この頃民族学者の梅棹忠夫さん（1920–2010）がアフガニスタンに調査旅行に来ていて、父はいろいろ梅棹さんの世話をしたって言ってました。

父がカブール勤務の間の1956年にスターリン批判があって、日ソ国交回復がなされ、それから日本にソ連の合唱団とか独唱者とかが来るようになったし、日本からはダークダックスとかボニージャックスとかロイヤルナイツとかのボーカルグループがソ連に行くようになりました。日本でもロシア民謡がブームになってきます。ロシアにはもともと4人でハモって歌うという形式がないんだね、大人数の合唱ってのはもちろん昔からやってるわけですけど。それが新鮮だったのか、向こうで大変ウケたようです。

話が戻りますが、単身で行ったカブールから父が帰国したのは1959年で、それまで私はまた札幌にいたんですけども、今度は北浦和の常盤小学校に転校しました。この頃から父が日本でいろいろロシア民謡のLPを自分で買って蓄音機で鳴らしてたんで、私の場合は耳からロシア語が入ってきた。ボリス・フリストフってこれはブルガリア人のバス歌手ですけど、彼の歌うグリンカ歌曲集っていうのが出てて、プーシキンの歌曲とかをそれで初めて聞いた。常盤小学校に1年ぐらいいて、1960年に相模原市谷口台小学校に転校しました。

小学校の頃はソ連のSFを読んで、オーブルチェフ（1863–1956）の『地底世界探検隊』って題名の袋一平さん（1897–1971）の子供向けの訳が出てた。これは『プルトーニア Плуто́ния』っていうのが原題なんですけども、ジュール・ヴェルヌの『地底旅行』のロシア版みたいな話で。地球の中が空洞だっていうんだよね。それで、太古に隕石が北氷洋に落ちて、地殻を貫いて中心まで到達し、地底の太陽になってる、という話。講談社に『世界少年少女科学冒険小説全集』というシリーズがあって、その中に入っていたのですが、そこでソ連とアメリカのSFが結構たくさん訳されてました。そのシリーズの中で読んだベリヤーエフ（1884–1942）の『第十番惑星』っていうのもその一つで、これは地球から見て太

陽系の太陽のちょうど裏側に 10 番目の地球にそっくりの惑星があるっていう話で、そこに行く話なんですけどね。これは夢オチで終わっちゃうんだけど。これも袋一平さんの訳でした。両方とも 1956 年に出ています。

それで小学校はここ谷口台小学校を卒業して同じ相模原の大野南中学校というところに入りました。国語を教わった朝倉芳朗先生は早稲田の国文の出身でシベリア抑留経験者であることを後で知りました。早稲田ではワルワーラ・ブブノワ先生（1886-1983）にロシア語を教わったそうです。それで、父は戦前からロシア語をやっていたんだけど、モスクワ大使館に勤務になったのは 1961 年になってからで、そこで初めてロシア語を使って仕事をした。この時も父は LP レコードをどっさり買って全部うちに持って帰ってきた。ロシア語の本も結構たくさん持ち帰りましたね。レコードだけじゃなくてロシア語の歌集とかも結構持ち帰ってきた。父はウクライナ民謡も好きだったので、レコードや楽譜の中にはウクライナ民謡とかもたくさんあったんですね。モスクワのアルバート通りにウクラインスカヤ・クニーガっていうウクライナ語の本屋があったんですよ。

坂庭 ドーム・クニーギとかの並びに？

伊東 そうそう。そこで結構いろんなウクライナ語の本を売ってたんで、私は最初にモスクワに 1 ヶ月で行った 1974 年夏に、そこで結構ウクライナ語の本を買いました。

坂庭 伊東先生が最初に行かれたのは 70 年代だったんですね？

伊東 夏の 1 ヶ月の、モスクワ大学主催のロシア語教師のためのロシア語コースで。

坂庭 もう早稲田に入られてから？

伊東 そうです。大学院の博士課程に入った 1974 年だと思うんですけどね。その頃はだからモスクワでもウクライナ語の本が買えたんですよ。それで、父の蔵書の中にはロシア語の本がたくさんあったんで、キリル文字に対するアレルギーは全くなかった。ロシア民謡をロシア語で歌いたいとか、ウクライナ民謡をウクライナ語で歌いたっていうのがあったから、アルファベットの読み方はすぐ覚えてですね、ウクライナ語もこの頃は全然日本語の教科書がないんで、父の蔵書の中にド・ブレイの『スラヴ諸語へのガイド』を見つけて自分で独習しまし

た。

神岡 歌を聴いて好きになって、それから語学という順番だったんですね。

伊東 そうですね。だから丸覚えしたロシア民謡が露文に入ってから、あちらが分かる、こちらが分かる、とジグソーパズルみたいに意味が分かってくると楽しかったですね。

それで1964年に藤沢の神奈川県立湘南高校に入学しました。私は補欠で入ったんですけどね、入学したら合唱部に入りました。それとは別にクラス対抗の合唱コンクールってのを湘南高校はやってまして、私が唆して、3年間、「ヴォルガの舟歌」とか「前線にも春が来た」とか「ともしび」とか、ロシアの歌をずっとクラスのみんに歌わせていました。この頃にやっぱりロシアからアカデミー合唱団とか合唱団がたくさん来たんですね。日本でも楽譜が結構出てたので、これも私が唆して、合唱部にもなるべくロシアの歌を歌わせた。この湘南高校の合唱部の後輩がプロの指揮者になってます。合唱部を指揮していた大野和士です。最近、新国立劇場で『ボリス・ゴドゥノフ』を振ったよね。それで1960年代はまだソ連からオペラ団が来てなかったんですが、1965年にNHKがスラブ・オペラっていう名前で、ブルガリアとユーゴスラヴィアの4つの歌劇場の混成歌劇団を作って、招聘して『ボリス・ゴドゥノフ』と『イーゴリ公』と、『エウゲーニイ・オネーギン』と、『売られた花嫁』をやったんだけど、後から考えると、演目はロシアのオペラが3つとチェコのオペラが1つだけど、ロシア人もチェコ人もいなくてブルガリア人とユーゴスラヴィア人だけ。だから「あ、スラヴ語ってつまり似てるんだな」っていうことを思いました。

この頃ソ連ではソルジェニーツインが登場し、文学界は活気づいていましたが、フォークロア研究の分野でも新しい風が吹き始めました。ソヴィエト構造主義の中心人物だったヴァチェスラフ・イワーノフとウラジーミル・トポロフによるスラヴ神話を言語学的に再建しよう、という試み『スラヴ言語モデル化記号体系』が1965年に出たんですね。彼らはレヴィ＝ストロースの神話論に大きな影響を受けていたのですが、比較スラヴ神話論にも関心が向いていた私の研究に後に大きな影響を与えました。またこの頃、ヤコブソンの著作集の第4巻、『イーゴリ軍記』とスラヴ・フォークロアの研究をまとめたものが1966年に出版

されました。ここに収録されたスラヴ民謡の比較韻律論からは大きな影響を受けました。

ロシア文学をまともに読んだのは、高校2年生の時、1966年ですね、私が虫垂炎になって入院してた時に『罪と罰』を読みました、まあそういう時に読むものじゃない小説だよね、退院が遅れたような結果になりましたが、ハマったってことでもあります。

1967年に湘南高校を卒業し、一浪して早大第一文学部に入った。私はこのような経緯から、早稲田の文学部に入ったらロシア語をやろうとはじめから思っていました。

大学で本格的にロシア語を学ぶ

坂庭 大学の様子を教えてください。

伊東 1968年に入学したのはロシア語のIクラスでした。その頃のロシア語クラスは2つあって、苗字のあいうえお順の最初のグループのIクラスでした。同級に井桁貞義（1948–2024）、岩田貴がおり、その他に読売新聞美術記者となった芥川喜好、人間科学部で合気道を教えていた志々田文明、カナダ・イヌイット研究の世界的権威となったスチュアート・ヘンリが同級のロシア語クラスでした。このクラスで安井亮平先生（1935–2020）と金本源之助先生（1921–2013）にロシア語を教わりました。そそっかしい級友は、金本源之助というお名前を金本ゲノスキイと聞き間違え、ロシア人と思い込んでいたものです。

その頃の露文のスタッフは岡澤秀虎先生、丸山政男先生、宮坂好安先生、黒田辰男先生、横田瑞穂先生、小川利治先生、野崎韶夫先生、金本源之助先生、新谷敬三郎先生、藤沼貴先生、安井亮平先生と11人もいらした。岡澤秀虎先生（1902–73）は露文の創立者の片上伸〔かたかみのふる〕先生（1884–1928）の一番弟子で、その一番弟子がおそらく藤沼貴先生（1931–2012）だった。岡澤先生は定年の年の1973年の3月に70才で亡くなられました。文字通り早稲田の露文と生涯を共にしたことになります。私はかろうじて露文の伝統の末端に触れることができたわけです。新谷敬三郎先生（1922–1995）はバフチンのドストエフスキー論を訳したばかりの頃で、授業でも読みました。文学研究の方法論的には新

谷先生に一番大きな影響を受けたと思います。フォルマリズムの紹介もされていて、そこから大きな刺激を受けました。

一方私はクラスに「ロシア語でロシアの歌を歌う会」を立ち上げて、ロシア語日本語の対訳と楽譜付きの歌集をガリ版で作り、みんなで歌ってました。「モスクワ郊外の夕べ」が入ってる一方で、デモ行進や学生団交で歌われた「ワルシャワ労働歌」とか「インターナショナル」とかも入ってた。

露文ではクラス新聞を作りましたが、『ガゼータ Газета』っていう名前でした(笑)。モスクワ芸術座が来日するのでみんなで行きましょう、というような記事や、教員インタビューという企画があって、最初は藤沼先生にインタビューしてたと思います。

それからクラス雑誌で『サモワール』ってのを作ってたんですけど、1968年のことですからこの頃は当たり前ですけどガリ版印刷ですね。これは奇跡的に残ってましてですね [実物を見せる]。

坂庭 ずいぶん作りがしっかりしていますね。

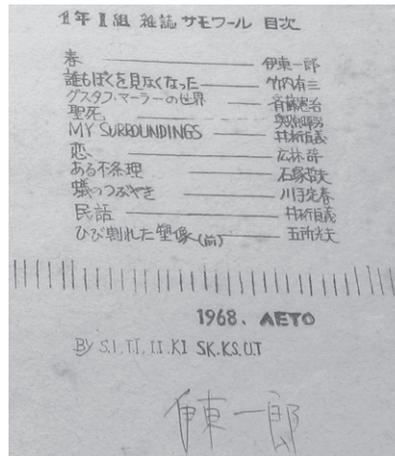
伊東 はい。こういうのをやろうって言い出すのはいつも井桁貞義だった(笑)。みんなでワイワイやるのが好きだったから。

坂庭 [雑誌『サモワール』の] 巻頭いきなり伊東先生の「詩篇」から始まりますね。

伊東 そうですね。この頃私は詩を書いてて、井桁君は評論と小説を書いていたな。

坂庭 へえ～。これも貴重ですね。

伊東 勉強はさておきですが、1968年に早稲田に入った時に、湘南高校の合唱部の先輩が2人もグリークラブに先に入っちゃってたので、自分も自然にグリークラブに入った。グリークラブは男声合唱団なんで、その頃までロシア民



『サモワール』目次

謡ってというのはドン・コサック合唱団の影響もあって、男声合唱のレパートリーとしては流行ってたんです。ところが私が入学した年に濱田徳昭先生っていう人を常任指揮者に迎えて、レパートリーは中世ルネッサンスのポリフォニーが中心になり、レパートリーからロシア民謡はどっかに消えてしまった。だからグリークラブではロシア民謡はほとんど歌えなかった。グリークラブでロシア民謡を歌ったのは後にも先にもグリークラブの卒業演奏会の1回だけ、「コサックの子守唄」とか「ヴォルガの舟唄」、ウクライナ民謡の「広きドニエブルの嵐」などを原語で歌いました。

そうこうしているうちに、8月ですよ、ワルシャワ条約軍がプラハに侵攻するっていうチェコスロバキア事件がありました。間が悪いことにその秋に石井好子事務所が赤軍合唱団を招聘していて、さすがにそのコンサートが中止になりました。心待ちにしていた私はショックでしたね。

振り返ってみると入学時の1968年にそういうことがあって、早大退職後3年目、2022年にロシアのウクライナ侵攻っていうのがあった。ロシア・東欧に起きた2つの大きい事件ですね、それが私のスラヴ学の辛い節目となった。つまり、それまで東ヨーロッパのことはロシア、ソ連を通じてじゃないとなかなか情報が入ってこなかったんだけど、やっぱりその国の本当のことはその国の言葉で知らなければいけないなっていう風に思ったことがあって。それでチェコ語とかですね、ポーランド語とかをはじめます。今はなくなった早大語学教育研究所(語研)にポーランド語の講座があって、野村タチヤーナ先生(1920-2005)がそこでロシア語とルーマニア語を教えてらした。そこでポーランド語を米川和夫先生(1929-1982)に教わりました。チェコ語は、日本チェコスロバキア協会の講座で能代ヴラスト・チハーコヴァーという美術評論家に教わりました。チハーコヴァーさんは『美術手帖』に日本語でマレーヴィチ論を書くというすごい人でした。ポーランド語は、カジミエシュ・モシンスキというクラクフのスラヴ民族学者が『スラヴ人の民衆文化』という大著を書いていて、これを読むのに後で大変役に立ちました。

今もロシアのウクライナ侵攻という事態を前にして日本のウクライナ研究が如何に手薄であるかが明らかになってきています。ロシアを通じてウクライナを見

る、という視点がソ連崩壊後も続いていた、ということです。

ところでこの頃は1920年代に圧殺されたロシア・フォルマリズムの再評価が日本でも始まり、ワルシャワ条約軍のプラハ侵攻に対する反発もあり、私も関心を深めました。

それで入学した年の1年間は授業があったんですが、2年になったら、第2次早稲田闘争が始まり、無期限バリケードストライキってことになってしまった。授業が全くなくなってしまったんですよ。それで、マヤコフスキー学院っていうのが1967年に東中野にできていたのを知りました。ロシア語を大学以外でやる場所ってのは当時だと「日ソ学院」それから「ミール・ロシア語研究所」と、「マヤコフスキー学院」の3つぐらいがあったわけで、マヤコフスキー学院は、江川卓先生（1927-2001）が始めた学校で、新日本文学会が主催の学校だったので、会話よりはロシア文学をロシア語で読む、という姿勢が強い学校でした。東中野に新日本文学会館っていう2階建ての木造の建物があってそこでやってたんですけど、それでその中に一番難しい「翻訳研究科」っていうのがあって、いきなり無謀にもそこに入っちゃったんですね。そこで読んでたのは何だったかっていうと、パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』だった。大学2年で『ドクトル・ジバゴ』なんて読めるはずがないんですけども、そこに入ってびっくりしながら受講してた。テキストの眼光紙背に徹する読み方には大きな影響を受けました。このマヤコフスキー学院では原卓也先生（1930-2004）や、早稲田に戻られる前の水野忠夫先生（1937-2009）、磯谷孝先生にも教わりました。他のクラスでは桑野隆さん、渡辺雅司さんとか佐々木照央さん（1946-2023）なども教えてました。新日本文学会が解散するのと同時にマヤコフスキー学院もなくなりましたが。

坂庭 もうこれはデヴィッド・リーン監督の映画とかはある頃ですか？

伊東 デヴィッド・リーンの映画版『ドクトル・ジバゴ』は1965年でもうありました。もちろんソ連では禁書で、ソ連版のテキストはないので、江川さんはフェルトネリというイタリアの出版社から出たテキストを使ってました。

それで1968年のワルシャワ条約軍のプラハ侵攻に対して「ロシア手帖の会」ってのをやってた江川卓、原卓也、木村浩（1925-1992）といった方々はプラハ侵

攻に対して抗議声明を出しましたが、他に抗議声明を出した人はいなかった。なぜかっていうと、そういうことをすると当たり前だけど当時はもうビザが出なくて、ソ連にいけないことは分かりきっていたからですよね。

それからこの頃から二期会のテノール、宮原卓也先生にロシア歌曲を教わるようになります。私は文学部に入った時、ロシア語会話の授業の担当は野村タチヤーナさんだったんです。私も授業で歌いまくってたもんだから、それを聞いてたタチヤーナさんが「あなたはちゃんと歌を勉強しなければなりません」と言って、それで木村浩さんがこの宮原卓也さんをよく知ってたもんだから、木村浩さんを介してその宮原卓也先生を紹介してくれて、ロシア歌曲を学ぶことになったんですね。それまで私はロシアのバス歌手に憧れていて、私も自分はバリトンだと思っていて、湘南高校合唱部でもバスのパートを歌ってた。そうしたら私の声を一声聞いた宮原先生に「あなたはテノールです」と言われた。がっかりしたのを覚えています。

ところで宮原卓也さんはハルピン生まれなんですよ。ロシアに関わる音楽関係の人って割とハルピン生まれが多いんだけど、歌手の加藤登紀子さんもハルピン生まれでお父さんがずっとスガリーというロシア料理店をやってましたよね。宮原卓也さんのお父さんはハルピンで産婦人科医やってたそうです。やはり子供の頃に耳からロシア語が入ってきていたんでしょうね。ドイツものの他にロシアの声楽曲もレパートリーにしていた。ロシア民謡のLPも出していらっした。ちなみに内田吐夢監督の『たそがれ酒場』（1955年）という映画に貧しい声楽家志望の青年の役で出ています。最後にグリンカの『皇帝に捧げし生命』の「スサーニンのアリア」を歌う場面で映画が終わるんです。

それで宮原先生のレッスンに通ううち、レッスン代の代わりにね、ラフマーニノフの歌曲の歌詞の対訳を3曲ずつ持ってきてくれて言われて、それを持って行って、それが溜まってって、『ラフマーニノフ歌曲歌詞対訳全集』（1978年に新期社より出版、2017年に恵雅堂出版から再販）というのができちゃったわけです。まあ歌は上手くならなかったかわりに、本ができちゃったということです。

それで、私達の時代は1年、2年が語学クラスで3年次でロシア文学専修に分

かれるってことになってました。3年に入って今度は、『サモワール』の次だからっていうんじゃないんですけどね、『ピログ』って名前の雑誌を出した〔実物を見せる〕。この題字は井桁君だよな。2号まではタイプ印刷なんだけれども、3号は活版印刷の立派なものができちゃったんですよ。露文復活25周年〔早大露文専攻は1920年に創設されたが、1937年に廃止され、1946年に復活した〕、ドストエフスキー生誕150周年と銘打っています。

坂庭 各先生が記事を書かれていますね。卒業生も五木寛之さん、後藤明生さん、三木卓さんをはじめとしてすごいですね、寄稿者のラインナップが。

伊東 すごいでしょ、何でこうなったかっていうと、無期限バリケードストライキになってしまったためにですね、『ピログ』の3号を出そうという時に、露文復活25周年のイベントを大々的にやろうという計画があったらしいんだけど、とてもそれどころじゃなくなりました。そのためにプールしてたお金が結構あったらしくて、「君たちはその代わりに立派な雑誌を作りなさい」ってことで、タイプじゃなくて活版でいいですよって、それで作ったわけですね。それがこの『ピログ』3号。ですから露文復活25周年とドストエフスキー生誕150周年を兼ねた立派な雑誌が出たんですね。

あつという間に卒業の年になり、1972年に私は結局「アレクセイ・コリツォーフとロシア民謡」という卒論を出したんですが、これはコリツォーフの民謡風の詩を実際の民謡と比較する内容でした。主査は宮坂好安〔谷耕平〕先生（1903-1989）でした、詩をやってたのが宮坂好安先生なので、そういうことになった。これはフォルマリズムの影響の強い卒論となりました。と同時に民謡の韻律を分析していくなかで、記号体系としての音楽と言語の関わりに関心が生まれました。

目次

露文科復活25周年記念に寄せる言葉	岡 野 浩 (1)
片上神生のこと	横 田 隆 (4)
ワトキの旗	後 藤 明 生 (8)
その頃	山 上 士 朗 (11)
夢の話	三 木 卓 (12)
ドストエフスキーの本	事 塚 成 (14)
露文大学のころ	東海社 さだお (15)
究 一	内 田 保 雄 (17)
わが学生期	五 木 寛 之 (21)
『東河』以後のこと	内 田 保 雄 (24)
窓 一	三 木 卓 (26)
デモクラシー No.2 「時代の木曜日」(1)	小 野 龍 彦 (44)
橋の辺り	石 塚 賢 夫 (48)
「君の夢のためーれいゝむ」	岡 野 浩 (50)
目録	伊 東 一 郎 (52)
秋のうた	新 井 義 典 (54)
私と他者—ドストエフスキー試論—	大 槻 規 子 (64)
ドストエフスキー—キリスト—ムイシキン公選—	大 槻 規 子 (64)
『戦じも人々』について—ドストエフスキーにおける—	三 田 龍 浩 (70)
「イゾギ軍記」に於ける異教神	宮 本 正 洋 (82)
早大露文科年表	(87)

『ピログ』3号表紙

井桁君は『私・他者・世界』という卒論を書いて、それを自費出版で出して、早稲田通りにあった古書店の文献堂とかに置いてもらったり。その本は図書館に入ってますけどね。これはドストエフスキーをバフチンとヘーゲルに関連づけるユニークな論でした。

大学院、ロシア語劇団「コンツェルト」

伊東 その後大学院に入りましたが、相変わらず民謡をやっていたので、入ったゼミはやはり宮坂ゼミで、そこで坂内徳明君と同級になったと思うんですね。坂内君は外語大から早稲田の修士に入って、それから一橋に行った。それで一橋の先生になったんだけど、彼は外語大と早稲田と一橋のフォークロア関連のロシア語資料を全部頭に入れちゃってるすごい人だったんです。このゼミで何を読んでたかっていうとね、ネクラソフの『誰にロシアは住み良いか』を原文で読んでました。これは宮坂先生が翻訳したものが岩波文庫から出ていました。

坂内君を介して亀山郁夫君や桑野隆さんと知り合い、4人で読書会のようなことをやっていたこともありました。

大学院でもしつこく『ウオトカ』という雑誌を作って出している。これ1号だけで終わっちゃったんですけどね [実物を見せる]。最近、同窓生雑誌みたいな形で『ウオトカ』は復活しました。また、この頃の大学院の同期生を中心に2021年、『スラヴァンスキイ・バザアル』という自前の古希記念論文集を出しました。

坂庭 それからこの頃にロシア語劇団「コンツェルト」が始まったんですね。

伊東 1971年に第1回の公演かな。つまり、外語はずっと語学祭で芝居をやってたわけだけど、外語も学生紛争でそれがなくなっちゃって、それで野村タチヤーナ先生が、学生と教師の仲が悪いので、ロシア語を介して教師と学生がとにも交流できる場として「コンツェルト」っていうのを考えて始めた。

坂庭 じゃあやっぱり早稲田と外大が一緒になってっていう？

伊東 早稲田と外大と東大の3つです。「コンツェルト」って、もともと「学芸会」っていう意味だったわけですけど、それが固有名詞化していったってことですね。最初は歌を歌ったり、寸劇やったり、琴と尺八の合奏とかそういうものを

やってた。それからだんだん一本の芝居をやるようになった。私の記憶では、初期のコンツェルトでは、米原万里（1950-2006）が確か外大の民族舞踊研究会の会員だったんで踊りに来たことがあった。それで『エヴゲーニイ・オネーギン』のことなんですけども。タチヤーナ先生が、彼女の親がタチヤーナと名づけたのは当然『オネーギン』のタチヤーナにちなんでつけたってということで、どうしても自分のためにやりたかったみたいだね（笑）。

坂庭 それで『オネーギン』の公演となったのですね。

伊東 それは1976年ですね。しかも『オネーギン』の原作は戯曲ではないので、オペラの脚本に原作を挿入するような形で脚本を作る、ということになりました。それでオペラの Aria で歌えるところは歌う、という無茶な企画になったわけです。

亀山郁夫はバリトンで鳴らしてたから、向こうがオネーギンでテノールの私がレンスキーだったんですけども、その時演出を担当したのが今は川崎渕先生の夫人、川崎〔旧姓小町〕直美さん。私は性格的には亀山氏がレンスキーで私がオネーギンじゃないかと思ったんだけど、まあしょうがないだろうと。その時に外語の1年生だった沼野〔旧姓小出〕恭子さんがピアノ伴奏をしてくれました。これは当時西ヶ原にあった外語大の講堂でやりました。これは米原万里も見に来てくれていて、『現代ロシア語』って昔あった雑誌にその感想を書いてくれています。

その後コンツェルトは50年を越える歴史を刻むことになり、私は一度大阪に就職した4年半をのぞいてずっと関わることになりました。早稲田に戻った頃に文学部に東井ナデージダ先生がこられて、タチヤーナ先生の片腕になりました。

野村タチヤーナ先生が引退した後、ナターリヤ・イワーノワ（バルシャイ）先生が後を継いでくれました。コンツェルトの出身者には錚々たるメンバーがいて、私や亀山郁夫、コンツェルト婚の沼野充義・恭子夫妻をはじめとして、〔ロシア・フォークロアの会〕「なろうど」の直野洋子さん、亡くなった映画研究家の井上徹（1965-2023）、現日本ロシア文学会会長中村唯史、北大スラ研の宇山智彦、日本ユーラシア協会の浅野真里、シベリア民族学の佐々木史郎、現代エスト

ニア史の小森宏美、埼玉大学の野中進、早稲田大学の貝澤哉、東大の鳥山祐介、大阪大学のヨコタ村上孝之、清泉女子大の井上まどか、東海大学名誉教授の土屋直人などがいます。

私は 1974 年に 2 年で修論を書いて出したんですけど、「ロシア民族抒情歌の表現構造」というフォルマリズムの手法によるテキスト分析ですね。ロシアの民族叙情歌のテキストを、音韻論、語構成論、統辞論、プロット構造、作品行為論といった複数のレベルで分析しました。言語構造の分析はヤコブソンに、プロットの分析はシクロフスキーに依拠し、作品行為論はバフチンのラブレール論を意識しました。

私はずっと民謡をやってきてロシア・フォークロアに関心があったけれども、当時はロシアの現地でフィールドワークとかできない。外国人が片田舎に一人が入って、調査するといってもロシア人からみればスパイじゃないかと思われるようなことをやるわけですから。だから私の学生時代は、ロシア・フォークロア研究というのは文献学だったわけです。その頃はまさかソ連が崩壊するとか考えていませんでしたから、修士論文もテキスト分析です。ヤコブソンの詩学から大きな示唆を受けると同時にちょうどこの頃ソヴィエト構造主義が台頭し、その中心にいたイワノフとトポロフの仕事に、スラヴ比較民謡論を構想していた私は大きな刺激を受けました。特に彼らが中心になって 1973 年にワルシャワのスラヴィスト会議に提出した「文化の記号学についてのテーゼ」は私のその後のスラヴ学的な文化研究の方法論的な視座をかなり規定したと思います。

宮坂先生が 1974 年に定年でお辞めになったんで、その後私はどこのゼミに移るかってなって、野崎先生のゼミに移りました。野崎先生の専門は演劇とバレエでしたが、音楽にも造詣が深いということで、そうになりました。その時に野崎ゼミで浦雅春君（1948–2023）とか山之内重美とかと同級になった。大学院では教会スラヴ語を小川利治先生に教わりましたけれども、私が教会スラヴ語をやったのは語学的な興味ももちろんありましたけども、ラフマニノフの『晩禱』などのロシア聖歌とか、ヤナーチェクの『グラゴル・ミサ』のような、教会スラヴ語で歌われる声楽曲に関心があったのも理由でした。それで実際にその発音指導を後

にやることになりました。教会スラヴ語の歌の発音指導できる人ってほとんどいないもんだから、何回か頼まれてやりましたね。この頃にマヤコフスキー学院の講師になりました。

一方、在学中に私はグリークラブでずっと歌ってたんですけども、卒業すると今度は稲門グリークラブっていう OB の合唱団があって、1975 年にシヨスタコーヴィチの 13 番『バービー・ヤール』の訳詞をやることになりました。1975 年の時点で、日本ではシヨスタコーヴィチの交響曲はほとんど全部演奏されてたんだけど、13 番の『バービー・ヤール』だけ残ってたんですね。なぜかっていうとやっぱり内容的にいろいろ問題があるし、独唱と合唱が入ってるので、その歌詞をどうするかっていうことで、ソ連から『バービー・ヤール』を歌うためにソリストと合唱団を呼ぶことも難しかった。それで、早稲田大学交響楽団とその OB の山岡重信さんという指揮者と、それからグリークラブ OB でバス歌手の岡村喬生、それから現役の早稲田大学グリークラブと OB の稲門グリークラブが集まって、「これ早稲田の音楽家だけでできるんじゃないの、シヨスタコーヴィチの 13 番の日本初演が」ってなった。だけどやっぱり訳詞でないと無理だよなって、岡村さんの命令でお前が訳詞を作れということでやったわけです。練習中にシヨスタコーヴィチが亡くなり、本番はシヨスタコーヴィチの追悼演奏会として開催して、大成功だったんですけどね。この岡村喬生さんっていうグリークラブの先輩は、『ボリス・ゴドゥノフ』を歌うためにロシア語をドイツで先生について勉強した偉い人だったんですけど。

それから翌 1976 年に小澤征爾指揮、岡村喬生主演『ボリス・ゴドゥノフ』を二期会でやった。この時の上演用の訳詩を作りました。この頃まで結構、訳詞上演のロシア・オペラは日本で多かったんです。ちなみに岡村喬生さんとこの頃よく一緒に演奏してたのが森安達也先生（1941-1994）の妹さんの耀子さん。ピアニストだった。その森安耀子さんの伴奏で岡村さんはロシア歌曲を歌ってました。達也先生も 53 歳で早逝されましたが、妹さんも 52 歳で亡くなられたんです。

1976 年に『ヨーロッパ文学研究』に「ゴーゴリとウクライナ・フォークロア」という論文を書きました。この頃から、ロシア文学とウクライナ、ウクライナ・フォークロアっていうのが、私の研究のテーマの一つになってきました。1977

年に私は露文を満期退学し、その後二文〔早大第二文学部〕と東海大学で非常勤をやっていました。この年に井桁君は早々と比較〔早大第一文学部比較文学研究室〕の助手から専任講師になってました。

国立民族学博物館でスラヴ民族学研究

伊東 ロシア民謡をやっていたのが逆に幸いして、国立民族学博物館助手として来ないか、という話が来た。この時の館長は梅棹忠夫先生（1920–2010）で、博物館のスタッフでロシア語ができる唯一の人は加藤九祚先生（1922–2016）だった。私の前にも何人か候補があったらしいんだけど全部ポシャってしまったらしくて、最後に私に話が回ってきたらしいんですけどね。私はこの頃どうしてもスラヴ民族学がやりたかったので、この話は受けない手はない、と思いました。

それで、大阪に行くことになります。1979年の10月でした。私を引っ張ってくれた加藤九祚先生はずっと平凡社にいた方で、そこからいきなりスカウトされて民博に来た。異色の抜擢です。それで私は助手として採用されたのですが、加藤さんの助手としてではない。講座制になってるわけじゃないんです。しかも同じロシア語のできるスタッフといっても、加藤さんの専門は中央アジアとシベリアで、私の専門はスラヴということで重ならなかった。助手は個室も与えられて私は自由に研究させてもらった。ただ加藤さんの影響で、シベリアや中央アジアにも関心を持つようになりました。国立民族学博物館というのは、国立大学共同利用機関という佐倉の歴史民俗博物館と同じような位置づけの研究機関だったんで、つまり大学と同じステータスなんだけども授業がないという大変良いところだったわけです。「勉強だけしてればいいんだよ」と言われて行ったんです。授業がなく研究だけなら、博物館には用事がある時に来て勝手に帰ればよいようなものなんですけど、加藤さんは平凡社勤務が長かったから、きっちり9時に来て5時までびっちり研究室で仕事する人だった。それで「先生いつ出勤していつ帰ればいいんですか」と聞いたならば、「君それはね、決まってるだろう、9時に来て5時まで仕事やるんだよ」って言われ、その通りにやってたけど、気がつくともうそういうことやってる人は加藤さんと私しかいなかったです。ただし、5時になるとしよっっちゃう加藤先生が私の研究室の扉を叩いて、「伊東くん、一杯やらん

かね」といって10時まで酒盛りになる。なぜ10時までかって言えば、10時に国立民族学博物館のある万博記念公園の門が閉まっちゃうんですね。加藤先生は最近、発掘調査地のウズベキスタンで亡くなりましたが、94才まで生涯現役でした。頭が下がります。また晩年加藤先生は、自分は実は朝鮮人なのだ、ということのカミングアウトされた。慶尚北道生まれで朝鮮名は李九祚だったんです。そこからシベリアやカザフスタンの朝鮮系の人々にも関心を持たれたんですね。

坂庭 伊東先生も9時～5時で働いてたんですか？

伊東 そうです。おかげでたくさん勉強しました。この年にはバフチンの『小説の言葉』が新時代社から出ました。これは新時代社で『バフチン著作集』を出そうという話になって、新谷先生が私に訳してくれと言ったので、四苦八苦で訳したものです。しかし訳しているうちにドストエフスキー論との関連が見えてきたのは収穫でした。これは平凡社ライブラリーに入れる時に結構直しましたが、今また、水声社の『ミハイル・バフチン全著作』に入れるために赤字を入れています。バフチンのドストエフスキー論と『小説の言葉』がアメリカの文化人類学界に大きな影響を与えていることをその後私は知ることになります。ロシア文学の領域でやっていたことが、文化人類学でも活きるようになったのは幸せでした。

1979年は『なろうど』が創刊された年です。ロシア・フォークロア談話会の会報として出版され始めました。坂内君は一橋の先生にもう決まっていたので、一橋の中村喜和、坂内徳明を中心に、そこで研究会を月1回開いて、年に2冊雑誌を出すことになりました。日本でロシア・フォークロア研究といっても、この頃はやっぱり文献研究ですよ。会はロシア・フォークロアの会と改称されましたが、現在89号まで出てます。ロシア関連の雑誌で45年も年続いている雑誌はそうないでしょう。

それで、勉強だけしてればいいっていう民博の話の続きですね。基本はそうだったんですけど、博物館なので、「お前の専門領域のフィールドに展示資料を買い付けに行け」という話があって。私は実はですね、それまでロシア、ソ連以外は行ったことはなかった。でもお前の専門は何かって問われた時に、「スラヴ民族学です」って大風呂敷広げたんですけど、「じゃあポーランド、チェコスロ

ヴァキア、ユーゴスラヴィアと行って展示資料を集めてこい。うちにはまだ東欧の資料は全然ない」と言われた。だけど、まだどの国も社会主義の時代ですから、民俗資料をお金で買って日本に送るってことはほとんど不可能だったんですけど、それこそ他の人はそういう事情をほとんど知らない。1980年と1981年に展示資料収集旅行に行きました。最初に行った時は各都市の民族学博物館のスタッフとこちらの希望の話をするだけでしたが。ポーランドはワルシャワとウッチとクラクフに行きました。分裂前のチェコスロヴァキアはプラハとブラチスラヴァとそれからマルチンってところに。それからユーゴスラヴィアは、内戦前でしたけど、ザグレブ、リュブリャナ、ベオグラード、スコピエを訪れました。それで各地の民族学博物館に行って、こういう資料が欲しいんだけど、集めていただければ買い取りにまた来ますよって言ったんだけど、ユーゴスラヴィア以外ではほとんどどこも断られちゃったわけです。「これは国家的な民族文化遺産なので金で売ることはできない。ただし、お前の博物館の資料と交換するならいいよ」って。これはポーランドでもチェコスロヴァキアでも言われました。だけど、国立機関の会計処理上、交換という費目でモノを動かすっていうことはできないと分かり、結局挫折したんですね。

この頃ブラチスラヴァに長興進君が留学していたので、小物類、民族衣装などを売りたいといった記事が新聞に出たら丹念にチェックしてくれていて、民族衣装はいくつか集めました。結局一番お金を使ったのはオーストリアでした。知り合いのコネがあったので、年末年始の仮装行列の仮面とかを買いました。それで最初の年は博物館に話をするだけだったんで、ほとんどお金は使いませんでした。唯一ユーゴスラヴィアは「集めておくので、1年後にとりに来い」ってザグレブとベオグラードの民族学博物館は約束してくれた。それで翌1981年にザグレブの博物館とベオグラードの博物館に行って展示資料を買い取り、まとめたものをベオグラードから発送することにした。それで運送会社も決めて支払おうと思ったら、革命記念日ってのにぶつかっちゃって1週間くらい運送会社が全部ストップしちゃったんですよ。それで私は支払いをするためにトラベラーズチェック〔旅行者用の小切手。近年の日本では発行されていない〕を現地通貨に大量換金してたんですけども、それが戻らないっていうことが分かってね。その

当時のユーゴスラヴィアってものすごいインフレで、全く信用のない通貨だったもんだから、すずめの涙ぐらいしかドルに戻らないってということが分かって慌てました。しょうがないので着払いにしてもらいましょうっていうことで話をつけたんだけど、余った大量のユーゴスラヴィア・ディナールって通貨を最後はギリシャで使うことにして、ギリシャに持っていったんだけど、ギリシャでは国立銀行しか換金してくれなかった。大変でした。

収穫だったのはこの時にザグレブでミロヴァン・ガヴァッツィっていうスラヴ民俗学者に会ったことです。実はザグレブに私の高校時代の音楽の先生で、大村礼子という方がザグレブのセルビア人と結婚して住んでいた。ご主人のエレヅヴィッチ氏はザグレブ大学の先生で、彼が紹介してくれた。ガヴァッツィ氏は1895年生まれのザグレブ大学教授で、当時もう85歳だった。元気な人でね、まだ自分の研究室を持って「私、ヤコブソンとボガトウイリョーフをよく知ってる、友達だ」って言うんです。ロシア語を喋る人なんですよ。びっくりしたのは、私がバルカン半島の雨乞い儀礼の論文「バルカンの降雨儀礼——ドドラあるいはベペルダ」を書いていたので、ちょうど抜き刷りを持っていったんです。もちろん日本語の抜き刷りなんだけど、差し上げたら「その論文の書評を書いてあげる」って言うんです。「日本語分かるんですか」って言ったら「図表とか引用文献で大体言ってることは分かるんだよ」って、書評というか紹介文を雑誌に書いてくれました。

ブルガリアでの民俗調査（フィールドワーク）

そうこうしているうちに1982年に、たまたまなんですけども、南ブルガリアでフィールドワークをすることができるようになりました。1982年っていうとソ連がまだ揺るぎない体制の時だったんで、ソ連に一番従順な国と言われてたブルガリアで調査ができるとは正直思ってなかった。なにしろソフィアにレーニン廟を真似たディミトロフ廟があった国です。そんな国でうまく調査できることになったんですね。たまたま6月にブルガリアのガブロヴォでフォークロア関係の国際シンポジウムがあるので誰か来てくれないかっていう話があって、それに乗かって、代わりに「実はブルガリアの農村でフィールドワークをしたいん

だ」って言ったら、割とあっさりと許可が出てですね。ノヴァコヴォっていう村に調査地を決めました。これ「新しい村」って意味ですよ、意味としては。それはトルコが支配してた頃にコレラだかペストだか疫病が流行って村全体がほとんど壊滅して、その住民が何家族かどっかに避難して、それが収まった頃に戻って新しく村を建てたのでノヴァコヴォというんだと、そういう話その村に伝わってました。ここに7月から10月まで3ヶ月半住み込んで民俗学調査をしました。その民俗学調査は大変面白かったんですけども、ブルガリア文化省が「やっぱり田舎は言葉が難しいから誰か通訳を連れてった方がいいんじゃないか」って言ってですね。私としては、多分スパイをさせないように見張りを付けたいんじゃないかなと勘繰って。ブルガリア人の日本語の通訳に、民俗学的なタームも訳せる人間がいるとは思えなかったんで、「ブルガリア語からロシア語への通訳をつけてくれ」って言った。それで3ヶ月半は長かったんでバルカン・ツーリストが派遣した4人の通訳が入れ替わり立ち替わり、その村に来たんですが、2番目に来た人がすごいインテリの中年女性で、ロシア語がすごく良くできるだけではなくって、ソルジェニーツインとか原語で読んでるんです。どうやって読んでるんだか分かんないんだけど。その村の図書館司書というのが、誰が昔話をよく知ってるとか誰が歌をたくさん知ってるという情報を持ってたんで、よくそこに行ってたんですけども、図書館だからいろいろ本が当然あるわけで、当時のことですよ、半分ぐらいはたてまえのようにロシア・ソヴィエト文学のブルガリア語訳が並んでいる。村人は誰も読んでる形跡はないんですけどね。それでロシア文学は捨ててもいい、とさえ思って国立民族学博物館に行ったくせに、やはりそういうものに目が行ってしまう。そしたら、ソルジェニーツインの『イワン・デニーソヴィチの一日』のブルガリア語訳っていうのがあって、これはまずいんじゃないのと思って見てみたら、昔の日本の図書館みたいに貸し出しカードみたいなものが裏表紙にくっ付いてるけど誰も読んでなかったんです。それで私の連れのロシア語堪能の通訳が喜んじゃって、ソルジェニーツインがあるじゃないかって。「どうしたらいいか分かる？ この村に迷惑がかかるから、私がかっぱらっていく」って（笑）、カバンに入れて持っていっちゃって。多分司書も知らないんですよ、ソルジェニーツインをね。

坂庭 え、でも配架はされてるんですね？ 流通体制はある程度あったわけですか？

伊東 そうですね。つまり、ご存知だと思いますが、ソルジェニーツインの『イワン・デニーソヴィチの一日』は解禁になった途端に東ヨーロッパで一斉に翻訳が出たんですよ。ソルジェニーツインがボシヤったら全部また回収されたんだけど、ブルガリアでも、ソフィアでは当然回収されてるはずなんだけど、田舎だから残っちゃったんですね。

坂庭 じゃあその聞き取りに行ったのがうまく作用した？

伊東 そうですね。ところでその図書館で見つけたもう1冊の意外な本にブルガリア語訳のパステルナーク詩集がありました。ページをパラパラめくってびっくりしたのは、当時のブルガリアでももちろん『ドクトル・ジバゴ』は禁書だったんですが、この詩集には何気なげに「ジバゴ詩集」の訳が入っていたんですよ。ブルガリア文化の面従腹背のなしたたかさを感じました。

ブルガリアでは面白いこともありました。この時じゃなくて1986年のことでしたがブルガリアのソフィア・ホテルでね、私の「イチロー・イトー *Ичиро Ито*」というサインを「ウルーポ・ウモ」と読まれてしまって、つまり「イチロー・イトー」の筆記体をラテン文字表記で読んだ人がいて「ウルーポ・ウモ」だと思って書いてあった。それで「あなたの予約はない。ウルーポ・ウモって人が来るはずだ」って言われて、「それは私なんだけど」って言って、30分ぐらい押し問答して解決したんですけど。そこの村もね、とにかく田舎だから、電報が来る時に英語の電報がキリル文字で来るんだよ。「the」が「tхе」とか書いてあるわけですね。何とか読めないことはないんですけどね。そういうところだから、これぐらいのことには驚かなかった。

坂庭 早稲田の人ならみんな知っている「ウルーポ事件」ですね（笑）。

伊東 そう、「ウルーポ事件」。

この調査中にブレジネフが亡くなりました。ブルガリアのテレビやラジオは葬送音楽を流しっぱなしで、店からは酒が消える、といった大騒ぎになりましたが、ブルガリア人はみな喜んでいました。BBC放送など聞いてアンドローポフとは何者だ、どっちにしろブレジネフよりはましだろう、とか話してました。し

かしの騒ぎのせいで、私のノヴァコヴォ調査を材料に番組を作ろうという話がどっかに行っちゃってしまい、私はブルガリア・テレビに出そこなうことになりました。この頃から東ヨーロッパにもペレストロイカの風が吹きはじめるということになります。

それでまだ民博にいる 1983 年に、当時ソ連時代のウクライナのキーウ開催の第 9 回国際スラヴィスト会議にはじめて参加しました。発表はしませんでした。これは 5 年ごとにスラヴ諸国の主要都市で開かれている国際会議で、この時は参加者 4000 人、発表 600 人の大大会でした。私はキーウに古本屋で知り合ったユダヤ人の友人がいて、空港まで迎えに来てくれましたが、会って開口一番「バービイ・ヤールは行ったか」と聞かれ、「いやまだだ」と言ったら連れて行かれました。スラヴィスト会議のキーウ案内にはバービイ・ヤールの案内はありませんでした。森安達也先生の希望で、彼 [ユダヤ人の友人] に案内してもらってシナゴークにも行きました。

その後リヴィウ、チェルニウツィ、ウジホロドと、ザグレブ、ソフィア、ノヴァコヴォで資料収集したんです。1983 年の前の 1978 年にはザグレブでスラヴィスト会議がありました。私は行ってないんですけども、この時に木村彰一先生が率いた日本の代表団が行って、これから日本の代表団も参加して発表したいって申請して認められたので、1983 年から日本人が発表することになりました。1983 年の参加者は大勢いましたが、発表者には井桁君とか中村喜和さんとかがいましたね。

ところでこの 1983 年っていうのが大韓航空機撃墜事件の年なのよ。それで、この時は大人数の代表団を作って、旅行社に手配してもらってキーウに着いたら、日本政府がエアロフロートの日本への乗り入れを当分禁止する、中止するっていう指令が来たから、みんな予定のエアロフロートで帰れなくなってしまったわけです。ただ私は西ウクライナからバルカンを回って帰ってくる予定だったので、そのまま旅行を続けた。結局私がソフィアからモスクワ経由で帰る頃には乗り入れ禁止は解除されてたんで、シェレメーチェヴォ空港からガラガラのアエロフロートに乗って帰ってきたんですが、他の先生方は、キーウから国内を国内線と国内列車でハバロフスクまで行って、船で帰ってきたっていうのが 1983 年で

した。

坂庭 ちょうど大韓航空機の事件と時期がピタッと合っちゃったんですね。

伊東 合っちゃったんです。ところで当時のスラヴィスト会議ってスラヴィスト会議であるにもかかわらず、ソ連時代ですからウクライナ人もロシア語で発表しなきゃならなかった。ベラルーシ人もベラルーシ語ではなくロシア語で話さなきゃならなかったんで、私の知り合いのキーウのフォークロリストもみんなロシア語で発表してました。これが独立したら同じ人が急にウクライナ語でしか発表しなくなっちゃったんですね。

坂庭 じゃあ、少なくともソヴィエトの間はもう全体がロシア語だった？

伊東 そうですね。坂庭さんが訳したソルジェニーツインの『廢墟のなかのロシア』でも、学術論文をウクライナ人がウクライナ語で書いても誰も読んでくれないうらうってソルジェニーツインは書いてます。もちろんそんなことはないと思うんだけど、とにかく学術語としてはですね、ソ連での国際会議ではロシア語でしか発表させなかったんですね。

早稲田の露文に戻る

坂庭 民博から早大露文へ移られるのはこの頃ですね？

伊東 翌1984年に早稲田の露文に戻ってきました。木村彰一先生の前倒しの後任ということでした。私は大阪に行く時は、もうこれからスラヴ民族学でいこうと思ってたんですけども、藤沼先生と新谷先生に「早稲田に戻って来ませんか」って言われて。民博には結局4年半しかおらず、心残りもありましたが、早稲田に戻ってきました。私の後任で民博に入ったのは、東大出身の「コンツェルト」OB、シベリア民族学が専門の佐々木史郎君（現国立アイヌ民族博物館）でしたが、スラヴ民族学をやる人は残念ながらいなくなりました。

早稲田の露文に戻りはしましたが、文学を文化全体の大きな広がりの中で考えることができるようになったのは大きな収穫だったと思います。早稲田に戻っても民族学、文化人類学との関わりは続きました。またウクライナ語の勉強会も院生たちと始め、イヴァン・コトリヤレフスキーの『エネイダ』の講読をやりま

した。この作品は最初のウクライナ語によるウクライナ文学というだけでなく、民族学的にも非常に興味深い、しかも抱腹絶倒の作品で、ゴゴリに大きな影響を与えています。

1986年には森安達也先生の編集で『スラヴ民族と東欧ロシア』が出版され、そこにスラヴ人の先史時代の歴史と民衆文化の章のほとんどを、200頁くらい書かせて貰いましたが、これは民博での勉強の総決算になりました。

早稲田には当時の語学教育研究所に田村すず子先生（1934-2015）ってアイヌ語の先生がいらっしゃって、彼女が会長の北方言語文化研究会っていうのがあったんですけども、これに誘われてこちらにも入った。ここで1968年に同じロシア語クラスに入学したスチュアート・ヘンリと再会しました。

一方、1985年にNHKラジオのロシア語講座中級をやってくれっていうので、「ロシア民謡を材料に使ってやってもいいですか」って冗談で言ったらば「いいですよ」って言われた。じゃあロシア民謡をテキストとして取り上げて、朗読の代わりに歌を流しましょうっていうことで、これを3ヶ月やりました。他にこんなことをやった例は、NHKのロシア語講座ではなかったと思います。

民謡論と言えば、この頃『現代ロシア語』誌に「文化の中のロシア民謡」を連載して、これは後に『マーシャは川を渡れない』っていう題名の本になります。

学部では「中世ロシア文学」という講義をずっとやっていましたが、一番好きな作品はやはり『イーゴリ軍記』でした。『イーゴリ軍記』は学部時代に小川利治先生に無理を言ってマンツーマンで講読をしていただいたことがあります。

それで1986年にモスクワでソ連作家同盟の主催で「イーゴリ軍記800年記念国際会議」ってのがあって、これは訳者の木村彰一先生か中村喜和先生がふさわしいはずなのに、なぜかお前が行けっていうことになって、行くことになりました。これについては『窓』58号に報告を書いています。基本的にどいう国でどれくらい翻訳が出てるかというのをお互いに自慢しあうような会議でしたけども、日本の『イーゴリ軍記』の翻訳数は結構多いんですね。それとペレストロイカの始まった頃で、昼間は酒を飲むべからずというお達しが出ていて、この会議ではレセプションでも酒が出ませんでした。文句言ってる参加者はけっこういましたけどね。この会議の直前に木村彰一先生が亡くなり、その報告も会議でし

たんですが、参加者全員が黙禱を捧げてくれたのが印象深かったです。

この会議で『イーゴリ軍記』のスロヴァキア語の訳者でヤーン・コモロフスキーって人に会いました。ロシア語ももちろん堪能な人で、この人はブラチスラヴァのコメンスキー大学に勤めていて、本当は宗教民族学みたいなことをやりたかったらしいんだけど、それが問題で解雇されちゃって。しかし『イーゴリ軍記』のスロヴァキア語の翻訳はコモロフスキーしかしていないのでこの会議に招かれたらしいんですけども、スロヴァキアでは無職だっているんだよね。それで、そのコモロフスキーと知りあって、彼は『イーゴリ軍記』のスロヴァキア語訳者であると同時にスラヴ民族学者でもあるってことが分かって、いろいろ話をしてるうちに、スロヴァキアの東、今のウクライナのザカルパッチャ州の国境の西に実はウクライナ人がたくさんいて、そこでフィールドワークしてる人もいるんだって話を聞いて、行ってみたいくなりました。それで、1986年ブラチスラヴァで夏期スロヴァキア文化言語セミナーというのに参加しました。それでその時にコモロフスキーと再会したんですが、彼はルシストでもあるので「スロヴァキアのブゾヴァヌイという町にプーシキン博物館があるけどお前は知ってるか」という話が出た。「いや知りません」、「じゃあ案内するから行ってみようか」ってなった。これについては『ガリツィアの森』に「スロヴァキアのプーシキン博物館を訪ねて」という報告を書いています。つまり、プーシキンの奥さんナターリヤの姉アレクサンドラが当時のオーストリアの外交官フリーゼンホフに嫁ぎ、住んでたお城が今は博物館になっているという話なんですよ。そこに行くと、ほとんど草ボーボーでしたけども、プーシキンの奥さんもプーシキンの死後そこに子供を連れて実際に行ったんです。それでナターリヤはプーシキンより背が高かったとか話がありましたよね。

坂庭 奥さんがですか？ 奥さんのほうが高いようですね。

伊東 ですよ。それで、そこのお城のプーシキン博物館に行くと、ナターリヤがそこに来た時に、柱に自分の身長のところ傷をつけたのが残っていて、プーシキンよりもナターリヤが7センチ高かったことが裏付けられたそうです。

坂庭 プーシキンが若干低めなんですよ。

伊東 そうですよ。それでこのヤーン・コモロフスキーっていう人が、熱烈な

カトリック教徒だったんで、社会主義時代のスロヴァキアであるにも関わらず大学の授業で宗教民族学を教えてたらしい。そのためにパージされたらしいんですね。それで一度解雇されたが、1968年のプラハの春に、逆に教壇に復帰したんですね。そしたら今度は1975年にまた解雇されてしまう。それ以来、年金生活に入るまでは工場の守衛みたいなことをやらされていたらしいんだけど、結局この「イーゴリ軍記 800 年記念国際会議」を開催することになった1986年に、スロヴァキア語訳を作ったのはコモロフスキーしかないことが分かり、モスクワに招いてもらえたっていう。ちなみにコモロフスキーのお父さんはチェコスロヴァキア軍団の一員として極東から日本の横浜まで来て、「横浜では日本人に非常に親切にもらったって話を父はしていたよ」という話を聞き、父の遺品だという日本の絵葉書も見せてもらいました。

彼は優れたスラヴィストで、コメンスキー大学で1930年代に教えていたボガトウイリョフのことをよく知っていました。しかし彼は国際スラヴィスト会議には一度も出席できなかった。1988年にブルガリアのソフィアで第10回国際スラヴィスト会議がありましたが、それにも出られなかった。ちなみにこの1988年のスラヴィスト会議で私は初めて発表しました。その時は「ゴゴリの『ヴィイ』のスラヴ共通の民俗学的源泉」という発表をしたんですけど、その時の司会がレフ・トルストイの曾孫のニキータ・トルストイだった。またその私の発表を聞いた世界文学研究所のヴィクトル・ガツァーク氏が、私の発表を科学アカデミーの紀要に載せたいと言ってきました。

ところでこの年に東京男声合唱団というアマチュア合唱団がラフマニノフの『晩禱』という曲を教会スラヴ語で日本初演するということがあって、その教会スラヴ語の発音を指導したんです。その頃の早稲田の文学部の心理学で教えてらした富田正利先生がこの東京男声合唱団の創立メンバーだったんで、金本先生を通じて教会スラヴ語を教えてくれる人はいないかと聞かれて私が教えに行ったんですね。『晩禱』を指揮したのは真鍋理一郎というやはりこの合唱団の創立メンバーの方で、この方は作曲家でお父様がニコライ堂の聖歌隊の指揮者だった。ちなみにこの合唱団の前身はニコライ堂の聖歌隊の男声部でした。

ペレストロイカの頃

坂庭 モスクワ大学に派遣交換研究員制度を使って赴任されたのはこの頃ですか？

伊東 1989年にはじめて1年間モスクワ大学に研究員交換協定で留学することになりました。この時に、ベルリンの壁が崩壊したんですね。モスクワ大学では金本先生もお世話になった文学部のフォークロア学科に世話になりました。ここはボガトウィリョーフやクラフツォーフといったスラヴ民俗学の専門家がいたところなんですが、その頃は2人とも既になく、保守的なアニーキンが学科長をつとめていました。その頃1986年のチェルノブイリの原発事故の影響が、この学科のスタッフがフィールドワークを行っていたロシアのブリャンスク地方にも及んでいたことが明らかになり、騒ぎになっていました。私はロシアでもフィールドワークができないかと期待していたのですが、それはまだ無理でした。

1989年は激動の年だったんだよね。この年の年末にベルリンの壁が崩壊して、チャウシェスクが射殺されて、全部ソ連のテレビニュースでそれ放映してたんですけど、ソ連のニュースでこういうの放映していいのかなってロシア人が心配してました。ゴルバチョフは他人事だと思ってるらしいが、って。

坂庭 射殺されているところがニュースで？

伊東 映されました。この時私が住んでたのは、シャボロフスカヤにあったロシア語教師の卵を入れる寮みたいなことだったんですよ、[この後、早大の教員が滞在する] オリンピック村じゃなくてね。その寮にはテレビは、私の部屋にはあったけど、普通の部屋にはなかった。ロビーにしかなかった。それで社会主義圏のロシア語教師の卵みたくのがロビーにつめかけて、毎日ニュースを見てびっくりしてるわけですよ。「自分の国でデモやっているのを初めて見た」とか言って見てるわけです。北朝鮮からの留学生もいたんですが、いつの間にかいなくなりました。

この滞在時に言語学者のヴィノグラードフの未亡人と知り合いになりました。といっても、そのことを知ったのは彼女が92才で亡くなった時だったんですが。というのも彼女はマールィシェワという旧姓を名乗っていたので、それに気づかなかった。彼女は声楽教師で、私は知り合いの声楽家のレッスンの通訳をしてい

たのですが、彼女は「私の夫は文献学者だった」と言うだけで、ヴィノグラードフの話は全くしなかった。ただ彼女が住んでいた建物には「この建物に優れた文献学者ヴィクトル・ヴィノグラードフが住んでいた」というプレートが貼ってあったんですね。ただまさかそれが、私が通っていたマールィシェワさんの住居だったとは気づかなかった。

1989年というとペレストロイカの末期なんですよ。パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』が初めて本屋に出てきたのもこの年で、長く禁書だったソルジェニーツィンの作品とかも出版されて。教会スラヴ語の宗教音楽も解禁になりました。それまでのソ連ではチャイコフスキー全集にさえ『徹夜禱』とか『金口イオアネスの聖体礼儀』とかいった宗教合唱曲は収録されていなかったんです。年明けの1990年には初めて「正教音楽祭」も開催された。そういう変わり目の、面白い1年間だったんですけども。モスクワ大学のフォークロア学科でも、宗教フォークロアの研究と出版が解禁になり、学科でも巡礼霊歌の講義が始まりました。それを始めたのはセリヴァーノフというブイリーナの専門家として知られていた人で、金本先生の友人だった方です。

フォークロアの研究の他に、モスクワ大学で日本語をやっている学生たちが私のところに来て、日本語を教えてくださいと言うので、谷川俊太郎とか沢村貞子の文章を使って講読の授業をしました。何か講義のようなものもしてくれというので、「日本の宗教詩人」というテーマで宮沢賢治、八木重吉、鷺巣繁男を取り上げて話をしました。なにしろその頃までにソ連で紹介されていたのはプロレタリア詩ばかりだったので。

それでこの時にですね、伊東がモスクワにいるならばソ連に演奏旅行に行こうと、稲門グリークラブという早稲田大学グリークラブOBの合唱団が計画を勝手に立てて、ゴールデン・ウィークに来ることになった。合唱団のメンバーだけでなく家族も連れて200人くらいの大旅行団で来ることになり、特別に飛行機をチャーターしてやって来ました。コンサートはモスクワ音楽院大ホールがいいとか、レニングラードはレニングラード・フィルハーモニーホールがいいとか勝手なことを言って、会場を取ってくれとか言ってですね、それが両方取れちゃったの。ゴールデン・ウィークの5月上旬だったんですが。

坂庭 それはどういうルートで取りに行ったんですか？（笑）

伊東 いやよく分かんない、なんか取れちゃったの。だからモスクワ音楽院の大ホールの舞台に、私は合唱団の一員だけ立っただけです。

それでレニングラード・フィルハーモニーホールは何か直前になって、ズービン・メータとイツァーク・パールマンが来るから変えてくれと言われて、グリーンカ合唱団という合唱団の持ちホールに会場が変更になりました。このグリーンカ合唱団はイワン3世の時、15世紀にモスクワに創立された宮廷聖歌隊が起源で500年の歴史があるというのが自慢でした。演奏会では「ともしび」をロシア語でグリーンカ合唱団の女声部と合唱しました。その時に指揮したのが堀俊輔っていう、二文を出てから芸大に入って指揮者になったグリークラブの後輩で、今もプロとして指揮しています。

それで稲門グリークラブというのはおじさんばかりの男性合唱団なんですけど、演奏旅行の楽しみは現地でその女性合唱団と共演して混声でハモる、ということなんです。そこでソ連のアマチュア女声合唱団をさがしてくれと言われてたんですが、ソ連には女声合唱団というものがなく、モスクワでもレニングラードでもプロの混声合唱団の女声部と歌うことになりました。

合唱団が帰った後の5月ですが、キーウであったフォークロア国際シンポジウムに行きました。キーウは独立前夜という雰囲気でも盛り上がっていて、83年のスラヴィスト会議とは大違いでウクライナ人の発表はほとんどウクライナ語で行なわれていました。

7月に帰国しましたが、帰国後、1991年から1992年、FM放送で「音楽図書館」という番組を担当することになりました。毎週木曜日の9時から10時15分まで、「音楽図書館 文学と音楽」というタイトルの番組をずっとやってただけでも、ドイツ、フランスとかやったところで、最後に残った時間を「ロシア文学と音楽」でやってくれと言われてたので、私がやりました。作家、詩人別に文学作品から生まれた音楽を、話を交えながら聞かせるという趣向で、NHKからこの番組の録音をオープンリールで貰ったのを最近CDに落としてもらいました。

坂庭 これ伊東先生、授業でも聞かせてくれませんでしたか？ 何となく聞いた覚えが。

伊東 それは木曜のね、9時から10時15分だからちょうど1限の授業時間なんで、それを使って授業してたの。最初はプーシキンによるオペラ、次はプーシキンによる歌曲とかを取り上げました。

一方、この頃にやっとソ連でもフィールドワークができるようになってきて、1991年の夏休みに西シベリアのケメロヴォで民俗調査をした。塚崎今日子さん（現北海道科学大学）がレニングラードに留学してたのを呼び寄せて、一緒に調査しました。彼女の学生時代ですね。

岡岡 先生、その時は具体的にどういうことをされたんですか？

伊東 これはエレナ・ルトヴィーノワというフォークロリストの知り合いがモスクワ大学できて、彼女の出身がケメロヴォだったんですよ。それでケメロヴォに来ませんかというんで、行ったわけですけどね。そういう田舎でも今はもうビザが出ると。彼女は当時モスクワ大学の院生でいろいろ手配してくれて、それでケメロヴォ州の田舎のいくつかの村に行ったわけです、一緒にね。エレナがケメロヴォ大学で教えてたんでケメロヴォ大学の学生も一緒にしたけども、行ってフォークロアをいろいろ、「ルサルカはいるかどうか」とかそういう話の聞き取り調査をした。カルマック人っていう、これはカルムイク人とは違う民族なんだけれど、このおじさんおばさん夫婦にいろいろ話を聞くと、「ルサルカらしいものを見た」って言うんだよね。「川をずっとさかのぼってたら、水車小屋の近くに裸の女が立っていて、何も喋らないんで怖くなって戻ってきた。あれはルサルカに違いない」とか言って。まあ、その女が自分で「私はルサルカ」と名乗ったわけじゃないけど、そういうのはみんなルサルカになっちゃうわけですよ。私だったら、例えばすぐそばにバーニヤかなんかがあれば、真っ裸の女の人が川に飛び込むために出てきたら鉢合わせしたっていうこともあり得るでしょうし、まあ、秘密のヌーディストクラブとかあるかもしれないし分からないけど、だけどこのインフォーマントの頭の中ではそれはもう一義的にルサルカになっちゃうってことがよく分かったから面白かったんですけどね。

1991年がそれで、次の1993年に行った時はまだ学生の熊野谷葉子さん（現慶應義塾大学）と一緒にだったんです。こういう中から今のロシア・フォークロリストが育っていったってことですよ。

1991年から1992年にかけてはNHKラジオの中級ロシア語でゴーゴリの『ソロチンツィの定期市』を講読して、この作品のテキストに見られるウクライニズムについても解説しながらやりました。

ソ連崩壊後、文化人類学との接点

伊東 それで1991年の12月ですよ、ソ連が崩壊しちゃって、チェコもスロヴァキアも分かれてしまって、ユーゴスラヴィアの内戦になっていくっていう時代になっちゃうわけですけど。だからユーゴスラヴィアのザグレブとベオグラードの民俗資料は民博にも入っているんだけど、現地の民俗資料は内戦の後どうなってるのかなど。ウクライナでも民俗資料が破壊されているんじゃないかと思うんですけど。で、この頃、前出のコモロフスキーに教わって東スロヴァキアのウクライナ人の調査を少ししたんですけど、スヴィドニークっていう町にウクライナ・ルシン文化博物館っていうのがあって、そこの夫婦で民俗学をやってるスタッフと知り合って、いろいろ教わったんですけども。その夫婦の苗字がヴァルホルっていうんだよね。「ヴァルホル」ってポップアートのアンディ・ウォーホルの「ウォーホル」と同じで、ヴァルホル、あるいはヴァルホラっていうのは東スロヴァキアのウクライナ人に特徴的な名字なんです。それで、東スロヴァキアのメヅィラヴォルツェにアンディ・ウォーホル家現代美術館というのがあって、そこへ連れてってもらったことがあるんですけど。ウォーホルはチェコ人だとかスロヴァキア人だとか言われてましたが、東スロヴァキアのウクライナ人の息子というのが正しいということです。

1993年にはブラチスラヴァ、もうチェコとスロヴァキアは分離してはいたけど、スロヴァキアのブラチスラヴァで第11回国際スラヴィスト会議があって、ここに私は参加して「スラヴ人における人狼と狼の牧者の民間信仰」っていう題目の発表をしました。この時の参加者は2000人でした。

それで1995年の年の3月20日に「スラブ歌曲の夕べ」っていうリサイタルをやり、この年に結婚しました。

それで、最初にモスクワに行った時は1人で行ったんですけど、1997年から1998年、2回目にロシアに行った時は妻と2人で行きまして、この時はオリンピッ

ク村に入りました。それで、1月ペテルブルクで友人のゲオルギー・スヴィリードフの葬儀に参列したんです。ゲオルギー・スヴィリードフって有名な作曲家がいるんだけど、その一人息子で父親と同姓同名の日本学者だったんですよ、中世文学が専門だった。最初岡山大学に行った時に腎臓の具合が悪いつことが分かり、透析をしないと駄目だってことになって。それで結局ロシアに戻って透析っていても、当時のロシアの医療状況を考えたら死に行くようなもんだから日本にいろ、とロシア人の誰かが言ってたらしくて、結局関西で非常勤講師をしながら暮らしてたんですね。私とは同い年だったんだけど、それで私がこのモスクワに妻と行ってる時に、年末ですけども、心臓発作で亡くなっちゃったんですよ。大阪の演劇研究の堀江新二さんから国際電話があったんです。それはたまたま、年末年始をペテルブルクで過ごすために母親がペテルブルクに帰ってた時で、母親の留守中に亡くなっちゃった。母親は「遺体を焼かないで。遺体をそのまま持ってきて、ペテルブルクで葬るから」と言っている。それで結局彼が非常勤講師として行ってた大学がいろいろ手配をしてくれて、防腐処置とかもしてくれ、輸送費も出してくれて、その時共通の友人の山之内重美がモスクワにいたんで、モスクワのシェレメーチェヴォ国際空港で、ゲオルギー・スヴィリードフの遺体に来るのを妻と3人で待ってたわけです。偶然なんだけど、その時に父親の作曲家のゲオルギー・スヴィリードフも病院で意識不明、末期状態になる。そしたら、モスクワに息子の遺体が届いた時に、親父さんが亡くなっちゃった。当然お互いそれを知るよしもないんですけど。それでシェレメーチェヴォで待っていたら、当然なんでしょうけど、遺体っていうのはモノとして通関手続きして出てくるんだ、荷物なんだよね。ちょっとびっくりしました。それでペテルブルク行きの飛行機に遺体と乗りかえて、ペテルブルクへ行って、ペテルブルクの葬儀に参列したんだけど、それが結局、年明けの新暦のクリスマスの日だった。そういうことがありました。

それで、モスクワから帰国する 1998 年に今度はポーランドのクラクフで国際スラヴィスト会議があって、この時は「スラヴ・フォークロアにおける時間の人格化」という内容で発表しました。

ここまでは普通だったんだけど、帰国後の 1999 年に妻の母親が脳内出血で倒

れて半身不随になりました。以後18年間、在宅で介護をやりました。だから、外にはほとんど出られなくなってしまったんですが、妻の母親っていうのは看護師で、仕事場で倒れちゃったんだけど、2000年から介護保険制度が始まりますよね、その前に在宅介護のステーション作りっていう仕事をずっとやってて、2000年に合わせるために結構すごく忙しかったらしいんだけど、それで脳内出血で倒れてしまった。左脳に出血が出て、それだから右半身が不随になった。義母は在宅介護のステーション作りをやってたから、それを施設に入れちゃうっていうのはかわいそうだとなって、いろいろ相談して、みんなで在宅でいこうっていうことになったんですね。

神岡 会話は普通にできたのですか？

伊東 会話はまあまあできました。歌も歌ってましたね。

スラヴィスト会議の話に戻りますが、1991年にソ連が崩壊してから、ソ連中心のスラヴィスト会議というものが変質していく。それまでのスラヴィスト会議っていうのはソ連の肝いりで、お金も出すいろいろな面倒を見るっていう体制だったけど、それがなくなっちゃったんで、だんだんしぼんできたんですね。出席者が減って、やりたいって手を挙げるところが少なくなってきて。

坂庭 規模的には何人ぐらいとか、なかなか数字を出すのは難しいかもしれません。

伊東 そうですね、1983年のキーウでは4000人の参加者がありましたが、ソ連崩壊後の1993年のブラチスラヴァでは2000人でした。2003年のスラヴィスト会議はリュブリャナで開かれ、リュブリャナで初めて参加費をユーロで払ってことになったね。

それで、この2003年に早稲田文化人類学会で「ポリフォニー 声の複数性」っていうテーマでシンポジウムをやったんです。文化人類学でポリフォニーっていう概念がこの時代割と問題になってきてて、つまり、ポリフォニー小説のように、記述者と記述対象が対話的に関わるような民族誌を書けるんじゃないかっていう、バフチンのポリフォニー論に乗った論が出てきた。それで、計量的な文化人類学に対して、質的な文化人類学というものを考える時、インフォーマントの声というものが注目された。声っていうのはそれぞれ個性があってバラバラ

だから、それをどういう風に民族誌にまとめていけるだろうかっていう、そういう問題意識が出てきた時に、このテーマでシンポジウムをやってみたわけですね。これは私が主催しました。『文化人類学研究』という学会機関誌に「ポリフォニー・多声性・異種混淆」という論文を書きました。この頃から文化人類学と文学の接点のようなものが私には見えてきたような気がします。

その次のスラヴィスト会議の開催地がマケドニア〔現北マケドニア〕のオフリドですね。この時はもうユーゴスラヴィアは分裂してた。マケドニアっていうと言語学者の中島由美さんが専門なんで、彼女が大活躍、私は彼女の勧めで、2006年にマケドニアで開かれたセミナーに参加して、2008年にオフリドで開かれたスラヴィスト会議に参加することになります。

それからアゼルバイジャンのバクーを2007年に訪問してるんですが、アゼルバイジャンの作家のカマラ・アブドゥラっていうのが、知人を介して「自分の小説を翻訳してくれないか」って言ってきた。『欠落ある写本』という芥川〔龍之介〕の『藪の中』を思わせる歴史心理小説なんです。それで彼の招待でバクーに行ってきたんです。もちろん私はアゼルバイジャン語はできないからロシア語訳からの重訳なんですけども、それを10年ぐらいかけてやったんですけどね〔訳書『欠落ある写本』は水声社より、2017年に刊行〕。

神岡 そのあと、2013年のスラヴィスト会議はミンスクで開催されたのですね。

伊東 そうです。それで2018年がベオグラードだった。そのあと、手を挙げる国がスラヴ諸国にはなかったんです。それで今回がパリになっちゃったんですよ。「スラヴ圏内のどこかの都市で」という原則が初めてそこでなくなって、パリのスラヴ学研究所が創立100年に当たるので、パリでやらせてと立候補して、他のスラヴ各国は手を挙げなかったのがパリになったのです。順番で行けば2023年開催だったけれど、コロナの世界的蔓延という事態もあり、2年延ばして2025年になりました。2024年に開催されないのはオリンピックがあったからだと思います〔第17回国際スラヴィスト会議は、2025年8月25日から30日に、パリで開催された〕。

神岡 戦争の影響とかもあったのですかね。

伊東 あったと思いますよ。私はずっと代表をやっていましたが、今は村田〔真

一] さんが会長なので、彼が幹部会に出ていると思います。

私は2019年に定年退職しましたが、最終講義はポリフォニーとブロークの『十二』について話しました。文化人類学と文学論と音楽論を架橋する話をしようと思ったのですが、欲張りすぎて消化不良になった気味があり、今もその作業の補遺を続けているような状態です。その後、井桁貞義との共編で『ドストエフスキーとの対話』（水声社、2021年）を出しましたが、そこに書いた「『ポリフォニー』小説とは何か——『音楽』形式から『声』の現象へ」のがとりあえず私なりのバフチンのポリフォニー論に対する評価の結論です。またバフチンのドストエフスキー論の改訳の仕事とかも抱えているので、まだまだ隠居生活ともいきそうにありません。

いろんなことをやっているうちに定年が近づきましたが、私がまだまともな本を出していないのをみかねて、早稲田の比較文学研究室が私の本を出してくれることになりました。小林路易先生の創設された早稲田の比較文学基金のご寄付をいただき、論集『ガリツィアの森』を出すことができましたが、この時は早逝された源貴志さん（1962-2023）に大変お世話になりました。

振り返ってみれば、早稲田の露文では好きなことを好きなように勉強させてもらったと思います。私は大阪の畑違いの就職先、国立民族学博物館に飛び出して行き、その時には文学は捨ててもいいとさえ思ったのに、結局私を呼び戻してくださいました先生方の度量の深さには感謝の気持ちしかありません。文化全体のなかで文学を考えることができるようになったのは、この寄り道のおかげでした。

思えば早大露文は一番文士らしい気風を残している場所だったのに、私はそれから最も遠い種類の教員だったような気がします。あちこちに手を出して、ロシア文学プロパーの仕事はあまりしていません。だからこのようなインタビュー企画を私も提案していたのですが、私が提案した時にはもっと大先輩の先生方を想定していたので、この私が日本ロシア文学会からそのインタビューを受ける、というのも面映い気がします。

今、日本のロシア研究はロシアのウクライナ侵攻によって大きく変質したような気がします。ロシアを相対化しつつその本質に迫る視点が今ほど求められている時代はないと思っています。そのために私が紆余曲折を経て辿り着いたスラヴ

比較文化史の視野は大事にしていこうと思っています。

(文責：坂庭淳史)

桑野隆（くわの たかし）

① 1947 年 ②東京外国語大学大学院 ③東京工業大学、東京大学、早稲田大学 ④ロシア言語学、ロシア思想、ロシア文化 ⑤著書に『ソ連言語理論小史』（三一書房、1979）、『エクスプレス ロシア語』（白水社、1986）、『未完のポリフォニー：バフチンとロシア・アヴァンギャルド』（未来社、1990）、『バフチンと全体主義：20 世紀ロシアの文化と権力』（東京大学出版会、2003）。



2024 年 7 月 31 日、武蔵小杉駅近くの川崎市コンベンションホール会議室にて。
インタビュアー：大平陽一、八木君人、神岡理恵子

暑い真夏の日の午後、インタビューは桑野先生がご用意してくださった川崎市コンベンションホール会議室の 1 室で行われました。事前にメールで質問をお送りし、当日は桑野先生が詳細をお話してくださいました。

大学生のころ

大平 桑野先生のお仕事については、第 4 回日本ロシア文学会大賞（2017 年度）を受賞された際の記念講演「20 世紀ロシアの人文知の魅力」においてご自身で語っておられます。ロシア文学会の公式サイトで読むことのできるこの講演は、いかにも桑野先生らしい、あらためてインタビューする必要があるのか疑わしくなるような、行き届いたものです。そこで、今回のインタビューでは、この記念

講演を補足するような質問をすること、ややもするとニッチな質問になることを予めお詫びしておきます。まず学部時代についておうかがいします。

今回、桑野先生にインタビューするに当たって、『ウィキペディア』で先生の経歴を確認したところ、「1970年、東京外国語大学ロシア語科卒業」とありました。つまり、先生は、その学部時代が、70年の日米安保条約自動延長を阻止しようとした羽田闘争（1967年）や、東大医学部の処分問題に端を発する東大闘争（68-69年）の時期と重なるいわゆる「全共闘世代」になるわけですが、当時、大学の授業は普通に行われていたのでしょうか？ われわれの世代でもストなどがあったので、学部の授業をちゃんと受けたのか、という疑問があったのでおうかがいします。それから先生ご自身は普通に授業に出席しておられたのでしょうか？ さらに「学会大賞受賞記念講演」の中で、大学院では「いったん封印することにした」と語っておられる哲学や思想に対する関心は、60年代後半の「政治の季節」と結びついていたのでしょうか？ 当時の経験は、その後の先生の研究生生活に影響を及ぼしたのでしょうか？ 以上学部生活のことについておうかがいします。

桑野 大平さんのメールに、「大学院に入ったばかりの時、一度だけ「ロシア・アヴァンギャルドの会」に連れて行ってもらったことがあるのですが、会場だった早稲田の文学部の部屋に入る前に「こういう会を大学の中でやることについては、議論があったんだけどね」とおっしゃったことをはっきり覚えています」とありましたが、すでにそのころにはロシア・アヴァンギャルド研究会は、発足時の批評性みtainなものが消えかかっていたと思います。それはさておき、ロシア・アヴァンギャルド研究会のメンバーの中には、「場」にこだわる人が何人かいて、例えば東中野の新日本文学会を使ったときですら、こういう場所でやるのはよくないなどという人がいました。要するに、既成の空間で何かをやるのは嫌だという人たちがいました。私もそれに近かったのですが。

全共闘については、当人たちは総じて語りたがりません。私もそうです。しかし私自身としては当時どうであったかについて少し話しますと、全共闘運動がはじまる前からかなり「政治的」でした。いわゆる学生運動にかかわってしまっていて、田舎の幼なじみの3割が中卒で集団就職して、大学にいったのは1割ぐらい

の時代だったこともあり、大学にいった自分には世の中を少しでもよくする義務があると思っていました。責任感というか、皆が働いているのに自分は大学生であるということが負い目になっていました。だからといって、幼なじみたちが学生運動を理解してくれるかという、けっしてそうではなく、勝手なことをしやがってという感じでした。ちょっとナロードニキに似た立場でした。

私が外語に入学した時点では、日米安保、ベトナム戦争、沖縄と、三つの大きな政治的テーマがあって、討論のために授業を使う、つまり先生に頼んで授業を休講にしてもらうことが日常化していました。そんななか、3年生の秋に突然、全共闘運動というカタチが可能となり、それまでこうした活動に無縁と思われていた同級生たちが数多くかかわってきたのには驚きました。ただし、数多くといっても全学生の10パーセントたらずでした。「意識の高い系」がそれだけいれば、バリケードストライキに入るのに十分でした。それに反対するセクトや学生はせいぜい5パーセントどまりで、残りの80パーセント以上はどっちでもいいという感じでした。マスコミは、そのどっちでもいい学生、われわれからすると無責任な学生を「一般学生」と好意的に呼んでいました。

ちなみに、全共闘運動という「大学解体」というスローガンがよく知られていますが、私自身はその気はありませんでした。全共闘運動内部でも考え方はいろいろだったと思います。外大では1968年の9月24日から25日から、翌年の3月15日まで、バリケードストライキをやっていました。バリケード内にいつも全員がこもっているわけではなくて、夜も交替で宿泊し、順番に自宅に帰っていました。ある夜、角材を手をたたかう練習に移った段階で、しかも内ゲバも念頭においての訓練が始まった時点で、「非暴力主義者」の私としては距離をおくようになりました。それでも、機動隊が来る可能性のある日は必ずバリケード内にいました。学生運動の経験はその後にも影響しています。同じ大学の大学院に行ったことがそもそも恥ずかしくて、裏切り者といったような気分でした。

その分、大学院ではひたすら勉強にうちこみました。なにしろ、ゼロからはじめる言語学といったところでしたから。音韻論なども、無意識の世界をいかに記述するかという視点からすると、私にとってはすこぶる斬新でした。その一方、デモや集会にいく以外にいったい何をすればいいのか悩み続け、大学院を出た後

もその状態は続き、精神的には、もやもやとした日々がつづいていました。

その辺の悩みをうまく解決してくれたのが、後でも触れる、当時せりか書房の編集長だった久保覚さんという方です。久保さんはこんな言い方をしました。桑野君は、専門家としての桑野君にしかできないような執筆や翻訳をして、知を実践の場に提供して、それを現場の人間が活用したり批評したりするという往復作業さえしていればいいのではないかと行って、うまくごまかしてくれました。翻訳なども、下手でもいいから何を訳すかが重要だ、有名な翻訳家は大手出版社から言われて売れる本を訳しているだけで問題意識がないなどと言っていました。その頃の私は、ある思想団体の事務所に通って、中南米の左翼の状況を扱っている英字新聞を翻訳したりもしていました。

東大全共闘議長の山本義隆さん（元学生運動家、『磁力と重力の発見』などで知られる科学史家）には、1969年に出た『知性の叛乱』を読んで以来、またその後の生き方もふくめて敬意をいただいていた。ちなみに、連れ合いの山本美智代さんには、白水社のエクスペレス・シリーズの装幀をされていたこともあり、お会いする機会がよくありました。山本義隆さん本人にお会いしたのは、2004年に山本義隆さん、佐々木力さんといっしょに『物理学者ランダウ：スターリン体制への叛逆』をみすず書房より出版したときが最初です。その宣伝文句に、「わが国論壇最硬派の数学史家、大佛次郎賞に輝く孤高の物理学史家、そしてバフチン、トロツキーを軸に権力と文化の關係に挑むロシア研究者、という異色トリオが編んだ稀有の歴史ドキュメントである」とあります。

大学院後の研究生活と、先生たちについて

大平 二つ目の質問としては、大学院を終えた後、東工大に着任するまでの時期、桑野先生はどのような研究生活を送っておられたのですかというものです。

もうひとつお伺いしたいのは、江川卓先生や原卓也先生のことです。両先生をはじめとして、当時の先生方は、研究者というよりはむしろ翻訳者、評論家と見なされていた方が少なくありませんでした。こうした先生方のお仕事をどう評価しているのか、今の若手研究者たちには迷う所があるようです。最近、私はたまたま、江川卓先生について「謎解きシリーズには、かなりいい加減な箇所が散見

されるけれど、翻訳を読むときちんとしている……」という「つぶやき」も読んで、自分自身でも江川先生、原先生に対して、とても慕ってはいるのですが、客観的にどう評価して良いのか、曖昧なところがあることに気づかされました。先生ご自身についての質問でなくて恐縮ですが、ロシア手帖の会でいっしょに活動しておられた原先生や江川先生のお仕事について、今桑野先生はどのように評価しておられますか？ とりわけ江川先生とは、東京工業大学での同僚として身近に接しておられたのでご意見をうかがえたら幸いです。

桑野 原先生、江川先生にたいする評価について答える前に、私自身の流れをお話ししておきますと、私は外大の大学院を修了したあとしばらくは、いわば「二本立て」の人生を過ごすことになったわけですが、この状態が30過ぎまでつぎきました。

ひとつめの柱は、大学院時代に千野榮一先生（東京外国語大学名誉教授、1932-2002）、佐藤純一先生、さらには両先生の恩師である木村彰一先生（東京大学名誉教授、1915-1986）と徳永康元先生（東京外国語大学名誉教授、言語学者、ハンガリー文学者、1912-2003）から学んだ言語学およびロシア語学の道でした。言語学と新たな外国語の習得に専念しました。とりわけ千野先生は、非常勤で学部の授業を担当していただけであったにもかかわらず、大学院に入った私とA先輩を相手にご自宅で読書会をしてくださるなど、格別に鍛えていただきました。言語学をやろうなんて学生は、外語のロシア語学習者にそういるわけではない、というわけで特別に大切にいただきました。

先生は、大平さんもご存知のように、つねにクリティカルで毒舌を吐いていましたが、学部4年のときに私が受けていた授業で、君たちは授業を受けている教師がどのような学問的業績を有しているか知らないだろう、それを知るには学会誌を読むべきであると言われました。そこで早速、私は和久利誓一先生に、日本ロシア文学会の学会誌はどこに行けば読めますかとおたずねしたところ、早稲田大学の露文科に行けば読めるはずということで、早稲田に連絡を取ってくれました。当時のロシア文学会は、発足以来ずっと事務局を早稲田大学が引き受けつづけていました。露文科をたずねたところ、助手（鳥田陽）さんが学会誌の創刊号からすべての号を用意してくれていて、ただで頂戴して帰ってきました。学生な

のに学会誌を読みたいなんて珍しいと言われました。それが学会なるものを知った最初の機会です。

学会誌を開いてみると、外大のロシア語科の先生はだれひとり執筆していませんでした。千野先生はそれを承知の上で、学会誌を読めと言ったのだと思います。修士論文にボードアン・ド・クルトネ (Baudouin de Courtenay, Jan, 構造主義の祖としてソシュールと並び称される言語学者、1843-1929) を選んだのも、千野先生の勧めがあったためです。ロシア語だけでなくポーランド語、チェコ語、ドイツ語その他の文献も用意していただきました。もちろん、その前にきっかけもあり、学部時代に千野先生の授業で、ヴィノグラドフ (Виноградов, Виктор Владимирович, ソ連の言語学者、1894-1969) のボードアン・ド・クルトネ論を読む機会があり、この人物自体は気になっていました。ソシュールの先駆者として再評価されはじめていたということもありますが、民族問題もふくめて人物像には惹かれるものがありました。ちなみに最近、岩波の『思想』(2024年6月号)に、「民族を超越した視点からみた「ウクライナ問題」 ボードアン・ド・クルトネ」を訳して載せていただきました。ただ、学部の時点では、思想関係の大学院に進みたいと考えていたので、言語学者を修論のテーマにするなど思いも寄らせませんでした。

また、大学院1年の夏から『博友社ロシア語辞典』の編纂に参加させていただいたことも大きかったと思います。語義の記述だけでなく、音声面、形態面、文体面などさまざまなレベルにわたって、ロシア語の特徴を再認識していく貴重な機会になりました。さまざまな辞書を基にして作成するのですが、たとえばオージェゴフの辞書をまるまる1冊読む、しかも別の版と比較しながら読むなど、それまで思いつきもしなかったため、とても参考になりました。

語義の記述にさいしても、辞書の使用者が日本語に訳すのを楽にするために、訳語を数多くいれておくというやり方ではなく、単語の概念を1語であらわせるならば1語にとどめ、2種類の訳語を合わせて元の概念に近づくならば2種類の訳語を添えるといった原則を立てており、上品な辞書だったと思います。

最低週1回は佐藤純一先生、森安達也先生といっしょに博友社の一室で仕事をして、そのあと飲み屋へ行くという日々で、勉強にならないわけではありません。

千野先生の場合もそうですが、とても充実した耳学問でした。授業以上に効果的に知識を得ることができたと思います。

以上がアカデミックな世界であるとすれば、2本柱のもうひとつは、先ほど名前の出ました、久保覚さんとの仕事です。ロシア・アヴァンギャルド研究会、民衆文化研究会、その他の活動をいっしょにしてゆくことになります。細かな説明は省きますが、私としてはこの2本目のほうが、いわゆる「運動としての学問」といった感じがして、世の中により役立っているように思えました。結局、自分が雑誌などに発表したもののほとんどが久保さんがらみでした。

ただそこで問題なのは、千野先生、佐藤先生の怖い目でした。言語学をやるというから指導してやったのに、桑野は何をやったんだといわれかねなかったのです。千野先生の場合は、お会いするたびに「桑野君、いまは何をやっているの、何を讀んでるの」と必ず聞かれるので、会うのも緊張しました。たとえば、じつはその頃、生活の糧に、チェコの絵本を2冊訳していたのですが、とても白状することはできませんでした（幸いに、下訳だったので出版時点での訳者名は著名な人でした）。そのほか、ディズニーの交通図鑑というかなり分量のある英語の本も訳しました。これもどうせ下訳かと思って訳していたのですが、桑野隆訳で出版されてしまい、これはまずいと思ったのですが、ディズニーものだったことも幸いして、先生方には知られずに済みました。ともあれ、アカデミックな柱と、プロパガンダという柱の二本立てだったのですが、結局、とても恵まれたことに、いわゆるプロパガンダ関係の著作のほうが業績扱いされ、東工大の教師になれました。学術論文がなくとも専任になれた最後の世代かもしれません。東工大に「公募」のときに、業績リストをつくってみると、シクロフスキーほか『レーニンの言語』とヴォロシノフ・バフチン『マルクス主義と言語哲学』のほかに、『資料・世界プロレタリア文学運動』第4巻におさめられた8万字あたりの翻訳がありましたが、江川先生のほうから、ここまで偏っているのはまずいとアドバイスがあり、最後のは業績リストから外しました。

前置きが長くなってしまいましたが、大平さんの質問である、ロシア手帖の会、および原先生、江川先生のお仕事についてですが、ロシア手帖がらみの活動は私にとっていわば3本目の柱という感じでした。けっこう長く、何十年間と続



桑野先生（左）と江川先生（1980年）

きました。原先生は、私が外語に入学した年に赴任されました。江川先生は、原先生の親友であり、外語に顔を出されることもよくありました。お二人とも、すでにロシア文学の代表的な翻訳者として名が知られていました。いまでも、このお二方の翻訳レベルを超えるのはむずかしいのではないで

しょうか。日本語が見事であるばかりでなく、誤訳もほとんどない、ひじょうにすぐれた訳だと思います。

ロシア手帖の会は、1970年に原卓也を中心に、江川卓、工藤精一郎、木村浩、水野忠夫で結成され、翌年から小冊子『ロシア手帖』を刊行していました。この会は、講演会の類も活発に開いていました。とりわけ原先生は、ロシア文学への関心を高めるために、いろいろな催しを企画していました。五木寛之が「明るく楽しいドストエフスキー」と唱えて話題になったのも、そうした講演会のひとつにおいてでした。また、年2回発行の『ロシア手帖』は、前半はロシア文化関係情報の紹介、後半はエッセイ集になっていましたが、必ず若手の書き手もひとり見つけては執筆場所を提供していました。また、毎号、有名な小説家や詩人をひとり選んで書いてもらうかたちもとっていました。こういうことは、ロシア文学関係者と日本の小説家や詩人を共通の場におくという貴重な機会になっていたと思います。

原先生と日本の作家たちとの付き合いには驚かされることが多々あり、私が大学2年生のとき、何人かで研究室を訪れて、大学祭に安部公房が大江健三郎を呼べないでしょうかとダメ元でお願いしたところ、「いいよ」と言って、その場で電話をかけてくれ、安部公房さんが講演にきてくれることになりました。

ただし、私がロシア手帖の会の正式メンバーになったのは、何年かの休刊後再刊された14号からで、東工大赴任の時期と重なっていました。というのも、それまでは、原先生からすれば、まだ私は「言語学者」ということになっていて、

メンバーに加えるには異質だったからです。実際、1974年に江川先生が「NHK ロシア語・テレビ講座」の講師をつとめられたとき（これはテレビ講座が始まって2年目で、ロシア語はまだ白黒でした）、江川先生からは、テキスト作成を私と共著というかたちにしていただきましたが、要するに文法面の説明は私が書くというかたちでした。これはその後、江川先生がラジオ講座を担当されたときもこのかたちが取られました。ロシア語学者として評価していただいていたわけです。

大平 ラジオ講座で江川先生がやられていた『現代の英雄』の講読は、私は学部時代だったのですが、あれはすごく勉強になりました。あの注釈は、染谷茂先生の『マカールの夢』の対訳本ぐらいしかなかった時代に、ちょっと驚くべきレベルでした。

桑野 すでに深読みが発揮されていますよね。

大平 すごく印象に残っています。

桑野 ちなみに、翻訳だけでも大忙しだった江川先生が、よくぞテレビ講座の講師を引き受けたものだと当時話題になりましたが、実際には、全体で30分の番組のうち、5分だけが江川先生のコーナーで、それも数回分とりだめしていました。通しのリハーサルには、私が定期的に通っていました。他の語学講座と同様、1年間通しの予定の番組だったのですが、おそらくソルジェニーツイン問題が関係して、突然半年の番組に変更になりました。結局その年度は、すでに外語を退任されていた東郷正延先生がピンチヒッターをお引き受けになり、残りの半年をつとめられました。東郷先生も私に気を遣ってくださり、テキストは引き続き共著ということになりました。

また、このとき江川先生をお手伝いしたおかげもあって、日本文学、朝鮮文学、ドイツ文学の方と江川先生、水野先生が行っていた岩波での研究会「ロシア文学と革命」にも参加するようになりました。このときも、もっぱらロシアの言語学について報告するようになったことでした。各国のプロレタリア文学運動に関心をもっていた方々の集まりに、私に加えられたのは不思議でもありましたけれども、ロシア・フォルマリズムやバフチンも含めて考えると、やはり言語学の状況も知りたいとのことでした。

こうして基本的には「言語学」を売りにしていたにもかかわらず、東工大で同僚となってからは、私は江川先生の身近にいたこともあって、ロシア文学そのものにも接近していくようになりました。それと同時に、私のロシア語力が未熟であることも認識することになります。私は修士卒業後、マヤコフスキー学院で文学作品を使った授業はおこなっていましたが、東工大につとめて、江川先生といっしょに読書会をおこなうようになってはじめて（これは水曜の夜に3時間くらいやっていた）、自分が文学作品を読みこめていないことを痛感しました。とてもショックでした。それは、言語学者のいう「ロシア語ができる」というのとはまったくちがっていました。言語学者は言語学者で、実用的なロシア語に長けているひとに対して、それだけでは「ロシア語がわかっている」ことにはならないとみなしていたのですが……。この両面を知ることができる立場にいられるようになったことは、とてもありがたかったです。江川先生のような「深読み」と、言語学的なロシア語理解を重ね合わせることができたならば、と考えるようになりました。

また、これも同僚になって改めて認識したのですが、江川先生はすぐれた研究者でもありました。当時にしてはきわめてめずらしく、ロシア以外の国の文献もよく押さえていましたし、雑誌もふくめ、たいへんな数を私費で購入してもしました。1984年に『ドストエフスキー』（岩波新書）、1986年に『謎とき『罪と罰』』（新潮選書）を出すのですが、これらは江川先生にとっても大きな転換期だったと思います。江川先生が亡くなられたときに書いた追悼文〔「江川卓先生を偲んで」『窓』2001.10〕から、一部を引用いたします。

〔江川先生はつぎのように述べている〕「私の関心はしだいにドストエフスキーの小説テキストへの関心に収斂されていった。……これは、無意味なデテールや無駄な言葉が、ほとんど皆無に近い、驚嘆すべきテキストなのだ。文字どおり一つ一つの言葉、その多義的な言葉と文体の背後に、神話、フォークロア、古今の文学、時事問題にいたる、広大な地平を実感できる。そこに、おのずと多層的、立体的な小説世界ができあがっている。ドストエフスキーのテキストのそのような魅力を、私はこの本でもまず第一に伝えたかった。」

ある時点から先生はこのような路線に「転換」されたようだ。マヤコフスキー学院や東工大での講義ぶりからすると、少なくとも70年代半ばにはすでにこの方向での読みがはじまっていたのかもしれない。謎ときを連載しはじめたころ先生は「これからは文学を楽しみたい」とおっしゃっていたが、落語訳「外套」を発表したのもこのころである（この訳は六代目柳亭燕路〔黒田龍之助さんの父上〕によって本牧亭で披露された）。

……

実際、江川流の読みは、一見我流に見えるにもかかわらず、研究書や辞書を丹念に調べ尽くしたものであった。ロシア語講座のテキスト共同執筆の際などにご自宅の書斎を拝見してわかったのだが、露文関係の研究室や図書館にもないような研究書をいくつも揃えておられた。また、ありとあらゆる辞書を引くことで先生は有名であったが、座り机のまわりは辞書の山で完全に取り囲まれていた。

さて、そのように調べ尽くされた先生なればこそともいえようが、先生はつねづねロシア語文体論への不満を述べておられた。江川流精読に応えるだけの文体論がない、というわけである。たしかにそれはなかったし、おそらくいまもない。また、そのことを嘆く者も江川先生をおいてほかになかなか浮かんでこない。……少なくともそれは「文体論」という名で呼べるようなものではない。

というのも、先生の精読にあつては、一個の作品をさまざまな版や草稿とも重ね合わせながら、一字一句の意味やニュアンスを可能な限りの辞書や文献で確認し、また登場人物の心理等も想像していくのだが、思い起こせば、その解釈の仕方がじつに動的であった。登場人物どうしやあるいは登場人物と作者とがその一瞬にその場づくりあげている関係、そこから生成してくる意味やニュアンスこそが、読みとられていく。結局それは、たとえばドストエフスキーという作家のある程度一貫した文体でもなければ、ましてや彼の時代の文学全体の文体でもない。それは、その場のそうした出来事的関係のなかではじめて生れてくる意味でありニュアンスであって、緊張感に満ちている。つねに先生はそうした意味やニュアンスにとりわけ敏感な読みをされていた。

となれば、統計的な要素の強い静態的な文体論が役に立たないのも無理はない。

以上です。

最初の著書『言語理論小史』（1979）とボードアン・ド・クルトネについて

大平 ここからは先生の最初の単著『言語理論小史』（2020年に『言語学のヴァンギヤルド』という題名で水声社から再版）について、具体的な質問をさせていただきます。桑野先生ご自身が、記念講演で「この本でとりあげた人物や理論のほぼすべてが、結局はこれで一区切りということにはなっておらず、むしろ出発点になっているからです。その後も執筆や翻訳を通じて紹介を継続していくことになりました」と述べられています。まさにその通りなのですから、ただそこに「ほぼすべて」とあるように、「すべて」ではありませんでした。

たとえば、単著や翻訳を出されたバフチン、ボガトウイリョフ（Богатырев, Петр Григорьевич, フォークロア研究者、1893–1971）らに比べると、ボードアン・ド・クルトネやポリヴァノフ（Поливанов, Евгений Дмитриевич, ロシアの言語学者、1891–1938）のような言語学者については、その後あまり論じられることがなかったようにお見受けします。言語学プロパーの研究者であったボードアン・ド・クルトネについて、最近も、先ほどの話にあったように翻訳を出されたということで、そしてまたその理由も少し分かったのですが、しかしそんなボードアン・ド・クルトネを修士論文のテーマに選んだのはどうしてなのかということをお前から思っておりました。

最近、私は日本スラヴ学研究会でスロヴェニア語のレジア方言についての研究発表を聞く機会があって、久しぶりにボードアンの名前を聞き、今さらながらに、ソーシャル研究と比べて、ボードアン研究の少なさ、薄さを痛感したのですが、ボードアンについて研究することは、今でも意味のあることだとお考えですか？ ソシユールに比べ、ボードアン研究が比較にならないぐらい立ち後れている理由は、どこにあるとお考えですか？

桑野 ボードアン・ド・クルトネの全体像には興味をもっていたのですが、修論

のテーマになろうとはとても思っていませんでした。大学院には行ってからは、「言語と思考」とか「言語と社会」なら、まだかろうじて思想史と関連づけられると思っており、その関係の文献を読んでいたのですが、空振りの連続で、それもまた修論のテーマになりそうにありませんでした。

結局、千野先生のご指導にすぎた次第です。ただ、それでも往生際が悪く、序論で「今回はこういう内容だが、最終的には、ロシア・東欧の言語思想の世界を全面的に復元したい」とか長々書いていたら、先生に「こうした能書きは必要ないからはずしなさい」と言われました。そして、客観的に淡々と書きなさい。さらには、論文なのだから「～であろう」などと推測はいっさい述べないように言われました。

結果的には、ボードアンを選んでよかったと思っています。修論を書くための資料は千野先生から頂戴しただけでなく、外大図書館には、八杉貞利先生がペテルブルグ大学でスラヴ諸語比較文法をボードアンのもとで学んだときの文献もありました。ただ八杉先生は外大の先生になったときに、自分の専門の言語学を封印したようです。当時の外国語専門学校には、言語学は必要ないと考えたのだらうと思います。ボードアンをテーマに選んでよかったのは、当時はソシユール熱が高まりはじめていて、その関係でボードアンに注目するひとも少なからずいたことです。その意味ではロシアの専門家以外の方にも多少は役立ったと思います。

ちなみに、『ソ連言語理論小史』ではボードアン・ド・クルトネに1章を割きましたが、ここでは、アカデミックな修論では触れない方がまともりがよからうとの判断で触れずにいた内容も、かなり加えています。紹介したいことを思うがままに書きました。論文ではなくて本なので、「～であろう」という推測を結構入れています。

言語関係で付け加えると、1979年に「ロシア語・日本語・英語対照文法」を『現代ロシア語』に1年間連載しました。またその頃は同時に、白水社から詳しいロシア語文法書を出す企画も進行していました。統語論は単文は木村彰一先生、複文は直野〔敦〕先生、それ以外の箇所は佐藤先生、千野先生、栗原先生、森安先生、米重〔文樹〕先生という錚々たる顔ぶれが分担執筆しており、その末

席に私も加えていただきました。私の担当は形容詞と数詞でした。私を含めて何人かは書き終えていたのですが、結局は船頭多くして舟山にのぼるようなもので、刊行には至りませんでした。非常にもったいないなと思っています。

さて、ボードアン研究の状況ですが、1989年に国際会議があり、その資料集『ヤン・ニュツィスワフ・ボードアン・ド・クルトネと世界の言語学』（ワルシャワ）が出たあたりで、研究としては一区切りができていような気がします。その一方、ボードアンの長所は、レジア方言調査のころから一貫しているマイノリティ擁護のように、「言語学」あるいは「言語学者」に何ができるのかを、実践的、あるいは実存的に見せた点にあると思います。交流もあったトルストイと共通する反戦・非戦の思想も、もっと注目されていいと思っています。私自身はもう、ボードアンの全著作を読み通すという気力はとてありませんが、今日の状況を踏まえ、民族問題や国際語をめぐる見解や、戦争観などを中心にまとめてみたい気はしています。ボードアンの反骨精神には、ダーリの辞書編纂に際してもそうですが、他の追隨を許さないところがあり、魅力的です。

大平 ダーリの辞書に、「こんな単語は許せない」って注がついていますよね。笑ってしまうような注で、すごいなと思います。

ボガトウイリョフについて

大平 ボードアンとは対照的に、桑野先生がその後、著書と翻訳を出されたピョートル・ボガトウイリョフは、その主著がチェコにいた頃にかかれたこともあってか、リハチョフがある論集の序文に書いているように、ロシア本国では「知る人ぞ知る」といったところがあって、もしもロシアのフォークロア研究だけに注目していたなら、日本のロシア研究者の視野には入りにくい人物だったようにも思われるのですが、桑野先生はボガトウイリョフについては、いつ頃から関心を持っておられたのですか？ 私自身、ボガトウイリョフという人が好きなので、ついこんな質問をしてしまうのですが。

桑野 学生時代は、ボガトウイリョフのことはまったく知りませんでした。あるとき、ロシア・アヴァンギャルド研究会の場で、久保さんから、[文学理論に関する季刊誌]『ポエティック *Poétique*』8 (Paris, Éditions du Seuil, 1971) に「演

劇の記号 *Les Signes du théâtre*」が載っていたから、これを訳さないかと言われました。それを大胆にも訳して、雑誌『新劇』1974年9月号、10月号に載せました。1973年初頭に雑誌『芸術倶楽部』にフランス語からの訳を載せたイワノフ（Иванов, Вячеслав Всеволодович, 記号学者、言語学者、1929–2017）の「エイゼンシュテインと構造言語学」（岩本健児さんと共訳）も、久保さんの勧めでした。イワノフについては、ボードアン論を読んでいたのですが、記号論の仕事はまったく知りませんでした。しかし読んだらとても刺激的で、おかげでイワノフさんと文通するようになり、80年代初頭にモスクワでお会いでき、いろんな話もでき、貴重な抜き刷りを大量にいただきました。

ボガトウイリョフに関しては、イワノフ論文のときのおぼつかない経験もあるので、フランス語を訳すのは自分の力からしてちょっと危険だなと思っていたところ、幸いにも外大の冠本文庫に〔プラハ言語学サークルの機関誌〕『スローヴォ・ア・スロヴェスノスト *Slovo a slovesnost*』が何冊もあり、そのなかに運よく掲載号があったのでチェコ語から訳し、少しはましになりました。それでも、就職の際の業績にはあげていません。あくまでも趣味ということで。

もっともボガトウイリョフは、この翻訳を機会にどんどん読んでいき、何度か短い文章を書きました。民衆文化とアヴァンギャルド、それに記号論、構造主義といった組み合わせが、自分の紹介したいものとはほぼぴったり重なっていました。文献も、ボガトウイリョフの著作を集めた『民衆芸術の理論の問題』（モスクワ、1971）を当時モスクワにいた伊東一郎さんが手に入れてきてくれました。おまけにチェコで発表したチェコ語の『チェコ人とスロヴァキア人の民衆演劇』（1940）のコピーまでいただきました。千野先生からはチェコででていた著作集『創造の関連性』（1971）を頂戴しました。そのようななか、東海大学出版会からボガトウイリョフ論で1冊書いてみないかと勧められ、大喜びで一気に書きあげました。1981年のことです。

今回、水声社の仕事でボガトウイリョフについて書くことになったのを機会に、前に書いた本を読み返したところ、勢いに任せて書いたかなりあらっぽいものであって、ディテールを修正すべき点がかなり目につき、おはずかしいかぎりです。ただ、ボガトウイリョフの著作はおもしろいものが多く、1982年には、

千野先生がチェコに1年間滞在している隙をみはからって、翻訳『民衆演劇の機能と構造』（未来社）も出しました。先生が気が付かないでくれたらいいなと思いつながら出しました。

千野先生ご自身は『創造の関連性』も全体を訳すべきとおっしゃっていました。私は自分のチェコ語読解力があまりにも衰退しているので、ぜひ大平さんに翻訳をお願いしたいと思います。

大平 私はボガトウイリヨフの私生活に興味があります、いい人ですから。

桑野 いい人ですね、確かに。

大平 補足の質問ですが、ボガトウイリヨフの著書の翻訳は、もしかしたら中沢新一の『衣装のフォークロア』が最初なのかなと思います、あれも久保さんの企画なのでしょうか。

桑野 あれは違いますね。久保さんは70年代なかばにせりか書房を退社しており、すでに船橋さんが編集長でした。

大平 そうですか、わかりました。どうもありがとうございます。

ロシア・フォルマリズムについて

大平 次はロシア・フォルマリズムについて、これは先生の著書から少し離れておうかがいするのですが、ロシア・フォルマリズムについては、すでに1970年代初頭には、二つの出版社から翻訳が出ており、それらについての紹介記事や、巻末の解説文が、当時学部生だった私などにとってはフォルマリズムの手引きになっていました。しかし、そうした紹介文と比べると、『言語理論小史』の記述は明らかに広く、かつ深いように感じました。私はリアルタイムにはわかりませんが、1970年代初めにどのようにしてフォルマリズムの紹介は始まったのでしょうか？ 日本で紹介が始まった頃のフォルマリズム理解はどのようなものだったのでしょうか？ そこに桑野先生がつけ加えようと意図されたものは、どのようなものだったのでしょうか？

桑野 ロシア・フォルマリズムは、欧米圏では1960年代後半から研究書やアンソロジーが出始めており、とくにフランスでは構造主義の先駆として、再評価がはじまっていました。ただ、わたしが文献に親しむようになったのは、1971年

にせりか書房、現代思潮社、理想社という三社から日本語訳のアンソロジーが出てからです。この年にはシクロフスキーの『散文の理論』も、水野忠夫さんの訳でせりかから出ています。これも当時の編集長は久保さんです。

これを読んで私はとても大きな刺激を受けました。社会との関係を重視してきたこれまでの私の姿勢からすれば、矛盾しているようですが、とにかくとても斬新に思えました。当時のロシア文学者の言い方を使えば、「人生論的読み方」から一挙に解放するものでした。ただ、わたしの場合は、文学研究にたずさわっていたわけではないので、別の位置づけをしていました。それは、有名評論家の書評に代表されるような、日本特有の個人的な印象主義、すなわち客観的な批評基準をもたないために相互批評の場が形成できない文壇などへの、対抗装置として使えるのではないかと評価していました。これは記号論に関しても同様であって、日本特有の無責任な主観的批評の不毛さを、少しでも改める装置になればと思っていました。

それと同時に、日本でのロシア・フォルマリズムの紹介の仕方には、ロシア本国におけるフォルマリズムの誕生や発達に特徴的な文化的背景、とりわけ言語論との関りが欠けているように思えました。もっと言うと、文学研究者と言語学者からなるサークル、その運動性があってはじめて独創的なフォルマリズムなるものが形成されえたことを抜きにして、ただその方法だけが機械的に応用されているように思えました。『言語理論小史』では、そのあたりのことを、少しでも正そう、変えようとしていました。ちなみに『言語理論小史』を書くにあたっては、1974年の夏にレーニン図書館にひと月通って、毎日マイクロフィルムを作ってもらっていました。

大平 先ほども桑野先生がおっしゃっていたように、言語と思想とか、言語と社会といった領域に関心があったと書いておられますので、われわれ素人からすると、「言語と思考」となると、ヴィゴツキーということになってしまうのですが、桑野先生のお仕事を見わたすと、意外なほどヴィゴツキーについて書いておられないため、不満のようなものが私の中にあるのですが、それはどうしてなのでしょう？ ヴィゴツキーに関する心理学者たちの研究は、私たち文学研究、言語研究に関心を持つ者にとっては少しピンと来ないところがあることもあって、

どうしてなのかということをお聞かせいただきたいです。

桑野 大きな理由としては、当時の学問的、あるいは文化的背景とあまり絡めていないということがあるのかもしれませんが。そのため、ロシア文化専門の者が、例えば文化学の視点から根本的に読み直すと、新たなヴィゴツキー像が浮かび上がってくる可能性はあると思っています。言語と思考の関連では、1980年に言語学者の米重文樹さん、教育学者の森岡修一さんとの共訳で、言語学者アレクセイ・アレクセーヴィチ・レオンチェフ編の『現代ソビエト心理言語学：言語活動理論の基礎』上下（明治図書）を出しました。レオンチェフは当時のソ連ではこの分野での代表的な研究者のひとりで、私は大学院時代以来、ほかの著作でも学ぶ点が多々ありました。父アレクセイ・ニコラエヴィチは高名な心理学者で、ヴィゴツキーの弟子でもありました。

ロシア語教科書について

大平 次は話が変わるのですが、教科書のことについておうかがいします。受賞講演に「私には言語学だけに専念するのは無理でした」と書いておられますが、桑野先生の初級教科書や自習書は、実際に授業で使ってみると、文学プロパーの先生方の教科書よりもロシア語学の理論的知識に裏打ちされていることが感じられる一方で、言語学プロパーの先生方は抜け落ちがあることが嫌いらしく、思い切って何かを切り捨てるということが得意ではないらしいのですが、桑野先生は例えば、最初は副動詞や形動詞は触れるだけにして、版を改める際にはそれらまでも切り捨てておられ、初級文法を教えていた人間からすると、画期的な教科書だったわけです。また、さまざまな工夫がなされています。この分野の仕事は、学会内部であまり評価されないためか、やつつけ仕事やロシア語のよくできる先生方にありがちな、自分ではできるから学生もできるだろうという、独りよがりの教科書が少なくないと感じます。桑野先生は明らかにこのような仕事も手を抜かずにやっておられると思いますが、桑野先生はどのような姿勢で教科書作りに臨まれたのですか？

桑野 言語学プロパーの先生は、教科書はあまり書きませんね。妥協ができないのだと思います。私の場合は千野先生、佐藤先生から教えられているところが

きいのですが、基本的な構造のみを提供しておいて、肉付けは教師にやってもらうというように考えています。この点では、言語学を学んだ経験が生きていると言えるかもしれません。それから、なかなか気づいてもらえないのですが、現場でつかう教師が存在理由や独自性を発揮できるようにもしているつもりです。一般に教科書や辞書の作成のやりがいは、どういう項目をいれるかではなく、いかに思い切って捨てるかにあると思っています。時代に合わせて多少の変更はしているものの、教科書も参考書も初版発行から40年を越えており、利用して下さっている皆さんには感謝しています。

大平 確かに、言語学プロパーの先生はあまり教科書を書かないというのは、その通りかもしれませんし、たまに書いていても、困ったなというか、初級レベルの学生を相手に使うのにはちょっと厳しいなというところもあったりするわけです。

私の個人的な感想ですが、私のような劣等生ではあったけれども言語学にも少し興味があったというような人間からすると、千野先生を含めて木村彰一門下の先生方は文献学志向が強く、スラヴ語研究は古代教会スラヴ語の勉強から始まるといった研究態度があって、それについて行けなかった者からすると、桑野先生の言語学はバランスがとれているように見え、当時の私としては、とても助かったというように申し添えておきたいと思います。ここで大平から八木先生に聞き手のバトンを渡します。

ペレストロイカ期の研究やソ連解体の影響について

八木 受賞講演の際、先生は1990年刊行の『未完のポリフォニー』を「私の仕事のいわば前半期の最後の著書」と述べられています。「前半期」とおっしゃるのは、たんにご年齢のこののみならず、90年代に入ればしばらくすると、それまでに関わってきたさまざまな「会」が変わっていったと仰っていることとも関係しているのだらうと思います。一方、このときはちょうどソ連解体の時期にあたりますが、ソ連解体が何か先生の研究に影響を与えたようなことはあったのでしょうか？ ソ連解体時、私自身はすでに物心はついていますが、ただ、実質的にはソ連を知らない世代です。ましてや日本におけるロシア文化研究がそれに

よってどういう影響を受けたかなどまったくわかりません。ペレストロイカ期を含め、そのあたりについて、桑野先生ご自身のことや、ロシア文化研究のことを含めて教えてください。

桑野 『未完のポリフォニー』が「前半期の最後の著書」と述べたのは、年齢にはまったく関係がありません。いくつか理由がありますが、さまざまな研究会との関り方が変わってきたことが一番の理由です。それと同時に、東大に移ってから表象文化論に所属したために、メッセージの発し方に戸惑うようになったこともあげられます。要するに、誰に向けて発信するかに悩みました。

東工大赴任時に江川先生から言われたのは、ここは外に向けて発信していればそれだけでいい場所ですということでした。こんなことを言うと、いまなら学生さんからも文科省からもしかられそうですが、それはともあれ、のびのびと書きました。東大に移るとそうはいかなくなりました。そうした状況下で1996年に刊行した『夢みる権利』（東京大学出版会）は自分なりに工夫して1冊に仕上げた本ですが、それ以前の私を知るひとのなかには「日和りましたね」とずばり言うひともありました。変身ぶりが不満のようでした。

ただ、こうした変化自体はソ連解体とは直接の関係はありません。わたしの場合、ソ連には、大学3年生（1968年）のときのチェコ侵入以来、あまりいい印象はもてませんでした。むしろロシアばかりを研究対象にするのは問題だなど思っていたくらいです。実際、とりあげてきたテーマや対象もソ連では軽視されたり抑圧されてきたものばかりです。たとえば記号論のイワノフさん宛ての手紙なども、チェックされており、場合によっては1年後になってようやく当人に渡されているようなありさまでした。イワノフさんから送られてきた『ソ連記号論概説』も翻訳権がとれませんでした。こういう例は、よく知られているソルジェニーツインだけに限ったことではありませんでした。

また、日ソ親善……とか日ソ友好……といった催しや団体にもかかわりたくありませんでした。そこ経由なら長期の語学研修も可能ではあったのですが、妥協はしたくありませんでした。そのようなソ連観をいただいていた関係で、ソ連解体にはさほど、というかほとんど影響されませんでした。他方、それに先立つペレストロイカには正直いって新鮮な驚きを覚えました。ソ連ももしかすると変わっ

ていくのではと期待しました。ペレストロイカをきっかけに日本におけるロシア研究も、対象がずいぶん広がったのではないのでしょうか。

シリーズの刊行について

八木 その後、桑野先生は、引き続きバフチンやヤコブソン等、さまざまな翻訳・紹介を手掛けられて現在に至っておられますが、そのなかで「叢書・二十世紀ロシア文化史再考」などのシリーズを企画されたりしています。「叢書・二十世紀ロシア文化史再考」シリーズも、刊行がはじまった当時、学部生だった私にとってはずいぶん刺激的なシリーズでした。そうしたお仕事のなかで私がいま伺いたいのは、大平先生も訳者として加わっていらっしゃる、国書刊行会で刊行された『ロシア・アヴァンギャルド』のシリーズについてです。この『ロシア・アヴァンギャルド』のシリーズは、世界的に見てもすごいものだと思いますが、このシリーズがたち上がった契機や、訳出する論文の選択等を含め刊行に至る作業過程の様子などをお聴かせいただければと思います。

桑野 「叢書・二十世紀ロシア文化史再考」なるシリーズを思いついたのは、ペレストロイカの雰囲気の影響していたかもしれません。これを機会に、『ソ連言語理論小史』を書いたときとおなじように、ソ連でつくられているロシア文化史とは異なる文化史を勝手に作りあげて、紹介したいという気になったのだと思います。

『ロシア・アヴァンギャルド』のほうは、これまた久保覚さんが私に提案してくれた企画です。その前に『メイエルホリド』全4巻の翻訳作業が進んでいたのですが、それとは別にロシア・アヴァンギャルド全体を2冊ぐらいで紹介しようという話だったのが、いつのまにか全8巻という企画に広がっていきました。国書刊行会の社長の意向もあったようです。全8巻となると、各巻の編集者たちもますます気合いが入ってきて、可能な限り資料を集め尽くそうと頑張りました。ここまで大部のものは世界を見回しても今もないだろうという自負もあります。

内容的にはロシア・アヴァンギャルド研究会を発展させたもののように見えるかもしれませんが、実際に翻訳を担当してくれたメンバーはこの研究会の元メンバーではありません。むしろ、ロシア・アヴァンギャルド研究会が形骸化してし

まったあとの空白を埋めなくてはといった気持ちでした。フォルマリズムの巻は私と大石雅彦さんと訳者を選び、お願いしました。大平さんには私から依頼しましたが、この巻にかぎらず全体としては、早稲田の助手であった大石さんがかなりの数の院生に依頼してくれた。

当時のフォルマリズムの巻の文献の選択には、ロシア語やチェコ語の原文が入手できない場合は、英語やポーランド語から訳すことにしました。おそらく大平さんにもそのようにしてお願いしたと思います。そのくらい、フォルマリズム関係の文献はまだ原文を手に入れるのがむずかしかったのです。ヤコブソンにしても、*Selected Writings*（私は大学院を出た年にこれを集中して読んだのですが）の詩学の巻がまだ出ていませんでした。

八木 そのときの論文のチョイスは、やはり各巻の編者が中心になっていたのでしょうか？ 全体を統括する人などはいたのでしょうか？

桑野 全体の統括は、私と浦〔雅春〕さんがやっていたのですが、演劇の巻は浦さん、岩田貴さん、武隈喜一さんの3人がやっていました。

八木 当時、いろいろなアンソロジーがドイツ語やフランス語などで出ていたと思いますが、論文の選定にあたってはそういったアンソロジーも参考にされたのでしょうか。

桑野 参考にしたのは欧米圏のものばかりでした。大石さんが驚くような資料を



桑野先生（左）と浦先生（1990年）

持っていました。大石さんに初めて会ったのは、ゴールデン街の飲み屋でした。大石さんはその時、チャーホフ論で佳作か何かをとっていました。それで、おもしろい奴がいるな、一度会いたいな、と思っていたら、飲み屋で会って、実はロシア・アヴァンギャルドというのを企画してるんだけど一緒にやらないかと誘ってみたんです。それだけだったのですが、実

は大石さんはすごい資料を究めつくしている人間だったということが、後でわかりました。

バフチンに関する仕事など

八木 こうしたたくさんの桑野先生のお仕事のなかで、やはりバフチンに関するお仕事が桑野先生の「一般的なイメージ」をかたちづくる大きなものだと思います。受賞講演でおっしゃっているように、桑野先生の紹介には「偏り」はあり、バフチンに関してはとりわけ近年では「対話的能動性」を重視する姿勢があります。この「偏り」を私自身は好ましく思っているのですが、その上で伺いたいのは、バフチン研究者ではなく思想家としての桑野隆が、バフチン思想を批判するような部分はあるかということです。あるいは、メディア環境の変化や現代の日本や世界の状況を踏まえて、バフチン思想をアップデートする必要があるとしたら、それはどのへんのことか、もし何かあるようでしたらお話しいただければと思います。

桑野 バフチン思想は、ずっとソ連にいながらにここまで「普遍的な」展開ができてきているという点では例外的だと思います。しかもさまざまな学問にとって応用可能なものとなっていますが、「イデオロギー学としての記号論」なるものをさらに具体的に展開することは可能であったのだろうかという疑問は抱いています。もちろん、ボガトゥイリョフの衣裳の記号論などはそれを具体的に活かした例のひとつになっていますが、もっと他の社会事象にどこまで適用可能とバフチン自身は考えていたのかということは気になるところです。

「メディア環境の変化や現代の日本や世界の状況を踏まえて、バフチン思想をアップデートする必要があるとしたら、それはどのへんのことか」という質問でしたが、これに答えるのは難しいです。「メディア環境の変化」のなかでバフチンの思想をどのように活かすべきかをテーマとした著作は、国外でも散見されますが、きわめて補助的にしかバフチンを使えないでいます。私もそういったテーマでインタビューを申し込まれましたが、うまく答えられる自信がなく、お断りしました。バフチン思想を今日の日本の状況に合わせてアップデートするのはむずかしいと私自身は思います。ただし、SNS に代表されるようないわゆるコミュ

ニケーションにおいて、実際には何が伝達され、何が伝達されていないのか、またそもそも何が起きているのかを考える際には、まだまだ役立つ思想なのではないかと思います。

それと、バフチンの小説論は好きです。要するに、世界はつねに変わりうるといったような楽観主義、すなわちあきらめない姿勢は、いまこそ重要ではないだろうかと思います。

八木 断ったインタビューというのは、オープンダイアログ関係ですか。

桑野 いえ、違います。広告的な情報で、かつインタラクティブはどこまで可能かみたいな感じだったのですが、そのような世界にそこまで詳しいわけではないので、断りました。

神岡 出版社ですか？

桑野 企業関係で、社内誌ではなくもう少し一般的な感じでしたが、定期的に出ている雑誌ではない感じでした。

八木 私からの最後の質問です。バフチンの小説論の話が出ましたが、桑野先生のお話のなかでも、もしかしたら江川先生の影響があるかもしれないということでした。桑野先生は文学作品もかなりお読みになっているという印象がありますが、実際にやるかどうかは別として、バフチンがドストエフスキーの読解を通してさまざまな創造的な概念を提起したように、桑野先生にも、何か論じたい作家や作品はありますか？

桑野 いるかいけないかという、いません。外語大は、一見外国語学校のように見えて、一方では何を専門にしてもいいところだったので、何をやるかすごく悩みました。最初は、経済学を学ぶべきと考えていましたが、2年生になると西洋哲学史ゼミを選びました。文学を研究テーマにしようと考えたということはありませんでした。文学作品の場合、やっかいなのは、読むことにより受ける印象や感動と、論じる対象となったときの構えが、なかなか一致しないことです。そのときに、どう扱えばいいのだろうと思いました。読んだときの感動をもっとうまく伝えたい、あるいは社会的なものとしても伝えられるなど思うこともないわけではないのですが。その点では、バフチンがみごとにドストエフスキー論を書き上げていることには感心します。バフチンの場合は、対話原理がきわめて有効

に働いていると思います。結局は、作品あるいは作家から何を引き出せるのかにかかっているのだと思います。そういう風に考えるとなかなか書けませんし、それほど読んでいないということもありますね。

大平 日本の小説まで読んでいると、中島由美さん〔スラヴ語研究者、一橋大学名誉教授〕が言っていました。

桑野 そうですね、むしろ日本の小説の方が読んでいるかもしれません。仮に特定の作家について論じるとしたら、やはり今日の日本において紹介する意味や価値がわずかなりともあると思える作家ということになると思います。わずかなりとも斬新な視点、考え方などを今の状況下で読者に提供できることが重要だと思います。ひとりの特定の作家ではなくて、複数の作家を絡み合わせながら、そこに共通する課題やヒントなどがむしろ使えるのかなとも思っているのですが、それもまたそれでたいへんなエネルギーを要しそうと思っています。

八木 「最後の質問」といっておきながら、訊きそびれてしまっていた質問をさせてください。漠然とした問いになってしまいますが、これまでのご自身の研究のなかで、ロシアや欧米の仕事をどのように意識し、また、そのなかでご自身の仕事の位置づけをどのように考えてこられたのでしょうか。と申しますのは、現在、「外国で発表しろ」、「外国語で論文を書け」といった「圧力」が強いように思われ、「業績づくり」という点ではわかりやすいものの、大局的に、自分の研究を位置づけるというのがなかなか難しいところがあるように思うからです。桑野先生はそのあたりはどのように思われていますか。

桑野 直接の答えになるかはわかりませんが、日本の一時期までのロシア研究、特に文学研究では、今では想像できないかもしれませんが、ロシア以外の地域における研究を参考にするということはまずなくて、学会での報告ですらそういう傾向がありました。その意味でも、今日の学会発表と比べて、かなりレベルが低かったと思います。もちろんこの背景には、欧米圏のロシア研究の情報を手に入れるのが困難であったという事情もありますが、だからといって無視したまま研究を進め、さらには学会で発表までするのはいかがなものかなと思っていました。私自身は、自分の仕事が国外の研究の中でどのような位置にあるのかは、問題にしたことはありません。国際学会などの場で発表したのは、モスクワであっ

たバフチン学会で1回と、日本であった国際トロツキー学会の1回だけです。国外における研究を翻訳した方が早くて有益であると思われる場合には、その翻訳出版の方を優先しています。他方、国外の研究を見た場合に、研究レベルの高さというよりも、やはり自分の関心や価値観が合うものがない場合は、逆に自分で執筆するように努力しています。

八木 ありがとうございます。私からは以上です。

ペレストロイカ以降のロシア文化理論について

神岡 今の八木さんの話とも重なる部分があり、やはり世代的にこのあたりの話が気になるのですが、例えばペレストロイカからソ連解体の時期に、新しい論文などがたくさんソ連の雑誌に載って、日本の先生方はおそらく毎月そうした雑誌をエキサイティングに読んでいらっしやっただろうなと思います。先生はアヴァンギャルドの研究もなさっておられますが、例えばボリス・グロイス [哲学者、美術理論家] とかが出てきたときに、まずどこでどう知ったのでしょうか。グロイスの他にも色々な新しい人たちが出てきて、そうした人たちが世界で受容されていく様子をどういうふうにご覧になっていたのでしょうか。具体的になくて申し訳ないのですが、例えばグロイスが述べたような見解は、先生方が1970年代くらいからロシア・アヴァンギャルドのことを研究されていたときに、考えたりしましたか？ そういう考えを日本でも持っていた方がいたのかどうか、お聞きしたいと思います。

桑野 ペレストロイカは先ほども少し触れたように衝撃的であり、はじまって数年間のソ連の文化状況については、『人文会ニュース』という小冊子に長めの文章を書いたことがあります。その後、1993年か95年にロシアに行った際に、ポドロガ (Подорога, Валерий Александрович, 哲学者、1946–2020)、ルイクリン (Рыклин, Михаил Кузьмич, 哲学者・文化理論家)、ヤンポリスキー (Ямпольский, Михаил Бениаминович, 哲学者・文化理論家) たちのいわゆる「余白の哲学」グループの存在に気づきました。

神岡 現地で気づかれたのですか。

桑野 はい、現地です。ただ貝澤哉さんなどはもっと早くから知っていたようで

す。かれらが突然のごとく思うがままに表現するようになったのは、やはりペレストロイカのおかげだったと思います。かれらは年齢からすると、もっと何十年も前から表現していても不思議はないのですが、していませんでしたから。いわゆるソ連時代の異論派というような、そういう存在ではありませんでした。

『現代思想』1997年4月号の特集「ロシアはどこへ行く」では「余白の哲学」を含む、思想界の新たな動きを代表する人物たちをできるだけ取り入れるようにしました。その年、和田春樹さん、沼野充義さんとロシアに行ったさいに、ルイクリンや「余白の哲学」編集人のアレクサンドル・イワノフに会って、インタビューの形式で色々話すことができました。ポドロガとは結局、電話で話しただけでした。文学中心主義批判を柱とするかれらの方針はとても斬新に思えました。ただ、その後、欧米でかれらがどのように受け入れられたかという点、文学中心主義批判などはロシアでこそ意味があるのであって、欧米ではその側面はとりたてて評価されなかったような気がします。

グロイスに関しては、『シンタクシス Синтаксис』[国外で出版されていたロシア語誌]にときたま寄稿はしていたのですが、グロイスも実はペレストロイカが始まるまではほとんど書いていませんでした。ロシア・アヴァンギャルドとスターリン主義の連続性を唱える新しいアプローチをしていることはすでに知っていましたが、特にロシア・アヴァンギャルドの事実関係や資料の扱いがあらうばすぎて、この点ではついていけないという感じでした。でも、その後のグロイスの活躍はそういう面に限っておらず、全体的に見ても独特な切り口をしており、その点では依然として注目に値する存在と思っています。

神岡 例えばアヴァンギャルドと社会主義リアリズムの共通性や連続性というようなことを考えていた人は、1970年代～1980年代の日本人研究者の中でいたのでしょうか。

桑野 ほとんどいなかったと思います。ただ、ドイツ研究者のなかには、ドイツではアヴァンギャルドと全体主義がかなり複雑に絡み合っていることを指摘する人もいました。グロイスの本も単行本は最初ドイツで出て、それから英語で出たんですね。世代的にはさっきも言った貝澤さんたちは、そういう視点もあるということを知っていたのだと思います。

神岡 グロイスがアヴァンギャルドについて書くのは、ペレストロイカの頃でしょうか。ソ連の非公式芸術家たちが『アー・ヤー А-Я』というタミズダート [国外出版] 雑誌を出していましたが、その創刊号巻頭にグロイスがモスクワ・コンセプチュアリズムについて初めて書いたのが確か 1979 年でした。奥付に日本の取次店が記載された号もあって、同時代的に日本でも持っていた方がいたのだと後で知りました（私は水野忠夫先生がお辞めになるときに、何冊かいただきました）。アヴァンギャルドの文脈では、そうした視点はなかったのですね。

桑野 一部持っているんですけども、確かに自分はそんな風には読んでいなかったという記憶があります。

神岡 貝澤先生たちの世代というのは、ソ連非公式芸術の方にも関心が最初からあったのでしょうかね。

桑野 非公式芸術というのはちらほら耳には入るようになりましたが、それについて書く人はあまりいませんでした。私もふくめて古い世代は、やはり関心の持ちようが異なるのだと思います。

神岡 ありがとうございます。

(文責：神岡理恵子、大平陽一)

安岡治子（やすおか はるこ）

① 1956年 ②上智大学、東京外国語大学大学院、東京大学大学院 ③東京外国語大学、東京大学 ④ロシア文学、ロシア宗教思想 ⑤訳書に、ラスプーチン『マチョーラとの別れ』（群像社、1984）、ドストエフスキー『地下室の手記』（光文社、2007）。論文に「ゾシマ長老と東方キリスト教」『エイコーン』33号（2006）、「ロシアの『反米』——独自の道を求めて」『反米——共生の代償か、闘争の胎動か』（東京大学出版会、2021）。



2024年10月14日、東京・田園調布の喫茶室「レピドール」にて

インタビュアー：畔柳千明、大平陽一、神岡理恵子

祝日の午後、田園調布駅から歩いてすぐの静かな住宅街。残暑のなか、ケーキ店の二階にある広い喫茶室は、冷房がよくきいている。窓際の明るい席でお話をうかがった。

ロシアとの出会い——父、小説家・安岡章太郎のソ連旅行（1963）とその影響

畔柳 まず、ロシアとの出会いからお聞かせください。

安岡 私は聖心〔女子学院〕っていうミッションスクールに小学校から高校まで行って、英語はBritish, Irish, Australianのsisters（その頃はmothersって言ったんですけど）に教わって、小さい頃から耳で聞いて憶えた、っていう感じでした。それで英語は比較できたんです。私が高校のとき、父〔安岡章太郎（小

説家、1920–2013)] がトロント大学の visiting professor で日本文学の講義に行ったので、3ヶ月だったら元の学年に戻ってこられると聞いて、トロントの普通の downtown のハイスクールに通いました。私はカナダは非常に気に入って、帰ってきたくないと思ったんだけど、このまま居続けると必ず lost nationality になっちゃうから、もう1回来たいと思うんだったら大学に入ってからいくらでも来られるから、と言われて、泣く泣く日本に帰ってきたんです。でも、それまでずっと聖心の中にしかいなかったのだから、こんな狭い世界で生きていくのは嫌だと思って、必ず外へだけは出ようと決心したんですね。

数学ができなかったから国立大学は受けなかったんですけども。『英語はもうできるし』と不遜にも思って、『ドイツ語フランス語も後からきっとできるに違いない』とそれも不遜にも思って。できなさそうな、なるべく難しそうな言語がいいと思ったのが、ロシア語を選んだ、ある意味で一つの理由なんです。うちの父が原 [卓也] 先生 (東京外国語大学名誉教授、1930–2004) をよく存じ上げてたので、原先生に伺ったら、ロシアをやるんだったら、染谷 [茂] (上智大学名誉教授、1913–2002) っていうすごいのがいるから必ず上智に行けて仰って、そのお勧めもあって上智を受けたんです。

父は1960年、まだ公民権運動が始まる前、テネシー州のナッシュビルっていう、ものすごく人種偏見の強いところに半年間行っていたんですね。母は一緒に行って、私は4歳で祖父母のところに置いていかれて。うちより先に阿川 [弘之] さんの家も [同じプログラムでアメリカに] 行って、[子供の] 佐和子ちゃん、尚之さんも広島に預けられて、庄野 [潤三] さんのうちも子供三人置いていかれてね。アメリカは夫婦単位で行動するから必ず夫婦で来なければいけない。しかしスカラシップが非常に安いから、子供は連れてこないこと、っていうルールがあって、歴代そうだったんですね。そのとき、父はアメリカ体験がすごく面白かったんですね。差別があったからなおさらね。だけど母はそれ以来、アメリカおよび白人も全部嫌いになって。それ以来一度も日本の граница の外に出たことはない (笑)。

父はアメリカを見て、そのちょっと後、1963年、ソ連作家同盟に招待されて、ソ連に行ってるんです。当時、堀田善衛さんがソ連作家同盟との関わりも深くて

らして、誰を派遣するかは堀田さんの意見があったみたいです。堀田さんは慶応大学卒で父の『三田文学』の先輩なんです。堀田さんが選んだ3人のメンバーがうちの父、小林秀雄先生、佐々木基一先生だったんですね。

小林先生はイデオロギー的には非常にアンチ左派という方です。だけど、「自分はたいそうドストエフスキーには世話になったから、ぜひドストエフスキーの墓参りもしたいし、それからネヴァ川っていうものを見てみたい」って仰って。

佐々木基一先生はどちらかというと左派の先生だったんですね。ただ佐々木先生とうちの父はご縁があって、うちの父が大学受験を3浪していた頃に、東京でどっかの下宿にいたのかな。そのときお向かいのお宅に永井さんっていう美男子の東大の院生が、お母さんと一緒に暮らしていて、それが佐々木基一先生だったんですって〔ご本名は永井善次郎〕。うちの父の小説で『質屋の女房』（1960）っていう短編があるんですけど、モデルは佐々木基一先生なんだ、っていうのを、父が書いています。そのとき、佐々木先生の方もうちの父の事を認識はしてらしたみたい。佐々木先生は後に『私のチェーホフ』（1990）を書かれて、チェーホフがとても好きだったの。だから、ヤルタはとにかく行きたいっていう希望を出したりなさって。小林先生は、「佐々木くんが一緒だから、コルホーズとかに連れてかれたりすると敵わないなと思ってたけども、そういうのを出さないでくれてよかったよ」って言ってらしたそうです。彼らの旅行は——私も横浜に見送りに行ったんだけど——「オルジョニキーゼ」っていう船で横浜からナホトカまで行って、ナホトカで鉄道でハバロフスクまで行って、ハバロフスクから飛行機に乗ってモスクワへ、そういうルートだったんですね。ちょうど小林先生が60歳ぐらいで、佐々木先生が50歳ぐらい、父は40歳ちょっと過ぎてるぐらいで、水戸黄門一行みたいな、すごくいい感じの旅行だったんですって。3人は毎日毎日、朝昼晩と食事と一緒にして、夜はお酒を飲んで毎晩毎晩いろんな話もしてたから、父は小林先生の影響をすごく受けたみたいね。

小林先生って戦中から、「人間にとって進歩なんてものはないんだよ、進歩じゃなくて変化があるだけなんだよ」なんて言うような方でしょう。父がまだ慶応の学生だったときに、大学に（ほとんど行かなかったんだけど）たまたま行くと、小林先生の講演会があったりしてね。（父はいいところに出くわしてるんで

すよ。井筒 [俊彦] 先生の「余計者」の講義とか出たりした、って言ってました [著作に『ロシア的人間』(1953)がある]。小さな 10 人ぐらいの会だったらしいんだけど、小林先生が来てくださって、お話を伺ったんですって。その「進歩には意味がない」っていう話を、小林先生がしてらしたら、台湾からの留学生が話し始めたんだって。「台湾のある民族では、月夜の晩に村の乙女を生贄にして捧げるといって、残酷で野蛮な風習がありますけど、そういうものはなくした方がいいんじゃないですか」って聞いたらしいのね。そしたら小林先生は、「ものすごく美しい、いい習慣じゃないか、なくすってことはないだろう」って言って、その進歩の話をまたなされた。父はそれをすごくよく覚えてたって。

父たちのソ連旅行はモスクワ、レニングラード、キエフ、ヤルタと周って、ひと月ぐらいの旅行だった。ヤルタのチェーホフの家に行ったときに、チェーホフはバラが好きだったみたいで、バラが庭にあって。バラは 6 月 7 月が一番いい時期ですからね。私宛の手紙に「今日はチェーホフの家に行った」って、バラの花びらが封筒の中に入ったの。そういうこともあって、世の中にはソ連という国があり、ロシア人という人たちがいて、チェーホフという作家もいるんだ、っていうのを、私は小学 2 年生のときに、へえ、と思って認識した。そのときすぐにロシア文学をやるって思ったり全然しないのよ。だけど間接的に、なるほどね、っていう感じはあった。宇宙開発の一番うまくいった頃だし、何しろ 63 年ってフルシチョフの時代で、ソ連が一番希望に満ちてた時代ですよ。にもかかわらずやっぱり建付けとかすごく悪くて、モスクワにやっと着いたら、入る予定だったホテルがいっぱい、出来たてのモーテルみたいなところに入れられたんだって。そしたら出来たてなのに部屋のドアがうまく閉まらない。それで、小林先生がこの国は「発展途上の国なんだな」って仰ったらしい。ロケット飛ばしたりはできるけど、一般的なところですごくいろいろ不都合なことがある。そういう話は父に折々に聞いて、ふーん、そういう国なのか、と思ったのは覚えてますね。ソ連の話、ロシアの話っていうのは父にしてもらって、何となく影響を受けてた感じはします。

私は読書は偏ってたけど少しはして、小学校 5、6 年の頃からチェーホフ全集は読んでましたね。チェーホフ全集は黒と赤の装丁で、中央公論で出てましたよ

ね。母が好きで買ったのね。30巻ぐらいありますよね。ドストエフスキーの、例えば『罪と罰』なんか読んだのは中学生になってからだけども。

あの頃私はお芝居を見てたんだな（「新劇」って言うと浦〔雅春〕さん（東京大学教授、1948-2023）に、安岡さん言葉が古いな、とか言われて。今新劇って言わないの？って言いましたが）。私が小学校1、2年のとき、文学座の集団脱退事件っていうのがあって。芥川比呂志、岸田今日子とか、メインどころの若い人たちが抜け出して、劇団「雲」を作ったんですよね。「雲」のお芝居は最初に見に行ったのは小学2年ぐらいだったけど、その後ずっと見てたわけではなくて、5、6年ぐらいの頃から行くようになった。シェークスピアばかりでなく創作劇も、例えば大岡昇平の『遙かなる団地』（1967年上演）、安部公房の『榎本武揚』（1967年上演）、遠藤〔周作〕さんの『黄金の国』（1966年上演）って『沈黙』（1966）を舞台にしたのとかね。うちの父も1本だけ〔「雲」で作品を発表した〕。『プリストヴィルの午後』（1969年上演）っていう、ナッシュビルのことを踏まえて、2人の登場人物が差別について語る、差別の話がいつの間にかアメリカの差別じゃなくて日本の差別に最後にどんでん返しみたいになってく、っていう1幕劇。そういうのを毎月見てたもんだから、時々チェーホフもやるんですよ。いろいろそういう影響が少しずつあって。

畔柳 お父様との会話からの影響は大きかったですか。

安岡 自分としては全然、父に影響を受けたっていう気持ちがないのよね。今から11年前、父は92歳で、我が家で看取って亡くなったんだけど、その後は「影響を受けたかもしれないと」ちょっとは思ったけど、それまで全然そういう意識がなかったわね。父は学校嫌いな人だったから、「お前はよく学校へいつまでも行くな」とか言ってて。威張ったりする人じゃなかったけど。でも、一緒の家にならなくてずっと住んでたから、影響を受けたんでしょうね。

大平 我々の世代に——私は地方だってこともあるけど——それだけ新劇の舞台に毎月行くっていうことは考えられない。学校で団体鑑賞会が年に1回、でしたね。

安岡 [今、「新劇」という言葉が使われなくなっていることに関連して] ロシア語を教えるとき поезд っていう単語を、私、「汽車」って訳したいわけよ。「汽

車」ってみんな知らないのよね。しょうがないから「列車」って言って。でも列車っていうかな？ электричка は近距離でしょ？ 遠い列車っていうのは、やっぱり「汽車」って言いたいんだけどね。もう最後の頃なんか一生懸命言い訳で、「私の時代も別に汽車は走ってなかったのよ、蒸気機関車じゃなかったのよ、だけど、遠い列車のことは「汽車」っていう習慣が残ってたのよ」って言うと、21世紀の子たちはみんなポカンとした顔していましたね。

大平 今は電化されてるけど、私は汽車って言いますね。

安岡 私、大っ嫌いな言葉は目線っていう言葉です。父がやっぱり嫌がってたんだな。有形無形に影響を受けてるかもしれないわね。言葉は特に。

畔柳 お父様が亡くなった直後に先生が、作品を初めてちゃんと読んで、すごいじゃないって思った、と仰っていたのを覚えています。

安岡 『海辺の光景』(1959) は父の母が、つまり祖母が亡くなってくのを9日間ずっと看取ったっていう話なんだけれども、うちの父が今晚死ぬだろう、と言われたときに、人が死んでくときってどうなるんだろうってわかんなくて『海辺の光景』読もうって。父の死の床のそばで読んで、そうか、こういうふうにあふっと息を引き取るんだなと思って、その後父が亡くなったの。でもあのときだから読んだけど、ちょっとつらくて読めない作品ですよ。いい作品だし、すごい作品だと思うけど。

でも、あんまり読んでないですよ。だからいい読者では全然ないですね。ただアイオワ大学の Kendall Heitzman が本を向こうで出して [Enduring Postwar: Yasuoka Shōtarō and Literary Memory in Japan (Nashville: Vanderbilt University Press, 2019)]。Kendall に何か質問されたりすると、「それは多分違うと思うけど」っていうようなことを勝手に言ったりはしますけどね。でも、小説家の作品は出版されちゃったら、あとは読者のものだから、作者の意図はその通りに読まれなくても仕方がないことなんでしょ、だから……とは思うけど。

一番嫌なのは、私小説って言われるもので、ものすごく設定が似てる父自身みたいな人が出てきて、その人が言ったことが全部父が言ったことだと思って読む人がよくいて、それはやっぱり作者と登場人物は全然違うんだから、いくらシチュエーションが似てても違うんだ、とはよく言います。

聖心女子学院の思い出 ― カトリックとのかかわりと信仰について

畔柳 次に聖心女子学院での思い出と、カトリックとのかかわりについて伺います。

安岡 日本の聖心会は、今から 100 年以上前にオーストラリア管区から来たんです。さっき言ったように英国系の sisters が非常に多かったですね。

エドワード・サイードの『遠い場所の記憶』(自伝)で、カイロの英国人学校の話があって、1 年上級生にオマー・シャリフ (Sharif, Omar, 俳優、1932-2015) がいたんだって。シャリフは優等生で、先生たちにもかわいがられてて。その学校はイギリス人が、カイロのエジプト人たちを教育して、第二のイギリス人を作り上げようっていう、そういう学校だったわけね。イギリス式の英語の発音をして、イギリス風の振る舞いをして、って教えて。それをしっかりやってたのがシャリフだったんだって。ずっと後になって、サイードが『アラビアのロレンス』を観て、アラビア人の格好して出てきたからすごく驚いたって。この学校の描写を読むと、聖心の sisters が悪意はないんだけど、ものすごく心を込めて私達を第二のイギリス人にしようとしてたのが、とってもよくわかるのね。

私は中学 2、3 年の頃にはもうかなり英語はよくできるようになった。スピーチコンテストに出されて、そのとき mother Maher が、“Do you always speak in English with your parents at home?” って聞いたのよ。それで “No, mother. Never. We speak only in Japanese” って言ったらすごくびっくりしてたわね。褒め言葉として言ってくれたらしいんだけど、いや違う、日本ではちゃんと日本語で話してるんだ、って訂正して言ったのを覚える。そういう感じの学校でしたね。

特に [聖心女子学院での学校生活] 前半はそういう感じだったんだけど、第 2 バチカン公会議は、ちょうど私が小学校 2、3 年ぐらいから始まったのかな。何年間かやってたんですよね。あれでもう、中世からのカトリックの伝統が変わって。sister と mother に分かれてたのが全部 sister になったし、それからハビットっていう中世以来の服装もだんだん簡素化されて、今は普通の格好になっちゃったでしょ。カトリックも変動期で、後半はだいぶ変わってきた。

キリスト教教育は第 2 バチカン公会議後もずっと教えてはいた。福音書はもちろん、旧約聖書は全部は読まないんだけど聖書物語としてどういうことがあっ

たっという事は小さい頃から知っていました。それはいろんな意味でその後のロシア文学をやっていく上での役に立ってるとは思います。

カトリックの信者になったのは遅いんですね。31 ぐらいのときに私は甲状腺のがんの手術をしたんです。その前に父が 6 ヶ月入院してたんですね。その間に私も手術することになって、ただし、そのとき私はがんだって全然知らされてなかった。

ところが、後で聞いてみたら両親は聞かされてたらしいのね。3 月に手術したんだけど、4 月から東工大で、初めて非常勤をやることに決まって。桑野 [隆] 先生が声をかけてくださってね。ところが4月の段階ではまだ、それこそジェシー高見山みたいなかすれ声しか出なくて、困ったなと思いました。でも6月頃になったら、本当にある日突然声が出るようになったのよ。それ以来ずっと、私は半年に1回病院に通って。25年ぐらい経って、「もうちょっと簡単にしていただけませんか」ってナースさんに聞いたのよ。先生のところに行ったら、厚いカルテをひっくり返して、「しかしあなたは悪性腫瘍でしたからね」って言うのよ。妙なことをこの人は言うなと思って (笑)。うちへ帰ってから両親に違うでしょって言ったら、母は昔のことだから忘れちゃったって言うし、父も全然知らん顔して。その5年ぐらい後かな、父が亡くなったあとに母に聞いたらば、実は自分たちは知ってた。だけど父は、「あいつはものすごく弱虫だから、がんだって絶対言うな」って言ったんですって。そんなに思ってくれてたのかと思いました。

私の手術が終わった後、父も退院して、ある日突然父が3人で受洗しようって言い出したんです。私としては、もう幼稚園からカトリックだし、大学もたまたま上智だし、ずっとカトリックの学校に行っていて今更受けるのもなんかなあと思って。そんなに積極的な気持ちでもなかったんだけど、父もああ言ってるしと思って、一家3人で、井上洋治神父 (カトリック司祭、1928-2014) っていう、遠藤 [周作] さんのお友達だけれども、非常に特殊なカトリックだと思いますけど [井上神父と小説家遠藤周作は同時期にフランスに留学し、日本の文化に根ざしたキリスト教をともに追求した。井上神父についてはインタビュー後半も参照]、その神父で受洗したんですね。キリスト教には多かれ少なかれ、小さい頃から影響は受けてるし、お祈りはするんだけど、どうも何か信仰心は薄いよう

な気がしますね。

上智大学入学——染谷茂先生からロシア語、ロシア文学を学ぶ

畔柳 上智大学では染谷茂先生に師事されました。大学時代、また染谷先生の思い出をお聞かせください。

安岡 染谷先生は最初から、私がロシア語をやりたくて来たのをよくご存知で。お目にかかってみたら素敵で大好きになって。ロシア語も比較的一生懸命やったもんだから、先生が教壇から降りて、私の机の目の前の椅子に座って、私に授業するみたいな感じだったの（笑）。でも、他の学生たちも特に嫌がったり嫉妬したりとか全然しないで、これが普通か、みたいな感じになってて。

アンドレイ・プラトーフの『雀の旅 Любовь к родине, или путешествие воробья』を染谷先生が授業なさったんですね。モスクワの働き者の雀が、冬に北風に吹かれて、南方まで運ばれていってしまう。向こうでものすごく美味しいトロピカルフルーツを食べて、満腹になるんだけど、なんか胸焼けがしちゃって、モスクワの黒パンが懐かしいと思う。結局今度は南風が吹いて、モスクワに戻ってこれたけど、そのまんま死んでしまった、っていう話なんだけどね。染谷先生が、「いや本当に黒パンっていうのは素朴だけど、うまいもんなんだよな」って仰ったのを覚えてる。染谷先生が講読に使ってくださると、雀も、雀を大事にするおじいさんも実に生き生きしてましたね。

これは亡命ロシア人の話なのよね。亡命先でどんなに豊かな生活をして、何とも言えない、酸っぱい黒パンが懐かしくなるっていう、多分そういう話。染谷先生は哈爾浜学院で教えてらしたから亡命ロシア人をたくさん知っていらして、そういう思いもあって作品を選んで教えてくださったと思う。

2年か3年になったとき、辞書は引いていいんだけど、初見でこれを訳しなさいっていうことがありました。『子鴨 Утенок』だったかな。子鴨がどんなに生まれたばかりで弱々しくても、やっぱり命を持ってるもので、「二、二が四」[になるということ、理性]¹で人工的に作られたものではないってことが書かれてい

¹ ドストエフスキー『地下室の手記』に見られる表現。

る、ソルジェニーツインのエッセイ。染谷先生は、私達が入る直前ぐらいに『イワン・デニーソヴィチの一日 Один день Ивана Денисовича』を岩波文庫で訳してらした。私は 1974 年に入学でしたから、ちょうどソルジェニーツインがソ連を追放された年なのよね。ソルジェニーツインって当時はものすごい人気があって。染谷先生はラーゲリ生活 11 年だから、『イワン・デニーソヴィチ』が出てきたときに読んで、自分たちの毎日毎日を、やっと思って書いてくれた人がいた、11 年間過ごした意味があったって思ったと言ってらした。

でも、染谷先生はラーゲリの話はそんなにはなさらなかった。寒いから、お風呂から自分たちの房舎に帰るまでの間に手ぬぐいがカチンカチンになっちゃうんだ、っていう話をなさったのは覚えてるけど。私達より上級生の授業では、ラーゲリのお話をしようと思うと、先生、気持ち悪くなって帰っちゃったりしたこともあったって。染谷先生が 1956 年に日本に帰ってきたわけでしょ。私は、その 56 年生まれですからね。だいぶ年月がたって、ラーゲリ経験も少し生々しくなくなったせいか、時々話もなさってました。でもその話ばかりしてっていうことは全然なかった。

さっき小林秀雄の話が出たけど、もっとずっと後になってから、染谷先生も小林先生をお好きだっていうから、新潮社の小林先生のテープを先生に差し上げて。染谷先生は一生独身でいらして、妹さんと一緒に暮らしてたけど、ある時、先生がお部屋でそれを聞いてたら、妹さんが部屋の外から、「あれ、今兄さん話してましたか」、って言ったっていうのね。小林秀雄って喋り方が志ん生の落語とそっくりなのよね。染谷先生も八丁堀の江戸っ子でほんとうによく似た話し方でした。

染谷先生の外語のときの先生が松田〔衛〕先生（東京外国語学校教授、1882-1956）とおっしゃって、二葉亭四迷（1864-1909）に直接習った人なんだって。松田先生は染谷先生のことをかわいがってくださって、お嫁さんの世話もしてくれそうになったんだって。お見合いしたら相手は申し分のない人だったんだけど、お父さんは新聞記者か何かインテリで。そしたら染谷先生は「もう全然、家柄とか格が違いすぎて駄目ですよ、なにしろうちの両親は「文盲」ですからね」って。文盲ってことはないと思うのよ。染谷先生ってそういう語り口なの。「鶏屋の染

谷さんの倅の茂さんは“ロシアの英語”をやってるそうだって、みんな言ってたんだ」とかね。外国語＝英語だったのよね（笑）。話がいつもおもしろかったですよ。

染谷先生は亡命者やソ連で発表されないものをたくさん読んでいらして、ナデージダ・マンデリシタームの追想記、YMCAで最初に出たんだけど、染谷先生は、「これはもうインテリのいいロシア語だよな」って言ってらした。1冊目が「Воспоминания」、2冊目が「Вторая книга」っていう、何ともそっけないタイトルなんだけど。染谷先生はこの人のロシア語がどういうロシア語かっていうのがよくわかる方だから。

ラーゲリで最後の何年間かは比較的本も読んだりできたんですって。ラーゲリの中の図書室の本だけど。それでもそういうところで読むとね、凡百の社会主義リアリズムの作家たちに比べて、ゴーリキーにしてもショーロホフにしても、輝いてるんだって。思わず時を忘れて読み耽ったっていうことを言ってらっしゃったわね。

大平 染谷先生の文法「小話（こばなし）」[『染谷茂ロシア語文法小話』（1979）]って言ったら、「こばなし」じゃなくて「しょうわ」って読むんだってすごい怒られたもんな。私らの世代で語学をやろうとしたら、先生の対訳本を読んで。染谷先生のを読んで好きになったんでしょね、[対訳本]『マカールの夢』（1963）とか。

安岡 染谷先生はすごくおかしくて、「俺のところは文学少年や文学少女は絶対寄り付かんぞ」って誇らしげに言ってました。

東京外国語大学での修士時代①——ロシアの「религиозность」との出会い

畔柳 上智大学を卒業された後は東京外国語大学の修士課程に進学されて、いかがでしたか。

安岡 [東京] 外語に行ってから初めて、周りがほとんど男の人だったから、普通に男の人と話ができるようになったの。谷垣恵子さんっていう女性が1人だけいて、私より1つ学年が下で、プラトーフをやってた人なんだけど、ものすごく優秀で、苦学生。「«сиротство»から«родство»へ」[『ロシア語ロシア文学研究』

16 号 (1984)] が、ロシア文学会誌に出した論文のタイトルよね。孤児сиротаであることから血の繋がりのある関係 родство へ、って、ある意味でプラトーフの全作品のエッセンスなのよね。当時 YMCA なんかでいろんなものが出てはいたけれども、作品ももちろん全てじゃないし、ゲレルの本はあの頃もうあったけれども²。さらに前の江川 [卓] 先生 (東京工業大学名誉教授、1927-2001) の時代は本当に何もなかった。よくあれだけ書かれたなと思う。

畔柳 プラトーフについては、上智時代にも『雀の旅』を読まれたというお話がありました。

安岡 1990 年、外語の教師になってから、プラトーフ『疑惑を抱いたマカール Усомнившийся Макар』を訳しました。原 [卓也] 先生が、集英社の世界文学全集の中のプラトーフのところをやってらっしゃったんだけど、学長になってお忙しくなって、お前やってみるかと言ってくださって、全集の「解説」を私に回してくださったのね。プラトーフは『チェヴェングール Чевенгур』も『土台穴 Котлован』も何も訳されてない時代で、でも解説を書かなくちゃいけないから、一生懸命読みました。[プラトーフとロシア・コスミズムの思想家] ニコライ・フョードロフとの関係も、ゲレルの本にも出てますが、一生懸命勉強して、解説を書いたわけ。そのおかげでプラトーフ、フョードロフをその後やることになった。

大平さんも多分その授業を受けてるんじゃないかと思うけど、ニコライ・ロスキー『ロシア民族の性格 Характер русского народа』を、原先生が毎年やってたんじゃないかと思う。

大平 学部時代の [ロシア文学] 概論の授業で、学生ではなく先生が授業で訳してました。

安岡 私は、大学院のときこれをみんなで読むっていう授業。第 2 章は、神の領域のことについてロシア人は知る能力が高いってということが書いてある。第 6 章は、ドストエフスキーの『百姓マレイ Мужик Марей』を取り上げて、ナロードにどれだけ優しい感覚があるかを説明しています。

² Геллер М. Андрей Платонов в поисках счастья. Paris: YMCA-PRESS, 1982.

ロシアの宗教性 религиозность については、学部の時代は、少なくとも直接は何も聞いてないのね。染谷先生はそういう意識はあったと思うけどお話としてはあんまり聞いてないのね。この『ロシア民族の性格』は外語の大学院に入ってから学んだわけなんだけど、後の私がいかに好きそうなテーマがいっぱいある本じゃない？

ラッキーにも32歳のとき、専任講師で外語に採っていただいた。それが7月だったのよね。授業は9月からだから夏休みがあって、2ヶ月準備ができた。授業はどうしましょうって原先生に言ったら、どうせ僕は[学長で]授業しないから、これ[『ロシア民族の性格』] やったらいんじゃないかって言ってくださって。もしかしたら、自分が教えることになって、初めて真剣に読んだのかもしれない。この著作に出会わせていただいたのは原先生のおかげで、そういう影響はすごくありますね。

修論はミハイル・ゾーシチェンコの сказ についてです。сказ はゴゴリ『外套 Шинель』とかレスコフとか、著者とは異なる語り手 рассказчик が出てきて、その人の語りのもので語っていく形式。それこそ染谷先生の『文法小話』の中にも出てきて、これでやれないかなと思った、ということもありました。

みんなで「1920年代の会」をやったのよ。西中村[浩]さんはザミャーチン、沼野[充義]さんはオレーシャ、あと早稲田の松原[明]さん、彼もザミャーチン。あと谷垣[恵子]さん。当時、なんか20年代が非常にいいんじゃないかって、みんなそれをやってたんですね。ゾーシチェンコについては、原先生たちがやってた雑誌『ロシア手帖』にいくつか論文を発表したけど、ちゃんとした研究を修論以外にまとまって出せなかった。ゾーシチェンコはうつ病持ちなのよね。自伝小説『日の出前 Перед восходом солнца』は自分のうつ病の原因を探るために書いた、それまでのお笑いのсказとはまた違う、すごくいい作品で、将来的に訳したい感じはいまだにある。

外語のときはポーランド語を1年、あと「古代……ロシア語」？

大平 古代ロシア語だと思いますよ。佐々木[秀夫]さんでしょ[著書に『ロシア古文典』(1982)]。

安岡 そうそう！あの先生の授業だけ私、「B」つけられた(笑)。

大平 ひでえな（笑）、愛知大学にいて、原求作さんは愛弟子で。何言ってるかよくわかんないんですよね。そんなこと言ったら、なんか、いろんな先生が何言ってるかよくわからなかった（笑）。言葉は聞き取れない先生がいっぱいたんだよ。
安岡 likable って感じじゃなかったわよね。こっちがちゃんとやらないからってのもあるんだけど。ポーランド語も książka とか Jestem Japonką とか、ちょっとだけやったけど、木村彰一先生（東京大学名誉教授、1915-1986）の作られた白水社の教科書で、11章からはふりがなが振ってないのよね。途端に読めなくなってるね（笑）。

大平 どなたに習ったんですか。

安岡 石井哲士朗先生（東京外国語大学名誉教授、1948-2022）。真面目に教えてくださったわよ。

大平 私も石井先生です。

最初の翻訳『生きよ、そして記憶せよ』（1980）と作者ワレンチン・ラスプーチンとの交流

畔柳 翻訳のお仕事は修士課程在学中から始められたのですか。

安岡 大学院〔修士課程〕は3年行ったんですよね。2年目に飯田規和先生（東京外国語大学教授・新潟女子短期大学学長、1928-2004）がラスプーチンの『生きよ、そして記憶せよ Живи и помни』を授業でやってらした。ラスプーチンはまだ現役バリバリの、出てきたばかりの作家で、国家賞も貰って、久々にソ連から出てきた本格派のロシア文学の伝統を持っている作家っていう感じで注目されて、原先生のところに翻訳の話が来たらしいのね。それで原先生がお前やってみないかって言ってくださって。私が先に全部訳して、先生が手を加えてくださるっていう形で共訳して。早いわよね、24歳のときに訳が出ました。

ラスプーチンは方言もあるんだけど、それだけじゃなくて、простой народ のロシア語が難しいんですよね。もう1ページに何ヶ所も分かんないところがあって、それを私は全部染谷先生のところに持って行って。今だったら事前にメールで送ると思うんだけど、いきなり持ってっても初見で先生はすぐわかってちゃうのね。原先生も、こいつの後ろには染谷がいるから大丈夫ってお思いに

なったんだと思うのよ。それでまあね。

第1章なんかものすごい硬い訳だったから、露文和訳じゃなくて、翻訳ってのは別なんだっていうことを一生懸命、原先生が言ってくださって、第2章から私もちょっと心を入れ替えて思い切って訳すっていうことをしました。

畔柳 その1980年にソ連に行かれますが、そのときが初めてでしたか。

安岡 78年に観光で行ってますが、80年の8月ぐらいまでに翻訳が終わって、講談社から11月末ぐらいに出ることになって。それで[ソ連]作家同盟が呼んでくれて。これ[写真1]はイルクーツクのラスプーチンの家なのよ。先にラスプーチンがモスクワに出てきて、作家同盟の建物で会って、いくつか分からないとこ聞いたりしてね。いろんな話聞いて、そのとき、

「あなたは洗礼を受けてるんですか」って聞いたの。彼はНетってすぐ答えたのね。だけど実は1980年に、洗礼を受けてたんですって。私はまさにドンピシャで聞いたんだけど、初めて会ったよくわかんない日本人に本当のこと言う必要はないと思って、そう言ったのね。これはラスプーチンの奥さん、これはグルリョフ Гурлев さんっていう人で、写真に半分しか写ってないけど。[ラスプーチン令嬢]マリヤはこのときまだ10歳ぐらいで、音楽学校の生徒。奥さんは数学の教師だって言ってたけど。これ[写真2]はずっと後になって、1989年。



写真1 ラสปーチン一家と (1980)



写真2 ラสปーチン一家と (1989)



写真3 ラスプーチンと

イルクーツクの家は何度も訪ねましたね。

これ〔写真3〕は日本に来たときに、空港で、サインをしてくれてるところなんだと思う。

76年に『マチョーラとの別れ Прощание с Матерой』を発表した後だったけども、新進気鋭の作家っていう感じだった。

でも暴漢に襲われて頭を殴られて、頭の手術したり、何か最初から苦勞の多い感じでした。マリヤはオルガン奏者になったけれども、ラスプーチンがモスクワに移ることになったからモスクワの консерватория に移って。元々おとなしい感じの子ではあったんだけど、途中からちょっと暗い感じの子になったのよね。かわいそうに、35歳ぐらいのときイルクーツクの空港で、飛行機事故で亡くなった。

畔柳 作家同盟の招待状はどうやって来るものなんですか。

安岡 もちろん原先生のご紹介だけど、そのときソ連と日本の文化交流会みたいなのがあって、その組織を通して来たんだと思います。たった1人で招いてもらって、9月にひと月間、イルクーツク、モスクワ、レニングラード、キエフ全部行って。作家同盟には Елена Редина っていう、モスクワ大学の ИСАА (Институт стран Азии и Африки) を出た日本語がよくできる人がいて、彼女が日本係で。ラスプーチンには一旦モスクワで会ったあとイルクーツクも訪ねて、バイカルにも行って。10月ぐらいになってたから、もう真冬のね。

1人なんだけど、一応代表団 делегация なの。どっかの музей に行くと「Где делегация?» «Я!» とか言って。こんなちっぽけなのが1人で делегация かっていう顔をされたけど (笑)。

その後、研究生を1年やってから東大の博士課程に。東大では川端香男里先生 (東京大学名誉教授、1933–2021) に教えていただいたんだけど、川端先生はそれまでの先生とはまたちょっと違って、比較 [文学] から入られた方だから、所謂

ロシア文学をやるにしても、フランス文学、ドイツ文学、西洋古典をちゃんとやらなきゃいけないんだ、ってことを教えてくださったけど、私はなかなかそっちまで手が回りかね、っていう感じでしたね。

その間にラスプーチンをもう二つ訳したんじゃないかな。『アンナ婆さんの末期 Последний срок』と『マリヤのための金 Деньги для Марии』[単行本『マリヤのための金』(1984)]。その頃まではラスプーチンをやってたんですね。だけど、ラスプーチンはソ連が崩壊するまでは作家だったけども、作品をあんまり発表しなくなっちゃったのよね。その後東大の教師になってから『マチョーラとの別れ』も訳したりはしたけど(1994年)、なんかこう、これだけやっても行き止まりかなっていう感じではあったのね。

1990年、さっき言ったようにプラトーフの解説を書かなくちゃいけない関係上、フョードロフもちょっと触れたわけよね。それで亀山[郁夫]さんがスヴェトラナ・セミョーノヴァ『フョードロフ伝』の共訳の話を持ってきてくれたんですね。セミョーノワも独特ではあるかもしれないけど非常に説得力のある解釈で、フョードロフをうまくさばいて押し切っていて。フョードロフは何を目指してた人なのかは、セミョーノワを通してだけど、だんだんわかるようになった。そこで「アポカタスターシス[万物回復、普遍救済]」も出てきたし、そういうことにだんだん関心が移っていったんですね。

92年に東大に移ってからは、卒論指導とかをする関係上、学生さんのやるテーマに沿って、私も少し勉強しなきゃいけないっていう感じになって。五島[和哉、ごしまかずや]くんが、ドストエフスキーで修士論文を書いて。ドストエフスキーはそこで出てきたんですね。

東京外国語大学での修士時代②——ヴェネディクト・エロフェーエフ『酔どれ列車、モスクワ発ペトゥシキ行』翻訳(1996)のきっかけ、仲間たち

畔柳 東大に移られた後の96年には、エロフェーエフ『酔どれ列車、モスクワ発ペトゥシキ行 Москва-Петушки』(1973年国外出版、ソ連国内では1988年に活字化)の翻訳を發表されています。この作品との出会いについてお聞かせください。

安岡 染谷先生がずっと早稲田で非常勤をしてらして。染谷先生は早稲田で『イワン・デニーソヴィチの一日』もやってらしたし、それからこの『モスクワ＝ペトウシキ』をなさってたんですね。前半3分の1ぐらいまでいったかな。みんなに読ませては訳させて、それは全然違うよって、直して下さったんだけど。染谷先生は裏に宗教的な背景があるとかっていう話は全然なさらないのよ。ただ話し言葉として面白い、とかそういう視点での解説なんだけど、それだけでも十分に面白かったのね。これは訳したらいい作品だなと、思ったのね。その授業には伊東一郎さん、浦〔雅春〕さんなんかも出てたんじゃないかな。

早稲田の非常勤って江川〔卓〕先生もしてらしたんだけど、もう素晴らしい授業だったのね。江川先生は早稲田の授業でバーベリの『騎兵隊 Конармия』をやるために、1時間半の授業で1パラグラフしか進まないのよ。もちろん私たちに訳させるんだけど、その後、一つ一つの言葉についての解説がものすごく深いわけね。言葉の背景とか。ちょっとああいう授業は他になかったかもしれないくらいね。

とにかくその後、この作品〔『モスクワ＝ペトウシキ』〕は是非訳したいと思って、どっかから頼まれたわけじゃなくて自発的に訳して、完成させて、持ち込んだのね。

最初は沼野さん経由で岩波に持ち込んだらば、ずっと店晒しで、国書刊行会の島田〔和俊〕さんに持ち込み直したら、すぐ出しましょうって言ってくれて。いかに持ち込みの翻訳が難しいか、そのとき、こんなにいい作品なのにね、分かったけど。でも、あとにも先にも、私が、頼まれたのではなくて自分で訳して持ち込んだのはこの作品だけです。

エロフェーエフに関しては、後に北大から出されたヴラーソフの注釈³、ガイセル＝シュニットマン⁴などの研究を読んで、「タリタ・クミ」(= Встань и

³ Власов Э. Бессмертная поэма Венедикта Ерофеева «Москва Петушки»: спутник писателя. Slavic Research Center, Hokkaido University, 1998 (「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯 No. 57).

⁴ Svetlana Gaiser-Shnitman. *Venedikt Erofeev: "Moskva-Petushki" ili "The Rest is Silence"*. New York: Peter Lang, 1989.

иди) や、瘋癲行者 юродивый など、宗教的側面がある作品なんだなって思いました。

本の著作権を得るために連絡を取ったのよね。彼はもう死んだ後で [1990 年没]、未亡人に、その当時だから手紙を書いて。ところが未亡人じゃなくて、たしかオランダに著作権を握ってる人がいて、取るのがすごく大変だった気がする。何とか取って。その未亡人は自殺したのよ。

神岡 1993 年でした。いまだに著作権や一次資料の在処がわからないものが多いです。本来であれば文学アーカイブとかに入っているべきなんですけど、創作ノートがオークションに出されたりして……。遺族には権利がないと聞いたことがあります。

畔柳 染谷先生が『モスクワ＝ペトゥシキ』を授業されていたのはいつ頃ですか。

安岡 私が外語に就職したのが 88 年だからそれよりちょっと前ぐらいかな。

大平 早稲田の大学院の非常勤で講読の授業があって、染谷先生の授業だって言うと、いろんなところから潜りが行ったわけです。

安岡 江川先生の授業は、外語の大学院生だったときに原先生がいいよ、江川に言っとくからって言うてくださって、行きました。

大平 [聴講者の中には] 谷垣 [恵子] さんもいましたよ。

安岡 谷垣さんがなにかで骨折したわよね。入院したんでみんなでお見舞いに行ったような気がするけど。

大平 私は 1 人で見舞いに行きましたけど、見舞いに行ったっていう口実で、病院のテレビにお金入れて、ラグビーずっと観ててすごい怒られました。ちょっと、うちにテレビがないもんで……って (笑)。

安岡 そうだったのか (笑)。いや、外語ね、本当に学生の交流がすごく良かったですよ。東大行ったらやっぱりちょっとよそいきっていう感じになって、だから私、外語の同級生とか近辺の上とか下とか、一番楽しかったような気がするな。ポルトガル語の林田 [雅至] くんの引っ越しをみんなで手伝いに行ったりとか。隣がスペイン語・ポルトガル語だったから仲良かったのね。山本 [富啓] さん、亡くなっちゃったけど、千野 [栄一] 先生 (東京外国語大学名誉教授・和光

大学学長、1933–2002)のお弟子さんだったのよね。

大平 東京教育大学の言語学科の最後ぐらいの人なんですよ。教育大がなくなるので、大学院で外語に来て、ドクターで早稲田に。山本さんは教育大のときから千野栄一先生について、千野先生にくっついて行く形で外語に来て。私はロシア語の先生から見捨てられて、千野先生のところにいて。山本さんとはブルース・ブラザーズ、名コンビだった(笑)。

安岡 山本さんてすごい楽しい人で、お風呂屋さんで眼鏡を外すと耳も聞こえなくなる、眼鏡をかけると耳も聞こえるようになるとか言ってね。Глаголицаをやってたんですよ。

大平 私の手元に残ってる「フラブルとグラゴール文字のグループ分け」[『ロシア語ロシア文学研究』12号(1980)]っていう、レベルの高い立派な論文ですけど、そうとは思えない人でした。

安岡 そうなのよ。普段は面白い人なのよ(笑)。

大平 和光大学に行くのに遠いから、大平君、土曜日授業が1限目なんで金曜日泊めてくれて、週1回、私の四畳半の下宿に泊まりに来て。浦さんも電車がなくなった、八王子に帰れないとか言って泊めてくれて言うし。知り合ってたちょっとぐらいで、浦さんの引っ越しが人手が足りないとかいうんで、桑野[隆]さんが電話してきたんですよ。行ったら、桑野さん、長與[進]さん、岩田[貴]先生、俺と山本さんなんだけど、俺と山本さん以外戦力にならないんですよ。岩田先生はひどいよ、引越しの現場に普通に書類鞆を持ってくるんだよ(笑)。あとでみんな偉くなったみたいですけど。

安岡 浦さん、去年亡くなっちゃったわね。浦さんは前から、江川先生も原先生も74歳で亡くなったから、74歳っていう年はすごく何か気になるっていうことをずっと言ってたらしいのね。実際に74歳で亡くなっちゃったのよね。

大平 偲ぶ会に行ったら、みんな浦さんは毒を吐くとかそういう話をしていたんです。だけど、俺と梅津[紀雄]さんだけは、駄目な学生には優しくかったですよ、あんな優しい人はいませんでしたって(笑)。

東大総合文化研究科での教員時代——「地域文化研究」への思い、19世紀文学研究・翻訳へ

畔柳 安岡先生と浦先生は、東大総合文化研究科（駒場キャンパス）での同僚でいらっしかったです。次に、教員生活の思い出について伺いたいと思います。

例えば、駒場でスラヴ、キリスト教研究というと、森安達也先生（東京大学教授、1941-1994）のお名前も思い浮かびますが、同僚だったのは数年程度でしたか。

安岡 そうね。森安先生に東方キリスト教について直接お話を伺ったことは全然ないのよね。ただ、ソロヴィヨフ研究の谷寿美先生を紹介して下さったりはした。

森安先生の最後のご著書は、がんで亡くなる寸前に書かれたけども、戦闘的無神論のご本だった。だからご自分はいくことなさりながら、無神論者だったのね。ちょっとそれは私とは違う感じだった。森安先生も暁星だから、カトリックの学校ではあったはずだけどね。

東大〔総合文化研究科〕行ってから組織変えがあって、最初は1年だけ比較〔文学比較文化〕、それから表象〔文化論〕に行かされそうになって、それだけはやめて下さいって言ってね。それで、地域文化研究専攻に入れていただいて、私としてはすごくそれはよかった。Area studies は地域研究なんだけど、東大のは地域《文化》研究専攻だから、文化について何でもやっていいと勝手に解釈したわけね。だけどそれにはロシアのことをもうちょっと知らなきゃいけないと思って。19世紀のロシア文学をお前たちちゃんとやらないと駄目だろう、っていうのはよく原先生に言われてたのよ。19世紀だったらチェーホフでもいいかな、と思ったんだけど、ドストエフスキーかトルストイかって言ったら絶対ドストエフスキーの方だと思って、それでドストエフスキーに行ったんですよね。

隣人の概念の中に人間以外の被造物は含まれない、っていうのが西欧のトマス・アクィナスでしょ。『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老の言ってるキリスト教っていうのは、被造物全てが含まれる。ゾシマはそういう言い方はしないんだけど、例えば自分のお兄さんのマルケルが亡くなる前に、小鳥にまで罪の赦

しを請うた、とか、大海の片っぼの端に触れたらば、向こう岸にまでそれが伝わるんだとかそういう話をしていて。

洗礼を授けてくださった井上神父は、遠藤さんと 1952、3 年ぐらいに、[カトリックの] カルメル会 [の修道院] を目指してフランスに行った。7 年間カルメルにいたんだけど、どうしても西欧的なキリスト教というのに馴染めないで、[留学] 最後の頃、パリのキリスト教の神学院でウラジーミル・ロスキー『キリスト教東方の神秘思想 Essai sur la theologie mystique de l'Église d'orient』と出会って、フランス語で読んで、そうか、こういうキリスト教もあっていいんだってことを初めて知って、すごく解放感に浸ったということです。でも結局彼は東方キリスト教には移らないで、カトリックのまんま、日本に帰ってきて神父になったわけだけでも。

東大に移ったときに [井上神父が] 「あそこには宮本 [久雄] さん (神学者、東京大学名誉教授) がいるから」 って。『キリスト教東方の神秘思想』を日本語に訳したのは宮本先生でしょう。「ただあの本は宮本さんの訳で読むよりも、フランス語で読んだ方がわかりやすい」とおっしゃってね。「あなたならロシア語で読んだ方がわかりやすいんじゃないですか、いずれ将来そういうことやったらどうですか」 って言ってくださった。

井上神父の本に、汎神論 (パンテイズム) と汎在神論 (パンエンテイズム) っていうのが出てきて。パンテイズムと一線を画してはいるけれども隣接する概念としてパンエンテイズムがある。パンエンテイズムは、グレゴリオス・パラマス (ギリシャの神学者・正教会の聖人、1296-1359) の話になるけれども、[神の実体について] 〈ウーシア〉と〈エネルゲイア〉のうち、ウーシアは非常に超越的だから、被造物である人間は到達できないんだけど、エネルゲイアは神から発出して、[ウーシアが] 太陽 [だとしたらエネルゲイアは] 太陽光線のようなもので、万物に降り注ぎ恵みを与え、万物とコミュニケートをしている、万物は神の恩恵を受けて輝いてるっていう、そういう概念。西のキリスト教にはそれがあんまりなくて、創造主である神は一旦造ったら、もう被造物との間のコミュニケーションはそんなにない。けれども、東のキリスト教はそれがずっとあり続ける。井上神父は本の中で、日本人として汎神論^{パンテイズム}の世界に育った自分としては、

パンエンティズム

汎在神論の考え方は西方キリスト教よりも馴染みやすかった、っていうことを書かれているわけね。

沼野さんが持ってきてくれた岩波の話で「超越」について書かなきゃいけなくなったときに、思い切ってゾシマのことを書こうと思って。私が今まで書いた論文の中で一番意味のある論文はそれですね [[ドストエフスキーのキリスト教——『カラマーゾフの兄弟』を中心に] 岩波講座『文学8 超越性の文学』(2003)]。

それから、ユーラシア主義をやったんだな。やっぱり地域文化研究専攻に行っただめに、少しでも Area studies みたいなことをするべきではないかと思って。

ユーラシア主義にはいろんな側面があって、レフ・カルサーヴィンが関わったユーラシア主義の国家構想(1926)は、キリスト教に基づいた国家構想なんですよね。カルサーヴィンはシンフォニックなリーチノスチ симфоническая личность、西洋近代における全体から全く切り離された、独立した「個」ではなくて、万物と繋がっている「個」としての личность っていう考え方があると言っている。

ドストエフスキーの『地下室の手記』第10章は非常に短いんだけど、あれはものすごく検閲で切り落とされてしまって、ドストエフスキー自身も非常に不本意であると言ってます。それを補うかのように、ドストエフスキーはちょうど『地下室』を書いている時期に、マリヤ夫人が亡くなって、その遺体の目の前で“Маша лежит на столе” っていう、1864年メモを残していて、その中で今言ったシンフォニックなリーチノスチみたいなことを言ってるんですよ。その辺が全部だんだん私の中で繋がっていきましたね。

畔柳 ドストエフスキーのキリスト教に関連して、安岡先生と東方キリスト教会とのかかわりについても伺いたと思います。

安岡 日本でドストエフスキーに関してキリスト教の話を持ち出そうとすると、「鉄のカーテン」っていう感じで、もうそれだけで嫌っていう人がすごく多いと思うんですよ。「キリスト教がわからないとこの作品はわからない」とでも言おうものなら、もう絶対拒否反応で終わりになるでしょう。

大平 それは逆もそうで、キリスト教的な解釈が強いんじゃないかなって思った

ら、我々が置いてけぼりを食ってる感じがして……。

安岡 東方キリスト教会はそうじゃないわけよね。よくわかるとか言われて歓迎ムードで、解放された感じが強かったですね。東方キリスト教会は宮本久雄先生、谷隆一郎先生（証聖者マクシモスなどを研究、九州大学名誉教授）、大森正樹先生（グレゴリオス・パラマスなどを研究、南山大学名誉教授）の3人が、一生懸命頑張ってた。次世代に交代しつつありますけれどね。次々と立派な本を出されたでしょ。日本人が書いた本で読むのはやっぱり違うのよね。あれで、日本の東方キリスト教についての理解が随分進んだんじゃないかな。パラマスは、さっき言った事情で井上神父の話からも知ってたんだけど、大森先生の著書を読むことによって非常に詳しくわかった。

畔柳 東方キリスト教への関心を深められたきっかけは井上神父だったんですね。

安岡 最初のきっかけはね。ただ井上神父がアカデミックなことを教えてくださってたというより、ヒントを与えてくださったという感じかな。

最近のお仕事——ゴンチャロフ『オブローモフの夢』翻訳をめぐって

畔柳 2024年5月に発表されたばかりの翻訳『オブローモフの夢』について伺いたいと思います。イワン・ゴンチャロフ『オブローモフ Обломов』の土台と言われる章「オブローモフの夢 Сон Обломова」の翻訳に加えて、小説全体を抄訳されました。

安岡 ゴンチャロフの『オブローモフの夢』は、[2024年7月に緑内障の手術をしたため]今の目の状態ではああいう形でしかできないだろう、『オブローモフ』岩波文庫で3巻あるものを全部訳すのは100年待ってもできないかもしれないと思って。ああいう形で出してもらったのは、私としてはすごく良かったと思ってるんですけどね。

ゴンチャロフ自身は幕末の日本にも来てるぐらい、ある意味活発な、ポジティブな人ですよ。作者にはそういう面があるに違いないのに、シトリツとオブローモフっていう対照的な2人の主人公を出してきて、明らかにオブローモフの方にシンパシーを抱いてると読めるじゃないですか。シトリツはロシア国内のみ

ならずヨーロッパにも気軽に足を伸ばしてる人、ゴンチャロフ自身は明らかにシトリス側の人間で、非常に有能な官吏であったと思われるのに。浦さんに、安岡さんは昔からそれ言ってたよねって言われたけど。詳しい解説を書くにあたって、いろいろなものを読んで、ゴンチャロフが躁鬱病だったっていう説についていくつか論文があって、長年の謎が解けた気がします。

大平 昔、ニキータ・ミハルコフの映画版『オブローモフ Несколько дней из жизни И. И. Обломова』も好きだとおっしゃってませんでしたっけ。理想の男性だとか言って、お父様がエツと言ったとか言わないとかいう話が私まで伝わってきましたけど。

安岡 そう言った覚え、ありますね。1980年にソ連に行ったとき、[ソ連作家同盟の日本係] エレーナさんは、ちょうど日本からの別の、小説家の黒井千次さんとか偉い人たちの делегация を案内しなくちゃいけなくて、代わりにヴェーラっていう若い、私と同年ぐらいの女の子をつけてくれたのね。その子は英語ができるということで、英語の通訳として。だからイルクーツクも彼女と一緒に行ったのね。最後の頃すごく仲良くなっていろんな話をして、好きな作品は何って訊いたら、『オブローモフ』って言うから、そうかと思って。ところが当時のことだから、彼女は『オブローモフ』が手に入らないんだって言うの。一つだけお願いがある、日本に帰ったら『オブローモフ』の本を送ってくれないかって言われて、送ってあげたのを覚えてますけどね。その後外語に来てたミーシャとジェーニャっていう夫婦がいたんだけど、ジェーニャとは非常に仲良くなって、彼女もやっぱりオブローモフ大好きだと言ってると、ロシア人はこれぞ理想の男性って思う人いるみたいですよ。なんか癒されるのよね。ここまで怠け者でもいいんだっていう。それこそ谷垣[恵子]さんなんか、「私は遅遅として進まない感じがとっても耐え難い」って言ってたけど、私は好きだった。

日本ロシア文学会について

畔柳 最後に、日本ロシア文学会での思い出をお聞かせください。

安岡 私はロシア文学会で2つ、ゾーシチェンコについての論文と、ラスプーチンについての論文と発表して学会誌に載せていただきました。ゾーシチェンコか

らラスプーチンに移行する時期だったんですね。

小野理子〔おのみちこ〕先生（神戸大学名誉教授、1933-2009）っていらっしやったでしょ。あの先生が、学会で激賞してくださって、非常にありがたかった記憶があるけど。ロシア文学会は若い人にとって発表の場であり、そこでたくさんの人たちに聞いてもらって評価してもらったり質問をしてもらったりするとても重要な場であったと私は記憶しております。だから私は非常にお世話になったと思ってます。

大平 小野先生と一緒に岩波の『新版ロシア文学案内』（2000）書きましたよね。

安岡 そうです。藤沼貴先生（早稲田大学名誉教授、1931-2012）と3人で、19世紀を小野先生がなさって、その前を藤沼先生、私は20世紀と言われて。全然書けないで、どうしようと思ってたら、なんか岩波の編集者が「小野先生のをちょっとお見せしますからこんな感じでいけばいいんですよ」って。

今、ロシアも、全世界的なすごい名作っていうのはどうなんでしょうね。今でも出てるんでしょうかね。ロシアも、やっぱり読者層が随分減ったでしょう。それもあるだろうし。でもまたきっと出てきますね。

畔柳 ここで録音を終了したいと思います。本日は長時間にわたってありがとうございました。

（文責：畔柳千明）

川崎 浹（かわさき とおる）

① 1930年 ② 早稲田大学大学院 ③ 早稲田大学 ④ ロシア文学 ⑤ 『チェーホフ 上下』（紀伊國屋書店、1970）、『ソ連の地下文学』（朝日新聞社、1976）、『ロシアのユーモア：政治と生活を笑った三〇〇年』（講談社、1999）、『過激な隠遁：高島野十郎評伝』（求龍堂、2008）。



2024年11月30日、東京都練馬区のご自宅にて
インタビュアー：神岡理恵子、長谷川麻子

インタビューは、厳選された書籍と資料が整然と並ぶ書齋で実施されました。時折、幼いお孫さん——小さな“恐竜博士”——がやってきて、大好きな恐竜や大雨の出来事などを“講義”してくれました。

ロシア語を始めたきっかけ、大学での授業や先生たちのこと

神岡 まず、先生がロシア語を始めたきっかけを教えてください。

川崎 新制高校生のときですが、フランス文学をやるかロシア文学をやるか？っていうことを先輩に聞いたら、これから世界は社会主義の時代になるんだから、ロシア語の方が良いってね（笑）。そうすれば19世紀ロシア文学もやれるし、同時にこれから世界を支配する社会主義の言葉も学べるわけで、現代的であると同時に過去のでもあるから、それでロシア語をやろうと思いました。

長谷川 そうした会話が行われたのは、戦後すぐということですよね？

川崎 1950 年には僕はもう東京にいましたから、1940 年代後半のことです。深いロシア文学と、現代のソヴィエト語を一緒にやれば一石二鳥だということで、早稲田大学に来たのです。天才だけが自分の運命を持っているのであって、普通の人間、凡人は偶然に支配される。僕も振り返ってみると、本当に偶然の羅列です。それで僕は宇佐見英治さん（1918–2002）と知り合ったのも、フランス語ではなくてロシア語をやったからなのです。僕の同級生に——大学院では一級下でしたか——親友がいて、その人がどういうわけか宇佐見さんを知っていた。それで紹介してもらったのです。それから僕の運命が変わったのです。『同時代』[1948 年創刊の同人誌。2020 年以降（第 4 次）、川崎先生が編集代表を務める]、そして宇佐見さんと親友だった矢内原さんと出会うことができたのです。僕は宇佐見さんを知らなかったのですが、矢内原伊作（1918–1989）の方に憧れていたのです。戦後、本当に紙のない時代に鎌倉書房から出た雑誌『人間』に中村真一郎（1918–1997）とか、三島由紀夫とかが書いていて、それと並んで矢内原伊作は実存主義について書いていたのです。17 歳の僕はそれを読んだ時に、20 世紀とは夜である、夜生きるものを実存主義者というを書いてあったので、僕は若いですから、すっかり痺れた。僕も非常に実存的な生き方をしたから。戦後、僕らの世代はみんなそうですね。価値観が全部ひっくり返ったわけですから。15 歳の時、僕らの世代は反抗すべき相手は国家だったんですね、親への反抗じゃないですよ。

神岡 最初のロシア語の先生を覚えていらっしゃいますか？

川崎 あの頃、1 年生を持っていたのは横田さんですよ、横田瑞穂さん（1904–1986）です。ショーロホフという作家は僕らにとっては神様みたいな作家だったので、横田さんはその作家をやっていることが存在理由になるというようなすごい存在の有名な先生でした。非常に温厚で良い方でした。テキストはチェーホフの「Радость / 喜び」でした。また岡沢秀虎さん（1902–1973）、そして米川正夫さん（1891–1965）。あの頃の学生というのは、平気で教授の家を訪れたものでした。何の予告もなしに。電話なんかしたら、岡沢さんなんて怒っていたからね。それでだいたい、約束して行ったことはないんです。米川さん、岡沢さん、宮坂さん、つまり谷耕平 [宮坂好安^{こうあん}] さん（1903–1989）ですね、あとは横田さん。

あの時代は、なかなか面白い時代でしたね。僕が一番接する機会があったのは、米川正夫先生ですかね。米川夫妻にはとてもお世話になって、泊めてもらったこともありました。

大学院時代の様子

川崎 岡沢さんが、大学院でゼミを開講したんですね。ゼミは人数が多い時には15人ぐらいいました。かなり多数の人が机を周囲に置いて、それで岡沢先生が一番真ん中にいて、その左右に僕と藤沼〔貴〕さん（1931-2012）が座って総括するのですよ。責任が重大で、僕がひとりずつに質問をしないといけないのですね。発表に対して質問をしたり、問題を展開させたり、それがいかにも大学院らしかった。みんなが自分の意見を出し合うから。

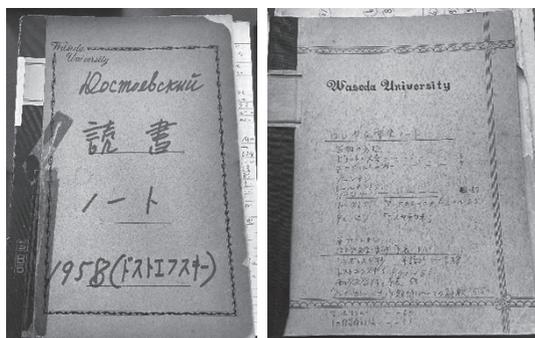
これはまた別の岡沢さんの授業だったか、クリュチェフスキー（Ключевский, Василий Осипович, 1841-1911、歴史学者）が文学について書いたものなどを翻訳させて、持って来させました。そのほかオフシャニコ＝クリコフスキー（Овсяннико-Куликовский, Дмитрий Николаевич, 1853-1920、言語学者・文芸学者）の『ロシア・インテリゲンツィヤの歴史』、イワノフ＝ラズムニク（Иванов-Разумник, Разумник Васильевич, 1878-1946、文芸批評・社会思想家）の「社会的小市民の時代」、ジルムンスキー（Жирмунский, Виктор Максимович, 1891-1971、言語学者・文芸学者）の「プーシキンのバイロンの叙事詩」、コーガン（Коган, Александр Григорьевич, 1921-2000、文芸学者）の「1880年代の文学的傾向」などです。それもやっぱり勉強になったと思います。昔は勉強したなあ、大学ノートがたくさんあるんですね。

〔ここで大学ノートを沢山みせていただく。写真も撮らせていただきました。書庫には50冊ほどのメモや抄訳など「ロシア文学ノート」があるそうです。〕

神岡 1958年、ドストエフスキーについてのノートが沢山ありますね。

川崎 あとから振り返ったら、よく勉強したなあと（笑）。

神岡 拝見してもいいですか？



川崎 岡沢さんのゼミは、本当に大学院らしい授業で、対面授業をすることを恐れない人はみんな出てきたんですよ。岡沢先生はある意味怖い人だったんですけど、自分のことを「トルストイ道人」と言っていましたね（笑）。黒板にも

「今日は早退。トルストイ道人」なんて書いて、あとでクラスで笑いが起きていました。

パリに行った経緯と研究テーマについて

川崎 やっぱパリに行こうと思ったのも、矢内原伊作さんと宇佐見英治さんの『同時代』のせいなんです。宇佐見さんが自宅に呼んでくれて、矢内原さんがその女友達なども連れてきて、ジャック・プレヴェール（Prévert, Jacques, 1900-1977）のシャンソンを聞いたりしているうちに、ふっとモスクワはやめようと。ほとんどモスクワ大学との交換研究の話が決まりかけていたんですけど、それが契機でした、プレヴェールのシャンソンがね。それで教育学部でパリ大学、つまりソルボンヌ大学との交換協定に申請したのです。すると、やっぱり教授会が波立ってですね。ロシア語を教えているのになぜモスクワでなくてパリに行くのかと。110人くらいの教授の前で説明しなくてはならなくなり、思いついたんです。パリに亡命ロシア人がいるから、パリの亡命ロシア文学について研究します、と。それで納得してもらいました。

パリには夜着いて、明け方になって、あの平和ホテルですよ、“Hôtel de la Paix”が隣の隣にありました。あのサヴィンコフが訪れたホテルです。それで因縁を感じました。サヴィンコフが追及することになる二重スパイのアゼフが泊まっていたので、同僚と追及に行くんですね。それで、サヴィンコフがいたアパートやホテルなどを探すのも、僕の研究テーマのひとつでありました。3つぐ

らい研究テーマがありました。ひとつは当然、亡命ロシア文学です。亡命ロシア文学こそが、ソ連時代においても本来の19世紀からの伝統的な文学の王道であるという説を立てたのです。『ソ連の地下文学』（1976）にもそう書いてますね。今読んでみると、あの時代には誰も、日本のジャーナリズムや読者はもちろん、ソ連の地下文学・サミズダートなんて考えてもいなかったのです。それで非常にセンセーショナルだった。『ロシア思想』紙の編集部に行って、いろいろなことを知ったのです。反体制のプロコフスキー（Буковский, Владимир Константинович, 1942–2019）とか。後で僕はプロコフスキーに会いに行きますからね。彼はケンブリッジ大学の講師になったのです。妻と娘を連れて会いに行きました。その時の写真もどこかにありますけどね。

[ここで色々な写真を見せていただきながら、しばらくお話をうかがう。]

亡命ロシア人たちとのエピソードについて

川崎 亡命ロシア人と付き合ったことで、反体制派というものに目が覚めたのです。『ロシア思想』紙の編集長ジナイエダ・シャホフスカヤ（Шаховская, Зинаида, 1906–2001. 1968–1978, 同週刊紙編集長）は侯爵家の出身で、非常に人懐っこい人で、「よく来た、よく来た」という感じで。ここがパリの亡命ロシアの中心地だと思いました。そこでいろいろな人を紹介してもらいました。例えば、帝政ロシア時代にコワレフスキー（Ковалевский, Максим Максимович, 1851–1916）という有名な学者家族がいましたが、子孫がパリ大学で教えていました。編集部周辺で開かれているロシア関係者たちの集会や講演があり、そこでまた知り合って、関係がパーッと広がったのです。

レフ・シェストフの娘とも知り合いました。僕らの時代はシェストフとベルジャーエフがソ連・ロシアの二大哲学者でした。日本の小林秀雄とか、ああいう人たちに大きな影響を与えたのはシェストフですね。シェストフは僕の中ではもう大きな名前なんですけど、ベルジャーエフ以上に僕にとっては大きいですね。なぜかという、ベルジャーエフはドストエフスキーに触れているけど概観的で、シェストフの方が実存的にドストエフスキーとチェーホフに迫っているの

です。それで、シェストフ選集 2 巻という大箱の本がありますけど、それは家宝みたいな感じになっちゃって。今でもそこに、売らないで置いてありますけどね。それで、そのシェストフの次女にあたるおばあさんに会った（Баранова-Шестова, Нагалья Львовна, 1900–1993. シェストフの伝記《Жизнь Льва Шестова》を 1975 年に出版）。やっぱり自分はシェストフ家の者だっという意識が非常にありました。写真にも写っているコワレフスキー教授は、非常に信心深いロシア正教徒でしたが、シェストフは非宗教的だったので、教授はシェストフ家を訪ねるのを避けていた。ある時、シェストフの娘が僕にね、この教授を家に連れて来てと言うのです。それで僕は、教授を車で連れて行った。ずいぶん良くしてくれました、本当に信じられないくらい。それで僕の記憶に残っています。小学校 3 年のかわいい孫も出てきて、「将来何になるの？」って聞いたら、父親の職業である原子物理学をやりたいって言ってですね。実存哲学者シェストフの子孫である少年が原子物理学、世の中変わるものだなあと感じてね。彼のお父さんがフランス人なのです。シェストフはユダヤ系ですから、ユダヤ人でもある。その少年が、面白かったですね。彼を助手席に乗せて、車を乗り入れるくらい広い邸内を車で走りながら少年とロシア語でしゃべっていると、車がね、1メートルほど敷地の外に出ると、何も言わないのにパッとフランス語に切り替えて、面白いなあと思いました。だから、おじいさんやおばあさんのいる屋敷内では——彼はそこに住んでおらず、呼ばれて来ていたのですが——ロシア語でしゃべるんですね。そこから一歩外に出ると、何も断りなしにフランス語で喋るのですよ。

そういう、色々な体験をしましたね。ヨーロッパ、外国に行くからね。パリに居ると、もう全部放送が聞こえてきちゃうんですよ。ロシア語も聞こえる、スペイン語もドイツ語も聞こえるし、モロッコの言語も聞こえるし。だからつくづく、ああいう所に住んでいると、なんか感覚が、世界感覚みたいなものが違ってきますね。話を戻しますと、パリに着いてから、オペラ座を見たときのことですが、地下鉄から外に出てパッとオペラ座を見たときに、ちょっと生まれた国を間違っただなと思ったくらい。

パリでは、サヴィンコフとアゼフについての問題も対象にしていたんですが、亡命文学を調査しにパリに行って、そこで地下文学に出会ったのですね。ソ連の

ユダヤ系ロシア人が、パリ大学で地下文学・サミズダートの講義をやっていて、せっかくパリまで来たのだから講義に出ようと思ったのですが、風邪をひいたので、手紙を出しました。するとすぐに直接訪ねてきてくれました。非常に声の透き通った聡明な顔立ちの人でしたね。意気投合して話を聞いてみると、やっぱりいぶん冒険をしながらパリまで亡命して逃げてきたんですよ。母親の手料理をご馳走になったこともありました。しかし彼は途中でどこかへ消えてしまいました。イスラエルだったかイギリスの方だったか。

まったく想像しないで行ったら、もういきなりソ連の地下文学の、活人画を見てるみたいに本人が出てきたりね。あとは、白軍兵士として戦ったという人とも仲良くなりました。戦って赤軍の捕虜になったけれど——あ、ポチョムキンという名でした。銃殺されそうになって、「向こう向け一、走れ一」となった時、走って逃げても赤軍の将校が撃たなかった。それで自分は今ここに生きているのだって。その人がシェストフを好きで、自分の聖書だって言うのです。それで一緒に読もうと言われて行ったら、ワインをついでくれてね。グルジアワインを飲みながら、とつとつと文章と一緒に読んでいくのです。面白かったなあ。ああいいう光景なんて、ちょっと嘘みたいですね。

神岡 先生がいらした頃は、第一次亡命と言われるロシア革命期の亡命者で、かなり年配の方が多かったのですね？

川崎 ええ、みんな年配だったんですよ。

神岡 第三次の亡命には、ちょっと早かったのですね。

川崎 そうそう。1971～73年でしたからね。内村さんの監修で『抵抗文集』が出てきてね [内村剛介監修『現代ロシア抵抗文集』全8巻、勁草書房、1970-1973年]。



パリの亡命ロシア詩人・作家たち
(1973年、川崎先生撮影)

神岡 シニャフスキー、ダニエルなどですね。

川崎 もうシニャフスキーなんて、すぐ会いたくなるような大作家だったので。あの頃はもう大作家っていうイメージ、つまり文学と政治の問題ですね。その境で軋轢を生じている。ソルジェニーツィンもそうですね。あの時分、政治の問題は必ずこう、ひとつの軛としてあり、政治に対する抵抗みたいなものがあって、そしてそれが文学になって。当時は本国の共産主義権力との対立は、はっきりあって。それを文学にすると、文学にも現実的な圧力が生じてきますね。それでも大作家のように思うわけですよ。でも最近読んだらね、もう普通の作家なのです。当時の自分には、やっぱり錯覚があったなあと。まあ政治的な圧力が文学作品に加わってるものだから、その作品をひどく重く感じて、それも文学的なものみたいに感じてしまうのです。

神岡 スターリンの時代に逃げてきた人たちもいたのでしょうか、「第二次亡命」と言われるような人たちです。

川崎 スターリンの時代は、あまりいませんでした。

神岡 ウクライナへの軍事侵攻の後、また多くのロシア人が国外へ出ましたね。作家のアレクサンドル・ゲニス「第四の波」というエッセイを書いていて、訳したことがあります。先生の大学院の授業でもゲニスとワイリの『60年代』（Петр Вайль, Александр Генис. 60-е. Мир советского человека. 1988）をみんなで講読しましたね。

長谷川 ゲニスはめっちゃくちゃ元気ですよ。Youtubeなどで積極的に発信しています。

川崎 沼野〔充義〕さんの紹介で知り、ニューヨークで奥さんにもすごいご馳走になりました。日本に来た時、吉祥寺の中華料理につれて行ったり、自宅に招いたりした思い出があります。

パリに行ったという事は、フランスつまりヨーロッパからロシア文学を見るところでもあり、勉強になりました。先ほどのポチヨムキン老人の友達——この人も元白軍兵——の話ですが、ある時知らない男から電話がかかって来て、自分はロシア人だと言ったら、相手のフランス人は「ああ、ジューか」と言ったというんです。それで亡命ロシア人2人は笑っているんですよ。それで、パリに

いる亡命ロシア人たちの、ユダヤ人に対する態度も分かってきますよね、なんとなく。ユダヤ人とロシア人は同一視されてるよってね。当時、確かにヨーロッパの中でユダヤというひとつの概念が歩いていたんですね。

それから、フランスのスラヴ文学者ジョルジュ・ニヴァ（Nivat, Georges）にも出会いました。2度ほど日本にやってきたかな。東京で僕の司会で講演をしました。それからもう1人有名な文学者ピエール・パスカル（Pascal, Pierre, 1890–1983）は、フランスにおける最初のロシア文学者なのです。僕も彼に会い、「あなたの本を翻訳します」と言ったら、喜んでくれた [川崎渕訳『ロシア・ルネサンス 1900–1922』みすず書房、1980]。

長谷川 ニヴァが日本で講演したときは、ロシア語ですか？

川崎 ええ、ロシア語です。彼はロシアでも広く知られていました。

実存主義の影響を受けて

川崎 フランスに研究に行ったのは、シャンソンを聞いたという偶然もありました。もっとも、最初にロシア語にしようかフランス語にしようか迷ったのは、あの当時の60年代前後の学生は、実存主義の影響を非常に受けたんです。で、僕はもう15歳の時に戦後の反抗期で、相手が国家だったわけですよ。そういう反抗の姿勢というのがね、戦後の実存主義のカミュとかサルトルにぴったり合ったんですよ。それでしかもあの頃、どんどん翻訳が出てきたものですからね。僕はフランスの実存主義をまろにかぶったのです。僕はもうサルトルのフランス語の本まで買って、*L'Être et le néant*, 『存在と無』ですね、フランス語で読んだりしましたよね。で、しっかりここ [頭] に入ってるんですよ。哲学として、概念としてね。存在を超えて、メタフィジックスはフィジックの上にあるものですから、超出っていくのが自由であり、存在であるということをしっかり——20代後半に入ってきた頃から30代のはじめに——勉強してるわけですよ。だからフランス実存主義に非常に影響を受けていて、フランス行きという発想が出てきたのです。だからこの前ね、英国人の若い女性が、まるでサルトルやカミュなんかが目の前にいるような書き方をしてる本を読んで。

神岡 先生が書評を書かれたのでしたっけ、『実存主義のカフェにて』（サラ・

ヴェイクウェル著、向井和美訳、紀伊國屋書店、2024) ですよ？ 私はまだ読んでいなくて“積ん読”しています。

川崎 『図書新聞』に、何十人かの書評家が半期ごとに書くもので、自分が興味を持った本3冊をあげるものです。本当に生き生きと描かれているんですよね。まだ若い人ですよ、イギリスの。僕はそれを読んで、懐かしく思っています。自分も実際パリに行ってその場を知っていますし。

カミュの『異邦人』なんてのは、太陽がまぶしかったから人を殺すなんて、実に斬新だったですね。それまでの小説にありえない、脱道徳的な考え方。そして僕は本当にサルトルに養われたみたいなので、サルトルはハイデggerとかなり通じてたんですね。結局僕は、後だったか、ハイデggerを読みましたよね。『ハイデgger事典』（昭和堂、2021年）は買っておかなきゃと買いました。何となく、あると落ち着くのです（笑）。

面白いのは、メルロ＝ポンティがかなり『実存主義のカフェにて』に出てきますね。メルロ＝ポンティも、鈴木大拙とまったく同じこと言ってるなと思ったのです。鈴木大拙も『禅による生活』で同じようなことを言っている。東西を問わず、同じような考え方するのかなと思って。

話を戻しますと、フランスではフランス人ロシア研究者に会ったほか、ソルボンヌ大学でフランス語の授業に出たことがあります。ボナムール（Bonamour, Jean, フランスのスラヴ学者）という人が露文科の主任をやっていて——オブローモフを研究していました——挨拶をして、彼のフランス語の授業に出たことがあります。後に外川継男さん（歴史学者、スラブ・ユーラシア研究所初代センター長、1934-2025）が日本に呼んで、講演に来ました。それから、のちに『権力とユートピア：ロシア知識人の肉声』（岩波書店、1995）でも対談しましたが、亡命ロシア人のミシェル・エレール（Heller, Michel, 歴史学者、1922-1997）は当時パリ大学で授業をしていました。政治的なものになりますけれど。内村剛介も良く知っている有名な人でしたから、挨拶をしてエレールの授業に出て、ロシア語で授業を聞いていました。それからパリの郊外にいたジャック・ロッシという、ロシアで長らくラーゲリに入ったりした人にも会いました。「ラーゲリ・マニュアル」という本（『ラーゲリ註解事典』恵雅堂出版、1997）を出し、内村剛

介が翻訳・監修しています。NHKのテレビでも出ていました。本当に色々なロシア関係者がいました。ロシア関係の本屋も2軒あって、その主人たちとも仲が良かったし、そのうちの1軒の古本屋の2階では、名前を忘れましたが研究出版施設が入っていました。とても勉強になりました。ロシア文学だけでなくヨーロッパを知るうえで、またヨーロッパとロシアの関係についてもね。

長谷川 お話を伺っていると、ロシアはヨーロッパの一部なんだなっていう実感を持ちます。事実としてそうなんですけど（笑）、いまこのお話を聞きながら、それを体験できています。

川崎 それで僕の目の中には、シベリアのことをユーラシア問題として見るという視点ができました。ある時期、研究費でそうした問題を考えていたこともありました。まあ、やっぱりパリにいとサハリンとかウラジオストクとか、そういう考えがなかったですね。パリまで離れて行くとね。我々日本にいるから、ウラジオストクとかいろいろな極東地域をロシアの一部として見るけれども。サハリン、樺太の極東をどうとらえるかっていうので、この前ね、工藤正廣さんが面白い小説を書いていましたね。『ユゼフ・ローザノフ：青春の終わりに』（未知谷、2024年）です。ウクライナからサハリンに飛ばされるKGB長官の話なんだけれど、そういう視点があるんだなあと。チェーホフ以来、サハリンは飛ばされる所として扱われていますけど。

長谷川 チェーホフの生地タガンログとか、あの辺はいま戦争の地域で、とてもショックですよ。行ったことがあります。南部軍事管区って言われていたのですが、本当にそうなんだ、と。

川崎 そうなんですよ。僕も行ったことがあります。ヤルタにもね。ヤルタの人もロシア側に兵隊にとられている人もいますんですけど、行ったときに会った色々な人たちを思い出します。クリミア・タタールの人たちとか、若い人たちが心配です。クリミア・タタールの大統領ムスタファ・ジェミレフにも個人的に招待されてご馳走になったことがあります。トルコに行ったら大統領として歓迎されたらと、その時の写真——トルコの大統領と一緒に写った写真——を僕にくれました。ネット上の写真では、彼はいま所在げな様子をしてはいますが。なんか世界が動乱のなかにあると、安らかに死ねないですね。自分の精神的な居場所が

よくわからないのです。こういう動乱のなかで死んでいくというのは、どういう風に自分を位置づけて死んだらいいのかなあ、ってね。僕は孫の顔を見ながら安らかに生きてるかと思ったら、そうじゃないですよ。老人は老人ながらに迷ってるんです。皆さんもね、あと 40 年したら、2065 年ぐらいになったらわかると思うんですけどね（笑）。地球と、あるいは世界と無関係に死ねないですね。ハイデッガーは、人間とは、世界内存在であると言ってますけどね。世界というのは時間の流れ、歴史でもあるわけでしょ。小林秀雄は、自意識とは時代意識にほかならないって書いているけど、まったくその通りだと思いますね。僕はサルトルに育てられ、芭蕉に育てられ、ハイデッガーに育てられてね。そしてこう、やっと自分の人間性というものがここにある。だから自分というもの、自意識というものは、時代意識の中で生きて世界内存在であるから、世界が混乱すると、存在としての自分も揺らいでくる。だからこれが、僕の今の最大の思考の対象ですね。存在ってというのは、世界に関係無しに死ぬののだろうか。色々あったって、自分はもう関係なしに死ぬときは死ぬですよ、何にもなくなるわけですから。だけど、そんなもんだらうかと思って。だけど今のウクライナにしろ、パレスチナにしろ、ああいうものがあるなかで自分はものすごく混乱して、動揺しているけど、このまま死ぬっていうことが——なんか色々すごいね、我々みんな同じ体験してるわけですけど——それとは無関係に全部断ち切って死ぬ方が正しいか？とか、色々考えてます。

長谷川 先生、コロナはどうでしたか？ あれも大騒ぎだったと思うんですけど。

川崎 やっぱりコロナにかからないようにと思って。コロナの時期はいろいろ考えましたよね、皆さんね。一体、区は何をしてくれるんだ？ 医師会や政府は？ 都知事は？ などと色々考えるのと、いまコロナで死んだらどうしよう？ というのとね（笑）。で僕は、コロナでだけは死にたくないと思いましたね。それこそ自分が無策の社会に振じ伏せられるわけですから。自分の思考と関係なしに。だから別のところで、別の身の処し方で死にたいと思ったのです。

帰国後の研究の話、パリの補足

川崎 パリで、ドストエフスキーをやっているジャック・カトー（Catteau, Jacques, 1935-2013）という人とも会いました。分厚い本を1冊出していたので、その本も買って帰りました。ひとつだけ、ドストエフスキーとゴシックの関係についての文章がありましたので、それは参考になりました。ドストエフスキーが描いたゴシックの絵なんかを引用して。僕は一時期、ドストエフスキーとゴシック思想というものがテーマになるのではないかと、本気で考えていたことがありました。ゴシック建築と小説が好きで、調べたことがありました。そうすると、ドストエフスキーの炎のような人物たちが出てくる。それから事件なんかもすごい事件が起こるので、ゴシック小説のゴシックも、ゴシック建築のゴシックも、ドストエフスキーは両方持ち合わせてるんじゃないかと。創作手帳にもゴシックのバラ窓なんかを描いているし。ジャック・カトーのドストエフスキー論はそこだけ、同じ関心を抱いているのかと思いました。雑誌に、ドストエフスキーとゴシック思想についての一文を書いたところ、宇佐見英治さんが読んで、会った時に川崎さんの論文が一番面白かったと言ってくださって。1冊の本にしようと思っていましたが、なりませんでした。小池滋さん（英文学者、1931-2023）のような、力量がなかった。専門家ではないのでね。相当本は読んだのです。

パリに行って良かったと思うのは、ゴシック建築を見れたことですね。特に郊外にある有名な寺院にたまたま行った日に司祭がオルガンを弾いていて、バラ窓に反響がよくて、あれはもう本当に心に響きましたね。もしフランスに生まれてたら、少年でカトリックになっていたかもしれないというくらい、誘惑力が強い。バラ窓とパイプオルガンというのは。そうしたことに立ち会った経験は大きい。

長谷川 シャルトル大聖堂ですか？

川崎 そうです！ 素晴らしかったですね。日本にいるのとは違った経験ができるのは大きい。

それから、ついだったから、森有正さん（哲学者・フランス文学者、1911-1976）の授業にも出ました。あるお坊さんの話——離れ島に手紙を出す、それを

お坊さんに持たせて——という明恵上人の話をしていました。フランス人の女子学生たち 7~8 人に、日本思想の一例として。日本の場合は自然と人間というのがこう、フランスみたいに理性で割り切れていないですからね。人間と自然が融合しているというところがあると言われている。

はじめて明らかになるポスドク時代のエピソード

川崎 僕は学生時代、教員になれば返済しなくてもよい奨学金をずっともらっていました。でもやっぱり仕事もしたいし、ちょうど自分のロシア語の勉強にもなると思って、乗船通訳を始めたのです。それで、サハリンとか対岸のアムールだとか、極東に材木とか石炭をとりに行く船の乗船通訳になって、通訳会社から派遣されるんですね。

神岡 そういうお仕事があったんですね。

川崎 大学院の友人たちでそういう人がいたものですから、それで乗船通訳として船に乗って。樺太(サハリン)の対岸に、デ=カストリという小さな村落があり、行きました。サハリンとか、アムール川を 100km 上ったところにも行きました。

夜船が着くでしょ。そして朝、目が覚める。そして仕事が始まる。その時にその船が停泊してる岸のところでね、労働者の声が聞こえてくるんですね。それがね、金属的な、やっぱり日本人と違ってロシアの方がどちらかという声は金属的で澄んでいるんですよ。それで、ロシア語で何か声高く叫ぶわけですよ、「ロープをこっちによこせー！」とかね。それを聞いた時ね、「あ、ロシア人の声だ!」、これはもうロシア人と言うか、西洋人ばい、ここはもうヨーロッパなんだって。その時の感覚がね、「初めてロシア人の声を聞いた!」っていう感じだったんですね。大学で聞いたりなんかするのは違った、働くロシア人の声。そのときに感じたんです、「あ、そういえばここはヨーロッパだ」と。ロシアはやっぱりヨーロッパからずっと続いているわけでしょ、それが新鮮でしたね。冷たい空気と一緒に。それだけです。

あ、それから木材? あれは石炭の時だったかな? もうこれも話すと長くなるんですけど、千トンの戦時標準船というのがあるのです。戦争中、標準的に、

アメリカの飛行機に爆撃されたり沈んでも惜しくないような最低の船を作って、それで日本はそういう艦船を作って兵隊とか物資を輸送してたわけですね。だから僕は、船は良くわかるんですよ、何千トンとか。

神岡 それは、おいくつぐらいの時でしたか？

川崎 20代後半から30代はじめ、講師になっても僕はまだやっていました。本当にいい人生勉強、社会勉強になりましたね。

長谷川 その船は、日本側はどこから出ていたのですか？

川崎 日本側は各地からですよ。東京から出たり、それから新潟から出たり、場合によっては門司港から出ることも。この前もう何十年ぶりに、自分がその時の印象を書いた手記を見たんですけど。朝早く起きて、石炭なんかこう山積みされて起重機が向いている、それから、こちらからポンポンポンンって、あのポンポン船に乗って、沖に停泊してる貨物船まで行くのですけどね。石炭の山をかき分けていくね、そういう文章があるのです。迫力があってね、不安感もあって、面白いのですね！（笑）

長谷川 すごい読みたいですわね！（笑）

川崎 自分の文章だと思って読んでるけど、まるで人の文章を読んでるみたいで。

神岡 日本と取引があったという事ですか？

川崎 あったのですよ、もちろん。木材とか石炭を。

神岡 木材をソ連から運んできた——日本が買ってたということですね？

川崎 そうです、石炭も木材も、カラムツとか。

神岡 いったん船が出ると、帰ってくるまでどれくらいかかるのですか？

川崎 それは色々です、4~5日の場合もあるし、1週間ぐらいの場合もあるし。

長谷川 船の上で生活するんですね。女の人はいないですよね？

川崎 女の方は、いなかったですね。一度は3千トン級の船に乗ったけど、それはやっぱり乗ってる人もちゃんとした会社員って感じの船員ですよ。だけどボロい船は、本当にやっぱり、素朴な人たちだった。一度沈みかけたことがあったのですよ、日本海ですごい台風に遭ってね。石炭だったかな、もう沈むのではなにかと思った。

長谷川 何を——誰と誰の間を通じたのですか？

川崎 日本の乗組員と、ロシア人関係者との。

神岡 買う時の通訳ですよ？

川崎 今のロシアならいいんだけど、ソ連時代の国境警備隊が乗り込んでくる。サイレンを鳴らしてタグボートが来るのですよ。すると向こうからね、「タラップ降ろせー！」とかね。

僕はね、一度逮捕されかけたんです。僕はもう本当に鈍感な人間で、あの怖い時代にね。昔、チェーホフがサハリンに来たでしょ。チェーホフの痕跡を見に行ったら写真に撮ったんです！（一同爆笑）

長谷川 ここはロシア文学者ですから当然です（笑）。

神岡 みんな一度はやっているのではないのでしょうか？ 井桁 [貞義] 先生もよく話してくれました。

川崎 亀山 [郁夫] さんも書いてましたね。

神岡 では、先生は写真を撮ったのです？

川崎 撮りました。なんか、子供が来たりしてね、「ここいい景色だから、ここ撮りなよ」なんて言って、ちっちゃい子供が言うんですよ（一同爆笑）。

神岡 おとりですか？

川崎 そうではありません。そうしたら、国境警備隊の隊長が——昔の俳優でハンフリー・ボガートかというような隊長が——船上での手続きが終わった後で、「ところで переводчик [通訳さん]、サハリンに上陸して先ほど何をしましたか？」と言うんですね。だから「写真を撮った」と。「なぜ写真を撮った？」——「チェーホフの遺跡があるから」と。「子供が、ここがいいから撮れって言ったから撮ったのだ」と。それからやっぱりね、上陸させられちゃったのですね、拿捕ですから。それで、本部まで連行されました。1人の若い兵隊が銃を持っていました。それからやっぱり訊問されましたね。それで始末書をとられて。

長谷川 ハンフリー・ボガートに尋問されたのですか？

川崎 ええ、ボガートに尋問されたのです。本当にそっくりだった（笑）。顔つきも、格好も。それで、連行されるときに僕は言ったんですよ、実は自分は、日本では民主主義者だと。だから反米思想のデモに加わったりしたことがあるんで

す、とね。だけど現場では尋問されましたね。どこの通訳協会から派遣されたか、それはどういう人間なのか、その人間の名前は何かとかね。本名を明かしてはいけないところは、やっぱり僕はほかして、始末書をとられた。その通訳会社の会長というのが、ソ連が攻めてきた時に、ハルビンの日本軍将校の1人だったんだけど、ソ連軍が来たっていうので裸足で宿舍の裏口から逃げてきたのが通訳会社の会長なんですよ。だからそんな本当のことを言うわけにいかないですから、ほかして、それで、カメラのフィルムを抜き取られて。

最後の手続きに兵隊を連れて乗船してくるわけですよ。仕事が終わってこれから船を出港するという時に、「ところで通訳さん」と来たんですよ。「なんか忘れ物がないか」って。だから僕も言うんですよ、「Пленки [フィルム]」ってね、忘れるはずない、覚えてるって。すると取り出してきて、「チェーホフの遺跡を撮りたいって言ったけど、もうちょっと写真術をしっかり勉強してからにしてくれ」と言うんですよ。だから僕も言い返してやったのです。「フィルムの現像を無料でやっていただいてありがとうございます」と。そうしたら、「私もマルクスボーイには無料でサービスすることになっている」と返してきたのです。今思えば面白かったですね。ロシア人のアネクドートは、やっぱりすごいじゃないですか。

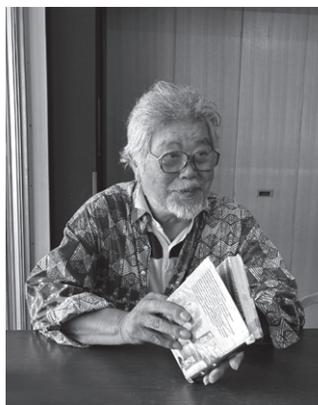
長谷川 “民族友好”で、なかなか気が利いたハンフリー・ボガートでしたね。ロシア人は一見コワモテで、笑わないから怖いと言いますが、不思議な魅力がありますよね。欧米の人たちとは全然ちがう。

川崎 個人的に付き合うとね。

(文責：神岡理恵子)

渡辺雅司（わたなべ まさじ）

① 1945 年 ②東京外国語大学、一橋大学大学院 ③札幌大学、同志社大学、東京外国語大学 ④ロシア思想史 ⑤著書に『美学の破壊——ピーサレフとニヒリズム』（白馬書房、1980）、『明治日本とロシアの影』（東洋書店、2003）、訳書に『亡命ロシア人の見た明治維新』（講談社学術文庫、1982）、『回想の明治維新——一ロシア人革命家の手記』（岩波文庫、1987）。



2024 年 9 月 24 日、湘南国際村内の湘南 OVA レストラン（神奈川県横須賀市）と渡辺雅司先生ご自宅（神奈川県葉山町）にて
インタビュアー：畔柳千明、松枝佳奈

秋の晴天のなか、渡辺先生が畔柳、松枝を JR 逗子駅まで車で迎えに来てくれた。横須賀市の湘南国際村に向かい、レストランで昼食をとりながら、和やかな雰囲気
でインタビューの前半が始まった。

第一部（湘南国際村内のレストランにて）

ロシア語を学び始めて：高校卒業から東京外国語大学での学生生活まで

松枝 それでは今から渡辺雅司先生のインタビューを始めます。

畔柳 最初にロシア語を始められたきっかけとありますか、なぜ東京外国語大学のロシア語科に入られたか、というところからお聞かせいただけますか。

渡辺 これが全くいい加減でね。僕は丹下健三（建築家、1913–2005）に憧れていたんですよ。代々木のオリンピックの建物〔国立代々木競技場〕を造った人。だから東大の都市工学に行きたいと思ってたわけ。あの頃はロシア語ブームでね、それで東大理科 I 類を受けるには、第 2 外国語はロシア語と指定されていた気がするんだ。ロシア語の先生方が 5、6 人増えたんだよね。そのときに初めて「え、ロシア語なんてあるんだ」と思ったぐらい。ガガーリンが宇宙へ行ったことは知っていたけど、ロシアのことを何も知らない。それで東大ではそんなロシア語やるんだと思って。案の定東大落っこっちゃって、それで遊び半分で外語大を。通っていた高校と近かったから、受けたんです。

そのときは受験申込に行ってその場で何語科か決めた。それで僕はロシア語にして。当然どういう試験があるかも知らないから、リスニングがあるなんて知らなかった、僕は。それで試験の途中でリスニングが入って、適当にメモをしておいたわけ。そしたら 30 分ぐらいで答案を集めに来た。だからあの分 100 点ぐらいゼロだと思うから、もう当然落ちたと思っていたわけ。その代わり数学だけ易しくて、目をつむってもできるような問題だったの。

それで合格発表が 4 月 8 日だったかな。もう落ちてるだろうと思って友達と山登って浪人しようなんて約束してたのに、受かってるじゃない。そのことを高校時代の野球部の奴に喋ったら、「お前はいい加減だ、ロシア語科なんて行って一体どうすんだ。もし発音できない音があったらどうするんだ」と言われて、へえ、そんなこと考えるのかと思ってね。

しょうがないと思って池袋でロシア語の比較的厚い参考書を買ってきて、5 月の連休ぐらいから授業始まるから、それまでに一応全部目を通したんだよ。格変化なんて覚ええないよ。でもこういう格とかがあって、構造を頭に入れておこうと思って、発音も難しくないとわかる。授業が始まったら、突然僕が優等生になっちゃったわけ。他の奴は何もしてないから、僕は一応大体最後までやったからさ。それで、いつの間にか先生方がいつも僕を当てるんだよ。それで僕は「語学なんかやる気ないんです」って先生方に言った。ところが、3 年生 4 年生になっても、先生方は、君は大学院を受けて語学をやるべきだっていうんだよ。

僕が 3 年生のときに原卓也さん（ロシア文学者・翻訳者、1930–2004）が外語

大に来て初めて会った。僕らの授業を持たなかったから、新任の原先生のごことは知ってたけど、スポーツカーで大学に来る先生でね、学生を連れては飲みに行っているって聞いたんだけど、嫌な奴だって思ってたわけ。じゃそこでさ、石山正三先生（ロシア語学者・ロシア文学者、1914-1973）が「原くん、渡辺くんってのはすごい優秀だからよろしく頼むよ」っていうふうに言われて。

でも僕はその時、経済学やっていたわけ。マックス・ウェーバーやマルクスも結構読んでたけど、勉強しても全然自分自身が自立できないっちゃうかき、自分の意見をまともに言えないというか、もちろんこれには恋愛も絡むんだけど、自分がなかなかしっかりしないっていうのがあって。こんなことしてちゃ駄目だと、大学3年終わったときに通訳で半年蟹工船に乗るんだよ。石山先生が原先生に「渡辺くんをよろしく」って言った翌日に、僕は蟹工船に乗ったわけ。

だから原さんには全然習ってない。でも原さんは僕ができるって石山先生が言ったことをずっと信じていて、いろんなことを僕に任せるようになったわけ。その端的な例が、マヤコフスキー学院の先生なんだ。

一橋大学大学院進学と安井侑子先生との出会い

渡辺 僕は24歳のときにマヤコフスキー学院の先生になったわけ。そこで運命的な出会いがあったっていうか、僕は初中級みたいなクラスだな、そこに夜6時から7時半まで、7時半から9時までってクラスが分けてあって、前半が、うちの奥さん〔安井侑子、ロシア文学者・翻訳者・神戸市外国語大学名誉教授、1938-2019〕なのよ〔ここで安井侑子先生が、父、安井郁氏（国際法学者・原水爆禁止日本協議会初代議長、1907-1980）の1958年、モスクワ・クレムリンにおける国際レーニン平和賞受賞演説を通訳した際の写真を見せていただく〕。

彼女の名前は聞いていたけど、その後結婚することになるなんてつゆ



レーニン賞授賞式（1958.9.5.）
（左よりエレンブルグ氏、侑子、スコベリツィン議長、安井）

も思わなかったよ。

松枝 そのとき先生はおいくつだったんですか。

渡辺 24 歳。一橋大大学院の修士 1 年から 2 年目ですよ。それも原さんが「お前できるんだから、マヤコフスキー学院で先生をしろ」と言われて、もう訳も分からず行ったわけよ。そのとき最初に読んだテキストがね、ペリンスキーのゴゴリへの手紙だったよ。また難しいものを読んだ、馬鹿だね。自分でコピーして持っていったよ。そしたら生徒たちがいたく感動しちゃってさ。早稲田の露文の学生もいたけど、僕は思想史を始めたばかりなのに、ペリンスキーのこといろいろ調べて喋ったもんだから、感動されたんだ。

ちょっとその前の話があってね、原さんと江川 [卓] さん（ロシア文学者・翻訳者、1927–2001）が「ロシア手帖の会」を始めていてね。この会は雑誌『ロシア手帖』も出していて、その創刊号に僕の小論「ピーサレフとエゴイズム」が載っているんだ。

それを読んだ詩人の長田弘さん（1939–2015）がいたく気に入ったらしくて、彼は当時、晶文社の顧問をやっていたから、晶文社から翻訳出しませんかって言われて、原稿用紙までもらって少し訳したんだよね。でも僕の好きなピーサレフ（Писарев, Дмитрий Иванович, 文芸評論家、1840–1868）はその翻訳じゃなかなか出せないと思ってさ。ついに反故にしちゃったってわけ。それでロシア手帖の会には、僕や僕より後輩だと桑野 [隆] 君（ロシア文化学者・翻訳者・早稲田大学名誉教授）とか、そういうのも加わっていたかな。最初はね、雑誌を出す前にロシア文学土曜講座をやっている。

飯田橋の言論研究所で 5~60 人集めて、15 回の講座だった。そこにはね、五木寛之（作家）や秋山駿（文芸評論家、1930–2013）、それから石上玄一郎（作家、1910–2009）、井上光晴（作家、1926–1992）とか錚々たる作家が来たかな。あとロシア文学関係の人、原さん、江川さん、水野忠夫（ロシア文学者・翻訳者、1937–2009）。それから工藤精一郎（ロシア文学者・翻訳者、1922–2008）。そこに僕が加わったんだよ。24 歳位でロシア思想史に入ったばかりで何も知らないのにね。

そこで初めて 1 時間半ぐらいの講義を人前で喋らされた。今思うと恥ずかしい

んですけど。ロシア手帖の会はバス2台借り切って、千葉の岩井で合宿したこともあった。それで夜、何人かの講師が喋って、その後は飲み会だよ。80人ぐらい参加した。そこには一橋の坂内〔徳明〕君（ロシア民俗学・文化論研究者）もいた。

蟹工船での通訳経験：ナロードとインテリゲンツィアを考える（1）

渡辺 それで、僕は蟹工船に乗ったでしょ。半年乗っかって、通訳のアルバイトではあるんだけど、本当に通訳するというよりも、ほとんどがね、ソ連船への抗議電報なんだよ。僕が行ったのはアラスカでね、アラスカ半島の北の方でね、そこでタラバガニを獲るわけよ。1メートル50センチぐらいのタラバガニ。それでアメリカはカニ漁をしてなかったわけ。そんなわけで、ソ連と日本、ソ連と日本って漁業協定を結んで、それで漁区割りをするわけよ。ところが、日本の網はね、ナイロン製でしょ。で、カニの網ってのはさ、こう縦に張るわけ。重石をつけて、そこにカニが来て引っかかっちゃう。

ところがソ連の網は、まだ木綿なんだよ。だからね、すぐ切れちゃうし、パツと浮き上がっちゃうの。カニかからない。そうすると、隣見たらさ、日本の網にいっぱいかかってるじゃない。そうすると、日本のカニを持っていっちゃうわけ。あるいは嫌がらせで、網を切っちゃう。それで毎晩のように、長い抗議電報をロシア語で書いて、それを英語のアルファベットに直して、ツーツ、ツーツと1時間ぐらい打つわけだよ。

だから作文力はずいぶんついたと思う。けどね、そんな仕事をやって、しかもそのときは僕は経済学者になろうと思ってたから、本もいっぱい持っていったわけ。しかもね、先生方は「君は経済って言ってるけど、絶対ロシア語の教師になるから」と僕に言うんだよ。そう言われるとさ、「やっぱりロシア語もやっておかなきゃいけないかな」と思って、なんとね、マルクスのロシア版を持って行って読んでたの。こんな厚い経済学理論をロシア語で読んで、ロシア語忘れないようにと思ってたわけ。それで、よし1日8時間勉強しようと思って始めた。で、ちゃんと個室もらって一生懸命やってたんだよね。

ところが3ヶ月ぐらいしたらね、朝起きたときになんか鏡見るとね、変なんだ

よ。夜もあんまり寝ないで勉強したでしょ。それに狭いところで、それこそ [ドストエフスキーの] 『地下室の手記』 じゃないけどさ。あのとき僕は文学持っていけばよかったと思うんだけど、経済学の本ばっかしダンボールいっぱい持っていったわけ。それで「なんか変だぞ」と思って、「これはちょっと酒でも飲まなきゃ駄目だぞ」と思い出したわけ。そう、前からずっと船員たちにね、「通訳さん飲みにおいでよ」って言われたので。それでトントンとノックしてね、飲みに行くようになったらさ、ほとんど毎日のようにいろんな人から声がかかって、それで僕は酒が強くなったわけ。

松枝 え、先生、それまではあんまりお酒飲まなかった……？

渡辺 飲まなかったよ。

松枝 えーっ、そうだったんですか！

渡辺 そう。真面目なもんでさ。酒なんて飲まなかったよ。そう、蟹工船から。それでね、なんで蟹工船から大学院かっていうと、ある時、蟹工船乗ってから、もう5人死んでたのね。それで蟹工船ってのは、あの本 [小林多喜二『蟹工船』] 読んでみればわかるけども、独航船がね、網張ったところに川崎船、なぜか川崎っていうんだけど、小さな船が降りていって、網を上げるわけ。で、モッコって分かるかな、モッコを四つとるとね、もう喫水線ギリギリで、大漁なわけだ。すごい大波でも、もう十トンもない船で行くわけだよ。それでね、母船の方から漁労長がね、双眼鏡で見てるわけ。すると、沖の方から四モッコが来るわけよ。もう今にも沈みそうで来るわけ。そうすると、漁労長がね、合図をするんだ。軍艦マーチが流れんだよ。軍艦マーチが流れるとね、蟹工船の連中はさ、一応、川崎船の連中ってというのは蟹工船の中ではヒーローなんだよ。最先端でカニ獲ってくるから、要するに命がけだよ。顔は全部もう凍傷だらけなんだけどさ。そう、軍艦マーチがね、霧の中に響いてくると、彼らもさ、はちまきをギュッと一回締め直して、腕組んでさ、颯爽と来るわけだよ。僕はマルクス読んでるからさ、「おいおい、搾取されてるぞ」と心の中で思いながらさ。でもね、一応かっこいいわけだよ。

そうすると、もちろん蟹工船には本社からも来てるね。水産大学とか商船大学出の連中もいるわけよ。そういう連中は双眼鏡で見てる。あるときすごく真面目

で仕事熱心な青年がね、僕の隣にいて。ものすごい嵐だった。それで四モッコなんだよね。四モッコで進んでいくわけ。で、もう本当にこの喫水線ギリギリのところまで波が来てて、今にも木の葉のように揺れてるから、沈みそうなのよ。そのときにその真面目な男がさ、なんとね、「船沈んでもカニ持って来い」って言ったわけ。えーっ、こんな人のいい人がこんなことを言うのかと思って。僕もおそらく東京に帰ったらどっかの大会社にね、[当時、東京外国語大学教授だった]伊東光晴さん（経済学者・京都大学名誉教授）が紹介してくれて務めることになるだろうと。そしたらね、会社の利益のために、こういう風に言いそうだなと、ちょっと思っちゃったわけ。それでその瞬間にもう絶対に企業には行かないって決めたの。そうすると消去法しかないじゃない。

まあ、消去法で、大学院しかなかったわけだけど、実は僕はもう一つあるんだよ。後で話すけど、僕のうちはさ、ちっちゃな町工場というかね、それこそ従業員5人ぐらいしかいない町工場で、高校入るまでは僕とおふくろが唯一の……「唯二」か、「唯二」の労働者だったのよ。僕はいつも学校終わると、営業というかな、それをしていたわけ。だから、働いてる人の気持ちを僕は分かるつもりでいたんだ。これは多分ナロードニキとも関係してるんですけど。それで、だからうちの親父の跡を継ぐか、そうでなかったら大学院だと。それしかなかった。

家庭環境について：ナロードとインテリゲンツィアを考える（2）

松枝 ご実家の工場じゃなくて、大学院に進まれた決め手は……？

渡辺 うちの工場って言えるようなもんじゃないよ、子供が見ても。だって僕が労働者なんだからさ。中学生だから丸坊主だったはずだよ。丸坊主でさ、学生服脱いでジャンパー着て、自転車でね、もう遠いところまで営業してたんだからさ。そんなところの社長にはなりたくないとは思ってるよ。子供のときから僕は、「まーちゃん」って呼ばれてて「まーちゃんは学者で、うちの弟は職人」って言われてた。だから弟が継いだよ、僕は継がないで。近所の噂どおり、僕は学者の道を歩んじゃったんだけどさ。

松枝 小さい頃からそのようにもう周りの方から見られていたんですね、先生は。

渡辺 いや、知らないけどさ。まあ、利発な子だったと思うんだ、きっと。その昔、大泉黒石（作家・ロシア文学者、1893-1957）がうちに住んでたの。で、それも今にして思うと、うちの周りが「池袋モンパルナス」といってもうアトリエだらけで、アパートにもいろんな詩人やなんかがいたっていうのと関係あると思うな。こんな人がうちに来るわけないもん。大きなうちではないけど、でも2DK ぐらいの一軒家が庭にあったわけ。で、そこに一家でね、入ってたわけよ。でね、感動したのがね、大泉黒石が書いた『ロシア文学史』なんて読んでないでしょ？

松枝 少し読み始めたんですけど、まだ進んでいないです。

渡辺 あれの参考文献を見てごらん。参考文献の一番上に上がってるのがね、1860年代に出た、ピーサレフの六巻全集。ありえないよ、ピーサレフなんて読んだ人は日本にはいないと思ってたの。それが何とうちにいた大泉黒石のロシア文学史の種本で、一番最初に挙げてるんだよ。これは偶然じゃないよな。それはね、自分でも不思議だ。それで [池袋モンパルナスを代表する] 詩人の小熊秀雄（1901-1940）が亡くなったのはね、うちのすぐ斜め前のアパートなんだよ。ってことはね、大泉黒石と小熊秀雄なんかもね、大泉黒石って人は非常にアナーキーな人だからね、付き合いがあったと思うんだ。うちの斜め左はさ、熊谷守一先生（画家、1880-1977）。知ってるかい？ 洋画界の仙人と言われた。彼が我が家の前にいてさ。そこら中がアトリエだらけだったんだよ。

昔のことをよく思い出すんだよ。そういえば、僕は工場で働いていた頃も「ひでえ工場だな」と思いながら、でもナロードにはなりたくないみたいな気持ちもあった。「まーちゃんは学者」って子供のときに言われていたから。その時は意識していなかったけども。でも、ただのナロードにはなりたくないと思ったわけ。

ところがね、これまた変な話だけど、250年前の僕の先祖がね、残した書き物があるんだよ。でね、その人はね、会津藩の出身で、会津から新潟の南魚沼郡に入って、それで土民になることを潔しとせず、つまりナロードになることを潔しとせず、修験道に励み、亡くなったとき門弟 250人って書いてあんのよ。小説みたいなものも書いてるんだ。「おー、修験道か」って。僕も修験道って興味あ

るし、そういえば京都のときいつも谷川の水に打たれて修行みたいなことをしてたなと思ってね。だから、インテリゲンツィアとナロードっていうのは僕自身のテーマでもあったわけ、ずっと。ピーサレフなども普通のインテリを批判したわけ。インテリゲンツィアは、自分のエゴイズムを見せてないだろう、と。そんな知識があっても、大した知識じゃないと。インテリゲンツィアは本当のインテリゲンツィアになってない。だからこそ、ナロードのことなんか分かりやしないし、ナロードの啓蒙もできないと。ナロードのことは今は忘れろってピーサレフは言ったわけ。お、すげえと思ったわけよ。

松枝 逆説的ですよな。

渡辺 で、ピーサレフすごいなと思って。それでだから2年間位はね、2年半かな、ピーサレフに惚れてましたよ。それで、初めて生きた文章というか、文体がわかるような文章に出会って。

一橋大学大学院での日々

松枝 東京外国語大学から一橋大学大学院に進学されるきっかけは何かあったんですか。

渡辺 経済学をやっていたから、僕の卒論のテーマは「社会主義における労働に応じた分配について」というの。

松枝 まさに経済学ですね。

渡辺 そう、その頃ちょうどソ連が経済改革で利潤論争を行っていて、それで利潤だなんていう資本主義の概念を導入しちゃいけないっていうのと、いやそうしないと能率が上がらないっていう議論があったわけ。で、僕はそれをね、方法的には初期マルクスの疎外論をもとにしてさ、そういうことをやったら、労働疎外っていうかそれが起きるんじゃないかと、ソヴィエトを批判するような論文で。経済学で卒業論文書いて、我々は卒業がね、5年目の6月。6月30日に卒論書いた段階で卒業証書が送られてきたわけ。僕はもう5年目は一橋の授業に行ってたんだけど。ところがつまんなかったのよ。経済学のゼミがね、先生方もね。一生懸命文献読んでるんだけどさ、全然読めてないのよ。というか、外語からすると、全然違うよっていう感じで、「こんなのやってたら駄目になる」と思っ

ていたんですよ。そのときに一緒に入ったのがね、2年前に亡くなった佐々木照央（ロシア思想史研究者・エスペラント研究者・翻訳者・埼玉大学名誉教授、1946–2023）。彼から外語大でロシア語を習っただろう？

松枝 はい、習いました。

渡辺 佐々木照央もいい加減なやつで（笑）。とにかく僕が蟹工船乗って帰ってきた後、彼はバレーボール部のキャプテンだったのね。それで大学行って夏休みにたまたま彼に会って、彼は「渡辺先輩、どうするんですか？」って言うから、「僕は一橋の大学院に行くよ」って、進学を決めてたから。そしたら彼がさ、「僕も。僕も行くよ」とか言い出してさ。そしたらこれとこれとこれ、参考書読めばわかるからさ、と。それで1か月ぐらい勉強して、二人とも受かったわけよ。

渡辺 佐々木は金子幸彦さん（ロシア文学者・翻訳者、1912–1994）のゼミに入って、ラヴロフをやるって決めてたの。僕は経済学やるというので、岡稔さん（経済学者・一橋大学教授、1924–1973）のゼミにいたわけ。

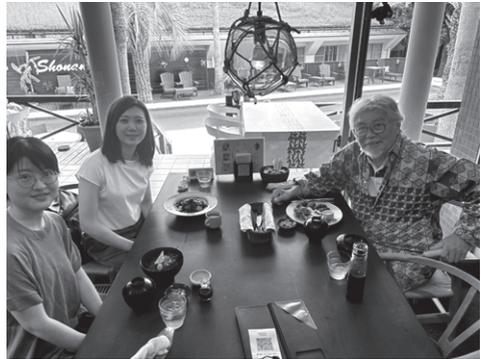
畔柳 どなたですか。

渡辺 岡稔さんてね、早死にしちゃったけど。その道の学者として立派な人だったけど、つまんなかったんですよ（笑）。で、その頃、神保町に日ソ図書って本屋があったの。そこで本を見てるときに野村さんっていうね、非常に本のことよく知ってる人が店員でいたわけよ。それで僕より1年下で小泉猛（ロシア文学者・翻訳者、1946–1980）っていう、亡くなっちゃったけど、ドストエフスキの『罪と罰』を訳した人。小泉猛、この2人で、それでいや実は、神保町のね、〈さぼうる〉っていう喫茶店、有名な喫茶店があるでしょ。そこで明治大学の人が何かピーサレフっていうのを読んでるらしいですよって聞いて。彼らに「行ったらどうですか」って言われて、僕はピーサレフの名前も知らなかったわけよ。60年代のニヒリストなんて全然知らなかったんだけど、ちょうどその頃、ピーサレフの四巻本が出たわけ。

松枝 そうなんですね、それはモスクワかどこからですか。

渡辺 うん、モスクワから。で、その四巻本もあったから、それを買って、それを持って翌週ぐらいから、〈さぼうる〉に行ったわけ。〈さぼうる〉に行くと、初老のジェントルマンが座ってて、その周りに2人若い学生がいるんだよね。それ

でピーサレフを原文で読んでるわけよ。その先生は小西善次（ロシア経済社会思想史研究者、明治大学商学部教授）っていう魅力のある人だった。当時60歳過ぎてたね。明治大学商学部の教授だったんだけど、第一次世界大戦の前にヨーロッパに留学して、それで10年位ヨーロッパ放浪してて。だからロシア語もチェコで習ったっ



（右から）渡辺雅司先生、松枝、畔柳

て言ってたかな。その頃、内村剛介〔内藤操〕さん（ロシア文学者・評論家、1920–2009）が当時『状況』とか『思試』という雑誌を出しててさ、そこに対談とかでその先生出てるわけよ。彼は目の付け所がいいの。内村剛介さんともずっと対等に議論してたんだからね。内村先生の名前をいつも「内山くん」と言ってたんだけど。

それで初めてピーサレフの『父と子』論を読んで。僕はもう1行読んで惚れちゃったのよ。つまり経済学のおもしろくないロシア語を読んでいた頃に、1860年代のニヒリストと言われて、文体の素晴らしいロシア語を書いて、しかも当時のアカデミズム批判というか、インテリゲンツィア批判を展開しているね、ピーサレフの文章に本当に惚れちゃったのよ。「あれー、こんな文章今まで外語でも読んだことないぞ」と思ってさ。それで次回から読書会に出させてくださいと言って、小泉さんと僕は出るようになったわけ。

一橋大学大学院・神保町での読書会：江川卓先生と翻訳の逸話も交えて

渡辺 当時僕は一橋に入ったけど、外語の卒業は6月だから1年は棒に振らなきゃいけなかったわけ。

畔柳 どういうことですか。

渡辺 院は前の年に受けて、受かって待っていたわけよ。だから4月に卒業で

きないから卒業証書をもらえない。6月に一橋大に行ったら、学生主任の先生が来てさ、「君たちには悪いけど1年棒に振ってもらうよ」って言われたわけ。だから僕は迷う時間があったわけ。で、その頃、佐々木照史の大学院の寮に、長縄[光男]さん（ロシア思想史研究者・横浜国立大学名誉教授）始め、一橋の金子幸彦ゼミの連中が皆集まって、読書会やってたわけ。

なぜ皆が集まったかという、金子幸彦さんが一橋の前期部長という役職になっちゃって、授業がなくなっちゃったんだよ。そうすると、学生たちとしてはさ、当局側の人間の授業は取れないと皆ボイコットしたわけ。でもロシア語はやらなきゃ駄目だから、長縄さんがその時はドクターの1年生だった。それで何読んだかっていうと、チャダーエフの『哲学書簡』。それから当時左近毅さん（ロシア文化史・思想史研究者・大阪市立大学名誉教授、1936-2002）がね、バクーニンの著作集を翻訳して、その下訳みたいなのを任されて、みんなで毎週やってたわけ。だからかなりの分量を毎回読むことになったわけね。

それで、外語から行った僕と佐々木はさ、一応出来たんだよ。一橋の連中はあんまり細かくできているとは言えなかった。かなり出来てたんだけど、でも時々間違いがあるとすぐ我々がさ、「そこは違いますよ」っていうふうに言うもんだから、彼らもさ、ちょっとショックを受けたんだけど。びっくりしたのは、長縄さんがね、毎週僕たちがいろいろ文句言って直させるでしょ。そうすると1週間後には見事な日本語に訳してくるのさ。「これが一橋だ！」と思った。外語だったらただ訳したらいいけど、それを見事な日本語に訳してくるわけ。「いやーすごいな」と思って。それでも我々のインパクトも強かったと思うんだ。両方で切磋琢磨してさ、それでできるようになったと思う。

僕は全く「遅れてきた青年」だからさ、ロシア思想史なんて知らないわけだよ。早くロシア思想史をある程度全体を知りたいと思って。当時アカデミーから出た哲学の叢書みたいのがあった。それを毎週、先輩たちを集めて僕は一章ずつぐらい読んで要約して。それを何十ページもだよ、僕はいっぱい読まなきゃいけないと思ってたから、みんなにそれを発表してたわけね。今思えば何も分からずに、18世紀からずっとやってたわけで、一遍にロシア思想史を俯瞰するっていうかさ、そういう作業をしてたわけね。

そのうちにさっき言った小西さんとの〈さぼうる〉での読書会も、明治大の私たちは卒業していったり、1人は北大に行ったりなんかしてね。いなくなって、結局僕と小泉さんと先生。先生もそのうち定年になっちゃって、金沢商科大学の教授になったんだけど、その後ね、やっぱり神保町のちょっと大きな喫茶店で僕は読書会を始めたわけ。それでピーサレフを読んだりしてたけど、そこに多いときは20人集まったかな。

松枝 その20人の方々はどこから……？

渡辺 外語とか東大とか、大体、留年してる連中、全共闘で卒業できなかった連中、それから東大の露文の連中。あと、安藤君って知ってるかな？ 最近ポーランドから賞をもらったんだけど、安藤厚（ロシア・ポーランド文学者・北海道大学名誉教授）ってね、安藤君も毎回出てたかな。それは何を読んでたかっていうと、途中からね、イワノフ＝ラズムニクっていう人の『ロシア社会思想史』っていう全2巻の本があるのね。それをひたすら読む。

松枝 ひたすらですか。

渡辺 ひたすら読むっていうかさ、そういう読書会やると、議論ばかりやってね、テキスト読まなくなっちゃうことがあるのよ。僕はやっぱりテキストが大事だと思うんでね。「予習してくれたら、僕1人でやるから」って僕は1人で1回4時間ぐらいだね。1時から始めて5時ぐらいまで。だから20ページは読んだかな。しかもそれは僕は予習しないで行ったの。予習しないでやろうと。

畔柳・松枝 いきなりその場で読んで！

渡辺 初見で。その緊張感が何とも言えなくてね。初めはもちろん、多分わからないけどこれ何だっけって聞くんだけど、そのうちに勘がよくなってきて、ほとんど辞書を引かないでも済むようになったのよ。それがだから修士2年目ぐらいのときだね。それで早く読むのと単語覚えるのが一緒になったから、自分でも読めるようになったなーと思った。

その頃、江川卓さんに頼まれて翻訳をしたことがあるの。これはプロレタリア文学全集か何かの、プロレタリア文学資料集かな。三一書房から出たやつ翻訳だったんだけど。翻訳終わったらさ、江川さんがね、「おたく、翻訳うまいね」って言うんだよ。

松枝 いやすごい、江川先生にそう言われるのは。

渡辺 すごいでしょ、「おたく」って言うんだよね。「おたく、翻訳うまいよ」って言うんだ。ただ「文章は古風だね」って言うんでね。「何で古風かな」と思ったんだけど、たしかに僕は文学も何も読んでなければ、とにかく子供のときは浪速節で育ったんだから。そういう浪速節とか講談の口調でさ。これが好きでね、今でも浪速節できるんだけどさ。「翻訳うまいよ」って言われたらね、自信持つじゃないですか。そうかと思ひながら、なんでもかなと思ったら、学部の頃から刀江書院ってのがあって、ちょっとなんか変わった本屋でさ、要するにソ連からお金をもらって、ソ連で出た本を下訳させて活字にしてたわけ。もう原稿用紙 400 字 1 枚 100 円とかさ、それぐらいの金額で、でもものすごい何千枚って翻訳をしてたんだ。

松枝 学生に下訳させていたんですか？

渡辺 学生だった僕と小泉さんの 2 人だけ。それで何冊か本になってるよ。『レーニン亡命記』っていうのが上下 2 巻で、それから『ソ連対外政策史』。これはハードカバーのでっかい本で。そんなの訳してたから、あと英語も翻訳したりしてたかな。だから翻訳には慣れてたんだけど、でも江川さんに褒められてね、もうその頃ちょうど僕は「ピーサレフを訳さないか」と言われてるのにさ、なんで訳さなかったのかなと思ってね。あれは訳していたら、今ごろ稀覯本になってたよ。てなわけで、だから学校じゃない読書会が僕を鍛えたかな。

畔柳 あの、金子幸彦先生からの影響というと……。

渡辺 もちろん、もちろんある。それはもうちょっと後のこと。だからつまり我々はね、修士の頃はさ、金子さんの授業を拒否してたわけだよ、当局側の人間だからね。それで授業はなかったんだけど、バリケードが解けて。学園紛争のことは分からないと思うけど、東京外語はかなり「重症校」だったの。僕が一橋に行った頃、5 月ぐらいで東京外語がもうロックアウトされて、その年の秋ぐらいから授業が始まったのかな。一橋に行った頃、遅ればせながら一橋がバリケードストライキになってた。

松枝 あ、一橋のロックアウトは遅かったんですか？

渡辺 そう、あそこは民青系が強くてね。

金子幸彦先生の思い出

渡辺 金子先生はね、もう僕がドクターに行く頃はさ、定年まで2、3年だったんだよ。一応ゼミはやるんだけどさ、そのうちすぐ「渡辺くん、お茶飲みに行かない？」って言うんだよね。「いいですよ」って、お茶飲みに行く。お茶飲みに行く間……ロージナって知ってるかな？

松枝 はい。

渡辺 うん、ロージナっていう有名な喫茶店があったんだけど、そこに行くまでの間、僕はその週に読んだ思想史の研究書、1冊ぐらいつつも読んでたから、読んではそれを先生に話すと、先生が嬉しそうな顔をしてね、僕の話聞いてるんだよ。それがあからさ、義務じゃないんだけど、毎回読まなきゃと思ってさ、読むようになった。だから恐ろしいぐらいの量は読んだかな。そのときはまだマヤコフスキー学院で教えてた。

松枝 あ、そうなんですな。

渡辺 今でも思い出すんだけど、その初中級から初級に降りたことがあったわけ。そのときはなんと江川卓さんと僕が初級を教えてたの。僕さ、江川先生ってそんなに偉い先生だってことも知らないからさ、平気で教えたんだけど、考えてみりゃね、江川さんはもうものすごくロシア語ができる人よ。そこにはね、東大の露文科の連中が2、3人来てた。

松枝 その頃のどなたかは、例えば今ロシア文学会の中にいらっしゃいますか。

渡辺 いない。1人はね、『中央公論』の編集長になった人がいたかな。3人位いたね。それで当時、初級に20人位いたよ。1人はね、長與〔進〕くん（スロヴァキア研究者・早稲田大学名誉教授）って知ってるかな？

松枝 あー、長與先生ですね。

渡辺 長與くんの奥さんは容さんといって、ポーランド文学やってる。彼女が初級にいた。だけどつくづく思ったけど、東大の連中は皆頭よくて、すぐに理解しちゃうんだけど、マヤコフスキー学院はというと、勤め人で夜来る人が多かったわけで、文学好きで。そういう人たちの方が読みが深かったね。ちょっとやると、語学的にはそりゃ東大の奴の方ができたかもしれんけど、あーやっぱり深い読みをしなきゃ駄目だなというふうになるようになったのも、マヤコフスキー学

院だね。そう、教えるようになって初めて、あ、そういうふうには読むんだって。

で、そういう訓練を一橋とは別のところでやって。一橋でもやったけど、金子先生に習うようになってからさ。そのうちに、僕は結構深読みするんでさ、それで今でも覚えているよ。先生が何か訳したんだよね。そこで「先生、そこちょっと違うんじゃないでしょうか」って言ったの。そしたらキツとした顔されてね。「何を言ってるんだ」という顔で、僕を見たの。「いや、ここは文法的にそうかもしれないけど、前後関係見るとそうじゃなくてこうじゃないでしょうか」って言ったら、「おい、君にはもう敵わん」と言ったの、先生が。それで「お茶飲みに行こう」って（一同、笑）。

深読み、深読みってあるじゃない。ただ語学的に読めばいいんじゃないくて、裏の裏を読むっちゃうかな。そういう読み方を普段からしていると、講読の授業でもさ、「先生、それ違うんじゃないですか」って言ったら、先生も初めてドキツとしたのね。「俺が間違うわけない」と思ったんだろうけど。うん、でも確かにあれはカチンと来たと思うんだけど、そういうふうになって、「先生、そんな早くもう参ったなんて言わないでくださいよ」って言いたかったんだけどさ。だから僕はもうほとんど最後のゼミ生に近いんだけど、非常に可愛がられたね。一橋ではね、伝説になってるよ、金子先生が僕に参ったって言ったの。そんなことも言われてみると、それに見合うように勉強しなきゃと思うじゃない。

だからそもそも原さんには間違って「お前はできる」っていうふうには伝わっちゃって。だからそう、その一つは黒澤明の通訳もしろと言われて、『デルスウ・ウザーラ』の。だってできるわけないのにさ。助監督はね、原さんと高校が一緒なんだよ。それでね、「お前やれ」って言われて。もう最終シナリオの作成をロシア人の作家とやったんだよね。だからいろんな仕事を与えてくれたよ。必ず僕か佐々木〔照央〕に割り振ってたわけ。佐々木は外語でロシア語がよくできたし、喋りもうまかったから。

真のインテリゲンツィアに会う：安井侑子先生との結婚、侑子先生ご一家との交流

渡辺 女房に出会ったと言いましたよね。一方で、ロシア手帖の会はずっとやっ

てたわけね。それで、講演会があって15回終わったときに打ち上げがあったわけ。打ち上げのとき僕は受付やってたらね、そこに病み上がりのうちの家内がね、来たのよ。1年半ぶりぐらいに僕は会ったわけ。ずっと病氣療養してたからさ、甲状腺が悪くて。それで、「安井さんですか」って言ったのを覚えてますよ。その頃、僕はその無銭



渡辺先生が会った頃の安井侑子先生

旅行なんかをして真っ黒でさ、日に焼けて。終わった後ね、さあ打ち上げだって言うんで、原さんや江川さんたちがさ、ガンガン酒飲み出したわけ。うちの女房、その頃ね、マカロニって言われたの。元の亭主がさ、イタリア人の映画監督なんだよ。モスクワの映画大学に来てた [アンドレイ・タルコフスキー監督] 『ノスタルジア』の助監督だよ。イタリア人の妻だから、マカロニって言われてたわけ。まだ離婚してなかったと思う。それで原さんが僕のあだ名を付けたら、マンダムなんだよ。

松枝 マンダム!?

渡辺 分かる? マンダムって、チャールズ・ブロンソンが出ていた整髪料のCM。たしかに僕はちょっとマッチョだったと思う。日本ロシア文学会の会員にしては珍しく、ちょっとがっちりしてたわけ。で、原さんが女房に「マンダムの隣に行け」って言うんだ。なぜかというと、僕がその直前にね、日ソ親善協会ってところの留学生試験を受けたわけ。それで受かってたんですよ。僕はレニングラード大学の大学院に5年間行くっていう風に申請してた。レニングラード大学に行くつもりだったの。ところがね、パスポート取って、待っててくれと言われて、待てど暮らせど返事がない。それで9月か10月かな、「あの話はボシャっちゃいました」って話が来た。つまり留学するからもう修士論文を書かなくていいと思ってたわけ、僕は。「もう5年間日本を捨てるんだ」と思っていた

わけでしょ。留学することになってるから、女房にね、隣に行って話してやってくれって原さんは言ったわけ。え、おかしいと思わない、それ？（一同、笑）

それでなおかつね、それから半年ぐらいで結婚することになったんだけど、なにしろ安井の家に行ったらね、お父さんとお母さんが待っていて、お父さんとはいつもネクタイしてる人で、隣でニコニコ笑ってる、非常に気品のある奥様がいたわけ。なんで笑ってるんだろうと思ったらさ、なんと僕が留学を決めるときの審査員の中に着物着た中年の女性がいたんだよ。それが女房のお母さん。僕は狐につままれたよ。

松枝 まさかそこで再会するとは思ってなかったんですね。

渡辺 ね、仕組まれたみたいじゃないの。留学が駄目になって、で、結婚することになって、結婚させてくださいって行ったらさ、お母さんがいるなんて信じられないよ。それでお父さんってのはすごい堅い人だからさ、書齋に通されてさ、僕に試験するわけよ。「君、今の中ソ論争をどう思うか、5分以内で述べたまえ」って言うんだ。

松枝 ちょっと何かまた別の試験が始まるんじゃないか……。

渡辺 とんでもないことを言う人がいるもんだなと思って（笑い）、わけわかないで何か喋ったと思うけど、試験に合格したんでしょう。あんまり生意気なこと言わなかったから。安井郁って人は、これは大変な人だけど、彼の口癖はね、「インテリになってもインテレになるな」と。

松枝 インテレ、ですか？

渡辺 インテリは本当のインテリにならなきゃいけない。インテレって、要するにジャーナリズムの中でペッペッて書く人、そういうふうになっちゃいかんと、だから女房なんかも気をつけないと、『中央公論』なんかでデビューしてさ、物書きってということで、付き合った連中も作家や評論家とかそういう人たちと付き合い合ってたから、あのそういうジャーナリズムに乗るなっていうのが、お父さんの心情だったんだね。だから僕はきつとその中ソ論争について、ペラペラ喋らないで訥々として何か喋ったから好感を持ってくれたのかな。とにかく、安井郁さんっていうのはね、あれは本当のインテリだよ。もうクラシックについては、音楽評論する人だし、それからキリスト教と仏教についても詳しい人で、それで原

水爆禁止運動をやったわけでしょ。それでドストエフスキーなんかもすごく読んでてさ。最後は病気になる時はね、もうゾシマ長老になりきってんだよ。僕をアリオージャだと思ってね、「アリオージャよ、よく来た」とか言ってね。病院行くたびにさ、深い話をしてくれたまえっていうんだよ、もう怖くなっちゃうよね（笑）。

畔柳 何か他にロシア文学について、安井郁さんと何かお話されたことなどはありましたか？

渡辺 あるね、うん。ドストエフスキーと、それからプーシキンとトルストイかな。結構日本語のがっちりした翻訳を持ってたから、かなり読んでたと思うんだけど。結婚してみたら全くそのものズバリのインテリ家庭に入っちゃって、「おいおいおい、こういう世界があるんだ」と。食べ物も違うな（笑）。戦中にね、うちの家内がまだ4歳位の時に、東大の国際法のゼミ生皆集めて、シューベルトの《冬の旅》をね、お母さんがピアノを弾いて、ドイツ語で歌ってたりした家だからね。そこに女房が1人いてさ。そこで育った人なんだよ。

それで女房はお茶大に行って演劇やってテニスやってさ、東大や他の大学の連中と付き合っていたし、その後も俳優座とも。加藤剛（俳優、1938–2018）とか知ってるかい？ あと中谷一郎（俳優、1930–2004）っていうのは、風車の弥七。彼も俳優座、あと栗原小巻（女優）。それから『上海バンスキング』って戯曲を書いた斎藤憐（劇作家、1940–2011）。ゴースト『小市民』を翻訳して、それで日本中を公演するからって、彼女はずっとくっついてたから、役者とか自由な世界が好きなのよ。

それで結婚してからもね、うちの中で、ナロードとインテリゲンツィアの論争を。僕の生まれ育った環境はナロードなんだよ。うちの女房はやっぱりどう見てもインテリゲンツィアなんだよ。アリストクラートなんだよ。食べ物も違うし、行儀作法も違うし。北海道にいたときに、ニセコかどこかに行ってね、原生林を見てるうちにさ、「いやあ素晴らしいな、原生林っていいな」って言ったらさ、「何がいいの？」って言うわけ。「文化の匂いがしない」って言うわけ。

松枝 インテリゲンツィアなんですね。

渡辺 だから僕は原生林が素晴らしいと言ったんだけど、やっぱり彼女にとって

は里山の方がいいわけさ。文化の匂いがしないのは、それが文化論争になっちゃうわけよ。それで1時間位論争するんだからね、うちの息子はたまったもんじゃないよね。そういう意味では、侑子と結婚してやっぱりインテリゲンツィアって何なんだろうって考えさせられたね。彼女のことを批判しつつ、やっぱり「すげえなあ」と思うことはずいぶんありましたね。それに恐ろしいことをしちゃうわけよ。例えばソルジェニーツインの『ガン病棟』の原稿を持ち出したのはさ、彼女なのよ。

松枝 そうでしたね。

渡辺 自分で写真撮って……。写真なんか撮ったことないんだよ。それを友達の一瞬レフ借りて、モスクワ大学の寮を真っ暗にしてさ、何千枚も撮って、それをこっそり持ち出したわけ、ナホトカから。それで出版社が取り合いになってさ、小笠原豊樹〔岩田宏〕（詩人・作家・翻訳家、1932-2014）が訳すことになったわけよ。

だからそういうことができちゃうっていうのはね、肝が座ってるっちゅうかな。だからモスクワの詩人のサークルに入っても、彼女は堂々としてたと思う。全然動じないっていうかさ。それがすごく信用されたんじゃない？「あれ、なんだこの人は」って。つまり当時の詩人たちってのは、ものすごいスーパーヒーロー、ヒロインだよな。そういうところ入って、普通はまともに喋れなくなっちゃうと思うんだけど、彼女は堂々と喋ったんじゃないかな。プラート・オクジャワ



プラート・オクジャワ
(1996年、ご自宅で)

(Окуджава, Булат Шалвович, 詩人・シンガーソングライター、1924-1997) も本当に信用してくれて、オクジャワが日本に来たのも、侑子が電話したからなんだよ。「絶対飛行機に乗りたくない」って言うのに、レコード会社が呼ぶって言うんで、頼まれて別荘に電話したのね。そしたらプラートが出てきて、「俺は飛行機乗れないって知ってるだろ？ 一つだけ条件がある」オーリヤって彼の奥さんなんだけど、「オーリヤも行けるのか？」で、「もちろんで

す！」って言ったら、即 OK になって。で、それで来てくれたから、オクジャワが来たときはずーっと付いてまわったんだよね。

松枝 オクジャワが来日したのは何年でしたっけ？

渡辺 1989 年かな。ちょうどペレストロイカの頃。

モスクワの詩人・作家・知識人たちとの思い出 (1)

渡辺 侑子はロシアにいた時にも、映画大学の連中と付き合ったり、それからブラート・オクジャワやエフトゥシェンコ（Евтушенко, Евгений Александрович, 詩人、1933–2017）やヴォズネセンスキー（Вознесенский, Андрей Андреевич, 詩人・作家、1933–2010）や、それからベラ・アフマドゥーリナ（Ахмадулина, Белла Ахаговна, 詩人・翻訳家、1937–2010）。そういう連中のサークルにいつもいたからね。

そういうサークル入ると大変なんだよ。普通の留学生は無理でね。そうそう、《Мне двадцать лет》って映画、知ってる？《Застава Ильича》ともいう。詩の朗読会がメインで。それと同じことがモスクワ大学の旧校舎であったの、赤の広場の前のナショナル・ホテルのところの。で、そこでもやってたらしくて、それで女房がそこに行ったときに、切符がなかったらしいんだよね。それでアクシヨーフ（Аксенов, Василий Павлович, 作家、1932–2009）、アクシヨーフは昔から友達だったんで、アクシヨーフがさ、「切符どうした？」っていうから「ない」って言ったら、「じゃ、来い」って言って、舞台に乗ったらしいんだよ。で、なんとそこにはね、ヨシフ・プロツキー（Бродский, Иосиф Александрович, 詩人、1940–1996）がいたんだよ。エフトゥシェンコがプロツキーを流刑から連れて帰ったの。最初の晩、「エドウィン・ダンに捧げるオーダ」っていうのを読んで、その後皆集まってさ、モスクワじゅうを飲み歩いて、酔っ払って。それは、女房の『青春・モスクワと詩人たち』っていう本の中になんか出てくるんだけど、そういうのがあったもんだから、皆から信用されてるの。

じゃあ、なぜエフトゥシェンコと知り合ったかっていうと、これは歴史が古いんだよ。1965年に日ソ作家シンポジウムってあったわけ。それで原卓也さんとうちの女房が通訳やったらしい。そのときの代表団長が長谷川四郎さん（作家、

1909-1987)。副団長がね、中村真一郎さん（作家・文芸評論家・詩人、1918-1997）。で、島尾敏雄（作家、1917-1986）もいたわけ。そのようなメンバーがいて、そこで通訳をやってるっていうんで、結構評判になったらしいんだけど、それで、女房はその舞台上って、そのときの Вечер поэзии は熱狂的だからね。それで、もう朝までみんなで飲み歩いて、最後は空港まで行ったって言うんだよね。まさに青春だったんじゃないかな。ベラ・アフマドゥーリナはね、6月の末なんだけどさ、平気でモスクワ川の上流の方でね、裸になって飛び込んで泳いじゃったっていうんだよ。信じられないよ、モスクワ川なんて冷たいからね。それを追っかけて、プロツキーが行ったっていうんでね。そしたら元の亭主だったエフトウシエンコがね、「Без романса!» って叫んだらしいんです。

松枝 «Без романса!» いいですね。

渡辺 もう、めちゃくちゃだよ。流刑から帰ってきて痩せ細ったプロツキーがね、モスクワ川の中をさ、ベラを追ってさ、泳いで行っちゃうのは、ロシア人だねえ。でもね、女房はそれを本に書いてないの。まだね、プロツキーのことを書くのはちょっとやばかったから、あの頃は。

畔柳 裁判になるということで……。

松枝 書けなかったんですね……。

第二部（渡辺雅司先生のご自宅にて）

日が傾きはじめる。秋の涼風を感じながら、渡辺先生のご自宅の庭でインタビューの後半を行った。

モスクワの詩人・作家・知識人たちとの思い出 (2)：札幌大学時代にモスクワへ

渡辺 とにかくね、うちの奥さんが、ロシアから帰ってきたのは、1967年位かな。それから我々は札幌行ったりしてて、札幌のときに一度、どうしてもロシア [当時はソ連] 行きたいっていうんで、1977年に1人でロシアに行ったんだよ。1ヶ月ぐらいかな。その翌年、初めて学術振興会海外特別研究員で。僕と和田春樹さん（歴史学者・東京大学名誉教授）と藤本和貴夫さん（歴史学者・大阪大学名誉

教授、1938–2025）と伊東孝之さん（国際政治学者・北海道大学名誉教授・早稲田大学名誉教授）が、第1回派遣。僕はね、1978年だけど、7月に行って11月に帰ってきちゃったの。

松枝 あ、そうだったんですか。

渡辺 なぜかっていうとね、札幌大学だったでしょ。それでもう女房は「東京に帰りたい、帰りたい」と言ったの。それで、これは1年留学行っちゃうとさ、その倍位いなきゃ、なかなか出れないじゃない。

畔柳 札幌大学から出られない、ということですか。

渡辺 申し訳ない、札幌大学に対してさ。当時だって札幌大学って定員65人だったんだけど、125人位いたのよ。それでもうものすごい人数を教えたわけ。先生は皆年取ってたから、僕がいなくなっちゃうとさ、これは困るだろうなと思って。だから4ヶ月だったら夏休み挟めば、そんなに負担はかけないだろうと、補講もできると思って、4か月にしちゃったわけ。もったいないことしちゃったんだけどさ。だけど、その年に行ったおかげで、ちょうどアクションノフが『メトロポリ』っていう検閲を受けない文集を準備してたの。

松枝 検閲を受けない？

渡辺 うん。普通は検閲を受けて、それでかなり厳しく削られるんだけど、アクションノフはついに我慢できないと。もうブレジネフの後期だよ。それで、自分の仲間を集めて、タイプ印刷の論集を出そうとしてたわけ。だからね、週末になると夜にね、ベラ・アフマドゥーリナのうちに皆集まるわけ。ベラ・アフマドゥーリナの家っていうのは、アルバート [通り] の近くのアトリエみたいなところがあるんだけど、ご主人がメッセレル（Мессерер, Борис Асафович, 舞台美術家）ってあってね。バレエのマイヤ・プリセツカヤ（Плисецкая, Майя Михайловна, バレエダンサー、1925–2015）のいとこなんだよね。それで画家で彫刻家かな。その人のアトリエに皆集まるわけ。夕方から集まってさ、夜中の3時ぐらいまで皆で飲んでるんだ。そこにもちろんアクションノフやヴォイノヴィチ（Войнович, Владимир Николаевич, 作家・詩人・劇作家、1932–2018）やら。初めて会ったベラ・アフマドゥーリナはまるで女優さんだったね。それであらゆる種類の芸術家が集まって、中にはアラブの石油王の息子とかさ、得体のし

れないのが集まってるわけ。もっとびっくりしたのは、内務省の結構上の方の、普通だったら、取り締まる方よ。そういう人までいるわけ。

それでね、その頃僕は2か月位向こうにいたから、ロシア語はかなり自由に喋れたし、95% ぐらいわかったのに、作家や芸術家が集まって仲間内の話をだしたらさ、途端に会話が分からなくなってきたわけ。難しいんだ。それでこれは飲むしかないと思って、ガンガン飲んで酔っぱらって、そのうちにエフトゥシェンコがさ、当時のイギリス人の奥さんを連れてきたの。当時エフトゥシェンコはもう、ちょっと体制側だというふうに見られていたわけ。ちょっとクレムリンに媚売ってる。だけど、エフトゥシェンコは夜の11時位に来ただけど、もう自分をこう、主張したくてしょうがないわけね。僕たちのことは紹介がすんでいたのにもかかわらず、また一生懸命に「マッサージとユーコは」って紹介するわけよ。みんなもうそっぽを向いてるのね。それはエフトゥシェンコがちょっと体制側、アンドロポフと近かったっていうのがあるんだよね。

それに対して反旗をひるがえしたのが、アクションノフで。それで『メトロポリ』っていうのは、その後、うちの女房だいぶ訳して何か雑誌に載せたな、その連中が集まってるからさ、緊張感が走っているんだよ。やっぱりもしこれが出たらきっと亡命しなきゃいけないだろうなというのは何人かいたわけだし、アクションノフは一番最初に亡命したわけよ。それでワシントン D.C. に行ったんだよ。それで、面白いのはね、夜中の3時近くまでさ、息子はもう遅いからアトリエで横になって寝てるわけだよ。さすがにもう帰らなきゃと思って、借りてるクヴァルチーラまでさ、息子を背負って帰ったらね、善良なソヴィエト市民の鍵番のおばさんに怒鳴られたな。「3時まで子供連れて何してんだい！」って。そりゃ確かににらまれることをしてたわけだけどさ。

それと同じ年にスフミに行ったわけね。ブブノワさん（Бубнова, Варвара Дмитриевна, 画家・美術研究者・早稲田大学・東京外国語大学講師、1886-1983）に会いに行ったわけ。それでそのときに、スフミに行く前にモスクワで付き合い合っていたのが、レフ・コーペレフって知ってるかな？ レフ・コーペレフ（Копелев, Лев Зиновьевич, 作家・ドイツ文学者、1912-1997）ってね、ソルジェニーツィン（Солженицын, Александр Исаевич, 作家・劇作家・歴史家、1918-

2008)の親友で、『煉獄のなかで』の主人公の1人なんだよ。ドイツ文学者で、人権活動家でね。のちに西ドイツに亡命したんだけど。その人がたまたまスフミにいて、それでちょっとお前たちが泊まってるホテルに友達いるから、明日行くから会わせるからって言うの。

うちの女房は勘がいいのよ。「友達……。サハロフ (Сахаров, Андрей Дмитриевич, 物理学者・政治家、1921-1989) かもしれない」って言うわけ。それで「まさか!？」と思ったわけ。最後にゴリーキー [現在のニージニー・ノヴゴロド] に流される直前だからね。そしたら我々がコーベレフと食事して帰ってきて、階段登ってそこをうちの息子がちっちゃいから先に踊り場に上っていたわけよ。そしたらね、背の高いおじいさんがね、じーっと見てるわけ、うちの息子を。そしたらうちの女房が「サハロフさんだ」つつって、案の定、翌朝会ってみたらサハロフだったの。そこから帰って、サハロフはゴリーキーに流刑になっちゃったわけ。だから最後の自由な時間だったのかな。

それとファジリ・イス칸デル (Искандер, Фазиль Абдулович, 作家・詩人、1929-2016)。ファジリ・イス칸デルはスフミ出身でしょ。彼とも3日位そこで一緒に飲んだかな。それで数年前に彼は亡くなっちゃったんだけど、ブラート・オクジャワの家で会ったのが最後だな、Переделкино 行って行ったことある？

畔柳 いえ、行ったことがないです。

渡辺 今度ロシアへ行ったら、ぜひ行った方がいい。ペレジェルキノっていうのはさ、作家村なのよ。Киевский вокзал から、鈍行に乗かって9つ目の駅なんだよ。無人駅で。降りると、修道院があって、ちょっと歩いていくと、村の墓地があるわけ。その墓地で有名っていうと、パステルナークの墓がある。マルシャークの墓とか、それからタルコフスキーの墓とかがあってね。そこは森の中っていうか、道



Ф. イスカンデルと渡辺先生 (1996年、モスクワ)

を歩いてると、いろんな作家や詩人にばったり出くわすことが多いわけ。今、ブラート・オクジャワのダーチャは、やっぱり музей になってるわけ。毎週土曜日になると、ニキーチン夫妻とかいろいろ来て、コンサートやったりするんだよね。コンサートのあと、飲み会になるわけよ。そこにファジリ・イスカデルも、それからジェーニャ・レイン（Рейн, Евгений Борисович, 詩人・作家）って知ってるかな？ 知らないな。ジェーニャ・レインってのは、アフマトワの弟子が何人かいるんだけど、そのうちの 1 人なんだよね。ジェーニャ・レインとか、エフトゥシェンコも来たな、奇抜な格好をして。いろんな人が集まって飲み会になるわけ。

[この後モスクワのウクライナ・ホテルのエフトゥシェンコフロアで半年過ごした時の写真を交えた回想をうかがう]

一橋大学大学院でのロシア思想史研究から：チェルヌイシェフスキーとマルクス

畔柳 金子先生は授業ではどういうものをお読みになってたんですか。

渡辺 そのとき読んだのはイワン・キレーエフスキーだったかな。そのときいたのが関啓子（教育学者・一橋大学名誉教授）って知ってるかな。一橋で教育学かなんかやってた人だけど。一橋にそのまま残ったんだよね。あと研究者になったのはいなかったかな。

松枝 みなさん修士で終わられてるんですか。

渡辺 修士で終わった人が多いね。

松枝 ああ、そうだったんですね。

渡辺 まあ実はね、ピーサレフを修士でやって、博士課程ではさ、チェルヌイシェフスキーをやったわけ。チェルヌイシェフスキーをやる以上はちょっと面白いアプローチをしようと。それはチェルヌイシェフスキーとアジアだって思ったの。チェルヌイシェフスキーの共同体論のなかにおけるアジア認識っていうので書いたの。これはね、意外とロシアでも評価されたと思うよ。

それで、つまり、今問題になってるあの、斎藤幸平くん（哲学者・東京大学准

教授) のヴェーラ・ザスーリチの手紙 [〈「ザスーリチ宛ての手紙」の再考〉] で、晩期のマルクスがね、共同体の意義に着目したと。で、それをいうんだったら、もうちょっとね、その種本というかさ、彼は読んでないと思うけど、マルクスはチェルヌイシェフスキーの共同体論をナロードニキを通して知るのよ。で、それでマルクスはロシア語を始めるわけ。だからマルクスが共同体全般についてそう思っていたのか、それとも、チェルヌイシェフスキーが分析したロシアのミール共同体なのか……。なんていうかな、斎藤くんは極端に生産力視点っていうのは否定しようとするけど、生産力視点がないと。例えば、ゲルツェンは“Россия”っていう 1850 年の論文で、社会主義とは民衆の伝統的な習俗プラス西欧の先進的な科学だって言ったわけ。問題は、先進的な科学っていうのは、技術なのか、それとも個の自覚とか、市民社会的なものなのか、分かれちゃうじゃない。かといって、民俗学の研究者がやるような感じで、エスノグラフィーとして共同体を再評価するっていう立場もあるけど、それだけでいいんだろうかっていう。チェルヌイシェフスキーは、「いや、ミール共同体の中には、生産力的な意味でも、十分資本主義に負けないだけのパワーがある」って論証しようとしたわけ。だから、斎藤くんとは議論が分かれるよね。斎藤くんは、マルクスの生産力や成長よりも、もっとエコロジーとかのほうになっちゃってるけど、ちょっとね、ほんとにかよって思っちゃうんだよね。

松枝 多分、ロシア思想史に即して言うと、そういう話にはならないかなと……。

渡辺 多分ね。だからそれを一般化しちゃうからさ。共同体全てがそうかっていうと、そうではないんじゃないかという気もするんだね。

[以降、у меня есть という表現を入り口にした、ロシア的思考におけるアジア的なものとヨーロッパ的なものの関係性が話題になる]

メーチニコフについて

渡辺 あ、そうだ、金子先生についてももう一つ言わなきゃ。メーチニコフ (Мечников, Лев Ильич, 革命家・地理学者、1838-1888) だよ。メーチニコフを僕

に与えてくれたのは金子先生だよ。

松枝 ええ、そうだったんですか、それは初めて聞いたかもしれないです。

渡辺 そうかな。1996年にロシアにいたときにね、ちょうどユーラシア主義のリバイバルが始まったわけよ。それで、トルベツコイ（Трубецкой, Николай Сергеевич, 言語学者・哲学者、1890–1938）とかサヴィツキー（Савицкий, Пётр Николаевич, 地理学者・経済学者、1895–1968）とか、いろんな本が一挙に出だしたわけ。それで僕は、メーチニコフで留学したんだけど、出てくる本出てくる本が面白いわけよ。で、読んでると、「メーチニコフに似てないか」って思い出したわけ。メーチニコフも地理と歴史を合体して、それを哲学するって立場なのよ。だから、風土に非常に重きを置いて、その中で中国が出てくるわけ。中国語がいっぱい出てくるんで、メーチニコフは中国語ができたからね。僕は中国語はできないから、ちょっとついていけないんだけど。

四大河川の文明があるじゃない。エジプトだったらピラミッド作ったよね。それで専制政治だよ。それからメソポタミアも、運河とか色々作ったよね。それ

からインドもガンジス河があって、文明があるんだけど、多分、中国文明の捉え方っていうのは、ちょっと違うっていうわけよ。メーチニコフの歴史観によると、正史は専制政治、それから封建政治、それからアナーキーっていう三段階なんだよね。最初の専制段階っていうのは、Речная цивилизация だから、大河なの。その次は地中海文明。それから、オーシャン文明になるわけね。オーシャン文明になると、アナーキーになって、アナーキーっていうのはかなり自由なのね。一番自由なのがオーシャンだっていうわけ。そんな中で、なんで中国はいまだに専制政治なのか、それはこういうことだっていうわけ。中国には、



渡辺先生ご所蔵のイコン

黄河や長江、珠江っていう三つくらい大きな河が並行してると。で、中国がなにしたかっていうと、運河を作って、それを網の目のように繋ぎ直したと。ということは、専制っていう外枠を残してるんだけど、内的には内海文明のような、つまり地中海文明のような交通形態があったと。それが中国の違うところなんだって彼は捉えたわけ。それってウィットフォーゲルに影響を与えてると思うね。

それとプレハーノフ（Плеханов, Георгий Валентинович, 社会主義者・哲学者、1856-1918）にも影響与えたんだよ。プレハーノフが最初に書評を書いたのは、メーチニコフの『文明と歴史的大河』。それで一説によると、プレハーノフの『史的一元論』、マルクス主義の本なんだけど、その種本はメーチニコフだったっていう説もある。それから、ジェイムズ・ジョイス（Joyce, James Augustine Aloysius, 作家・詩人、1882-1941）。ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』の種本というかね、その一つも、メーチニコフだったっていう説もあるんだよ。だから、メーチニコフっていうのはね、やっぱり弟もすごいけど、天才だよ、あれは。メーチニコフの弟を知ってるかい？

畔柳 あの、ヨーグルトのイリヤ・メーチニコフ（Мечников, Илья Ильич, 微生物学者・生物学者、1845-1916）……。

渡辺 そうそう、彼の伝記書いてる人が言ってるけど、彼はまるでドストエフスキーの小説に出てくるような人物だっていうわけ。何回も自殺を試みてるしさ、自殺未遂するたびに大発見するんだよ。で、だからね、弟が一生懸命、顕微鏡をイタリアで買って見てるところを、隣で兄貴たちが一生懸命革命の話してるのに、脇目も振らず顕微鏡見てるわけ。半端じゃないよ。だから伝記書かなきゃと思ってるんだけど、なかなかついていけないんだよ。

メーチニコフと村松愛蔵、そしてユーラシア主義について

渡辺 それで金子先生の話に戻ると、「今チェルヌィシェフスキーやってて、それでその後博士課程終わった後に何しようか、特に方法論がない」みたいに思ってたわけ。要するにずっと方法論がないから、「基本的な読書をしなきゃだめだ」っていうか。僕は思想史をはじめて3年、4、5年しか経ってなかったわけ。で、初めはソ連の思想史研究をいっぱい読んで、だけどそれにソ連邦の歴史観と

は違う見方をしようと思ってたけど、方法論がない。それで、竹内好（中国文学者・思想家・文芸評論家・翻訳者、1910–1977）の中国論とか、そういうの読んでただけど、つまり、日本のアジア主義とかさ、そういうものとの関係で、それをやらないと見えてこないんじゃないかと思ってたのよ。そしたら金子先生から「そんな方法論なんてどうでもいいよ」と。とにかく「僕が抱えてたテーマがあるんだけど、これ調べてみないか」って言われたの。それがメーチニコフと村松愛蔵（政治家・キリスト教伝道者・社会事業家、1857–1939）だったの。

松枝 メーチニコフと村松愛蔵、先生が書かれたものを何度も読みました。

渡辺 読んでるの？ ありがとう。それであの頃なんで自由民権かっていうとさ、僕自身が、色川大吉さん（歴史学者・東京経済大学名誉教授、1925–2021）の『新編明治精神史』っていう本があって、豪農民権層とかを発掘したじゃないの。それで、自由民権とフランス思想の連携は十分に色川さんが論じてるわけよ。それで、多摩地方の豪農層がルソー読んでたとかさ。だったら、ロシアの影響も絶対あるんじゃないかと思ってたわけよ。それがあって自由民権運動に関心を持ったところに、先生から村松愛蔵って言われて、僕はもう飛びついたってうかね、調べ出したら次々に出てくる。しかも外語の一期生じゃない。で、彼の先生はメーチニコフじゃない。それでその時の同級生がさ、黒野義文（教育者・サンクトペテルブルク大学講師・東京外国語学校助教授、?-1917）というとんでもない人物。二葉亭〔四迷〕（小説家・翻訳家・ジャーナリスト、1862/1864–1909）の先生で、シベリアを徒歩で横断して、ペテルブルク大学の講師になる。これは面白いテーマだなと思ってやっていたの。

結局、考えてみたらメーチニコフしかやってない感じになってるんだよ。それはね、ユーラシア主義に関心があるからなんだけど。すでに言ったように、1996年にロシアに行ったときに、ユーラシア主義の本がいっぱい出て、まとめて読んで、これはすごいなど。僕はピーサレフに繋がるものを見たわけ、そこに。それはトルベツコイなんかも言ってるんだよ、ユーラシア主義者は徹底的に個人主義者であると。個人主義とナショナリズムを結びつけるんだっていう、面白い発想だね。普通ナショナリズムっていうとさ、個はそこで消えるじゃない。ところが、個をあくまで活かすことによって、ナショナルなものが見えてくるっていう

かね。で、それはあの、彼の личность 論なんだよ。だから、顔論なんだよ。これがヨーロッパの学問にはないっていうふうに。ヨーロッパの学問の欠点は、つまり、個というものを individual として捉えるけど、личность は顔を、いくらでも変わる、複数性なんだよね。それがないから、学問それ自身が、それこそ、言ってみれば、遠近法なんだよ。アイコンていうのはさ、奥に景色があると、遠くの景色が大きくなってさ、こう包まれるような逆遠近法じゃない。で、やっぱりヨーロッパっていうのは、逆遠近法っていう発想を、ルネッサンス以降に失ったんじゃないかと思うの。

札幌大学でのロシア語教育

渡辺 札幌大学っていうのはときどきとびきり優秀なやつがいるんだよ。だからこれは、一学年 125 人全員教えるけど、でも一部の 5 人くらいを集めて研究しなきゃいけないと思って、集めて勉強してたの。で、もう 2 年生くらいからね、オドエフスキーの『ロシアの夜』読んでたの。ありえないよ、そんなこと。

松枝 一年間ロシア語を勉強した学生がそれを読むんですよ。

渡辺 読めないよ。だから、そんなの、せいぜい、Дама с собачкой しか読めないじゃない。それで、4、5 人できるのがいたから、とにかく一年生の最初に、木村彰一さん（ロシア文学者・翻訳者・東京大学名誉教授、1915-1986）の『基礎ロシア語』かな、結構難しいやつだよ、あれを、夏休みまでに仕上げろって言ったの。そしたら仕上げたやつが 3 人くらいいたの。そしたら夏休みに、Дама с собачкой 読むぞって言って、ちゃんとしてきたんだよ。それが近藤昌夫（ロシア文学者・関西大学名誉教授）とかさ、それから札幌大学で思想史の先生になった工藤孝史（哲学者・思想史研究者、札幌大学名誉教授）とかね。とにかく、札幌大学っていうのはね、先生方がすごい豊かでさ、北大の先生が全員非常勤で来てたわけ。でも取る学生がいないから、数人で授業やってるわけよ。だからみんな生意気なんだよ。ロシア文学についてはいっぱいなの。僕なんか、論文書くと、必ず学生に読んでもらってたもん。ソロヴィヨフ研究してるやつとかがいてね。第二外国語を教えてても手抜きしたら、生徒は馬鹿じゃないからわかるんだよ。

大学でのロシア語教育について

渡辺 あんまり辞書引く人じゃなかったね、僕は。

松枝 でも、私は辞書の引き方を、先生に教わった記憶があります。

渡辺 そうか？ 多分要領よく引けてことだと思うよ。それで、今はね、辞書引くとね、へー、辞書作ってる人はすごいなって。研究社なんて見てるとさ、本当に、例文なんかでも、訳語がすごいやつなんだよね。だから辞書って引くもんだね。いやあ、さっき言ったでしょ。読書会やるっていうと、予習しないで行く癖がついちゃった。だから、自分なりに読んじゃって、間違ったら辞書引けばいいやと思ってたからさ。それが意外と長引いて、外語行っても、あんまり質問してこないからさ、もっと予習して、やつらに教えればよかったのか、それとも今の僕の実力で教えればいいやと思ったのか、わかんないんだ。つまり、先生だから、調べれば色んなことがわかるよ。それを注入したらいいのか、それともみんなが気がつくまでそれは教えないほうがいいのかとか、ちょっと迷ってた。

松枝 たしかに、学生の中で、そもそもロシア語の学習に対する意欲はものすごくばらつきがあって。本当は、もっとすごく勉強したかった、色んなことを先生と議論したかった学生はクラスの中に本当に二、三人だったと思います。でも、あとは大多数は、そうではなかったのよ、みなさんロシア語を本当にやりたくて外語に入ったわけではなかったっていう。

渡辺 そうだね。数人なのよ、本当にやるのは。中には本当に語学が大好きなのもいる。それはそれで逆にすごく狭いのよ。

松枝 そうですね。興味関心の範囲が、語学の研究とか学習の範囲を超えないというか、文学とか文化の方には入っていかないっていう感じですね。正直に言うと、先生方は本当に超一流なのに、週五時間、六時間もそんな先生方の話を聞けるのに、めっちゃうちゃもったいない、と……。

渡辺 本当だね、そうだった。だけどね、今でも思い出すんだけど、札幌大学で6年、同志社大学で5年教えて、それから外語大へ。で、ものすごく給料も下がって、教授から助教授へ降格されて、それでも行ったのね。しかも僕は単身赴任で行ったわけですよ。だからものすごい身銭払って行ったのに、本当に、驚くほど給料下がったのよ。もうね、教授会で、同志社から移るっていうのが出たと

きに、教授会のメンバーからね、こいつ気が狂ったのかって言うふうに思われたらしいよ。同志社って給料高かったらしいんだ。僕は知らなかったから外語大に行っただけだよ。

外語大で第一回目の授業教えに行ったらさ、全然疲れないんだよ、やる気満々だからみんな。みんな目が爛々輝いててさ、それで打てば響くからさ、授業終わって帰ってきてね、原卓也さんにさ、「先生外語ってすごいですね」って、「僕これだったら給料いらない」って言ったら、「馬鹿、こんなの二十年ぶりだ」って言うわけ。二十年ぶりっていうことは、原卓也さんが来たときに、やっぱりそうだったんだ。やっぱり新しい教師がくるとき、生徒もガーッと勉強するのよ。そう言われたのは覚えてる。で、二年生の授業行ったらさ、みんな予習がすごいよ。僕は Страницы истории ってやつをね、読んでただけど、ノートに綺麗に単語が書いてあるわけ。これ3時間くらいはかかるだろうって言ったら、5時間ですって言うわけさ。まずね、みなさん予習はやめようって言ったの。もうね、人生無駄にするな。単語は僕が全部引いてくるから、それを覚えてくれって言うふうに言ったんだけど、結局単語を引いて、やっても、足りないんだよ。だからみんな一生懸命調べてるわけ。あれ快感なのかな、辞書一生懸命引いてさ、綺麗に書くのは。

松枝 そういう学生はいたと思います。

渡辺 いるよね。それはほとんど女子学生でね。そのときにプーシキンの『青銅の騎士』なんかが出てきて、それで歴史読むのつまらないから、じゃあプーシキン読もうなんて言って、『青銅の騎士』読んだときに、詩に目覚めたのが、太田丈太郎（ロシア文学者・熊本学園大学教授）よ。

松枝 あー、太田先生はそうだったんですね。

渡辺 そう。それからもうね、彼は詩に夢中になって、ベールイやったりなんかして、ブラート・オクジャワが来たときの身の回りの世話は彼にやらせたの。だから彼は非常にロシア語できるよ。

ロシア文学会の思い出

渡辺 ロシア文学会はね、原さんと江川さんが学会に入ったことによって、

ちょっと変わったかな。

松枝 変わったっていうのは……。

渡辺 変わったっていうのはね、みんなね、ロシア文学会は最初の方はね、職人さんというか、翻訳とかそういう人が多くて、本当に研究者が出てきたのは我々の世代からなんだ。東大の露文科ができて、それで大学院ができて、そのあたりからいわゆる論文書かなきゃだめだってふうになってきたわけ。

松枝 研究者の集団に変わっていったっていうことですね。

渡辺 そう。それは悪い意味でもある。論文論文論文っていうのになってきた。

松枝 そうですね、論文主義ですね。

渡辺 だから、翻訳が馬鹿にされるようになった。で、原さんと江川さんたちが、大学院でバラバラになるのは良くないから、インター大学院っていうかな、東大、一橋、早稲田、それで若手の研究者で発表してもらって、お互いに切磋琢磨した方がいいんじゃないかってことがあったのね。それが1970年代のはじめだと思う。それで第一号の発表者が僕だったな。

松枝 先生はその、第一世代という……。

渡辺 第一世代。僕の次にやったのが、佐々木照央だったと思う。そのあと、結局東大の連中なんか逃げちゃってね、結局2回で終わっちゃったのかな。大学院と学会と蛸壺的な大学をみんな一つにしようっていうのがあったんだけどね、長続きしなかった。僕は地方にいたからさ、学会に行く日は東京に行くから楽しみなんだよ。最初の頃は数年間毎年発表してたかな。



渡辺先生手作りのボルシチとともに

原さんと江川さんが来て、学会を広げようとしたの。要するに、東大に露文科ができたことによって、ずいぶん変わっちゃったんだよ。まず北大に露文科ができた、木村彰一さんが作ってね。そのあと東大も作って、それでロシア語ができ

ない人も三年生にあげて、それでロシア語初級は教えないから、マヤコフスキー学院に行けって言って、それで僕と江川さんの授業に来たわけよ。その連中は本当に要領よく勉強したと思うんだけど、でもやっぱり、勉強は大学院でしなきゃいけないっていうか、論文書かなきゃいけないっていうか。そういうのが押し付けられてさ、余裕がないっていうかな。論文のこと、ペーパーペーパーって言うじゃない。まるで軽々しいよね。で、そういうふうになってきたと、世知辛いっていうかな。やっぱり、さっき言ったように、なんで論文書くかわからなくなってきちゃう。

畔柳 なんのために研究してるのか、よくわからなくなることがしばしばあります。

渡辺 あのね、せっかくあなたは東京にいるんだからさ。時々ここにね、教え子たちが集まってパーティーやるんで、よかったらまた来てください。あ、今日はボルシチを用意してるから、食べていって。

松枝 先生、ありがとうございます。

渡辺 ボルシチ、まだ温かいかな、大丈夫？

畔柳 録音はここまでということで。

畔柳・松枝 渡辺先生、長時間ありがとうございます。

(文責：松枝佳奈)

リュドミラ・エルマコーワ

① Ермакова, Людмила Михайловна, 1945 年 ②モスクワ国立大学付属東洋語大学、ソ連科学アカデミー東洋学研究所 ③ «Художественная литература» 出版社、全ソ連国立世界諸国文学図書館、ロシア科学アカデミー東洋学研究所、神戸市外国語大学 ④日本古代文学、日露交流史 ⑤ Российско-японские отражения - история, литература, искусство. Сб. статей. М., Наука - Восточная литература. 2020. 327 с. Вести о Япан-острове в стародавней России и другое.



– М., Языки славянской культуры, Series Minor, Studia Historica, 2005. 269 с. Нихон сэки. Анналы Японии. Том Первый, свитки 1–16. Пер., иссл. и комм. Гиперион, Санкт-Петербург, 1997. 494 с. Кодзики. Записи о деяниях древности. Свиток Второй. Пер., иссл. и комм. Шар, Санкт-Петербург, 1994. 168 с.

2024 年 7 月 20 日、エルマコーワ先生のご自宅（兵庫県神戸市）にて

インタビュアー：扇千恵、松枝佳奈

猛暑のなか、扇、松枝はエルマコーワ先生のご自宅を訪問した。エルマコーワ先生がお描きになった絵画作品の数々や書籍に囲まれたお部屋で、和やかな雰囲気
でインタビューが始まった。

日本古典文学への関心：モスクワ大学での学び

扇 エルマコーワ先生、こんにちは。

エルマコーワ こんにちは。

扇 今日は私達のインタビューに答えてくださるということで、大変楽しみにしてまいりました。インタビューは松枝さんをお願いしました。よろしく願いたします。

エルマコーワ わかりました。よろしく願いたします。

松枝 エルマコーワ先生、今回はインタビューをお受けいただきありがとうございます。今から早速インタビューを始めます。7つほど質問をご用意いたしましたので、その順番に沿ってお伺いたします。

まず、先生は日本の古典文学や芸術がご専門とのことですが、その道を志されたきっかけをお伺いしたいのですがよろしいでしょうか。

エルマコーワ 古典文学。なぜ日本文学かという質問ではなくて、なぜ古典文学かということですか。

松枝 古典文学、日本文学の両方をお願いいたします。

エルマコーワ 私は高校生の時点で文学を志していました。最初は、1番好きなロシア文学にしたかったのですが、でも高校生だった当時、1950年代末から60年代初めはいわゆる「雪解け」でした。鎖国状態にあったソビエトで急に扉が開いて、いろいろなものを読むことができました。私は14、15歳のときに Японская поэзия [『日本の詩歌』] という小さい赤い本を入手しまして、これは本当に新鮮な印象を与えてくれました。日本の文学全般の中で、昔の詩を大変魅力的だと感じてモスクワ大学 [モスクワ国立大学附属東洋語大学] に入学しました。

この赤い本は、2人の翻訳家、グルースキナ先生（Глу́скина, Анна Евге́ньевна, 日本学者・日本詩歌の翻訳者、1904-1994）とマルコワ先生（Маркова, Вера Николаевна, 詩人・翻訳者・日本学者、1907-1995）によるものです。グルースキナ先生は私の恩師、修士課程の指導教授になってくださいました。素晴らしい時代でした。グルースキナ先生は、万葉集を翻訳された方で、日本古典のテキストに関して問われたら準備なしで何でもすぐ説明することが出来ました。そして

1928年に1度、1年ほど出張で日本で過ごしまして、そのときに柳田國男（民俗学者、1875-1962）にお会いになりました。また、佐佐木信綱（歌人・国文学者、1872-1963）先生の万葉集のゼミにも通われていました。私が初めて出会ったとき、グルースキナ先生は65歳位でしたが、とても若く見えました。『萬葉集』の専門家、中西進先生（日本文学者・比較文学者・教育者）は、ソ連時代に出張でИнститут Востоковеденияを訪問してグルースキナ先生と出会ったそうです。私は中西先生から、グルースキナ先生が佐佐木信綱のゼミに入っていたと聞いて、全く信じられませんでした。これほど若く見える人が佐佐木信綱に会っているはずはない、と私は思ったのです。

しかし、グルースキナ先生は1904年生まれだと知りました。本当にとってもいつも若く見えました。素晴らしい方でした。あ、忘れないように、貴重な本をお見せしましょう。若いロシア人の日本文化研究者のプレゼントですが、グルースキナ先生が100年前、1926年に発行されたПесни Ямато [『大和の歌』]です。その本にはグルースキナ先生の達筆で「お母さまとお父さまに差し上げます」とロシア語で書かれています。つまりこれはグルースキナ先生がご両親に捧げられた本です。

扇・松枝 おおー、すごい。

松枝 ぜひ、モスクワ大学での勉強や研究生活について、もう少し詳しくお聞かせいただきたいです。例えば思い出に残っている授業や、グルースキナ先生や他の先生たちの思い出などはありますか。

エルマコーワ 私の大学時代に、グルースキナ先生はИнститут Востоковедения Академии наук СССРという研究所の東洋文学部の研究員でした。教師の仕事をなさらずに、研究だけ。私の大学時代だと、例えば日本文学に関係ある日本の方ならもう亡くなられた小野理子先生（ロシア文学者・神戸大学名誉教授、1933-2009）がこの研究所に滞在され、研究なさっていました。35年経って、日本でまた小野先生とお目にかかることが出来ましたが、当時神戸大学教授の小野先生は『ワーニャおじさん』の翻訳に集中しておられました。大変光栄なことですが、時々私にチャーホフの劇の解釈に関して相談してくださいました。結局、小野先生の訳で『ワーニャおじさん』が東京の劇場で舞台化されて、先生に連れら

れて東京へ初演を見に行きました。私にとって忘れられない、とても大事な出来事でした。

ロシア人の日本文学専門家というと、イリーナ・リヴォーフ先生（Иоффе, Ирина Львова, псевдоним — Ирина Львова, 日本学者、1915–1989）の日本文学の講義を聞きました。私の卒論のテーマとして芥川龍之介の文学を選んで、イリーナ先生は指導してくださいました。大変お世話になりました。晩年にイリーナ先生は『平家物語』の素晴らしい翻訳を行われました。

松枝 芥川のどの作品を研究されたんですか。

エルマコーワ 当時、エストニアのタルトゥ大学ではロトマン教授（Лотман, Юрий Михайлович, 記号学者・文化歴史学者、1922–1993）と彼の指導のもとに活動していた一派が文学に対する新しいアプローチを進めました。全部ソ連の制度でしたが、そのなかでタルトゥ派はオアシス的な存在だったのです。体制のなかで半分許され、半分禁止されているロトマンを私は大変素晴らしいと思って、このように自分でも研究したいと思い、芥川の若干の短編小説をもとにして、「芥川龍之介のポエチカ」というテーマにしました。つまり文学作品の政治的、社会学的な面より、文学的な面を対象にしました。

学生時代のとき、私の人生にもう一つの重要なことが起こりました。平安文学を専攻していた先輩で、その後「百人一首」を翻訳した V. サノーヴィチ氏（Санович, Виктор Соломонович, 日本学者・翻訳者、1939–2020）が私をレーニン図書館に連れて行ってくれました。そして 1935 年に出た論文・翻訳集“Восток”掲載の N. ネフスキー（Невский, Николай Александрович, 東洋学者・言語学者・民俗学者、1892–1937）の『延喜式』（905–927）の祝詞三篇の翻訳を紹介して下さり、その訳が私の運命を定めました。ネフスキーの翻訳に憧れて、将来いつか祝詞を読みたい、翻訳したい、日本の古典をやりたいという夢が生まれました。ネフスキー自身の悲劇的な運命も関係して、当時、1960 年代の「雪解け」の世代の私たちにとって、スターリン時代の犠牲者は英雄のようで、崇拜の対象でした。その上に、ネフスキーの翻訳は本当に優れた立派な仕事で、美しく、それまで読んだことのない、不思議なテキストだったので、印象はとても強かったです。

そして大学院生になって、祝詞のように古い、大昔の時代に和歌の起源をたどりたいと思っていたのですが、グルースキナ先生は「ちょっと待ちなさい。まだ、そのような研究テーマをやるには早いし、大がかりすぎる。具体的な作品を選んで、これを出発点としなさい」とおっしゃいました。それで出発点は、翻訳されていない『大和物語』（951頃）になりました。修士課程は『大和物語』の翻訳と、もちろんポエチカでした。そのとき、Институт Востоковедения の東洋文学部のある“大人”の研究員が、文学研究においてはまず第一に階級的アプローチを守らなければならないと考えて、一生懸命私に助言しようとしてしました。つまり「あなたは структура（構造）というが、структура という言葉は詩歌の魂を殺してしまう（Ваша “структура” убивает душу поэзии）」と忠告してくれたのですが、私は頑固でした。

この『大和物語』は歌物語ですから、和歌が多いですよ。和歌の構造、手法、詩歌学的なインパクトを詳しく分析する予定でした。しかし、和歌の起源をたどるといふ目的は、もっといにしえにさかのぼる必要があるとわかって、だんだん古代、「神代」に帰結して、それが私にとって大変面白いと感じました。

私はいつも研究という活動が一番と思っていましたが、しかし長い間、研究に集中することができず、実務的な仕事をしながら研究を続けました。最初に«Художественная литература»（「文芸」）出版社に勤めて、次は ВГБИЛ（全ソ連国立諸国文学図書館）の編集部でした。研究だけをするためには、Институт востоковедения に就職する以外に可能性がなかったのですが、私の夢が実現したのはペレストロイカのあとでした。なぜかという、ソ連時代には、外国文学研究はイデオロギイ的戦線とされて、Институт востоковедения に努める研究員のなかでも特定の人たちだけが出張で外国へいく可能性が与えられていました。私は共産党員でもなく、労働組合員でもなかったのです。したがって、外国へ行くチャンスをもたらせるような信用を得ていなかったのです。ついでに言いますと、『竹取物語』『枕草子』、芭蕉の俳句の素晴らしい翻訳をなさったマルコワ先生は一度も日本へ来る機会がありませんでした。私の来日のチャンスは、50歳になって初めてやってきました。ペレストロイカのおかげで階級がさかさまになったあとですね（笑）。

出版社での勤務経験について

松枝 ぜひ、「Художественная литература」にお勤めだったときのそのご経験もお聞かせいただけないでしょうか。日本ロシア文学会のメンバーには、ソ連での外国文学出版活動に関心のある方が多いと思います。

エルマコーワ 私は出版社で働き始めたとき大学を卒業したばかりで、ちょうど30年後、この出版社で芥川龍之介の書籍を2冊出すことになりました。私は当時正式な編集者ではなく、まだアシスタントとして参加していました。しかし、私は卒論が芥川龍之介でしたので、3編の芥川の短編小説を翻訳することをすすめられて、これを何とか頑張って翻訳しました。それは『猿蟹合戦』、『早春』、『ひょっとこ』の3編でした。私にとってそれは大きな出来事でした。

松枝 どのような点で大きな出来事でしたか。

エルマコーワ この芥川の翻訳事業には、私の先生方やさらにその先生方が関わっていらしたからです。N.I. フェリドマン（Фельдман-Конрад, Нагалия Исаевна, 日本学者・翻訳者、1903-1975）、アルカージー・ストルガツキー（Стругацкий, Аркадий Наганович, SF作家・日本文学者・翻訳者・通訳、1925-1991）、大学で教えてくださった夏目漱石の翻訳者、A. リャープキン先生（Рябкин, Анатолий Григорьевич, 日本学者・翻訳者）、安部公房と大江健三郎の翻訳者 V. グリーヴニン先生（Гривнин, Владимир Сергеевич, 日本文学者・翻訳者、1923-2014）その他のレベルの高い研究者、翻訳者、教師が2巻本の翻訳に参加されました。私にとって光栄なことでした。また、私は芥川龍之介の作品が好きで、卒論を書いたときに、芥川に関して資料をたくさん調べていたので、翻訳はそうしたものを生かすという意味でも、めったにないチャレンジになりました。結局、初心者の方の私にとって、奇跡的なチャンスであり、良いスタートになったのです。

日本滞在と国際日本文化研究センターでの在外研究について

松枝 ありがとうございます。それから、先ほどちょっと触れられた最初の来日の時のこともお話いただけますか。来日されたきっかけや、日本での生活をお伺い出来ればと思います。

エルマコーワ それは1994年の京都の「国際日本文化研究センター」(IRSJC)からの招待でした。そのとき私は、メシエリャコフ(Мещеряков, Александр Николаевич, 歴史学者・日本学者・翻訳者)という同僚と2人で『日本書紀』の翻訳をしていました。私は最初の第1巻から16巻までで、同僚のメシエリャコフさんは後の17巻から30巻まででした。IRSJCで翻訳の精度を高めるための文献資料を得られましたし、日本の学者と相談することができました。中西進先生との相談も大変貴重なものでした。一年終わって、もう1年間の滞在を勧められました。この二回目



(左から)エルマコーワ先生、扇

の一年間は山折哲雄先生(宗教学者)のグループに入れていただいて、色々教えていただきました。のちに山折先生の研究論文2編を翻訳させていただきました。

扇 山折さんは、宗教学で有名な方ですね。山折哲雄の講義を聞かれたのですか。

エルマコーワ はい。講義ももちろんですし、先生のゼミに参加させていただきました。

松枝 場所は日文研だけですか、それとも京都大学にも行かれたりしたのですか。

エルマコーワ 日文研に入っていたときに、立命館大学教授の真下厚先生(日本文学者・民俗学者)に頼まれて立命館の日本文学科に一学期非常勤として通いました。真下先生のご専門は私のテーマにとっても近く、素晴らしい学者で、先生のおかげで偉大な研究者の方々とお目にかかることが出来ました。たとえば福田晃(民俗学者、1932-2022)、松前健(宗教学者、1922-2002)、岡田精司(日本史学者、1929-2019)といった有名な学者たちです。また、真下先生のおかげで、2011年と2012年に2度日本の歌垣の起源を辿るために、中国のミャオ族の地方へフィー

ルドワークのグループのメンバーとして行くことが出来ました。1995年には半年ほど立命館大学で、神話とフォークロアの理論に関する講義をしていました。ロシアの学者（ヴェセロフスキー、プロップ、メレチンスキーその他）の研究をもとにしていました。今も私の日本語の会話は流暢ではないですが、日本に来たばかりの当時、講義をするのが大変難しかったです。一所懸命頑張っていました（笑）。話す外国語は若いときに他言語の環境の中で育てる方が一番いいです。私は50歳になって初めて、そういう環境に身を置きましたが、自然な日本語が身につきませんでした。それなりに頑張りましたが。

日本在住となったきっかけ

松枝 ありがとうございます。その後日本にずっと住まわれるきっかけは何だったのでしょうか。

エルマコーワ “Любовь”（愛）のせいでしょうか（笑）。私が日文研に招かれたときのセンター長は梅原猛先生でした。梅原先生はその1年後に退官されましたが、そのとき京都で梅原先生の大規模な最終講義とパーティーがあり、パーティーには700人くらい集まりました。それは1995年の5月のことでした。そのとき、多くの人がいたので、いろいろな人と話すチャンスがたくさんありました。梅原先生が1960年代に立命館大学で西洋哲学を教えていた時の学生たちも来ていて、そのなかの一人が私に話しかけました。

松枝 その方のお名前は。

エルマコーワ 岡本章義さんです。会社に勤めていました。立命館大学を出て、梅原先生に大学院に進まないかと誘われたそうですが、経済的な事情で諦めて、海運会社に就職していました。1995年に神戸に住んでいらして、地震で奥様が亡くなって、家は全壊してしまったので、彼は当時、会社の寮に住んでいました。パーティーの席で彼は、奥様のために書いたレクイエムを私に渡して、「日本語がお分かりのようですから、読んでください」と言いました。私は、パーティーから帰る途中バスに乗りながら、直ぐ読んで、涙が出たほど感動しました。返しの手紙を送ってそこから文通が始まりました。それで結局、結婚することになりました。

松枝 素敵なお話をありがとうございます。
ございます。

エルマコーワ 19年ぐらい一緒に暮らして、それから彼は、がんで亡くなりました。10年前のことです。

扇 私は岡本さんが亡くなる前のお日にお伺いしました。ご主人がこの部屋に寝ていらして。岡本さんの入院中に、お医者さんが病院がよいか、お家へ連れて



(左から) エルマコーワ先生、松枝

帰った方がよいか尋ねられて、ご主人はエルマコーワさんが大丈夫だったら家に連れて帰ってほしい、と。ずっと寝てらしてね、亡くなる前日にこうおっしゃったの、「妻をよろしく願います」と。覚えています。

日本での研究・教育活動について

松枝 先生は非常勤講師として、複数の大学に勤務され、神戸市外国語大学にお勤めになったということですが、神戸市外国語大学を初めとする、日本での先生のご研究や教育活動について、ぜひ自由にお聞かせいただきたいのですが、思い出に残っていることや印象的なことはありますか。

エルマコーワ 一番強い印象は、ロシア文学を研究されている日本人の先生方が、私より遥かに細かいことまでご存じだということでした。私は恥ずかしく思いました。私はロシア文学が大好きで、よく知っているつもりだったのですが、それどころではなかったのです。ロシア文学を研究している日本人の中に物知りの方が大変多いことに驚きました。ロシア文学、文化について多くのことを初めて知りました。室生犀星の詩に「故郷は遠きにありて思ふもの」とありますが、まさに自分の「故郷」について、日本に来て、初めていろいろと知るところがありました。文化というものを、比較なしに知ることなんてできないのです。

私は50歳で日本に来るまでずっと、日本文学で一番面白いのは日本の古代だ

と思っていました。日本古代の和歌の構造や音響などが面白かったです。しかし、日本に来て、このような文化と文化の相対性、絆、交差などが大変面白いことを知りましたし、想像もつかないような歴史的事実を知ること面白かったです。

その当時、神戸市外大で一番話し相手になってくださったのは、岡本崇男先生でした。いろいろ教えてくださったし、雰囲気の良い方でした。私は、最初に日本はどこでも神戸外大のロシア学科と同じように協力的、お互いに助け合うものだと思っていたのですが、違う言語の学科では雰囲気が全く違うとわかって、驚きました。

井上幸和先生は当時、ロシア学科長でした。井上先生は古代のリトアニア語とプロシア語の福音書の翻訳研究を、岡本崇男先生は古代ロシア語の 15 世紀の年代記の研究をされていて、感動しました。神戸外大のもう一人、とても大事な人は、学生時代にモスクワで知り合って、親しい友達になっていた渡辺 [安井] 侑子先生（ロシア文学者・翻訳者、1938-2019）でした。彼女とご主人の渡辺雅司先生は私にとって頼りになってくださいました。

このような就職ができて、またこのような素晴らしい同僚に囲まれたものだから、私も古代の日本だけではなくいろいろと貢献をしたくなかったのですが、ロシア文学を研究する資格はなく、古代が好きなので、日露交流史の一番古い時代の研究をしようと思いました。

松枝 そこから日露文化交流の研究に入られたのですね。

エルマコワ いつも、起源に遡ろうとしますね（笑）。毎年、1 か月くらいモスクワで過ごすので、夏はレーニン図書館で過ごしました。17~18 世紀のロシアの日本に関する資料を調べました。昔のロシアは日本に関して何を書いていたのか、どんな情報をもとにしていたのか、日本に対する態度や考え方について、17~18 世紀のロシアの資料を調べました。当時の資料を載せた作品について論考を書きました。一番初期のものは、1670 年の北方の教会堂の *Космография* という世界誌に手書きで描かれたものです。ロシアにおける日本に関する文章は、明治期からの資料は多いのですが、昔のテキストについてはあまり言及されることがなかったので、このような資料をめぐって本を書きました。

その本は二部構成で、一つは、ロシアにおける日本について、もうひとつは、日本におけるロシアについてです。日本文化とロシア文化の交差と相互反映、例えば、最初にロシア人が描かれた絵画作品を検討してみました。それは神戸市立博物館で保管されている屏風です。『泰西王侯騎馬』の八曲屏風で、そのなかにタタール汗とその敵、モスクワ大公が描かれています。日露交流のもう一つの研究は、1921年に銃殺された詩人N.グミリョフと川上貞奴の出会いに関するもので、貞奴に捧げられたグミリョフの詩についてです。これと、その他のテーマは日本でもロシアでも発表しました。

個人的なことですが、もう一つ言わせていただきたいです。私は最近十数年にわたって趣味として絵を描いています。ずっと美術の学校に通っています。もうかなり前のことですが、一度、扇さんのおかげで、個展を開くことができました。大変感謝しております。

扇 神戸でエルマコーワ先生の個展を開いたのです。そのとき、ご主人もご存命でした。水彩の他、当時水墨画もされていましたね。中国の方に教わっていたのですよね。

エルマコーワ はい、王曉玫先生です。素晴らしい、めったにない才能に恵まれている画家です。王先生のご両親は文化大革命で、田舎に流刑されていました。教師、つまりインテリだったので、地方の村に送られたのです。

神戸市外国語大学で指導した学生について

松枝 神戸市外国語大学でのその指導された学生さんたちとの関係について、先生はどのように感じていらっしゃいましたか。

エルマコーワ 優秀な学生とちょっと怠けている学生がいたかもしれませんが。神戸外大の卒業生のなかには、現在素晴らしい研究を行っている人が少なくありません。20年前の優秀な女学生が今は漫画家になって、ペンネームで漫画等を描いています。小学館新人コミック大賞〈青年部門〉で佳作を受賞したのです。秘密かもしれませんが、これから彼女が作ろうとしている漫画は、ショスタコーヴィチをテーマにしています。日本語の資料をいろいろ集めていたそうです。私は、彼女のためにロシア語のかなり古い本を入手することができて、彼女は頑

張って読んでいます。私はスカイプで彼女のために一番難しい数か所を日本語に訳してあげています。私は友人にモスクワの音楽大学の教授がいるので、この先生と相談しています。

松枝 素晴らしい活動ですね、大変楽しみです。

エルマコーワ 昔、学生時代に彼女は、私は漫画家になりたいと言ったのです。そのときは、真面目に受け取りませんでした。立派な漫画家になってくれました。もうひとり、素晴らしい人といえば、大学卒業後に国会図書館に就職を決めた学生がいました。優秀でした。また私が就職して、最初の院生のゼミに東海晃久さんと竹本〔旧姓：源〕絵里さんと山口涼子さんが入っていました。三人とも才能のある方で、東海晃久さんは優れたロシア文学の翻訳者になりました。本当に優秀な方で、最近 A. ヴヴェヂェンスキー全集や、その前はサーシャ・ソコロフ『馬鹿の学校』、ゴーゴリ『死せる魂』その他を翻訳しています。

扇 東海さんは、めざましいまでに活動していますね。神戸市外大だけでなく、同志社大にもいました。私も同志社で教えていましたが、人と喋る時間を惜しんで、非常勤講師控室でずっと翻訳していたそうです。そういう人でした。

エルマコーワ 彼のヴヴェヂェンスキーの翻訳は面白いです。ヴヴェヂェンスキーは、韻を踏んだり、踏まなかったりするところがあるのですが、東海さんは同じようにそのニュアンスを読み取っているのです。

扇 東海さんは、サーシャ・ソコロフの作品で、何ページも句読点なしのものを訳しきっていましたね。本屋さんにも売っているし、もちろん国会図書館にもあります。

日本のロシア文学研究・ロシアの日本文学研究・日本ロシア文学会について

松枝 日本のロシア文学の研究や、先生が関わられたロシア文学会や、関西の研究会についてぜひお伺いしたいのですが、何か思い出はありますか。

エルマコーワ 東京の学会と関西の学会は研究のやり方もレベルも差はあまりないですが、気になる点は、ロシアから作家や文学の専門家も招待されると、東京には行くものの、関西まで来ないのです。それはとても残念です。有名なロシア人の作家は皆、東京や札幌に行ってしまう。

松枝 東大や北大に流れますよね。

エルマコーワ 最近コロナのおかげで、時々オンラインで聞くこともできるけれども、前は無理でした。

松枝 ロシアやソ連における日本研究の特徴や独自性について、先生はどのように考えてらっしゃいますか。

エルマコーワ 私の若い時代といいますと、古代、中世日本文学の研究が盛んでした。それはある意味もちろん、ソ連の現実から何とか逃れる方法でした。現代文学であれば、階級闘争や“進歩的な”ものが問われてしまうので。今は全く違いますよ。ペレストロイカの後には。それでも沼野充義先生は不満をおっしゃっていました、古典にこだわりすぎていると。

松枝 ソ連やロシアの日本研究は、やはり古典や古代中世から江戸までの文学までが盛んですよね。個人的には近代や現代の方までなかなか研究者が出てきていないと思うのですが、理由は何だと思われますか。

エルマコーワ 今は増えていますよ。少なくとも、毎年2月の半ばに開催される“История и культура Японии”という日本研究学会のプログラムを見てみると。

松枝 私も実は10年前の2015年にその学会に参加したことがあって、一度発表させていただきました。メシエリャコフ先生やエレナ・ジヤークノワ先生(Дьяконова, Елена Михайловна, 日本文学者・日本文化研究者)にお世話になりました。やはり古典古代、それから中世、近世までの発表が多いという印象で、ロシアの日本文化研究はそちらを中心にやっているんだなっていうのをすごくひしひしと感じたんですが。

エルマコーワ そうです。古典研究は洗練されていっています。でも、最近若い人たちが現代文学も研究しています。

松枝 明治期を通り越して、昭和の研究が多いですよね。昭和や平成の研究が多い気がして。私は、明治・大正期が専門なので、ロシアでもその時代の専門家が増えると嬉しいです。ロシアの研究者にとって、日本の近現代作家といえば、谷崎潤一郎や三島由紀夫ですかね。

エルマコーワ 村上春樹の研究とか。

松枝 今のこの政治の状況もあって、今はやはり、古典古代の方に戻っているな

という気がします。

エルマコーワ 政治の影響もありますけれど、それでも、ロシアから日本に留学される人はいますよ。分かっている限りでは、今現在日文研にロシアからの来訪研究員がいませんが、大学にはロシアからの留学生がいます。又、日本文化・文学のロシアの研究者は今も日本大学や国際交流基金を媒介して来日すると聞きました。しかし、前に比べて、もっと少なくなりました。

松枝 ありがとうございます。私もロシアやソ連における日本学のことにとても関心を持っていたので、ロシアの日本文学・文化研究の現状を知ることができてうれしいです。

エルマコーワ もちろん明治期の翻訳はそんなに多くないですし、二葉亭四迷以外は訳されていないと思います。今日はあなたが二葉亭四迷について書いた本を持ってきていないのですか。

松枝 すみません。あまりにも大きな本なので、今日お持ちすることができなくて。ぜひよろしければ1冊差し上げたいのですが、いかがでしょうか。

エルマコーワ 喜んで読ませていただきます。送ってくださればありがたいです。

松枝 ありがとうございます。後日、お送りいたしますね。

現在の研究・教育活動について

松枝 そろそろ最後の質問になりますが、先生の現在のご研究や教育について伺ってもよろしいでしょうか。

エルマコーワ 去年は、9回ほど講演や講義を行いました。それは学問的な研究の結果で、モスクワの学会で、日本の古代に関するものがほとんどです。ロシアに関係ある講義は去年か一昨年だったかと。ヨコタ＝村上〔孝之〕先生（比較文学者・ロシア語学者・元大阪大学大学院准教授）の依頼で、阪大で講義をしました。日本におけるロシア語の教科書の歴史と展開と特徴です。検討しようとする、大変おもしろいものがたくさん出てきました。明治期から現代までにロシア語の教科書と辞書は700冊ほど出ています。どれも文化的な面白さがあります。

私は、自分が日本語を勉強した教科書を思い出しましたが、日本のレアリアは

全くなかったですね。「共産党委員会」や、「プロレタリア諸国の団結」などは外国人に通訳するために必要なものだとされていました。しかし、日本文化に関わるもの、例えば、日本の習慣、食料品、祭りや、日本美術や工芸についての言葉は何も一切載っていなかったのです。教科書には文化的な背景が非常に関係しています。日本の教科書ではどのように、ロシア文化を見せようとしたかを調べたところ、昔の教科書でもちゃんとロシアの文化的雰囲気伝える努力がなされているのです。びっくりしました。

たとえば、戦前の軍事関係の教科書だ

と、ロシアの兵士が描かれているものがあったも、また別のものには、ロシアの美しい自然に関する文章や、チェーホフの短編小説が載っていました。

もう一つ驚きだったのは、2000年に発行された教科書で、その教科書の登場人物は、ロシア人と日本人です。テキストの背景として、モスクワから100キロくらい離れた距離で、架空の都市 Японоградがあります。もうずいぶん前から存在しているということで、日本人とロシア人が住んでいて、お互いにいろいろと話をしているんです。この Японоград は、広場や通りの名前がおもしろいのです。例えば、Площадь перестройки や、Проспект гласности。私はこれを読んで、悲しくも感じました。この教科書が作られた当時は、ベレストロイカ精神がこれから生きるだろうという期待があったと思うのですが、現実はそうならなかったのです。調べた教科書の全てについて語れませんでしたけれども、新しいことがたくさん分かって大変楽しかったんですよ。ロシア語教科書を知ることできたのは、本当に私にとってよい機会で、招いてくださったヨコタ＝村上先生に感謝です。



エルマコーワ先生のご著書（2005年出版）

愛好する日本文学・ロシア文学について

松枝 ぜひ先生にお伺いしたいのですが、一番好きな日本文学の作品、ロシア文学の作品は何ですか。

エルマコーワ 日本古典文学以外では、若いときには石川啄木の短歌が大好きでした。一つに絞れないですよ。私は万葉集が好きですが、現代の歌人の作品も翻訳しました。前田夕暮（歌人、1883-1951）の短歌です。芥川龍之介や、横光利一が好きです。後者の作品も訳しました。実験的な作品でした。こういう実験的な作品も面白いです。しかし、古代に対する憧れが強いです。『延喜式』の祝詞の翻訳もしましたし、『古事記』第2巻の翻訳も担当しました。『日本書紀』も1~16巻まで翻訳、研究しました。『延喜式』の祝詞、「続日本紀」の宣命、『倭姫尊世紀』の翻訳と研究は難しかったのですが、いつも楽しくありがたい仕事でした。そして今何をやっているかということ、エカテリンブルグで“Японская древность”というシリーズの編集委員会に入っています。一度『高橋氏文』の翻訳と研究を提出して、次は『新撰龜相記』の翻訳・研究を発表しました。ロシア研究に関しては、1930年代のロシアにおける日本文化の研究者、そのテーマの流れと悲劇的な運命を検討して見ました。日本とロシアの学会でその資料の発表もしました。

ロシアの Поэзия なら、プーシキン、若い頃はパステルナーク、インノケンティ・アンネンスキー、ブローク、大好きな詩人が多いですし、詩をたくさん覚えています。またそろそろ14年経ちますが、ロシア詩の поэтика の授業（Поэтика 会）をずっと行っています。それは〔扇〕千恵さんのおかげです。千恵さん、大変感謝いたしております！ 自分の大好きなロシアの詩に興味を持ってらっしゃる日本人の前で朗読して、響きの魅力や意味を一生懸命伝えようとしています。

扇 本当にあんな授業はどこにもなかったです。音の世界について語ってくださるのです。先生の授業は、毎回詩の理論的なこと、あるいは歴史的なことから始まって、毎回詩人の1人、2人の詩を朗読してくださって、詩の意味など、私たち日本人にはできないような話を何年も続けてくださったんです。今はオンラインですね。私はオンラインになってから抜けましたが、最初は私が先生にお願い

して、何人か集めてやっていました。もう最高でした。

エルマコーワ поэтика を講義のテーマにしたきっかけは次のとおりです。以前、学生の一人が「来週ゼミで何を読むのですか」と聞きました。「プーシキン」と私が言うと、「またプーシキンですか」と彼女は私に言いました。私は、「なぜ、プーシキンが嫌なのですか」と言うと、彼女は優秀でしたが、「プーシキンは内容が薄い。あなたを愛する、愛した、そればかり」と言うのです。私はこれを聞いて、20世紀のアメリカの詩人が言った言葉を思い出しました。彼は、「詩歌とはなにか」と問われると、それは翻訳の後に残るものだと答えたのです。というのは、翻訳で伝えることが出来ないものだと聞いたかったようです。翻訳できない、しかし何とか説明しようと思って考えて、プーシキンの「Я вас любил」の詩歌的な魅力を説明してみました。

ポエチカ会を始めたとき、詩の意味を考えず、忘れさせて、音の響きの美しさ、リズムの動きだけを聞かせたかったのです。例えば、ネットでも読めるパロディ詩があります。数詞からなっていて、数詞しかありませんが、ちゃんとリズムが整えてあるので、ロシア人は直ぐ ямб か、хорей か、дактиль かと分かる／感じることができます。例えば：“148, 6, 12” («сто сорок восемь, шесть, двенадцать») という一行はプーシキンの «У лукоморья дуб зеленый» のリズムと一致しています。リズムの内容的な価値に関する理論的な研究もあります。例えば M. ガスパーロフの研究論文 “Семантический ореол метра” (『リズムの意味論的ハレーション』) です。音声とリズムの整えは内容をもっと深くして、豊かにするだけではなく、追加の意味をつくることを毎回、ポエチカの授業で伝えようとします。しかし、頑張っても魅力ある1行の魅力を説明できない場合があります。そのときには諦めて、「信じて下さい、この1行は魔法だ」というしかありません(笑)。

松枝 リズムが生み出す魔法ですか。プーシキンがやはりロシア語の詩の中でやはり一番素晴らしいと先生は思われますか。

エルマコーワ いや、一番素晴らしいというか、彼が詩のリズムが生み出す魔法を明らかにしたのかもしれませんが。プーシキンの詩歌は奇蹟のようです。でも、彼以外にも、違う形でその現象を表した詩人もいましたね。

松枝 例えば、どの詩人が思い浮かびますか。

エルマコーワ 19世紀のロシアの偉大な詩人は皆そうでしょう。「Звучность」[響きの力]という言葉がありますね。ロシアの詩歌の、いつもとても重要なファクターです。実は、日本の和歌にも音声の整えが存在すると思いますが、ロシアの場合、もっとよく聞こえるようで、インパクトがもっと強いかも知れません。時代が下がると、ある詩人は、わざと強調しています。例えば、バリモントだと“Чуждый чарам черный челн”……。あるいは、パステルナークだと、“И будут бодро по трое магросы...”とpの音の連発が行進曲みたいですね。内容的にもそうです。ブロークの“Я любил твое белое платье” (лл, бл, пл) などこのような音の繰り返しだけではなく、“музыка стиха”のようなものがありまして、リズム抜きには内容がとても薄いと思われるのは当たり前です。プーシキンもそうでしょう。シンボリストの神秘さも理解できなくなります。

松枝 ロシアの詩をもう一度勉強したくなりました。私も小説よりも実は詩が好きなので。ロシアの詩の音とリズムが好きなので、研究でなくても勉強したいです。

扇 松枝さんは、モスクワ人文大学にいらっしゃったのですよね。あと、今度東京外語大 [名誉教授] の渡辺雅司さんとも会われるのですよね。

松枝 はい。今度9月に、インタビューで渡辺先生にお目にかかります。

エルマコーワ 私も行きたいです。

扇 場所が少し変わったのですよね。逗子にお住まいで、皆で集まって料理したりしていたのですよね。

エルマコーワ 実は私は明日講義します。大阪でロシア人の集まりがあって、日本文化の講義をロシア語で行います。神戸市外大のエレナ・バイビコフも参加します。タチアーナ・シェプコーワという人が、リーダーになっています。彼女は、極東連邦大学で学んでいました。彼女には日本人の夫がいますし、子供もいます。大阪で、子供向けのロシア語学校を開いていて、そこの子供たちのためにいろんな日本文化の知識を仕入れているのです。または大人向けの日本文化講座も開いています。さまざまな背景を持つロシア人が集まって、テーマは多岐にわたり、日本演劇や日本のデザイン、日本の歴史などを話します。

松枝 どれくらいの方の人数の方がいらっしゃるのですか。

エルマコーワ 場合とテーマによって違います。15～20人までです。

もう一つ、私にとって重要なことに関してお話を聞かせていただきたいです。今年の2月から3月に早稲田大学の特別資料室でA.A. ワノフスキー（Ванновский, Александр Алексеевич, 革命家・日本文学者・早稲田大学露文科講師、1874-1967）の資料を調べていた際に、レフ・トルストイの一番下のお嬢さんアレクサンドラ・トルスタヤ（Толстая, Александра Львовна, 作家、1884-1979）がワノフスキー宛ての手紙を見つけました。絵葉書は日本で書かれたもの、長い手紙はアメリカで書かれた物です。これを是非発表するつもりです。日本古代ですと、ワノフスキーのアーカイブに重要な資料が見つかりました。革命後、日本に亡命した素晴らしい文学者M. グリゴリエフ（Григорьев, Михаил Петрович, 日本文学者・翻訳家、1899-1943）が訳した3編の『延喜式』の祝詞です。N. ネフスキーの訳より4年先ですが、その訳の存在について今まではだれも知りませんでした。

松枝 なぜ、早稲田大学で見つかったのでしょうか。

エルマコーワ ワノフスキーは、早稲田大でロシア文学を教えていたのでこれほど見つけれられたのです。ワノフスキーは日本神話論を作る予定でしたが、日本語のテキストを殆ど読めない状態でしたので、友人のグリゴリエフに頼みました。グリゴリエフは完璧に日本語を知っていたので、熱心にコメントをつけて、ワノフスキーのために美しい翻訳を作りました。

もう一つの私が入っているグループに関して聞かせていただきたいです。片山ふえさんによって20年以上前に創立されたロシア文学翻訳研究会クーチカと言います。参加者は気に入ったロシア文学作品を和訳して、原文と翻訳を他のメンバーに配り、そして15人ぐらい集まって、その翻訳を組上に載せて原文を見ながら大変詳しく分析しています。数年前に私もその仲間に入って、テキストから分かりにくいロシアのレアリア、変わっている言い方などをできるだけ説明しようと思います。しかし、このような集まりがありがたいのは、私にとって大事な可能性を開いてくれるところです。クーチカの皆さんは日本語訳のスタイル、意味のニュアンスなどをにぎやかに議論しはじめると、私は一所懸命聞いています。辞

書に簡単に見つけられない日本語の表現、珍しい単語、文体の特徴その他の貴重な知識を得ることが出来て、勉強になります。

松枝 エルマコーワ先生、ありがとうございました。そろそろ2時間を超えますので、ここで録音を止めたいと思います。

(文責：松枝佳奈)



エルマコーワ先生が描かれた絵画作品の数々とともに

生田美智子（いくた みちこ）

- ① 1946年 ②大阪外国語大学大学院、大阪大学大学院 ③大阪外国語大学、大阪大学
④日露・日ソ交流史 ⑤『大黒屋光太夫の接吻』（平凡社、1997）、『高田屋嘉兵衛』（ミネルヴァ書房、2012）、『女たちの満洲』（編著、大阪大学出版会、2015）、『満洲からシベリア抑留へ：女性たちの日ソ戦争』（人文書院、2022）



2024年11月3日、大阪大学箕面キャンパスにて

インタビュアー：畔柳千明、須佐多恵、藤原克美

インタビューは2020年に移転した真新しい大阪大学箕面キャンパスの教室をお借りして実施した。ちょうど豊中キャンパスでは学園祭が行われている時間帯だったが、箕面キャンパスは静かで、教室には暖かい陽光が射していた。

研究の原点——学生時代、大阪万博とグルジア体験

畔柳 大阪外国語大学での学生時代に印象に残っていることから伺いたいと思います。まず恩師の先生について伺えますでしょうか？

生田 國本哲男先生（大阪大学名誉教授、1925–1996）が指導教官だったのですが、卒論に何を書くか迷っていました。そうしたら、國本先生が「ゲルツェンにきなさい」とおっしゃったので、最初の研究はゲルツェンでした。今に至るまで一貫して興味があるのは女性なので、女性を扱った作品で『どろほうかささぎ

Сорока-воровка』を選びました。

須佐 國本先生はプーシキンの専門ですね。

生田 歴史が専門なのよ。プーシキンとか、いろんなことやってはるけどね。元々京大の史学〔科〕卒業。習った？

須佐 私、〔國本先生が〕ものすごく恐くて、ちょっとウダレーニエを間違うと眉間にしわを寄せて……。

生田 そう？ そんな感じじゃなかった。優しかった気がしたけど（笑）。卒論を何しようかと思っているときに、〔國本先生に〕ゲルツェンはどうかと言われて、パラパラと読んで、女性を扱った作品を選びました。思想史というより、女性の方に行きましたね。

畔柳 最初から女性に関心があったということですか。

生田 段々とそうになってきたのかな。私がロシア語を勉強しようと思ったのは、ロシアで郵便ポストの数ほど保育園があるとか、女性が優遇されていて男女平等とか、そういうのに高校生のときに憧れてロシア語科に入ったっていうのが元々なのです。

畔柳 ロシア語を始めたきっかけはソ連社会への関心だったのですね。

生田 実際行ってみたら、それほど素晴らしい社会でもなかったけど（笑）。でも、あの頃はソ連時代〔70年代〕で、割と良かったですよ。2回目に行った時〔1991年〕はソ連崩壊直前で、もう、荒れた感じで、滞在中に崩壊したのですけれど。1回目のときは本当に良かったです。

畔柳 最初にソ連に行かれたのはいつでしょうか。

生田 1975年です。その前に、大学出てすぐに1970年の大阪万国博覧会があって、コンパニオンをしたのです。プレスセンターっていう、新聞記者とか放送記者の詰めている部署で、彼らに付いてソ連館に行ったり、ソ連から来た人にインタビューをしたりとか、結構楽しかったです。

畔柳 万博にソ連から来たお客さんもいたわけですか。

生田 ソ連から来た人は万博関係者がほとんどで、大方はスタッフとして来ていました。アメリカ館とソ連館は、人気があるパビリオンでよく人が集まりました。アメリカ館は月の石を展示し、ソ連館の方はすごい「長大」な建物で。宇宙

飛行士とかの展示がありましたけど、月から持って帰った石の方がインパクトはあったみたい。

須佐 私は小さかったからよく覚えていないのですが、ただソ連館もアメリカ館もそれはすごい行列で、なかなか入れなかったっていうことは覚えています。双璧っていうか、すごい人気があったみたいで。そこにいらっしやったのですね。

生田 そうなのでございます（笑）。

藤原 万博開始以前の準備もされていたのですよね。

生田 そう。1970年に万博が開催されて、準備段階からそこに勤めて。ソ連館で何か建てたりする時の通訳とか。あの頃の通訳やからいい加減やけどね（笑）。一応やっていました。

藤原 [大学を] 卒業してからですか。

生田 卒業してから。

須佐 先生がグルジアに行ったのもこの時期でしたか。

生田 グルジアに行ったのは1975年の夏休みです。単に、どこでも良かったのよ（笑）。行けるっていうので行って。日本から何人か応募があったのですが、蓋を開けたら、結局行ったのは私だけだった。いろんな国の人と一緒に、1ヶ月ぐらいグルジアにいました。募集がどこかに貼ってあったのよ。「イクタ・ミチコ」でしょ。だから「何とかコ」でそっちが姓だと思われて、「しかも」男のところにカウントされてあったのよ。

須佐 多分、そのときグルジアは自分の国を知ってもらいたいということによって……。

生田 初めて外国の人を招待したの。ソ連の一国だったけれども、独立したいっていうのがあってね。血の気が多い人が多くて、椅子を持ち上げてこんなにして[頭に向かって]振り下ろす。本当に、椅子を突き破って全部顔が出るのよ。あんなのを西部劇以外で見たのは初めてでした（一同、笑）。激しい喧嘩で血なんか流れても平気な感じ。

須佐 グルジアに行ったのは学生時代ですか。

生田 いや、学生時代ではなかったと思います。その頃、京大で非常勤講師をしていたのですよ。帰ってきてからグルジアの話をついばいして、学生の1人がグ

ルジアの専門家になって、京大の人文研に勤めていた。だから私はその後グルジアとほとんど関わりはなかったけど、授業で喋りまくったら、その人が興味を持つように（笑）。

須佐 そのとき、先生はもう結婚されていて、日本に旦那さんを置いてグルジアに行ったとか。

生田 そう。外国の人に「帰ったら家庭にあなたの場所はなくなっている」とか言われました（一同、笑）。

畔柳 先生がグルジアに行かれた動機は、語学研修のためとかではなくて……。

生田 なんかもかく行きたい、行きたいっていうので行って。強い目的もあんまりなくて。カナダとかいろんな国の人が来ていました。西洋の人が多かったですけどね。授業が終わって外へ出るでしょ。バスに乗って帰るしか手段がなかったのですよ。日本だったら何時何分でぱっとバスが出るけど、人が溜まるまで待っているのよ。だから時間がかかってもうすごかった。宿舎のシャワーも、浴びていたらすぐ水が止まるのよ。だからもうしょうがないからミネラルウォーターでバーッと洗って、とかそういう思い出があります。もういい加減で、「よくこんなで外国人を呼んだな」って言うんだけど、ホスピタリティはすごくあってね。それはすごく良かった。

[生田付記：グルジア語の授業では受講者 1 人にアシスタントが 2 人つき、つきっきりで教えてくれました。内容はもう覚えていませんが、サマースクールのような感じでした。資本主義国の若者にグルジアの言語や国情を知ってもらい、将来の国家間の友好関係につなげたいとの気持ちが満ちあふれていました。授業終了後は、劇場に招待してくれ、最初は感動していましたが、あまりの歓待ぶりに付き合うのに、くたくたでした。]

畔柳 学生時代に戻りまして、印象に残って



大阪外大教員時代

いる授業について伺えますか。

生田 オレスト・プレトネル (Плетнер, Орест Викторович, 東洋学者、1892-1970) という先生がいて、ニコライ・ネフスキー (Невский, Николай Александрович, 東洋学者・民俗学者・言語学者、1892-1937) の親友の一人ですけど、その人がフォネティック・サインを用いた授業をして。音素とかそんな言葉は聞いたこともなかったのが、彼に教えてもらって。自分 [プレトネル先生] が今発音している音はどれかっていうのを [学生は] 言わされるのだけど、音を聞いてもわからないから。先生の顔を見ていたら大体赤い血が上ったりするのはこの音や、とかいうので、いい加減な判断基準で、私は割と成績は良かったです (笑)。でも耳で聞いたのではない。

畔柳 プレトネル先生は戦前から大阪外語でロシア語を教えておられて、当時は最晩年でしょうか。

生田 そうですね、晩年に近いときだったですね。ネフスキーの話もしてくれて。ネフスキーは一旦ソ連に行ったのですが、帰ってくるつもりだった。行かなければよかったのに、って言っていましたね。弟 [オレグ・プレトネル (Плетнер, Олег Викторович, 東洋学者、1893-1929)] もやっぱり粛清されて。

ずっと亡命ロシア人の先生ばかりに習っていたのですが、その後しばらくしたら、ソ連から先生が来るようになって。そのうちの1人が亡命したのですよ、[在日] アメリカ大使館に逃げ込んでね。周りのあらゆる人が訊問されたと言ったらあれだけど、警察から事情を聞かれて大変でした。

藤原 そのとき先生は学生だったんですか。

生田 まだ学生だった。[亡命したソ連出身の先生は] 身重の奥さんを置いて、自分1人で行っちゃったのですよ。奥さんはソ連に強制送還されて、かわいそうだった。

畔柳 亡命ロシア人とソ連と両方の先生に習われて、違いはありましたか。

生田 亡命ロシア人の先生はみんなお年寄りだったっていうのもありましたけどね。ソ連からは若いぴちぴちした人が来て、テンポの速い授業してくれるので、教授法がしっかりしているな、っていう感じがありました。亡命ロシア人はそういう [ロシア語教授法が] 専門じゃないしね。亡命ロシア人の先生は3人い

ました。元外交官のひとドイツ系ロシア人、それと、イーヤ・レーベジェワさん（Лебедева, Ия Евгеньевна, 1913–1991）って知らない？

でも、事件のおかげでソ連との交換教授は一時ストップしてしまいました。次、しばらくしてから来た人はもう共産党員バリバリの人。絶対逃げないような感じ（一同、笑）。

畔柳 ほかの学生にはロシア語は人気でしたか。

生田 [ロシア語科は] 定員は満たしていましたね。割と人気があったような気がします。ロシア [ソ連] 船が、神戸港とか大阪港に来るでしょう。みんなでグループを組んで行って、船の中で歓待してもらって、良かったです。そのとき初めて琥珀のネックレスをもらいました。

須佐 私も行きました。ソ連時代の最後ですよ。

生田 行った？ ああいう風にしないと、先生以外にロシア語で話をする人がいなかったものね。

須佐 大阪港まで行って。もうみんな歓待してくれて。

生田 一緒、一緒（笑）。私は神戸港も、ソ連船が来る度に行っていました。船に売店があるので、私達も何か買うことができました。

畔柳 船の乗客の目的は、観光ですか。

生田 観光のために来て、日本中を船中泊で回るのですよ。陸に降りてからはバスで観光しますけどね。そういう感じの旅だった。

ロシア語教師として

畔柳 大阪外国語大学の修士課程を出られた後、すぐロシア語を教え始められました。

生田 それは非常勤講師としてね。専任じゃなかったです。

須佐 私は先生から LL 教室で。発音の先生でしたね。

藤原 私も“LL”です。その頃は二部の夜間のコースもあったから、夜に先生が生協でご飯を食べているという（一同、笑）。

畔柳 “LL”というのは……？

生田 “Language Laboratory”っていうのでね。ブースがあるのですよね。今だっ

たら家で聞いたらいいのだけど、当時は家で聞けるような時代じゃなかったから。みんなカセットをブースに入れて、発音するのね。

大体メカに弱い先生が多いので、授業を受け持つのが嫌で嫌でしょうがない先生ばかりなの。法橋和彦〔ほっきょうかずひこ〕先生（大阪外国語大学名誉教授、1932–2024）は競馬が好きで、競馬の解説を新聞でもしているくらいなのだけど、操作を間違えて競馬を“LL”で流してはるのね。法橋先生自身は学生みんなが笑っているっていうのに気がつかないのだけど（一同、笑）。のどかな時代だった（笑）。

畔柳 この頃、ロシア語の教科書〔生田美智子、Плотникова Г. Н. 『Слушаем русскую речь и говорим по-русски』大阪外国語大学、1989年〕を作られたと伺いました。

生田 プロートニコヴァさん、“プロちゃん”〔教え子たちによる愛称〕（一同、笑）と一緒に作りました。

畔柳 ソ連から来られていた先生ですね。

藤原 プロートニコヴァ先生だったら、80年代後半ですか。

生田 1989年3月出版と書いてある。“ИК (Интонационная конструкция)”が³、ブリズグノーヴァさん（Брызгунова, Елена Андреевна）っていう人の本で流行っていて、それを教えていた。ИК-1, 2, 3とか言ってね。例えば、肯定文はこうなのだけど、質問の場合はピットと上がって、感嘆文の場合はどう、とかそういうのをやっていた。

藤原 プロートニコヴァ先生の前に、サンニコヴァ先生（Санникова, Алла Владимировна）が最初〔に習ったロシア語ネイティブの先生〕で。怖かったというか（笑）。

生田 怖かった？

藤原 体格が大きかったのですよね。パルチザンで戦ったという噂でした。ミンスクの出身だったから、そう言われていたのだと思うのですが。向こうの先生は日本語が全くわからないところに、1年生の4月からいきなり放り込まれて、お互いに意思疎通ができない。あれはすごいですよね。学生に言葉が通じないから、先生が「はあ……」って溜息をついている（一同、笑）。

畔柳 ソ連からの先生は、日本語は全くできない状態に来るわけですか。

藤原 そうですね。だから多分、アテンドは大変というか。宿舎に迎えに行つて、食材の買い方、ゴミ捨ての仕方を教えて、とか。

須佐 2年ぐらいおられた気がします。語劇も全部指導してくれたりする。私はモロゾヴァ先生でした。

生田 1年契約だったような気がするけどな。更新していたのかな。

藤原 サンニコヴァ先生は2年で、春休みに一回帰って、また戻ってきていました。

畔柳 先生の教え子の方々について伺えますか。

須佐 最近だと植原邦雄さん。防衛省に最初入って、外務省に移ってユジノサハリンスクの領事になっていらっしゃるんですけど。

生田 この前行ったときには、植原さんはサハリンにまだ行っていなかったよね。今年度 [2024 年度]、サハリンにまた行くので、その時には彼を訪ねようかなと思っています。



教え子たちと

藤原 『セーヴェル』¹で言うと、池田いずみさんとか、杉山真央ちゃんは先生のゼミ生ですね。先生のところはロシア人の学生さんも結構いるのですよね。

須佐 『セーヴェル』の編集に、先生の教え子の方が携わっているのですよね。

¹ 雑誌『セーヴェル』：満洲からの引き揚げ者で、哈爾濱学院出身の小泉義勝（関西大学名誉教授、1920–2009）、満洲で生まれ、雑誌記者をしていた杉山公子（1928–2009）、松野威五（1919–1999）、また当時大学院生の内山ヴァルーエフ紀子の4名を会員とした「ハルビン・ウラジオストクを語る会」により、1995年創刊。初期の同人には満洲の生活を経験した人が多かった。2024年現在の刊行ペースは年1回となっており、40号（2024年）まで刊行されている。インタビュー後半も参照。

生田 書いてもくれているしね。イリヤ・ハリンさんは留学してきて、一緒に研究発表会もしましたね。ここにいるときに日本人女性と結婚しました。遠峯エレナさん、遠峯良太君も私のゼミの学生で、結婚して、今ずっと函館にいます。

『大黒屋光太夫の接吻』（1997）の誕生——「接触面」に注目する

畔柳 卒業論文のテーマはゲルツェンということでしたが、そこから関心が大黒屋光太夫にどう移ったのですか。

生田 境界領域というかね。ゲルツェンも亡命ロシア人なのですよ。イギリスに行って『鐘』を出したり。そういう人に興味があるのは、それはずっと今に至っています。なぜ大黒屋光太夫に、となったかという、大黒屋光太夫の「接吻」っていうことでね。

その頃、私の後輩にあたる平田由美さんが大阪外国語大学のビルマ語を出てから、京大人文研〔人文科学研究所〕で助手をしていて、飛鳥井雅道先生（京都大学名誉教授・日本史学者、1934-2000）の班「文学から何がみえてくるか」に私も呼んでくださったのです。そのときに「大黒屋光太夫の接吻」という題で発表をやったのですが、「接吻」みたいな形態のところから切り込んでいくというのが、気に入っていただけなのです。谷川恵一さん（国文学研究資料館名誉教授・日本文学研究者）、米井力也さん（大阪大学教授・比較文学者、1955-2008）、彼らが出版社に売り込んでくださったのです。それで私は何のつてもなかったのですが、その研究を『大黒屋光太夫の接吻』というタイトルで出版できたのです。

そこからあとは、割と出版社を見つけやすくなりました。最初の出版だし、普通では出せないのを、そういう人たちのバックアップを受けて出版することができました。研究会に出ていたのはみんな常勤の先生で、私1人が非常勤だったので、みんなも割と気にかけてくれていてね。

須佐 先生のお話だと、人文研で研究発表されたことが後の研究のきっかけというか、そこでの研究発表があったからこそ本が出て、それからですよ。だから原点でもないですけど、大きな……。

生田 ステップですね。「文学から何がみえてくるか」というのが研究会の目的だったのですよね。私は文学者じゃなかったのですが、なんか呼んでいただいて。あと木村崇さん（京都大学名誉教授、1944-2024）も一緒に行っていて。彼は文学ですけどね。

畔柳 木村先生とはそのときからお仲間ですか。

生田 木村さんとはずっと一緒。木村さんと浅岡宣彦さん。それとあとお亡くなりになられた、ロシア史研究会の元会長の佐々木照央 [ささきてるひろ] さん



『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』より



日本で幽閑生活を送ったワシーリー・ゴロヴニン (1776-1831) の末裔、ピョートル・ゴロヴニン氏宅を訪問 (右端がゴロヴニン氏)

（埼玉大学名誉教授、1946-2023）。一緒によくロシアに行つて発表しました。

藤原 [『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』（2008）をめくりつつ] 私、これがすごく気に入っていたのですよ。腕立て伏せですか。これが強烈に残っている（笑）。

生田 いや、そういうふうに視覚的に捉えられていたのですね（笑）。

藤原 これはどうやって見つけたのですか。

生田 エストニアに行つて、レーヴェンシュテルン（Левенштерн, Ермолай Ермолаевич, 1777-1836）の日記があるのですよ。読んでいたら、その中にこの絵があったのです。

藤原 向こうに行つて見つけた

のですか。

畔柳 先生はこの本の中で、「インターフェース」にいた通詞や民衆の考えに着目するというテーマを打ち出されています。光太夫もそうですよね。そういう関心を持たれるようになったきっかけをぜひ伺いたいです。

生田 これは誰か偉い先生の何かがあったからというのではなくて、だから先行研究を参考にしたわけではないのですけれども、それ以前全然接触がなかった者同士が接触するとき、接触面にいた人に注目するのは面白いなと思って。通訳とか、そういう何かに注目しました。だから、外交交渉が全くなかったところを突破するような人の動きは、光太夫にしろ、関心がありました。

畔柳 関連して、2017年のロマンフ王朝展は東洋文庫とのお仕事ですが、これは東洋文庫の牧野〔元紀〕さんからお話があったそうですね。

生田 牧野さんとはどこかのシンポジウムで一緒になったのですよ。隣に座って。

藤原 山口で何か史料のカンファレンスがありませんでしたっけ。山口大学の古い資料を見せていただいて、東洋文庫の方が何人かいらっしやっていました。

生田 それでお知り合いになって、貴重な資料を色々を見せていただいたのですよね。

日口極東学術シンポジウム

畔柳 先生がなさってきたような「境界領域」に着目する研究は今でこそ当たり前ですが、元々はそんなにメジャーなテーマではないですよね。

生田 全然メジャーじゃなかったと思います。

畔柳 そういうとき、研究発表をどのような場でされましたか。

生田 私、発表が割とできたのは、毎年、大阪（関西）、それからウラジオストクとハバロフスクがホストになって研究会を開いて、その研究会で発表した論文を発行していたのですよ。発行するのはウラジオストクの極東連邦大学の出版会がほとんどでしたが、そこがいつも出してくれる。だから割と論文を公刊することが出来ました。

須佐 藤本和貴夫先生（大阪大学名誉教授、大阪経済法科大学学長、1938–2025）が代表になって、関西と極東、特にウラジオストクとハバロフスクで経済と歴史

の人たちが集まって、交互に日本・極東と研究会をやっていたのです [日ロ極東学術シンポジウム]。コロナ禍でなくなってしまいました。私も学生のときは翻訳を手伝いましたよ (笑)。

生田 翻訳の仕事を、常勤の教官、非常勤講師、院生など、みんなで分担したのですよ。

畔柳 それはロシア人の研究者が書かれた論文を日本語にしていたということですか。

藤原 向こうの人がこちらに来たときは私たちが彼らの口頭報告を日本語の冊子にして、向こうに行ったときには、彼らが私たちの口頭報告を全部ロシア語の冊子にしてくれる。

生田 だからみんながすごく苦労して翻訳していました (笑)。発表の機会が保証されていたのは良かったね。コロナ以降はないのね。

藤原 極東連邦大学に勤めていた先生が亡くなりました。[『セーヴェル』をめくりつつ] 2019 年の 35 回で終わりですね。

畔柳 35 回というと、つまり 35 年間やっていたってということですか。それはすごいですね。

須佐 雲和広さん、羽場久渥子先生とか。羽場先生はロシア関係ではないのですが、いらっしゃいましたね。

ニコライ・ネフスキー研究

畔柳 高名な民俗学者・言語学者ニコライ・ネフスキーについて研究されています。先ほどお話に出た、ネフスキーの親友で、大阪外語で教鞭をとったオレスト・プレトネル先生にロシア語を習ったのがきっかけでしょうか。

生田 それもありましたね。私、昔からネフスキーに関心があって。彼のお嬢さんのお家に何回も行って、写真とかなんとかいっぱい見せてもらいました。モスクワにお住まいだったので、いつも文書館や図書館に行ってからお訪ねしていましたが、食事を用意してくれて、борщ とか出してくださってね。お嬢さんは私が研究成果を発表することを期待されたのですよ。ところがまだこの『資料が語るネフスキー』(2003) しか書けていないので……。もう彼女はお亡くなりにな

なったのですが、お孫さんとかにささげたいと思っています。

口頭では、天理大学でシンポジウム「悲劇の天才言語学者ネフスキー」をしたのですよ [2015年、特別展「天理大学創立90周年記念展 悲劇の天才言語学者ネフスキー——自筆資料に見る軌跡」(2015年11月)に併催された]。

須佐 今、日本のネフスキーの資料はほぼ天理図書館にありますね。

生田 天理大学はネフスキーと直接関係はないのですがね。ただネフスキーの本が古本屋さんからガバッと出たのですよ。そのときにどこが買うか。彼は京大にも非常勤で行っていた。それから本務校であった大阪外大とか。ただ大阪外大も、京大も、年間の予算が限られているでしょう。天理大学は真柱さん [天理教の代表] が「OK」言ったらいくらでも出るのですよ。それでそっちに行っちゃって。天理大学は別にそこで教えたわけでもないし、ネフスキーとは直接の関係はないけれども、買い取って。

須佐 蔵書だけでなく、いろんな資料もありますよね。整理はまだ途中のようですが。

生田 一応、全部写真には撮らしていただきました。ネフスキーは写真を撮るのが好きだったので、写真を撮っている自分を写したものと、裸に近いような姿で勉強している写真とかがありました。本を必ず出さないといけないと思っているのですけどね。

畔柳 ネフスキーの娘エレナさんとの思い出をお聞かせください。

生田 本を出してほしいというのが、私に対するエレナさんの希望で。出します、と言っているような資料を見せてもらったのに、まだ書けていないから、心が重いですね。彼女、日本に来たのですよ [2002年]。宮古島の「ネフスキー通り」の“歩き初め”のとき呼んでもらって。私も一緒に行きましたけどね。宮古島の人にはネフスキーのことを覚えていて、私、そこでネフスキーの時代に生きていた人のインタビューもしました。ネフスキーは台湾も行っているから、そこにも行ってインタビューして。とにかく全部しているのですよ。ネフスキーはお墓がないのですけれども、ロシアには、大きな穴を掘って、いろんな粛清された死体と一緒に放り込まれた所があるのですよ。Левашовская пустошь っていうのですけれど。ネフスキーの娘婿に運転してもらってそこに行ってきました。墓

標も何にもない所です。ただギロチンにかけられている人の像が置いてありました。まだ全然発表していないので、これからの仕事としてやりたいと思っています。

「ハルビンとウラジオストクを語る会」と雑誌『セーヴェル』

畔柳 『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』などを発表された後、社会史の方面で、中国の白系ロシア人へと、お仕事をさらに展開されました。そのきっかけをぜひ伺いたと思います。

藤原 やはり、雑誌『セーヴェル』ですかね。執筆者として先生のお名前が出てくるのが9号からです。1999年ですね。

[以降、雑誌『セーヴェル』のバックナンバーをめくりつつインタビュー]

畔柳 早くからハルビンに目をつけていらっしゃったのですか。

生田 伊賀上菜穂さんとか、阪本秀昭さん、藤原さんたちと一緒にハルビン行ったでしょう。あれいつだった？ 中嶋毅さんとか、みんな一緒に。



『セーヴェル』の調査旅行（2013年9月）

藤原 あれは2013年です。

生田 私、[最初は]内山ヴァルーエフ紀子さんと一緒に行ったのを覚えている。もっと早かったと思います。

藤原 内山さんが「哈爾濱に残るロシアを探して」っていうのを書いている時ですかね [12号]。

生田 これ、私一緒にいたと思うわ。

藤原 じゃあ、2000年ですかね。12号の「まぼろしのスパリヴィンの墓」に書いてあります。

生田 2000年には左近毅さん（大阪市立大学名誉教授、1936–2002）、内山さんと一緒に行きました。『セーヴェル』の同人たちと一緒に実際に旅行をしてみて、余計関心が深まりましたね。

畔柳 先生は『セーヴェル』の創刊の時から同人だったわけではないのですよね。先生が『セーヴェル』、「ハルビンとウラジオストクを語る会」にかかわられるようになったきっかけは、ハルビンへの関心ですか。

生田 そうですね、[ハルビンが]面白いなと思ったのは、小泉先生が亡くなってからかな。あるいはお亡くなりになる前に、小泉先生から後のことを頼まれたからかな。ハルビンは日本から一番近い西洋だと言われていた、独特のモダンな感じの街だった。みんなで一緒にハルビンに行ったのですよ。皆に行こうと言われたのだと思うわ。私はやっぱりみんながいてくれたからやってこられました。私は事務とかあんまり。藤原さんは経済が専門だからそれこそばっちり。そんなのが関係あるかどうか知りませんが（笑）。

藤原 2002年の16号から[編集が]先生の名前になっています。これはあれじゃないですか？ 刷り直した号。

生田 アイ・ジーという印刷会社でいつも頼んでいたのちがうかな。アイ・ジーに変わる前かな。私が入らせていただいたときには、薄くてペラペラでしたが、雑誌ができる体制は既にできていました。

畔柳 雑誌『セーヴェル』運営に当たってご苦労があったと思いますが、印象に残っていることがありましたら伺えますか。

生田 なんかありました？（一同、笑）私はもうこの人たちがしっかりしている

から、原稿を催促して集めて、それで印刷できるようにして。藤原さんは結構しんどかったのとちがうかな。

須佐 会計もされているし。

生田 事務能力がすごくあるからなのですけど。

藤原 ないですけど（笑）。でも、先生はいつもおっしゃいますけど、『セーヴェル』は研究仲間がいて、いいですね。研究会もできるし、一緒にハルビンにも行ったし。

生田 そう、それが良かった。ここの同人になってくれている人は、結びつきが強いのですよね。強くなったというかね。

藤原 『セーヴェル』の独特なところは、体験者の記事をずっと載せているところでしょうか。

生田 最近では少なくなったけれど、みんなで一緒にハルビンとかをフィールドワークしたから、それも良かった。

藤原 私が行ったときは、これはその時のですよ。[「旅のしおり」を見せていただく]

生田 本当によく残っていたね。

藤原 行った人の名前が中にあります。

生田 本当だ。これは、マヤトラベルが作ってくれた。割とそういうのが専門みたいな旅行社ですね。

須佐 私は『セーヴェル』に入ったのは遅かったのですが、それは大学に行く途中に、ときどきモノレールで先生とお会いしたのですよね。そのとき「何しているの、須佐さん」とか言われて、それがきっかけで入ったのです。先生のおかげで、っていうか、先生が「何しているの」っていうから入った（笑）。

生田 そんなこと言った（笑）？

須佐 はい。こんなあるからって言って、で入って。その後一緒に旅行に行って、いろんな先生がいらっちゃって、それがすごく勉強になって。でもコロナの後、旅行はなくなってしまって、それが残念です。

生田 そうね、また行ってもいいけど……。

藤原 そうですね。行きましようとかいう話は出てはいますが、なかなかちょっ

と。

須佐 計画するものなかなか難しいですよ。

畔柳 『セーヴェル』の同人はどのように集められたのですか。

生田 満洲の台湾人をやられている方がいて、その方に頼んで書いてもらったこともあり [36号]。だから、阪本先生が集められた先生とか、知り合いの先生以外にも、同じようなテーマの人に原稿依頼をしました。映画の研究者とか、そういう人もね。

藤原 40号の李潤澤さんとか。

生田 彼女は中国に帰ったのかな。

藤原 そうですね。でも、こうやって書いてくれて、日本に来たときに持って帰りはったでしょう。

生田 だから、国籍もいろいろよね。

文書館での史料調査について

畔柳 先生はアーカイブでの史料発掘にも精力的に取り組まれています。

生田 藤原さんで行ったのかな。

藤原 先生とは、ロシアはРГИА [Санкт-Петербургский государственный исторический архив] とハバロフスクは行きましたよね。それから一緒に行ったのは、プラハと、サンフランシスコのРусский музей とフーヴァー [Hoover Institute]。それから私たち3人で一緒に、ワシントンのNARA [National Archives and Records Administration] に行きましたね。

生田 ワシントンね。学会もよく行ったのですよ。学会に行くのと調査に行くのと、あるいは両方するとか。

藤原 『セーヴェル』でもう一つ面白いのは、現地に行った旅行記とかも書いてあって、それを参考にしながら [同じ場所で調査する] とかもお互いできて。先生がハバロフスクの調査記で、ハバロフスクのアルヒーフでどうやって、どうだったか、というのを書いてくださっていて、次行く人はそれを読んで行くのですよ。[『セーヴェル』をめぐりつつ] 左近幸村さんもРГИАについて書いていますよね [27号]。書いてくれて、アルヒーフについて情報提供もしてくれるの

ですよ。中嶋毅先生は結構書いてくれていますよね。ハバロフスクで生田先生に会ったって書いていますね（一同、笑）。

畔柳 『セーヴェル』という雑誌は研究者のコミュニティそのもので、とてもいいですね。調査に行かれるときは、大体何週間ぐらい行かれていたのですか。

生田 2〜3週間かな。ロシアの文書館は注文して何日か経たないと、資料が出てこないのですよ。だから日本だったらすぐに出してもらえるのに、だいぶ待つから、すごい時間を取っていかないと満足な調査ができないというのが、ちょっと大変でした。特にロシアはそうですね。ほかはそんなにひどくもないけど。

ロシア人研究者との交流

畔柳 次にロシア人研究者との交流について伺いたいと思います。まず、『中国におけるロシア・ディアスポラ Российская диаспора в Китае (1920-1950-е гг.)』(2008)などのお仕事がある、エレーナ・アウリレネ先生 (Аурилене, Елена Евлампиевна) についてお聞かせください。

生田 私が文書館か図書館で本を見ていたのですよ。そこにたまたまアウリレネさんご本人がいらして、これ私の本です、っていうふうに言われてね。それからなんか仲良くなって。家にも招待してもらって。大きな犬がいる家。日本にも来てもらって、藤原さんが案内してくれて。私、あの人を京大の人文研に連れて行ったのね。アウリレネさんがトイレに行って——水洗の流し方を教えていなかった私が悪いのかもしれないけど——非常ベルを押したんですよ。ふわーって鳴って、みんなが駆けつけてきて、彼女、すごい恥ずかしい思いをしたと言っていました（一同、笑）。でも、そんなのいちいち言わないとダメかな（笑）。

畔柳 藤原先生もお親しいのですね。

藤原 それは、やはり生田先生が仲良くなったのが最初で。アウリレネ先生が誕生日のときに、たまたま向こうにいて、呼んでもらって。スウェーデンかどこかの学会で、発表も一緒にしましたよね。

生田 彼女とそれからオリガ・バキチ (Bakich, Olga Mikhailovna) さん、伊賀上菜穂さん、藤原さんと私。一緒にパネルを組んだのですよ [国際中東欧研究会

(ICCEES) スtockホルム大会 (2010年)]。エルマコーワさんとも組んだことない？

藤原 さっき写真にありましたね。あれはバキチ先生とエルマコーワ先生。別の2016年のシンポジウム [国際シンポジウム「わたちの満洲とその後」] で、日本でやりましたね [33号]。

生田 あときは相川和子さん (1937-2025)、高木榮子さんとか、昔ハルビンにいた人たちを全部呼んで、シンポジウムしたことを覚えています。

藤原 ヨコタ村上孝之さんと、岡山のドミートリエヴァ [・エレナ、ネチャエワ・アンゲリナ] さんが通訳した。

畔柳 アウリレネ先生とのパネルは、いつ頃の話ですかね。

藤原 [『セーヴェル』をめぐりつつ]「満洲の中のロシア」のシンポジウム (2012年1月) が28号……[ICCEESでパネルを組んだのは]2010年ですね [27号]。

[ここで一旦、生田、インタビュー会場の教室の外に出る。戻ると、ドアのオートロックが作動して教室に入れぬ。]

須佐 [開錠しながら] 今の大学はこんな感じですね。同じような経験をしたのはフィンランド。フィンランドは銃の所持率が高く、以前学校で銃乱射事件があったこともあって、今では防犯のために教室は外から開けられないようになっている。でも遅刻した生徒はこっそり教室に入れなくなっちゃった……。

藤原 うちも今、下で閉めているじゃないですか。やっぱりこれぐらいの場所にあるんで [新箕面キャンパスは旧キャンパスよりも繁華街に近い]、不審者が出るからっていうので、結構厳しいのですよ。

生田 昔の大阪外国語大学には誰でも勝手に入れて、オープンな感じだったけどね。私が勤めていた頃は、研究室で寝泊まりしている先生がいました。朝早く行ったらパジャマでね (笑)。遠いところにあったからね。そうしないと仕方ないという一面もありました。

畔柳 [2019年の写真を見つつ] この方がプシュカリョヴァ先生 (Пушкарева, Наталья Львовна) ですか。

生田 この人はロシアの女性学会の会長なのよ。

畔柳 どちらでお知り合いになったのですか。

須佐 先生はその当時、女性学会に毎年行ってらっしゃいましたね。

生田 そう、私、女性学会でよく発表していたのですよ。そこで知り合いました。

畔柳 女性学会というのは、ロシアの学会ですか。

生田 世界的なものです。ロシアの人もそうだし、いろんなところから女性問題に関心のある人と呼んで、やっています。プシュカリョヴァさんが車を運転して、いろんなところを案内してもらって。積極的な人。こちらも招待しろと言われて、科研費で招待して、伏見稲荷とかいろんなところに連れていきました。有宗昌子さんの案内役がうまかった。

畔柳 2019年のシンポジウム「非日常における女たち」です [35号]。

藤原 須佐さんは司会されていますね。報告もされています。

須佐 覚えてない（一同、笑）。

藤原 お友達のムーヒナさんっていう人も自費で一緒にいらして。お2人とも割と日本人に似ていて、京都に一緒に行くと、日本語で話しかけられて。あの人たち、日本語わからないのですが、って（笑）。

畔柳 その後も交流は続いて。

生田 最後に会ったとき、ロシアで彼女が案内してくれて、そのときに交通事故に巻き込まれたの。彼女が私に「降りて、タクシーで帰りなさい」と言うて。帰国する日だったから。

畔柳 そうなのですか?!

生田 でも何ともなかったのと違いますか。今もメールでやり取りはしていますので。やり手よね、すごく。

畔柳 次はアミール・ヒサムジーノフ先生（Хисамутдинов, Амир Александрович）について伺えますか。アジア太平洋地域のロシア人の活動を扱うウラジオストクの歴史家です。

生田 神戸にある外国人墓地に一緒に出かけて調査しました [24号]。それで先ほど言ったオレスト・プレトネル先生のお墓にも行きました。プレトネル先生のお嬢さんもそのとき既に亡くなっていたのかな。私の教えていただいた外国人の

先生たちのお墓がいくつかあって、お参りしてきました。

畔柳 ヒサムジーノフさんは非常に多作な研究者です。

生田 そうそう、もう、書きなぐっている感じですよ（一同、笑）。家に行ったのよ。そうしたら手先も器用で、自分で日本の神社を建てて（一同、笑）。家も自分で全部建てたのよ。あらゆるところすごい人。エネルギーがすごい人ですね。論文も書くのがすごく早い。

畔柳 ロシアでも、先生が研究されているテーマを、やっぱり同じように追求している先生方がいるということですよ。ロシア人の研究者とご自身のスタンスの違いを感じられたことはありますか。

生田 私は日本に足場があるし、向こうはロシアで、やっぱり視角が違うのかな。ちょっと目を付けるところとかね。それは、あまりネガティブに捉えるものではないと思います。それぞれの特性があるから、それぞれに合った形で。同じものを見ても違いますものね。

雑誌『セーヴェル』の調査旅行と新年会の思い出

畔柳 ところで調査旅行で先生が訪問されたのはハルビン、満洲里と？



『セーヴェル』の調査旅行：内モンゴル（2016年9月）

生田 ハルビンはもういっぱい行きました。藤原さんがやっているのはチューリン [商会] やから都会も行っているし、それから佳木斯^{ジャムス}とかも行ったしね。ハイラルも行ったよね。

須佐 あとは内モンゴル。先生、国境を越えたんちがいますか。

生田 国境越えた。川の真ん中から出た。川を隔てて中国とロシアになっていたと思うわ。それを途中まで行って。本当は行ったら駄目なところに行ったの。ブラゴヴェシエンスクやなかった？

須佐 もう一つ、荷物を持っている人がいっぱいいてどうのこうの、っていう話を先生から聞いたことがあるのですけど……。

生田 ロシア人、大体荷物いっぱい持っている（一同、笑）。

須佐 そう、綏芬河も先生は行かれていたと思う。あとはロマノフカ [村]。

生田 ロマノフカ、行きました。良かった。

藤原 ロシアですけどピロビジャン、行きましたね。

生田 いろんなところに行きましたね、本当に。

畔柳 ピロビジャン、ユダヤ自治州はいかがでしたか。

藤原 シナゴークに杉原千畝さんのちっちゃい写真がありましたね。

生田 千畝さんの写真は掲げてあったけど、「もう 1 人樋口季一郎がいるでしょう、掛けておいてください」って言うたのを覚えている。軍人だったのだから、それほど有名じゃないけど、でも [ユダヤ人の満洲通過に] 貢献したのですね。

畔柳 先ほどの、先生が国境を越えたというのは、中国側からロシア側に行かれたってということですかね。

生田 中国に行ったときに越えてね。塚田力さんと一緒に。彼は中国語ができるからね。

藤原 『セーヴェル』は新年会を 2014 年からずっとやっています。

生田 最近はずっと「キエフ」[京都祇園のレストラン] やね。このごろ新年会は発表と一緒になんですよ。頼んどいたら「キエフ」が……。

須佐 全部セットしてくださる。発表は 1 人 30 分ぐらいで。

藤原 皆さんいろいろな発表をやって。2014 年は生田先生と天理村の山根理一さんがやったりとか。

生田 山根さんは天理教の信者なのですけどね。満洲に天理村というのがあったのです。その住人だった人。もう亡くなられたと思いますけどね。家に行ったら、玄関に満洲〔国〕の国旗が掲げてあって。

藤原 朝日新聞の永井靖二さんのモンゴルに行った話とか。

生田 永井さんがモンゴルに行って、跡を飛行機で写真に取ってきたのよね。それを発表してもらった。永井さんって、今、朝日新聞の編集委員かなんか。その頃は朝日新聞の記者やったのですけどね。

藤原 新年会は2021年までやっていて、2022、2023年がなくて、2024年。

畔柳 雑誌だけでなく、新年会も大事な集いですね。

生田 1人か2人、必ず発表しているからね。

畔柳 毎回何人ぐらい参加されるのですか。

生田 「キエフ」の個室の席いっぱいになるものね。

須佐 30人、40人いますか？

生田 家族で来る人もいる。

藤原 最近はまだ大きくなったけど、うちも。

生田 小さかったからね。ヨコタ村上さんも、内山さんもそうやってね。それから〔池田〕いずみちゃんね。『セーヴェル』の編集をしてもらっている、ゼミの元学生。ご主人がロシア人。

須佐 今年先生がサハリンの話をされて。

生田 2023年12月に須佐さんと一緒に行ってきたのですけどね。そのときの報告をしました。

最近のお仕事について ― サハリンでのインタビュー

畔柳 先生の直近のお仕事はサハリン関連ですね。

須佐 先生と一緒にユジノサハリンスク、コルサコフ、ホルムスクの三都市に行ってきました。王子製紙工場跡とか、奉安殿跡とか。日露戦争のときの日本軍上陸記念とか残っていて、それを見たりとか。残留日本人のサトウ・ボリスさんと、奥さんが韓国人なのですけど、お会いしたりしました。サトウさんのご両親は60年代に日本に帰ったそうです。

生田 なんか [ロシアのウクライナ侵攻後] あんまりモスクワとか行かないものね。今度予定している調査では教え子 [上述の植原邦雄さん] がそこで働いているから、インタビューする人を探してくれているのですよ。だからぜひ行こうと思っています。

畔柳 そういう伝手を使いながら調査されているのですね。

生田 伝手がないと、いきなり行って、誰かとインタビューしたいです、って言っても、ね。やっぱり、ある程度用意してから行かないと。

須佐 この前は北海道サハリン協会の方に協力していただいて。でも、残留日本人の方々もうお年でほとんどもうインタビューできる人がいなくなった、とかおっしゃっていて。だからこの前は3人でしたよね。

『満洲からシベリア抑留へ』(2022) — 抑留経験者をどう探すか

畔柳 先生のお仕事でも、女性の抑留者に注目するという視点は、新しかったと思いますが、研究のきっかけを改めてお聞かせいただけますか。

生田 昔から知っている朝日新聞の記者が、私のところに電話をかけて来たのですよ。ある女性が抑留中にナホトカで、ロシア人にダンスホールに連れて行ってもらった、という話をしていると。その、真偽のほどを尋ねられたのですよ。私もそんなまさかと思って、その記者が彼女にインタビューするとき一緒に連れて行ってくださいと頼み込みました。連れて行っていろいろな調べると、本当にその人はダンスホールに行っているのですね。佳木斯第1陸軍病院の看護婦さんだったのですよ。その人から芋づる式に、ほかの看護婦さんとか、看護婦見習いとか、いろんな人を紹介してもらって『満洲からシベリア抑留へ：女性たちの日ソ戦争』(2022)、これを書いたのです。

畔柳 元々は文献学から研究の世界に入られて、今はインタビューをメインにお仕事をされています。その移行については。

生田 やっぱり、インタビューの方が生々しい声が聞こえるのでね。面白いつていうか、今インタビューをしなければ亡くなられてしまうというのがあって。だからまずはこれを優先して。私がインタビューした、佳木斯第1陸軍病院の婦長さんなんかね、100歳過ぎられて、この間亡くなられました。だからネフスキー

なんかも、もう何でも、ちょっと置いといて、今インタビューしておかないと、というのがあって。

畔柳 朝日新聞の記者の方とはどうお知り合いになられたのですか。

生田 大学に「夜間主コース」[社会人などを対象とした夜間の4年制コースで、2007年大

阪大学との統合時に学生募集停止] っていうのがあったのですよ。授業があったから、夜も私、大学にいたのですね。そうしたら朝日新聞の記者が、私とは全然なんの知り合いでもないのに、夜に研究室をノックして。亡命ロシア人関係の質問をされたのです。

[これまでインタビューした抑留経験者は女性が多いが] 男の人で1人、印刷所を経営している人がいたのですよ。その人が、みんなで帰ってきてからの証言とか、自分のいろんな実体験を書いておられる。50何冊まであるのかな、それを全部コピーさせてもらってね。人的にも、資料的にも助かりました。[抑留経験者は] みんな一緒に苦労したっていうのがあるから、結束が固いのですよね。1年に1回ぐらい、どっかにみんなで遊びに行って、親睦会みたいなのをやって。[1人証言者が見つかる] 芋づる式で [他の証言者にも会える]。[最初の] 1人を見つけるのが大変みたいで、それがたまたま私はラッキーだって。そういう新聞記者の人と知り合ったとかね。向こうは取材に来られたのだけど、取材に答えるよりか一緒について行くと、押しの一手で (笑)。ついて行きました。

畔柳 ロシアでは、当時からずっと今もロシアに住まれている日本人や、その周りで抑留を目撃していた方へのインタビューもなさっています。

生田 それこそさっきも言いましたけど、芋づる式に行くから、会えるかどうかわからないし、もう90歳、100歳近い年代になってくると、かなり亡くなっているのですよね。だから、やるのだったら今のうちっていうのがあって。



インタビューの様子

須佐 覚えているのは、ロシア極東に行った時、先生、人に会うたびに聞いていましたね。前から歩いてきた人がちょっと年配だったら「これ見たことありますか」とか。コムソモーリスカヤ・ナ・アムーレで「絶対たくさん日本人いたから」って。

生田 まず村役場に行って一番長老の人を紹介してもらって、その長老の人の家に行って、「こういう日本人知らないか」とか言うと、大体紹介してくれるのですよ。最初から準備なんかしていけなかったものね。大体みんな親切なので、あんまり拒絶されることはなかったですね。日本からわざわざこんなところまで来てくれたっていうので。その人たちが発行している冊子みたいなのを頂いたり。でも急がないと、もう亡くなってしまわれるね……。

須佐 あとは抑留の墓参団も行かれましたよね。そのときも博物館で話をしたら、ずるずる出てきたのですよね。それ以前に富田武先生（成蹊大学名誉教授、1945-2025）が名簿については全部確認されていて、それも『セーヴェル』にあるのです [35号]。けど、そのときも「何かあるはずだ」とか言って喋っていると、「これかな」なんて、箱でいっぱい出てきたっていうのがありました。

生田 向こうが出してくれたのも、押しの一手段ですね（笑）。

畔柳 この女性抑留者についての成果は、社会的な注目も集めたかと思います。

生田 ラッキーだった部分もありますよね。

須佐 先生は新たに女性抑留者の名簿を見つけられましたよね。それも大きかったかと。

藤原 新聞の夕刊の一面に載りましたよね。

須佐 先生の指がしっかり写真に入っていましたね（一同、笑）。

藤原 生田先生が載っていますねって、同級生からメール来ましたよ。

須佐 私もコピーして送りましたもんね。

生田 ありがとうございます（笑）。

畔柳 専門家ではない方に研究についてお話しされるとき、心がけていらっしゃることはありますか。

生田 わかりやすいように話すことかな。あと私、大体プリントだけじゃなくて、パワーポイントも使ってやるのですよね。割と、いろんなところから講演を

頼まりましたね。やっていることが女性だというので、これまでほかの研究者があんまりやっていないからかな。割と親しい男性の抑留者の方に聞いたら、「女性なんか、そんなのはいなかった」って。だから、男性の抑留者でも女性が抑留されていたことを知らない人は結構いる。たまたま良いツボを見つけたっていうのがあるんじゃないかな。

日本ロシア文学会

畔柳 最後に、日本ロシア文学会について伺えますか。そもそも最初に入られたきっかけは。

生田 國本先生に勧められたのだから、もう大昔です。論文を読んでいるだけじゃなくて、人の研究を聞くことは刺激になって良かったと思います。あとはロシアとか、そういうところに行って発表できたのも、刺激的ですね。

畔柳 先生はご自分では文学の専門ではないと思っていらっしゃるというお話が先ほどありました。

生田 ロシア文学会には文学の人が多けれども、文学でない人もいらっしゃるじゃないですか？ 私はそっちのタイプだと思うのですけれども（笑）。文学ってというのはその時々世相をつかみとるから、それを無視しては歴史研究というのも成り立たないと思うので、そういう意味ではいいかなと思います。

畔柳 授業では文学テキストも使われましたか。

生田 ゼミは歴史かな。講読として読むには文学はわかりやすいので、使いましたけどね。『どろぼうかささぎ』を使ったんじゃないかな。自分が好きなもの。訳をみんなが知っているなら、勉強にならないでしょ。だからある程度マイナーな、テーマ的に面白いような。でないと、みんな日本語訳で読んできて、それをそのまま読んで。先生の方は翻訳えらい上手だなと思って（一同、笑）。

畔柳 学会を通じて交流があった先生は。

生田 印象に残っているのは、左近毅先生で、急死されたのですよ。奥様も同じ日に亡くなられて。お別れ会が関西支部であって、そのときにある先生が男泣きに泣かれていてね。ずっと印象に残っています。

畔柳 左近先生は『セーヴェル』の同人でもいらっしゃいました。

生田 左近先生も結構書いてくださってね。私より早く『セーヴェル』同人をしていらしたんじゃないかな。なかなかいい先生でしたよ。

畔柳 本日は長時間お付き合いいただきまして。

生田 いえ、とんでもない。面白かったですね。

畔柳 本当にありがとうございました。

(文責：畔柳千明)

宇多文雄（うだ ふみお）

① 1941年 ② ③上智大学 ④ロシア語学、ソ連・ロシア研究 ⑤『ソ連—政治権力の構造』（中央公論新社、1989）、『ガラスノスチ ソ連邦を倒したメディアの力』（新潮社、1992）、『ロシア語文法便覧 新版』（東洋書店新社、2016）



2024年9月25日、神奈川県藤沢市、小田急江ノ島線・長後駅近くのご自宅にて。奥様も時折インタビューに同席された。

インタビュアー：秋山真一、安達祐子

ロシア語との出会い

秋山 先生、ご無沙汰しております。今日は私と安達先生でインタビューをさせていただきます。

安達 よろしくお願ひします。

宇多 こちらこそ、よろしく。

秋山 先生はなぜロシアおよびロシア語をやろうと思ったのですか？

宇多 うん、あの、大きい理由と小さい理由がある。大きいってのは、状況ね。たとえば、日ソ国交回復とか大きい話。それこそ日本の独立とかね、あの、アメリカの占領下にあったわけでしょ。それから上智大学にロシア語学科ができたって話とか。これはね色々重なる。どういうことかっていうと、なぜ上智なんかにはロシア語科ができたんだってこと。これはどうも国際的陰謀みてえだよ。あの、

つまり、米ソは非常に厳しい関係にあったわけですよ。そこに日本が独立国だったことで入っていくでしょ。もちろんアメリカの保護のもとにあったわけだけども。で、そういう中であってなぜ、やっと日本が独立して、あの、独立回復したって言ったほうが正確かな。それから、日ソ国交が始まったわけだ。で、そういうときにどうして上智のような弱小大学にロシア語科ができたのか。大袈裟にいうと国際的陰謀なんだね。タイミングが良すぎる。

秋山 小さいほうの理由はどうなんですか？

宇多 小さいほうはね、俺は栄光学園っていう、上智と同じ、学校法人のイエズス会の中学高校で、受験の成績が非常に良い学校なんだよ。で、そこから推薦で……。当時推薦制度なんてなかった。ただイエズス会だから内部でやっちゃえみたいなそういう推薦制度はあった。あの、対外的に開かれた制度じゃなくてね。で、俺受験勉強するのイヤだったから、逃げたわけ。つまり当時の栄光学園の受験界での実力と上智の評判みたいなのでいうとこんな [大きな] 差だった。上智低かったからね。ところが非常に運のいいことに素晴らしい先生がいたわけですよ、そこに染谷茂先生 (1913-2002) という。だからわけもわからずに自分が楽しかったと思って入った学校が非常にいい学校っていうのか学科ってのか、だったんだね。そこでぶんなぐられたみたいな感じになって。つまり、わりとちやほや優等生とかいってやってきた、で、本当にちゃんとやってる人からゴーンとやられた感じになって。あの別に染谷先生ってのはそういう意味で厳しい人じゃなかったけど、ちゃんとしてたから、ああこれはいかんわと思ってね。

安達 その栄光学園から上智に行くっていう小さい理由と、社会的な大きな理由が重なってロシア語を選んだってことですか？

宇多 まあ大きい小さいはともかくとして、そう、重なったんだね。で、大きい方の話をすればさ、あの、要するに日本独立、それからソ連との国交回復で、領土問題ですっともめて棚上げしちゃったんだよね、ご存じのとおり、領土問題ってのは「それはともかくとして国交回復しましょう」って恰好をとったわけだよ。で、ちょうどそのころ俺がソ連やロシア語の研究をやりたいと思ったっていうと、ちょっときれいごとになりすぎるんだな。逃げたいと思った。つまり、たとえば東大受けて、とかっていうのとは比べれば推薦で入れてくれちゃうんだも

ん。例えばさ、同じ風に栄光学園から上智に行くにしても経済学部とかいくらでもあったわけで、じゃあなぜロシア語かっていうとそこでわけのわからないままに屁理屈こねたわけだよ、頭の中で。これからはソ連だとかさ、いい加減な話でね。で、やってみたら見事に跳ね返されたってのかね。

秋山 染谷先生の授業でこういうことが印象に残っているってのはありますか？

宇多 いくらでもあるんだね。例えばね、大学を卒業して外務省入ってモスクワ行ったでしょ？ で、家庭教師がいい先生で色々習ってノート取って、さすが本場は違うわいって思う。でも大学時代の昔のノート見たら全部書いてある（一同、大笑い）。

秋山 当時の上智のカリキュラムっていうか、どんな授業があったんですか？

宇多 ロシア語ばかり。

秋山 あ、ばかりですか。

宇多 いや、というかね、選択の幅が狭かった。規模小さいし、銭ないし、っていうことでせせこましくやってたんだよ。つまり広くね、国際関係論とかそういうのはない。ロシア語だらけ。だけどそこにいい先生がいたから得したって言うのかね。

安達 その染谷先生の授業が圧倒的に魅力的だったと仰ったのは、内容が難しかったから？ 内容がなんかこう……。

宇多 染谷先生の授業？

安達 惹きつける何かがあったんですか？

宇多 人柄がよくてね。ばかでも相手にしてくれたから人気はあったね、染谷先生は。でも授業はちゃんとしたよ。新聞読んだりしてたんだよ。

秋山 当時読んでた新聞はどういう新聞ですか？

宇多 プラウダっていうやつ。あの、まだ共産党一党独裁が健在だったからね。

秋山 ソ連事情みたいな授業はなかったんですか？

宇多 一つくらいだね。そこで大学紛争が起こって、がったがたになっちゃった。

外務省時代

秋山 先生は大学の学部卒業後に外務省に入省されていますよね？ その時はどんな仕事をなさったんですか？

宇多 あのね、外務省に入って研修生ってことでソ連に行ったら、無知に、我ながら無知に驚いて。何にも知らないの。あ、これいかんわって思って、で多少一所懸命勉強したんだよ。で、ついでに家庭教師の先生ってのが、これが日本人を教え慣れちゃっててさ、ちくちくいじめんだよね。ちくちくって文字通りよ。こうして鉛筆でつつくんだよ。「Господин Уда! それじゃだめだ！」って。ただこれが語学の勉強の方法としては悪くなかったんじゃないかな。つまり毎日二時間先生が来ちゃう。朝からさ。相手は俺 1 人だから、俺が勉強しなきゃ何事もない。おしゃべりなんてすぐ尽きちゃうんだよね。それとか、あと、本読んでるだろ？ それでまあ例えばさ、ペースとして 1 時間に 2 ページとかなんとか。で、ちゃんと俺が予習して質問があれば質問して、質問されたら答えてみたいにするには時間がかかる。そういう意味ではね、寮なんかに住んで友達と意味のない会話をしているより良かったんじゃないかな。

安達 教材は、政治の新聞読んだり文学作品読んだり？

宇多 教材？ 小説です。

安達 小説。チェーホフとか？

宇多 チェーホフも読みましたよ。だけどね、あの、なんていうんだろう。日本じゃあんまり知られていないかも知れないけどロシア語やったら教養として当然読むべき小説ってのがいくつかあるわけでそれ読んでた。読まされてたというか。たとえば君は知ってるか Двенадцать стульев とかね。

安達 あー、映画は。

秋山 映画ありますね。

宇多 Золотой теленок とかね。おんなじ Ильф и Петров って人だけど、作者。Илья Ильф と Евгений Петров の共作って、どういう風に役割分担してたかは分からない。これは面白かったよ。それでね、どういう風に面白いかって、どう言ったらよいか。教養がつくってのかな。こう、ロシア人が、教養あるロシア人なら知ってるようなことがたくさん書いてある。で、ここ読まなきゃ先行って

ロシア人と話してもだめだみたい。そういう、あの、基本的教養？ ちょっと聖書っていうと、でも聖書に似てるかもね、宗教的な部分除けば。うんと引用されるんだよ、そのあとの作家によって、これがあれだって。教養書だね。

安達 それらの小説はロシア人が小さいときに必ず読んでるって感じなんですかね、それとも教養ある人が読んでるって……。

宇多 そうですね。小さいときって言うよりもやっぱりその思春期過ぎないと(笑)、分かんないんじゃないか。小さいときはおとぎ話読んでるだろみんな。で暗記させられてる。ところがいま言ってる本はそれとはちょっと事情がちがうんだな。みんな読んでるっていったら読んでるんだけど、大人になってから読むもの、ていうかませた子が背伸びして読むもんだな。あのね、一種の教養書、つまりね、ばんばん引用されるんだよ。新聞の見出しとかに、片っ端から。

安達 ロシア人と交渉するときとか、ふつうにお話するときにも出てくるような……。

宇多 あんまりべらべらやると本当はこっちのロシア語の教養ってそんなに深くないからやばいんだけど適度にやるとね、「お前、やるじゃん」とか言われるんだよ。けっこう難しいんだな。難しいってね、語学的に難しい。文学的にはユーモア小説、だけどね、作者は冗談で入ってくるわけ。太刀打ちできない。

秋山 モスクワにはそのときはどのくらいいらっしゃったんですか、外務省に入って語学研修生としては？

宇多 5年半。

安達 5年半！ けっこう長いですね。

宇多 帰国なし。当時は外務省も金なかったんだろうね。途中帰国なんてのは、よほどのご褒美。

秋山 5年経って日本に帰ってらっしゃってからどれくらいで上智に？

宇多 すぐ。あの、上智に入れそうだったことが分かって。てのは紛争だったんだよ。大学紛争。だから、もぐりこむすきがあったんだね。で当時の理事長ってのが、俺の中学校校のときの恩師で、イエズス会の神父だよ。ヨゼフ・ピタウ(1928-2014)って、名前は知ってるかも知れない。ピタウさんに言って採用してくれて言った。そうしたら「いいよ」って言ってくれたから帰ったら行くところ

ろあるんだから辞めさせてくれて言って。外務省は出先では解雇しない。だって外交パスポート持ってるんだもん。だから俺みたいなやつを、もしクビにしようとかいったら一回日本に戻して、そこでクビにしたわけだね。

ロシア文学会での関係

秋山 お話がちょっと離れちゃうかも知れないんですけど、前に上智で学会開いたときに先生が乾杯のあいさつで、わりと文学会の当時の偉かった人に可愛がられてみたいなことを仰ってて……。

宇多 偉い人が？

秋山 たぶん原卓也先生とかそういう方が……。

宇多 そう、それは言える。原卓也（1930–2004）、江川卓（1927–2001）、川端香男里（1933–2021）、それから米川哲夫（1925–2020）。あの、みなさん歳がね、俺より 10 くらい上なんだよ。で、そこにかたまってるの。原卓也とか江川さんとか。だからそこにぼつんと 1 人離れて。そんな関係もあったんだろうね。

秋山 事務局をなさってとかですか？

宇多 事務局をやったときもあるよ。あのころは佐藤純一とか。

秋山 僕が文学会に入会したときに新潟大学で発表したんですけど、その新潟大学のときに会長選挙の年で、そのときに佐藤純一先生が会長に選ばれていました。そういえばあの時、宇多先生が僕の発表を見に来られたんですけど、発表順で僕の前の人がキャンセルになったもんだから僕がワンプロック早く発表したら、僕の発表が終わったところに先生がお見えになって、「秋山君の発表を聴きにきたんだが、終わってるんだけど、どういうことかな」って。

一同 大笑い

宇多 そのあと学会さぼって焼き鳥かなんか食いに行っちゃってさ。俺は行先で学会の人に会っちゃったりなんかして。

一同 大笑い

秋山 その後、上智で全国大会を開催したのは 2017 年なんですけど、そのときに宇多先生が乾杯のご発声で、この手の乾杯の発声なんてのは、一番長老がやるもんだけど見渡したら自分が最年長でびっくりしたって（笑）。

宇多 長老が目に入らないし、身長が目に入ったんだよ。

秋山 そのときに「もっと昔自分はいっぱい色々な先輩から可愛がられてたくらいなんで年上の方がいっぱいいらっしやるはずだったのに、なのでまさか自分が今日の最長老だとは思わなかった」と仰ってて。

宇多 そうね、あの、俺の世代ってのは、ほとんどいないんだよ。それから10年くらい上にかたまってるの。あの学会みたいなどころってのはこういう風に均等にならないで、かたまったりなんかするんだよね。大学もそうだろう。そうっちゃうんだよ。

秋山 不思議ですよ。

安達 ばらけないでかたまっちゃいますよね。

宇多 どうしてもかたまっちゃうの。

研究の話と著書について

安達 先生が ругательство の研究、なさって論文 [「Ругательство に関する一考察—日本人の立場から—」『上智大学外国語学部紀要』第6号] をいただいて。かたや『ソ連—政治権力の構造』って本を書き、その一方で ругательство の研究みたいなものもされるじゃないですか。そのへんのバランスみたいなものって、ご自身の中にあっただけですか？

宇多 ていうか、あの外国語の学部というか、ロシア語の研究ってのは純粋な意味の学問じゃないからね。なんとなくだろ。

秋山 政治のこと考えつつも語学のこととはどっか頭の中にあるってことですか？

宇多 うーん、どういう言い方がいいんだろうな。あの、政治のほうもさ、ちゃんとした政治学出身じゃないわけだよ。ソ連研究っていうかソ連の勉強っていうかをやっている際の政治の面からやるってそういうことですよ。つまり、しばしばあるようにどっかの政治学科の、法学部で政治学やってって人とちがう。だからソ連政治やってて頭のどっかにロシア語研究がって言い方はちょっと合わない。いっしょくたになってるんだな。もともとがさ、大体語学なんて言い方、あれ一種独特であって、たとえば英語でもロシア語でも、あの、английский язык の研究ってあり得るけど、語学ってのは、語学って言葉自体が不思議なものだか

ら。日本独特の。

秋山 先生が東洋書店の『ロシア語便覧』書かれたじゃないですか。あの便覧まとめるのは、どういうきっかけでまとめたんですか？ 読むとけっこう、ロシア語の文法書を参照されて、まとめられたんだろうなと思うところがあるんですけど。上智を退官したきっかけで1冊文法書をまとめようと？

宇多 別にそういうことじゃない。俺の場合、本書いたりなんかすんのといわゆる研究なんかと別にくっついてないから。

安達 『ロシア語通訳教本』のほうはどうですか？ あれは通訳協会の教材としてということですか？

宇多 違います。あれは徳永晴美さん（1947-2022）と一緒にね、その昔『ロシア語通訳読本』って本書いた。20年くらい時間経ったからまた書こうと言ったら徳永さんが嫌がって、1人で書きなよとか言って。で俺が書いた。

安達 でもけっこう色々な本出されてますよね、先生。

宇多 そんな本の多い人間じゃないよ。あの、まあ、こんなことやってるからゼロじゃないけど、そんなにないよ。それと2つに分かれちゃってるんだね。あの、いわゆる研究書と語学の教科書。語学の教科書ってちょっと研究書と違うんだな。構えも違うし、とにかく語学の教科書っていうと引いて読めるみたいな辞書みたいなそういう性格持ってないといけない。読んで面白いなんてこと考えないわけですよ。



秋山 小町文雄の本は読んで面白いように書くってことですか？ あの、小町文雄ってペンネーム使って、料理本を書こうってのはどういうきっかけだったんですか？

宇多 あれね……、俺ね、60だったと思う。60歳。でああいう本を書こうと思って。

秋山 60の節目だからってことですか？

宇多 別に偶然重なっただけ。60歳記念執筆なんて（一同、大笑い）。

秋山 でもどういうきっかけで料理本を出されよ

うと思ったんですか？ たとえば『趣味は佃煮～ある大学教授の「無趣味」からの脱出～』とか。

宇多 あれはね若干野心があつてね。駅の売店で売ってるような本書きたいと思つて。ところがどっこい駅の売店で売ってるのはよっぽど売れるもんなんだな。じゃなきゃあんな狭いところに入らない。そのころ名もなき雑誌に2,3雑文書いてこれまとめようと思つたんです。そんなきっかけがあるんだな。

秋山 その依頼されたいいくつかの原稿というのはどういうきっかけで依頼されたんですか？ 先生に料理系のこと書いてくださいというのはどこから？

宇多 たとえば放送のテキストの……。

秋山 NHKの……。

宇多 だからその頃になると、こういう本書きたいなんていうと出版社の人がどうぞなんて言うんだよ。

秋山 なるほど、なるほど。

ソ連の崩壊と宇多先生の視点

安達 話があっちこっち飛びますけれどソ連が崩壊したじゃないですか。それで先生の、なんか、変わりました？ 研究の立場っていうか。

宇多 立場は変わらないですよ。はじめから別に肩入れしてたわけでもないし、観察者。終始観察者。

安達 で、こう、よりいままでソ連の共産党とか研究してきたことが間違つてなかったって言ったら変ですけど分析と合つたというか、やっぱり崩壊したなつて感じありました？

宇多 ない。終始一貫観てた。だからこんなだったかなんてのはない。

秋山 ちょうど僕が学生のときはソ連が健在で授業は「ソビエト学入門」という授業でした。ゴルバチョフがペレストロイカを進めてましたし、当時一般教養科目でも先生が授業やれば当時の六号館の大讲堂で立ち見という状態だったじゃないですか。

安達 机に座つて（笑）。

秋山 あのリアルタイムでソ連が崩壊していく様を僕は学生として見てたわけで



2016 年勉強会にて（こうやって机に座るのが宇多流）

すけど、先生は先生として見てたというか……。

宇多 先生としてじゃない。観察者として。

秋山 観察者として見てて、でもほぼリアルタイムで授業で語らなきゃいけなかったわけじゃないですか。

宇多 あれはある意味で易しかった。つまりあることをそのまま先日のね、たとえば中央委員会ではこういうことやったって言てればいいんだろ。

秋山 でもこれが起こってることは何でなんだろうとか学生が疑問に思うことを先回りして解説してくださったわけじゃないですか。それとかも教えてて、どうしてそうやって詳しいことが分かるのかなって。

宇多 教えるっていうよりこっちは観察者なわけですよ。観てるわけ。教えるってのはたまたまそれを人に伝える・喋るといふ行為が加わるだけであって繋がってるんだよあくまで。まあそれに学会なんかあるし北大にスラ研ってのがあってそこで夏はシンポジウムなんかやってそこに参加したりするいわゆる研究活動ってのはしてただけね。

秋山 観てることを先生は観察して述べてるだけと仰りますけど、学生からするとあれだけ立ち見が出る授業だったわけですから。

宇多 いやね、そのあとがら空きになったよ（一同、大笑い）。

俺がアメリカ行って帰ってきてからかな。その頃一番混んだな。

秋山 1989 年先生はサバティカルイヤーなんですけど、1990 年に戻っていらっしゃって僕がソビエト学入門とかロシア語の講読で二年生のときに先生から習ったんですけど、多分 1989 年くらいからソ連が一番色々動いてた時代で、でもたぶん解説してくれる先生がちょうどサバティカルでいらっしゃらなくて 1990 年になって戻ってらっしゃったからここぞとばかり先生の授業聴きにわーっと集

まったのはあるかも知れませんが……。

宇多 そうだろうね。

秋山 それにしてもみんな聞いている授業だったし大学の中でもあの人数いた授業はそんなじゃないかなって思いますけどね。

宇多 それはそうだな。そのあとずっと似たような授業やってったんだよ。

秋山 先生の授業ってわりとリアルタイムで聴くこっちは分かりやすいんですよ。で、なるほどなと思って聴くんですけど、先生は全然板書をなさらないので授業のノートがみんな夢中になって聴いてるんですけど終わるとみんなノートが白いんですよ。僕は聞きながらずっとメモ取るタイプだったんで聴いてメモ取っただけのノートがまあ試験前とかレポート提出締め切り前に飛ぶように売れましたけど（一同、大笑い）。

安達 私は先輩からやはりノートが回って来たのがありますね。

宇多 なぜかっていうと「ソ連崩壊」って授業じゃない。ソ連事情なんだあくまで。たまたま崩壊した（一同、大笑い）。

秋山 それにしたって授業30回喋るのは大変だなんて思いますけどね。

宇多 そうじゃなくて共産党の組織とかこういう部分の話ですから。事件が起こったってそりゃ彩りみたいなもので（一同、大笑い）。

秋山 まあそうですね、授業の本質は起こっていることではなく、ソ連共産党とはってことでしたから。

安達 でも観察対象、研究対象の国にそれだけの大変化が起こるってのは、まあ観察者としては面白い……。

宇多 面白いですよ。そんなこと滅多にないから。

安達 そのぶんいま戦争が起きていて観察対象にもすごい変化が起きていて、なんでそうなのかと考えたりするじゃないですか、なんかやっぱり……。

宇多 あのね、そりゃなんでそうかって明快な答えを求めてるからなんだよ。そんなもんないんだよ。こういうことが起こりました、こういうことが起こりましたもん。

秋山 いま戦争起こっている最中でもさすがに立ち見の授業はないですね。ロシア語学科で立ち見の授業はないです。



教員紹介冊子で学生が描いた
宇多先生のイラスト

安達 履修する学生は他学部の学生が増えましたね。今「ロシア・ユーラシア経済概論」って授業をやってるんですけど他の学部学科の学生が増えました。

秋山 関心はあるんですね。

宇多 そう、たとえば外国語学部全体を見るとロシア・ソ連に関心持ってる学生は多数派ではないんだね。だけどいれば強いんだね。その関心は、あの、どうだろう、ドイツ語やフランス語はそんなにのめり込まないんじゃないかな。昔と違って、うんと冷静に見るといえるか、昔は

のめり込んでたね。戦前なんてすごいね、本当にのめり込んでた。

後進へのメッセージ

秋山 お約束の最後の質問があって、今後のロシア語ロシア文学の研究者に対して先生からメッセージがあれば。

宇多 さあ、勝手にせいってことだね（一同、大笑い）。

秋山 まあ、基本的には、それでそうか、勝手にやるのがよろしいと。

宇多 そう、好きじゃなきゃできないしね。好きってのは、他人から言われてなるもんじゃないからね。

安達 関心がそれぞれ違いますしね。

秋山 なかなか悩んでうまく論文が執筆できない院生に何かアドバイスありますかかって言われても君に関心がなきゃ書けないんじゃない？っていうことと同じですかね。

宇多 そうそう。

秋山 分かりました。ありがとうございます。

宇多 言われて関心持つようじゃしょうがない。

安達 ロシア語学科については何かありますか？ 上智のロシア語学科について。

宇多 やっぱりロシア語。ロシア語に関心がなきゃしょうがないよね。

安達 教員として、ロシア語学科の教員に対してはそのへんのアドバイスあります？ 我々に。

宇多 あのね、ともかく学び舎ってのは、学ぶ対象、ロシア語に関心を持ってなきゃどうにもならないよね。これは与えるわけにはいかない。だから教師としてはそういうものを持った学生が集まって来たという前提でいるわけ。持たないやつに持たせようってそりゃ無理だよ。

秋山 先生は昔、一年生のロシア語でチーチーパッパをやるのが先生だ、と仰ってましたけど、必ずしも第一志望でロシア語学科に入ってきた子ばかりじゃないじゃないですか。ロシア語に興味がない子に対しては、それはもうしょうがないよという感じですか。

宇多 彼らの問題だよ。それはここにロシア語という勉強の対象があり担当の先生がいて教科書があってそれにどう向き合うって彼らの問題であって、こうしろ、ああしろって言えない。言っても仕方ない。

安達 大学だしね。

宇多 そうそうそう。

秋山 じゃあ先生が大学に入られて染谷先生がいらっしゃって授業やられてこれは気合を入れてやんなきゃいけないと思われたというそういうことですね。

安達 大学に入って関心や興味が助長されたプロセスが大学の中であったってことなんですね。

宇多 それはあった。つまりそれは最初の動機ってこれ非常に弱い、はっきりしない、ついその気になったみたいな、これを育ててくんだよ。勉強で。育てられるやつは伸びるわけ。育てられないやつはだめだよ。

秋山 上智は1年次用の「基礎ロシア語I」で再履修が多いですし、その後退学する学生もいるんですけど、なんとかできないかなと思わなくはないんですがそれは仕方ない。

宇多 そうだよ。でもちょっと冷たく言っちゃうと、あれもあれで学生の側も教える側も悪くない刺激ってのかな、じゃないのかな、適度に。あの、大学当局は迷惑だろうね。はじめからやっぱり定員の50人 [現在の学年定員は60人]

入ってきてから 10 人落ちるなんて言えないんだもん。誰も落ちないかも知れない。現にそういう年もあったしね。そうかと思えば 30 人くらい落とすことになる年もある。

安達 最終的に、アドバイスは「勝手にせい」でいいんですか？ 文学会の将来に何か一言っていうときに（笑）。

宇多 「勝手にせい」しかない。

秋山 分かりました。ですよね。改めてありがとうございます。

（文責：秋山真一）



2015 年懇親会で乾杯の発声をする宇多先生

編集後記

「本の中で集う懇親会」——インタビューを受けてくださった先生方、インタビューに協力・参加してくださった方々はもちろんですが、本書の中には実にたくさんの顔が見えます。様々な声が響いているこの「場」で、「初めまして」という人もいます。この先生のお話もうかがいたかった……ということもあります。

世代、研究ジャンル、さまざまなレベルでの垣根を越えて……と当初から考えていましたが、私自身が予想外だったのは地域のレベルでの垣根です。会員と海外の研究者とのこれまでのつながりについても多くを学ぶことができましたが、国内各地の研究会やサークルといったさまざまな「場」の存在や活動の歴史について十分には理解していなかったことを痛感しました。毎年の全国大会でも（総会や懇親会などトータルで）、より多くのかたにご挨拶してみたくになりましたし、あるいは本書がきっかけとなって、各支部や研究機関、グループの連携イベントなどが生まれると素敵だなとも思います。

楽しい「懇親会」がいちど「お開き」となるので、寂しくもあります。ですが、編集の立場からすれば、「ようやく校了までたどりついた」というのが正直な感想でもあります。本書にはお手本とするような文献があったわけではなく、つねに足元を確認しながら、道なき道を進んできました。次回、こうした企画が立ち上がっていくときには、本書やWGの活動が何らかの形で役立つのではないかと思います。本書の編集活動また先生方へのインタビューを通して、積み重ねることの大切さもあらためて学びました。

一方で、いくども迷走・暴走し始める座長をゴールまで導いてくれたのは、WGメンバーの皆さんのアドバイスやアイデアでした。ここにお礼を申し上げます。また、こちらからの無理難題につねに的確に、そして根気よく対応してくださった松籟社の木村浩之さんにも感謝しています。

2025年9月

日本ロシア文学会副会長

同 75 周年記念事業 WG 座長 坂庭淳史

日本ロシア文学会 75 周年記念事業ワーキンググループ

秋山真一（関東東北支部／ロシア語学・コーパス言語学）
扇千恵（関西中部支部／ロシア・ソ連映画）
大平陽一（関西中部支部／在外ロシア文化）
小椋彩（北海道支部／ロシア文学、ポーランド文学）
神岡理恵子（関東東北支部／現代ロシア文学・文化、冷戦期比較文化）
畔柳千明（関東東北支部／中露関係史）
坂庭淳史〔座長〕（関東東北支部／19 世紀ロシア詩、思想）
中村唯史（関西中部支部／ロシア文学・ソ連文化論）
松枝佳奈（西日本支部／比較文学・比較文化、日露文化交流史）
望月哲男（北海道支部／ロシア文学）

インタビューでは、以下の皆さまにもご協力いただきました。

阿出川修嘉（関東東北支部／ロシア語学・アспект論）
須佐多恵（関西中部支部／在外ロシア）
田中大（関西中部支部／中世スラヴ語）
野町素己（北海道支部／言語学）
八木君人（関東東北支部／ロシア・アヴァンギャルド、ロシア・フォルマリズム）
安達祐子（ロシア・東欧学会／ロシア経済）
長谷川麻子（元会員／20 世紀ロシア詩）
藤原克美（ロシア・東欧学会／ロシア経済論）

クリクラ・ウイタエ
Curricula Vitae 日本ロシア文学会 75 周年記念インタビュー集

2025 年 10 月 15 日 発行

発行者 日本ロシア文学会 中村唯史
事務局〔庶務会計〕：〒 930-8555
富山県富山市五福 3190
富山大学五福キャンパス人文学部校舎 320
笹山啓研究室気付
事務局〔書記〕：〒 560-0043
大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院 人文学研究科
北井聡子研究室気付
学会ホームページ <http://yaar.jpn.org/>

印刷 株式会社松籟社
〒 612-0801 京都市伏見区深草正覚町 1-34
TEL：075-531-2878

装幀 安藤紫野（こゆるぎデザイン）

Curricula Vitae

クリクラ・ウィタエ

